

奇譚クラス

1965-3



3
月
号

奇譚クラス

3
月
号

定価 三〇〇円

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Tenseisya

Osaka Japan



3月号

¥ 300

限定版……………写真集

美しき縛しめ

第四集

頒価 一〇〇〇円 (送共)

略号 (美4)

△華々しき女体緊縛の組写真集△

最新撮影の新しいモデル、山原清子、木村洋子、玉田美佐子による美しい緊縛フォトに加えるに、ベテラン大塚啓子の最新撮影のフォトなど、この数カ月に亘って、フォト・アルバム「美しき縛しめ」用として撮影し保存してきた写真を、極めて鮮明なるグラビヤ印刷の特アール紙によって、皆様にごらんいただけます。写真はいずれも未発表のとおき

の傑作ばかりです。各モデル嬢の特徴をそれだけに十二分に発揮した文獻的価値豊かなフォト揃いです。春の暖気に匂う花の如く全紙面から、にっこりと皆様に微笑みかけています。緊縛による苦悶や苦痛も、皆様に頂けるといふことだけで、彼女たちも嬉しいのです。どうか、この素晴らしい一冊をお求め下さるよう心からお待ちいたします。

一般書店売りは一切いたしません。直接発行所へお申込み下さい。

◎縛られた美女ばかりの美しいフォトアルバムです。
この一冊により、新しいモデルの新しい緊縛ポーズを十二分にお楽しみ下さい。

登場モデル——山原清子——木村洋子——玉田美佐子——大塚啓子

○お詫び○
「美しき縛しめ」(第四集)は、一月号の予告では、十二月中旬完成と書きましたが、その後、種々の事情のため、印刷の着手が遅延しましたところへ、折柄、年末新年と休日が多くなり、意図的に手間とり、約一カ月以上も完成が遅れるという結果となってしまいました。アルバム完成を御期待下さった皆様に対し

大変御迷惑をおかけしましたことを、ここに厚くお詫び申し上げます。尚、その間、二月号に途中経過報告を掲載する予定でしたが、に、スペースが全部ふさがってしまい、その機会を失ってしまいましたため、必要以上にお心配をおかけしましたことを、重ねてお詫び致します。予約の方々は第一番にお送り致します。お詫びにかえさせて頂きます。

◇写真集内容◇

- 逆さ吊りに揺れる女体 (木村 洋子)
- 開孔器と浣腸器の鼻責地獄 (大塚 啓子)
- 刺青女体の柱縛り責め (山原 清子)
- 古墳後手吊りにあう組写真 (木村 洋子)
- 革拘束具による緊縛組写真 (大塚 啓子)
- 洞窟内に於ける責組写真 (玉田 美佐子)
- 刺青女体連続緊縛写真 (山原 清子)
- 野外に於ける連縛組写真 (玉田、木村)
- 両足吊りにある刺青女体 (山原 清子)
- 柱縛りの晒責めの組写真 (玉田 美佐子)
- 鉄扉に緊縛晒しにあう女 (玉田 美佐子)
- 皮製嵌口具に悩む組写真 (大塚 啓子)
- 捕獲された女、裸身の悶え (大塚 啓子)
- 猿ぐつわ百態各種組写真 (大塚 啓子)
- 入墨に映える緊縛絵模様 (山原 清子)
- セーラー服緊縛連続写真 (大塚 啓子)
- 両手吊り連続組写真 (山原 清子)

以上の通り本誌のグラビヤにして、何カ月分にも該当する盛り沢山の内容を収録いたしました。必ずや皆様の御満足を得ることと信じます。限定版につき一般書店には姿を現しません。数にも限りがあります故、売切れにならぬ中、今すぐお申込み下さい。



奇譚クラブ 3月号 目次

◆奇クサロン 編集部選……(9)

○桐一葉の淋しさ……編集部(9) ○世相診断……木戸川健(10) ○「妻の逆吊り」によせて……芥川一夫(11) ○サロン集我記……辻村隆(12) ○投稿「僕のイメーシヨ」……室井重砂路(13) ○轉り映画展望「日本拷問刑罰史」の凄じさ……東山映史(14) ○同好夫婦の多きを喜ぶ「SMブレイク夫婦」……益原駿夫(16) ○夫婦SMブレイクの写真……新田英雄(17) ○「男性切腹体験記」について思う……兵頭麻一(18) ○編集室より……編集部(18) ○ボクの責め方……宝塚三夫(19) ○如の魅力……春川ナミオ(20) ○「妻の生首」……剣持逸人(21) ○まにあのメモ「奇クと販売のあり方」……三岡良信(22) ○「奇クと私」……森本博司(23) ○サロン・ルポ「果敢しき哉、竹野ひろ子」……古川生七(24)

本文

SEXの考え方に就いて……芳野 眉美……(25)
「蛇のような革帯」を拝見して

SM研究

SMの混同と作品への希望……岩井 鬼輔……(28)

最近の読者通信から……保藤 久人……(32)

映画「日本拷問刑罰史」について……おもたか・しの……(36)

メトミに就いて……増田トシロー……(40)

革の服の流行ー革マニヤの幻想ー……山口 広……(42)

櫓の宿 (悦庵絵灯籠 その十二)……万田 不二……(46)

原作・悩ましのサディズム……芳野 眉美……(54)

▲森山美歌夫人に関する小品……栗瀬 長……(60)

バリウム便秘……栗瀬 長……(60)

懸賞「告白、手記、体験」入選作品……佐仲 晴成……(64)

SMレター 第二の手紙ー岸野マキ子ー……(64)

かずひこの雑記帳……とやま・かずひこ……(74)

秋の味覚を楽しみつづ……とやま・かずひこ……(74)

一つの視点 小森白先生への書簡……田村 清彦……(80)
新連載サディズム小説

起訴されたミシユリーヌ……西条 操……(84)

「心傷たむ遍歴」 第七章「そのかみのこと」……高砂流好生……(88)

看護婦さんと浣腸について……高砂流好生……(88)

女子寮と女子事務員……高木紀久枝……(88)

「あるサジスチンの告白」……東 雪枝……(88)

「虹のあじさい」……団 鬼六……(88)

連載小説 花と蛇 (続第五回)……団 鬼六……(88)

SM・カメラ・ハント……辻村 隆……(88)

映画「日本拷問刑罰史」とS子……辻村 隆……(88)

映画、TVのシーン十大ニュース……鼻 好生……(88)

(ANUS及びNOSEに関して)……鼻 好生……(88)

「SM」より見た世界史シリーズ……黒瀬 要一……(88)

ベリサリウスとアントニナ……黒瀬 要一……(88)

ガン作・マニヤのノート……芳野 眉美……(88)

濡れにぞ濡れし……大坂雨奇男……(88)

夫婦のゴム・プレイ……大坂雨奇男……(88)

読者原稿 生活体験報告……細田 隆……(88)

婦人洋装下着のこと……細田 隆……(88)

「想うこと」(続)……西条 操……(88)

検便随想に就いて……漆山 春美……(88)

セミ・フィクション……漆山 春美……(88)

おなかに切り傷のある女……南方 佳男……(88)

「体験告白」女性ビンタの追憶……王福 敏太……(88)

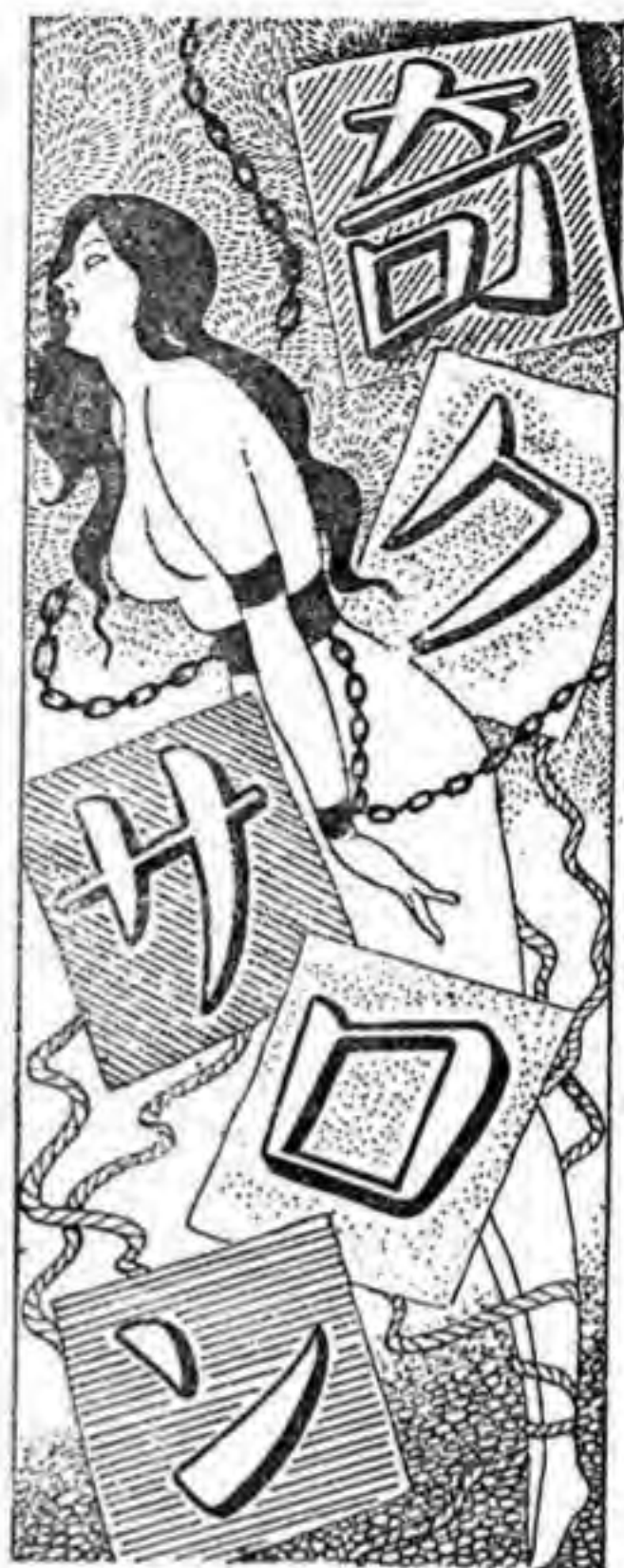
▲ビンタ・マゾの提唱……王福 敏太……(88)

N・H・K・TV……おもたか・しの……(88)

恋すれば物語……おもたか・しの……(88)

読者通信……おもたか・しの……(88)

編集部選……おもたか・しの……(88)



昨年の十二月十三日に風俗奇譚の編集長から電話があり、雑誌倫理研究会の会合について連絡を受けたのだが、その節、僚誌裏窓が二月号から廃刊をするということを知り驚いた。

贈呈を受けた同誌の一月号を拝見した折は、二月号の予告も出ていたことだし、よもやこのように急に廃刊するなどは、夢にも考えていなかったことだった。三誌の共同自肅声明の文案にしても、私の提案により、飯田豊一氏が急拠作成してくれたものであり、雑誌倫理研究会の会員十数誌の中でも、この三誌は特にお互い連絡をとり合って続刊しようと誓い合っていただけに、同誌の脱落は、全く淋しい限りである。

さて、忘年会を兼ねた雑誌倫理研究会の十二月例会に於て、高倉

一氏と顔を合せた私は、挨拶もそこそこに、先ず相手の雑誌の存続の意志を確かめたい気持ちがいっぱいだった。それは高倉氏の方でも同じ気持ちだったらしく、お互いに苦難を乗り越えて、昭和四十年の発行を続けてゆくということを確認しあえて、ほっとした気持ちを禁じ得なかった。

風俗奇譚の二月号の巻頭には、すでに三誌共同の自肅声明を組んであったので、急にそれを二誌に変更したという高倉氏のお話だったが、いずれにしても、桐一葉落ちて天下の秋を知るといった思いが、ひしひしと二人の胸に迫って

くる感じだった。

已年の新春を迎えて、輝やかしい本年の抱負を述べたいところだが、どうやら本年も昨年に引続いて苦難と棘の年になりそうだ。それはそれとして、多数の愛読者の皆様から、賀状を頂戴いたしましたことを、遅ればせながらお礼申し上げます。一様に本誌の発刊について力強い激励の言葉を添えて下さっていることは、感謝にたえないところで、今後許容される範囲で十分に効果を挙げ、ご期待に応えたい気持ちでいっぱいである。

今月号は一つの試みとして、グラビア写真も口絵もとりのやめて本文ばかりとしてみた。勿論ご不満の方も多いことだと思うし、いろいろ御意見もおありと思う。しかし、これは今後、ずっとこういう方針で発行を続けてゆくということではなく、月々何かと変化をつけて出してゆこうという試みの一つとして御覧いただきたい。従来のゆき方のグラビア写真というものが、一番忌避され易いと

いうことは衆目の一致するところだが、さりとて中途半端な妥協は読者の側からも、見離されるといふ総スカンを喰う恐れが多分にある。折角発行しても、読者から見向きもされないものであれば、これは存在価値はない。徒らに国家資源を浪費することになるのだ。

そこで本年の課題として、グラビア写真と口絵の絵画をどのような形で皆様の前に提供するかというところが、大きくクローズ・アップされてきた恰好である。そのため、手を変え品を変えて誌上に提供し、それを皆様の目によって批判していただくという方法が最善だと思う。来月はどのようなものが出てくるだろうかという楽しみも味っていただけだと思う。

編集者としては、前々月、前月と同じ形式を踏襲している方が安易であり且つ無難であるが、本年は右にいったような努力と冒険を必要とする方法でやってゆこうと思う。従来も忌憚のない御意見を沢山賜っていたのであるが、今年もどうか右の主旨に従って、更に一層のご負担を、本誌の充実と永続のために賜りますよう、心からお願いしたい。

桐一葉の淋しさ 編集子



木戸川 健

道路交通法第六十六条では、過労の場合の自動車の運転を禁止している。違反は六カ月以下の懲役または五万円以下の罰金である。もちろん、見つからなければ、なんでもないし、証拠もない。第一過労かどうかの認定は、誰がするのだろう。

事実、私の知る限りでは、過労運転Vでのみ罰せられたという話は聞かない。事故が生じて、はじめてその原因に過労Vが追訴されるのである。

例えば、早速今日（十二月二十二日）の新聞に出ている。三行記事なので、ちよつとわずらわしいけれども、全文を転載してみるとこうである。『二十一日午前十時

十分ごろ東京都世田谷区若林町三五〇さきで、自転車にのった同町二二〇会社社員依田実氏さんの長男正雄君（六）は同区五ノ二七会社役員水上利光（46）の運転する乗用車にはねられて、頭の骨を折って間もなく死んだ。世田谷署の調べでは水上が前夜の忘年会の二次会帰りでかなり疲れているところから判断をあやまったものらしい』

このように、過労というものは、原因であつて結果ではない。結果が出なければ過労かどうかはわからない。己自身にもしかとはわからない。ちよつと頭が重い感じ程度の事で、この場合も事故がおきなければドライバーの過労は当然問題にはならなかった筈である。

さすれば、道交法六十六条は、原因を縛る法律で、交通事故の全てがその原因をたどれば何等かの形で加害者被害者いずれかの過労Vにつながるのだから、きわめて理想的には有意義な、そして現実的には無意義な法律である、ということが出来よう。自分でも、しかとはわからない過労Vを、認定するのは事故という結果以外にはない。

同様のことが、いわゆる青少年を、悪書の事故から守ろうという運動にも通ずるだろう。過労Vによって事故を生じたという、その過労Vは、事故を生じたという結果によってのみ認定されると同じように、青少年に有害な図書Vであるという認定は、これこれこういう過労Vが生じたが故にその図書は有害Vであつた、と当然、ならなければならない筈である。

ところが、そういう公衆に対する有害Vは、交通事故Vと違ってその原因は複雑であり怪奇でさえある。一方的に図書が原因しているというとはいいい得ても、認め難い。又、それが果して公害Vであるかどうかの判断も、立場によって色々に違ってくる。

こういう過労Vがある。「世界」を読んでもその思想に影響された若者たちが、反政府デモを行ない警官隊と乱闘した、という悪い結果が出た場合、「世界」は果して悪書であるや否や、というのである。K誌を読んで反政府デモをやる力は絶対ない筈である。その時点のみで考えた場合、「世界」は悪書であり、K誌は良書であるのだろうか？

申すまでもなく、これは愚問である。「世界」を読んで共鳴し影響されるところはあつても、それがデモという結果につながるという証拠はどこにもないし、又、デモをやること自体果して公害Vかどうか、という観方の問題にもなってくる。

幸か不幸か、K誌には思想がない。あるのは嗜好Vだけである。同好者の単純な喜びVだけである。K誌が悪書であるという一方的な判断は、木を見て森を見ざるもので、K誌を読んだが故に、こういう事故が生じたという証拠はどこにもない。

綜じて、図書における個々人に対する影響の問題は、心理学の範疇であつて、法律の問題ではない。もとより、法律は行為のみ対象

「妻の逆吊り」によせて

芥川 一 夫

としているのであって、殺人犯人を縛ることは出来ても殺意を縛ることは出来ない道理である。ましてや、△嗜好▽や△趣味▽までも取り締めることは、自由社会においては、それ自体が最大の悪である。K誌は悪書である、といい得て、

証拠がない、ということとは、何も尻をまくって啖呵をきっている図ではない。光のある場所では、K誌は悪書である、ということとは私はいともたやすくいうだろうし、いったおぼえもたしかにある。しかし、夜が私を承知させない。そ

こに、私の△嗜好▽があり、△喜び▽があり、ひそやかな△生きがい▽に似たものがある。もっとも、青少年に対しては、車の運転と同様、K誌購読の△免許状▽を与えてはならないことは当然であり、われわれが無免許の

彼等にそれを読ませぬよう配慮を厳にすべきことも当然である。

追記——東京、神奈川、千葉にお住いの方（男女を問わず）の、この欄に対する感想をおよせ下されば幸甚です。

○妻の頬そげて産み月近づきぬ
○九カ月の身重、縄目に呻く妻
○今こそと思いつ未だいたしかね
○お腹の子大丈夫かと妻憂い
○身重妻そろそろ吊りて梁きしむ
○脚の縄、強くくびれて妻重し
○逆吊りに心逸りてカメラ光る
○逆吊りに膨れたる腹波打たせ
○逆吊りに、早く早くと呻めく妻
○膨れたる腹二寸下りて逆さ吊り
○縄をとき、妻の涙のいとおしさ
○この苦痛よくぞ耐えたり妊み妻
○逆吊り二度とごめんと妻はい

妻妙子の九カ月の某夜、遂に待

望の妊婦の逆吊りを実現しました。上半身裸体で、腹帯とパンティだけの姿にし、後手縛りにして、両脚首は縄では喰い込んで痛みが激しいので、妻の伊達メで縛り、その上より縄をかけ、我が家では唯一の、梁のある勝手元の通路を選びました。あらかじめ私の書斎机を持出してそこへ布団をしき、妻を縛って机にそっと仰向けに寝かせ、脚につけた縄を梁にかけてから、カメラの位置をきめ、先にピントを合わせておきました。私一人で妻を吊り上げるのは仲々の大仕事である事を、この時つくず

く感じました。殊に九カ月ともないますと、子宮の膨脹につれて、膀胱が圧迫されるのか、小用が近くなり、時には洩らします。生れる胎児の父親として、ふと悪徳めいたものを覚えましたが、妻は私のこの計画には、かねがね申しでありましたので、素直に承諾しておりました。千載一遇のチャンス逃せば二度もあるかどうか分りませんので、思い切って敢行したのです。若し逆吊りで、早産、流産したらとの危惧もあったのですが、ことここに到れば、私も意馬心猿で止められせん。

私は徐々に縄をひき絞り、一方の手で妻の体を抱え上げる様にしていって、パラパラとはこりの落ちてくるのに辟易し乍ら、左右の手に力をこめて、妻の足を上に段々と引揚げて行きました。妻の背のみが机についている処まで引上げて私は一旦、縄の端を、通路の柱のまちにしっかりと結び、更に力一杯引き上げました、妻の首が机すれすれになり、微かに浮いた処で、更に大急ぎで結び直し、尚も妻の体や、結び工合を確かめた上で、急機を外しました。宙にゆらゆら揺れる妻の体を静止させ、私は喉をカラカラにさせて、夢中でフラッシュをたきました。通路の表側と、奥とから二枚づつ。妻の背面と、正面です。それから妻の体を横に廻し、ゆっくりと元の位置に戻るまでに、揺れる妻の側面を夢中でとりました。その間時間にして約三分です。神に祈る様な気持で撮ったのですが、やはり慌てていたのかピントが少し甘かったですが、露出はよく、送りました二枚は、側面と、俯かんしたものです。奇巧の妊婦マニアの為、是非御掲載下さる様お願いします。



辻村 隆

某日の某新聞の「近ごろ」欄に作家の水上勉氏が、肛門の不快感に對する小文をのせていたが、面白いので一寸御紹介しよう。

『某日、某誌に肛門の不快感を訴える文章をかいいたら、同情者からの書信が殺到した。秘薬を教えてくれる者もあるが、中には指圧療法をやらせてくれとか、私の備えつけている床屋とおなじ「瞬間湯沸器」を利用しての「洗尻」の方法は原始的だ。今日三十八万円出す

と用便後、紙も使わずにすますことが出来、暖かい風で乾燥させる新式便器がある。これを取りつけてみたらどうか、などといったくる。私は自分のシリに三十八万円かける気持はない。それこそ、考えただけでもシリがハレあがる気がする。今のところ原始的な備品で結構楽しい。瞬間湯沸器は、便所のすみの頭ぐらいの高さに打ちつけてあって、湯は床屋と同じくホースから出てくる。頭を洗わないでシリを洗うのである。それだけでも爽快感がある。たまには便器に腰かけながら、コーヒーでも入れたいような気持になることもある」とある。成程せいたくな排泄である。水上勉氏の描いた、女の妖しさ、流麗な推理は、案外こんな時間に生れるのかも知れない。

× × ×
今年の恵方の方位はまるで神戸の様で、一月号の読者通信では志村善子さん、二月号の奇クサロンで刑部典子さんと大当りである。寒気のきびしい某日、思い立って神戸へ出掛け、長田区の東尻池二丁目の交叉点の、彼女指定の喫茶で志村さんと出逢った。須磨のホテルで三時間、たっぷり彼女を

撮ったが、このテーマ、いずれカメラ・ハントにて報告します。ついで、もう一件、省線で三宮まで戻り、カメラハント志望の女性、刑部典子さんに電話した。午後五時神戸そごうの前で初対面し、元町近くのホテルでこれ又三時間、私にとっても始めての耳穴責めをやってみた。彼女は終始協力的であって、今後の撮影を約束してくれた。精しく書くところ、カメラ・ハントで面白くなるから、唯、この欄では紹介程度だが、このところ少し、カメラ・ハントの材料がたまってきた。(尼崎市の松岡寛様へ——)、志村善子さんは学校の都合で、東尻池か、板宿辺りなら待合せてお目にかかってもいいそうです。阪急三宮駅西出口附近は混雑していて初めて逢うのは困るそうで、それにあの辺り、娘一人でじっと待っていたりするのと、愚連隊がチョツカイを出すそうです。読者通信へ、彼女の近くのはっきりした目印の場所を指定してほしいと云っておられます。免も角、一日に二人の女性に逢い、それぞれプレイのフォトを撮って、初対面の気疲れもあって、自宅に午後十一時半過戻った時は心身共にくたくたであった。一九

六五年の新春を飾るにふさわしいカメラ・ハントの一日——。

「代理部たより」

○大好評を得ておりました臨時増刊号「花と蛇」とうとう売切れとなりました。ここ二月前あたりから広告を差し控えておりましたがそれでも連日お申込みがあり、一お断りするのにも大変なので、今後お申込みなさらないように、お願い致します。

○只今のところ「写真、絵画」文献特集号、一部五〇〇円、略号(文献)の方は、若干在庫がござい

ます故、未見の方はお申込み下さるようお待ちします。これも売切れになれば補充できません。

○口絵、グラビヤ写真で皆様のお目を楽しませることが出来ませんので、限定版写真集並に分譲品の拡充を計っておりますから、せいせいお申込み下さい。

○旧分譲品の再分譲を望む声も多いので、可能なものは次号あたりから、ぼつぼつ広告してゆきますが、版の大きさや価格が従来とは変る予定です。只今「目録」はございせんが、出来上りましたら誌上に、その旨広告いたします故その節お申込み下さい。

投稿△奇クサロン▽

『僕のイメージ画』 室井亜砂路

めっきり寒く成りました。暖房装置の無い安アパートの屋根裏三畳は昼間でも手のかじかむ十二月です。今日も煎餅蒲団にくるまって白昼夢にふけます。天井のフシ穴、壁のシミから少年時代のな

つかしい耽美の思い出がよみがえって来ます。母に手をひかれて通った因果物の見世物小屋の通りのドロドロした不思議なイメージ。童話本の挿絵のエッチング彫刻の華麗なムウド。そして古い「奇譚

C図―「断頭台（ギロチン）の少女」



A図―「乗馬」



クラブ」に載った美しい口絵・カットの数々。あの頃の表紙は本当に美しい物でした。

素人絵ではおはすかしいのですが僕のイメージ画をスケッチ・ブックから五枚同封します。

①―「乗馬」という題です。ありふれたイメージですが、首と身体を入れかえてみました。動物は犬と狐の合いの子でしょう。（キット）

②―「兄妹のプレイ」という連作の中の一枚です。男は土人にみえるかもしれませんが。人喰い土人のプレイです。

③―「断頭台の少女」です。少

女小説の挿絵のムードで描いてみました。首が断たれたところの絵を今度描いてみようと思っています。小生いささか感傷趣味のムードに弱い為マニアの方々には物足りなくお思いの方が多いと思いますが、どうか御指導お願いします。

④―「南北戦争以前」という絵です。一八六一年以前のアメリカ南部。黒人の奴隷の少女が逃亡を計って失敗し、みせしめの為に晒し者になっているという設定です。

⑤―「悪夢」です。変な獣は豚のつもりです。妊婦の蛙腹が上手く描けないのです。因果物のイメージが少しまざっています。

縛り映画展望



「日本拷問刑罰史」の凄じさ

東山映史

新東宝の小森白製作の「日本拷問刑罰史」は本年度最高の異色作品だが、これによって、今後の時代劇の縛りシーンなどにも大いに影響するだろう。

テレビの丹波哲郎らの「三匹の侍」のリアルな緊縛シーンや立ち回わりによって、邦画時代劇にも

歌舞伎の様式美的な立ち回りや縛りシーンにリアリズムを注入したが、今回の「日本拷問刑罰史」によって、時代劇の拷問や刑罰にも一大革命をもたらし、女優残酷物語をつくりださるだろう。

だが、同作品のワイドスクリーンに、西条ユカリの半裸体の駿河

責など、迫力を通りこした残酷美ともいうべきものだった。

それに、海老責の凄じさといったら、過去において、奇譚クラブの大塚啓子らの海老責めの写真よりも迫力がある。

これは当然のことで、巨大な画面に、ほぼ等身大の大ききでうつし出された半裸の女が型どおりにあぐら縛りの縄を足首からのど首に直結し、顔を前につきだした凄惨なポーズでうめき、のたうち、悲鳴をあげ、あぶら汗を流すのである。

それでも、白状しない、この女賊はついに吊り責めから、駿河問いにかけられる。

手足を背中中、ひとつにくくりあげ、天井から吊るす。腹面を下にされ、背中に重石をのせられ、がんじがらめに縛られたままのからだを回転させられ、天井から垂れ下っている縄をよじられる。

よじるだけよじっておいて手をはなすと吊られた全身は逆回転をはじめ、女は凄絶なうめき声をあげる。

駿河の町奉行、彦坂九兵衛が発案したのでその名があるという駿河問いが、シネマスコープの画面にありありと再現するのだからす

さまじい。

この場合の女優には、演技というものは一切不要である。女優はただ耐えしのぶだけでよい。これ以上のリアリズム演技はない。

気の強い女優の西条ユカリもこの回転がとても恐ろしく、悲鳴をあげて「こわい、やめて……」と絶叫したようだ、さもありなん。昔の記録でも、全身の汗とあぶらがしぼり出されて、血と一緒にふりとばされたと書いてある。

石抱きの責めから火刑になる森美紗は十七才の可憐な女優だが、容貌もスタイルもよく将来を楽しませた。

とくに、石抱きの責と火刑のシーンの表情がよかった。奉行所の吟味部屋とおぼしき所に、腰巻き一枚にむかれ、上半身に本縄をかけられひきすてられている。

娘の左右の豊満な乳房には、縄が入念にまかれていて、乳首をかくしている。この縄のかけ方はむろん、エロチシズムの強烈さをすこしでも弱めるためだろうが、余計に、エロチシズムとサジズムを感じさせる。

「火つけした罪を認める」と、答打ちが加えられるが、娘は「私は

しない」と頑張る。

それで、ついにソロバン責が加えられる。三角のギザギザをたくさん上にむかした厚板の上に、正坐させられるのだ。娘のスネにそのギザギザがくいこむ。

娘の悲鳴と苦悶の表情、演技力もある。

ついに、娘の太腿の上には、さらに、伊豆石がのせられる。

れいの石抱き拷問がはじまる。はじめに、一枚がのせられ、娘はうめき声をあげる。だが白状しない。

「二枚目をのせろ」という、与力の声。

役人が二人がかりで二枚目の石を運び、娘の太腿の上にのせる。娘の背後に用意してある縄で、二枚の石をすかさず縛り合わせるなど、芸は細かい。

余計に切迫感がある。

娘はうなり声をあげ、額からは、あぶら汗をしたたらせる。ついに石の上に顔をふせて悶絶する。

そして、ついに、連日の拷問にたえかね

「私が火をつけました」

と偽りの自白をする。

そして、裸馬にのせられ、引き廻わしにあい、そして、刑場にお

いて、火あぶりの刑が行なわれるのである。

腰巻き一枚の半裸体のまま、柱を背に立たされ、うしろ手に縛られる。

乳首の上には、れいによって、細縄を二本くいこませている。

柱のまわりに薪がつまれ、火がはなたれる。無実の罪で死んでいく娘のクローズ・アップ。

目からは涙があふれ、恐怖と苦悶の表情のまま焼け死んでいく。

この、石抱きの刑などを見ていて、かつて責めの大家伊藤晴雨の東京は浅草の百万ドル劇場の責めの舞台を思い出す。

この時も女性哀詞として、女性の人権が無視され、拷問のために無実の罪により死んでいく封建社会の悲惨な女性を描くというのがテーマだった。

舞台の上手に、拷問柱が立ち、その前に、ソロバン責の三角にとがった台座がすえられている。

そして、舞台下手より長襦袢一枚にむかれた女が、後手に縛られて引かれてくる。本当は青色の囚衣だが、色彩効果のために、長襦袢にしたという説明がある。

そして、女は柱にしばりつけられ、身動きしないようにと、首に

も縄がかかる。

そして、石が彼女の太腿の上にのせられる。

「ヒィー」という悲鳴がおこる。

女は痛さのために身じろぎしようとするが、おさえつけられているので身動きできない。

二十年近い前の舞台だが、今でもその女優の悲痛な顔が眼前にほうふつと浮ぶ。

そして、つぎに駿河問いのような吊責めで、手足をしばられ、モッコのような巾に入れられて、吊り上げられ、グルグルと回転させられる。映画の駿河問いのような迫力はなかったが、その当時はシヨッキングな舞台だった。

映画の遊女の責め「ぶりぶり」も、珍重すべき責めである。

勤王の志士を逃がした遊女雪乃「松島洋子が扮している」は、まず井戸端のムシロの上で、長襦袢一枚にむかれ、後手に縛りあげられ、割れ竹の笞でたたかれ、ついに水責めにあう。

やがて、折檻部屋に入れられ、吊り責めをうける。

両手首と両足首を、ひとつにまとめて前でくくり、そのまま天井へ吊りあげる。背中がまるくまがって、下へ垂れ下がる。顔を大き

くうしろへのけぞる。

十九才の彼女は、乳房をかくそうと、足をちぢめて、のばさないのだ。名和弓雄をこまらしたそう

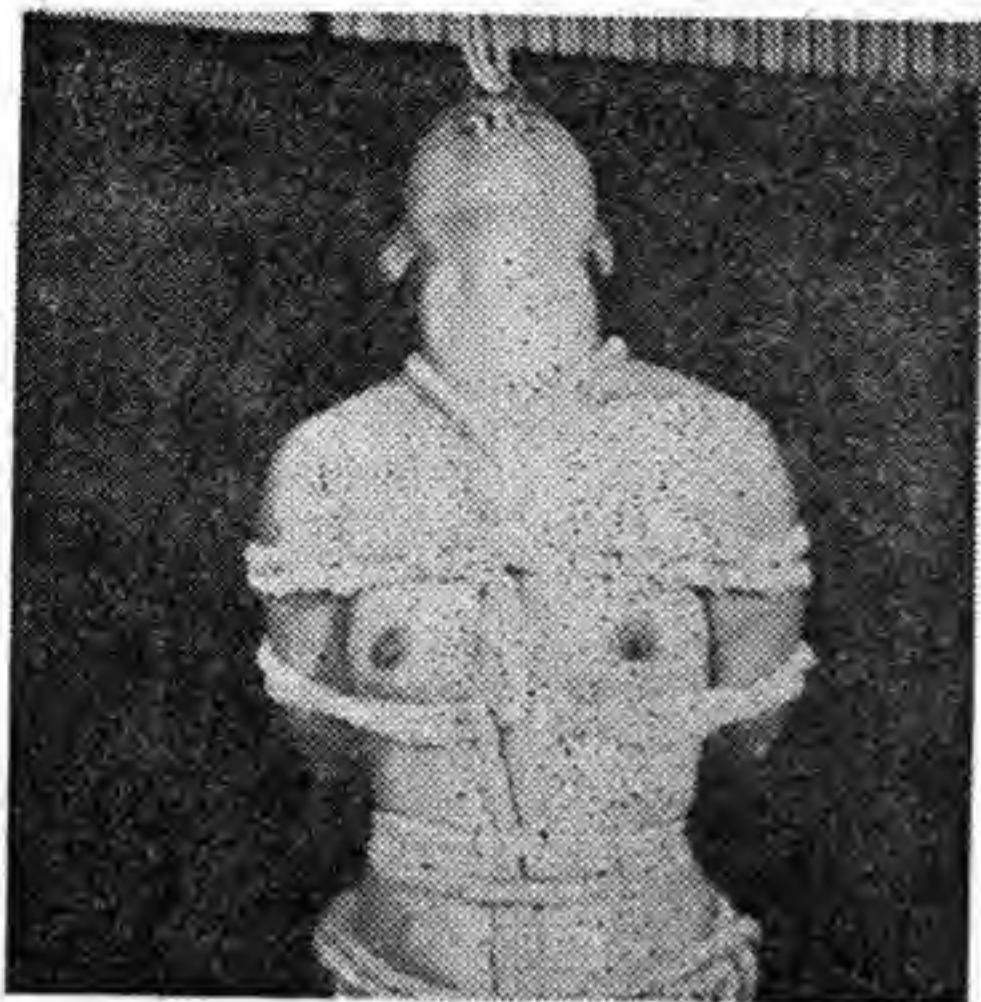
だが、この「ぶりぶり」も本当にいたましかった。彼女が「痛い」「痛い」と、泣声をあげたのはもともとだと思う。

さらに、竹竿に両腕をのばしたまま縛られて、足首を吊し上げられ、笞打たれる責めは珍らしい。とうとう責めにたえきれず、恋しい男の逃亡先を吐く。

そして、男らとともに、斬首刑にあう。

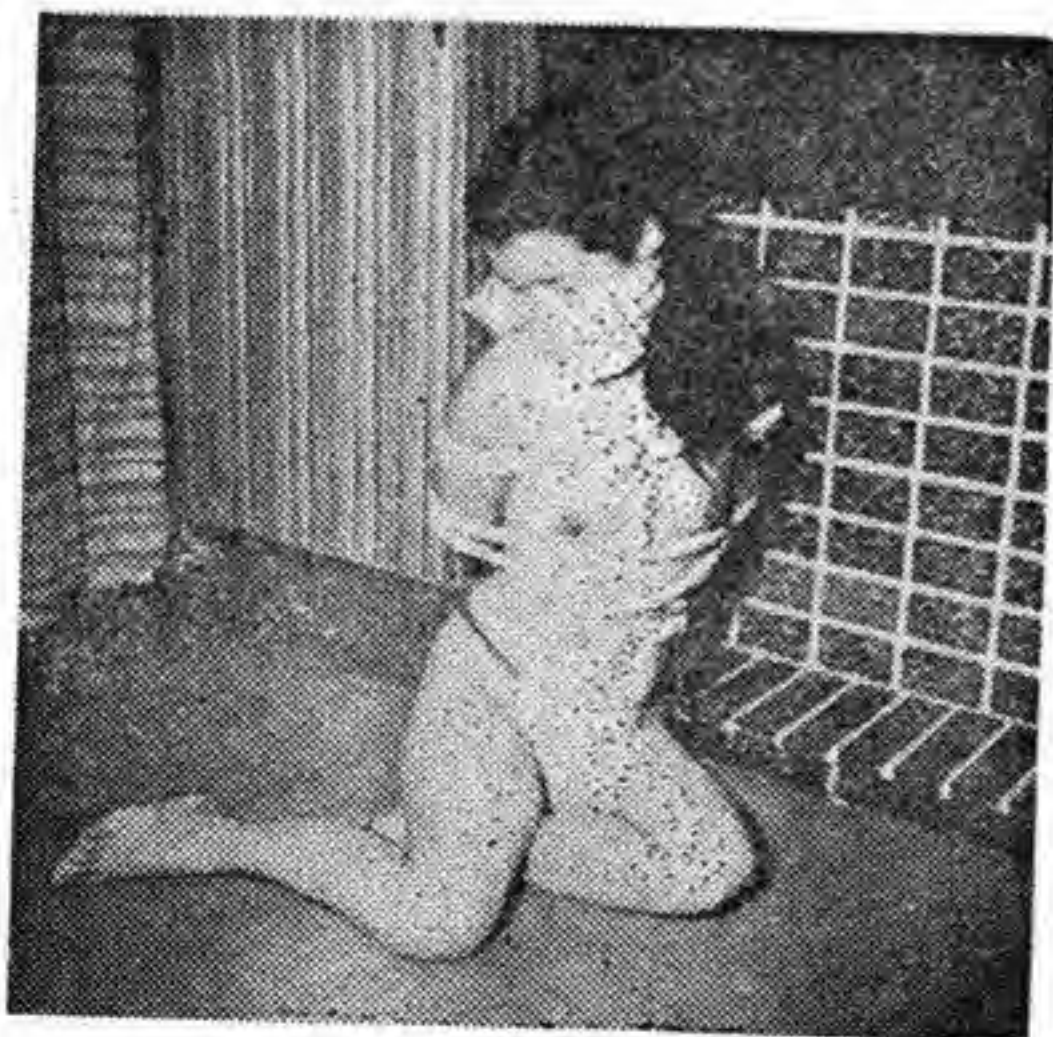
後手に縛られたまま引き出され、額に白紙のおおいをつけられる。非人に、首縄を切られ、ぐつと肌をむかれ、首をさしのばされる。そして、首斬り浅右衛門に斬られ、その首は獄門台にさらされるのである。

実に、S愛好者にとっては、感慨なくあたわざる作品であった。サジズムの極致の青水順子らにより、時代劇の拷問のリアルな舞台を再現してもらいたいものである。



写真の現像焼付を自家製で出来る様マスターした頃よりでありまして始めは、緊縛もなかなかうまくゆかず、又撮影したフィルムも失敗を重ね、以来今日、どうにか見られる様なものが出来る様になりました。妻の緊縛ポーズを写し期待で胸をわくわくさせ乍ら現像するだいたい味は、同好の皆様方同様私も味っております。

以来折にふれ変わった緊縛ポーズを考えては写し、又お仕置に面白いものがあれば写し保存して居ります。時々妻と批判し乍ら見るのも楽しいものです。夫婦の愛情に破たんを生じた事もなく二人の子供ももうけ、またプレイに打込めるのは幸福至極と思っております。未熟な写真ですが発表させて頂きます。妻の体は子供を二人生んだ事とて他の若い奥様方の如き麗姿は全然なく、全くお恥しい限りです。私は元来、むっちり肥った体が好きです。妻を肥らすべく随分努力を重ねた結



奇クを愛読しているSM夫婦ですが、最近夫婦のSMプレイ同好者が意外とたくさん居られ、又素晴らしい作品の数々を御発表されておられるのを見、大変よろこばしい事と思っております。私達夫婦

も同好夫婦の皆様方にお仲間入りさせて頂き度く、又出来れば色々のご交歓をお願い致したく存じております。

投稿させて頂き度く、又同封の写真をご掲載下さいます様何卒よろしくお願い致します。

今後とも思いつくままに、時折り投稿させて頂き度く、又同封の写真をご掲載下さいます様何卒よろしくお願い致します。



同好夫婦の多きを喜ぶ

SMプレイ夫婦

益原 駿 夫

果、大分肥って来ました。又、おとろえた乳房も大きく張らすべく、これも随分努力し、最近はこのもりと豊かな乳房になりつつあります。而し乳首は授乳の為拡大してしまったのは致し方ありません。けれども乳首を責める時はむしろ好都合の場合もありますので便利です。

桃山春雄様、通信欄でお便りを拝見し有難うございました。

夫婦SMプレイの写真

新田 英雄



初めて「奇クサロン」にお便り致します。小生三十才になる奇クファンです。妻と二人でSMプレイをひそかに楽しんでました。かねてより同好の方々とお会い出来たらと思っておりましたが、それもかなわず、妻と二人で楽しむだけに過ぎませんでした。お友

達を得ることは、普通では到底かないませんので、奇クサロンを通じてお知らせになる以外にないと思ひまして、ここにお便りした次第です。お互いに意見の交換やフォトの批評などをしあえたら、どんなに楽しいだろうかと思ひます。若し



同好の方々がございましたら、奇クサロンを通じて、お便りいただきたくお願い申し上げます。

ちなみに私達のフォトを同封致しました。御掲載の上御批評賜れば幸いです。最近奇クに対する風当たりも強い様で何かと大変な事と存じますが、頑張っ下さい。同好の方々の機関誌やフォトの発表誌が出来たら、というのが小生達の夢です。奇クのお許しがあればこれからも、フォトや私達夫婦のプレイについての模様なども発表させていただきますものだと思っ

ております。

今日は初めてなので、何を書いているのか、さっぱり要領がわからず、只とりとめのない、まとまりのない文章になり大変失礼いたしました。編集者の方々、ファンの皆様どうかよろしくお願い致します。

妻の名は悠子、本年二十四才、一六一センチ、五四キロと稍々大柄で肥っています。まだ妊娠したこともありませんので、乳房も大きい方です。

(東京都新宿区)

「男性切腹体験記」について思う

兵 頭 庫 一

先頃、藤村陵子、皆川波留子、山田久仁子などの勇敢(う)なる女性達に依って、夫々創意工夫された切腹体験記が発表されたのに対し、最近、美川多起夫、新山武達との男性切腹体験記が公表されたことについて筆者の所感を述べさせて頂こう。

大体切腹を願望し父母に享けた大切な身体髪膚を敢て毀傷する者は女性に多く、男性は自ら毀傷することなく女性の其れを窃視して悦に入るものであるが、男性にも或程度のナルチズムが有るから、女性なみに切腹を願望する者が皆無とは断じ難いけれど、多くは自己を女性化して一部そのナルチズムを満足させると同時に女性に仕立てた自己の切腹を窃視して女性切腹のムードを楽しもうとするものであるから、美川、新山の両氏のように女装して切腹プレイを行うことになるのであろう。

従って又こうした傾向の男性は女装マニアをも兼ねていると見て良い。

女装マニアという者は一種の変質者だと見られている。事実それに違いないが、その告白に徴すれば女護ヶ島の環境に成人した男性はその例を見る外、反対に女の香すら嗅ぎ得ないような環境に育って何等かの事情に災されて女性そのものが得られなくて、止むを得ず比較的入手易い女装を代用品として愛着するようになった男性にもその例が見られる。

女装の内でも最も愛着の強い物は赤い腰巻や長襦袢のようにじかに女肌にあつわるもので、それに次いできらびやかな着物、帯、伊達巻、扱帯、足袋、かつら、櫛、簪、かんざし、その他のアクセサリ類でなっている。所が美川・新山の両氏の切腹衣装はどちらも白装束になっている。尤も最初は赤い腰

巻や長襦袢姿を鏡に写して見とれたりしているが、いよいよとなると、これらは棄てて白一色の衣装に着替えている。往時武家などで若い女性が自害する時は、死出の晴着に白無垢の衣装を用いたことは事実らしいから、このお二人はこの故実にならったのかも知れない。

凡そ自害や切腹という厳肅なムードを出すには、なまめかした赤や桃色の衣裳よりも純白の衣装の方が、ふさわしいことは自明の理である。こうした心理的效果をねらって最初は美しい花嫁衣装を身につけ、本番には総白無垢に色直しをしてムードを盛りあげたお二人の演出は成功したと云えよう。

次にお二人とも事の初に睡眠薬を服用していることについては、女性側と異ったやり方である。近頃青少年の間で深夜喫茶とかいう不健全(う)な場所で睡眠薬遊びと称する頗る悪習間がはびこって大人共の眉をひそめさせているらしいが、切腹プレイに睡眠薬を用いることは、その苦痛を和らげ陶酔感を助長する意味に於ては似通っている。男性側では睡眠薬の助を藉り、女性側は敢然としてしらふで行っているということは、

編集室たより

○お蔭さまで奇クサロンの原稿は、この頃沢山寄せて下さいましたので、今月も大分未掲載が出ました。この調子だったら32頁に増頁できそうです。

○二月号に於て最近の二つの事と題する編集子の文章を読みましたが、その中で私達関係三誌が都条例云々とありましたが、その関係三誌の誌名をお知らせ下さい。と大分市の滝尾氏からの問合せがありました。これに類した照会や、中には用語の意味の解説を求めるものなど、忙しいのに手を焼いています。

○一月号で予告しました「美しき縛しめ」第四集が意外に遅延し申訳ありません。毎月刊誌の確実発行で手一杯でてゐて、舞いのところへ、電話を掛けてきたり、逢いたいと訪問してきたり、無駄な手をとられることが夥しく、ほとほと弱り果てました。今日も印刷所の使いの人に待って貰つての校正中、大沼ですがという電話、聞いたこともない名前だと思ったら、読者ですが、二月号の何んだかんだと言われても、そんな応待をして



宝塚二三夫

ボクによき協力者であり、よきパートナーである恵子、二十三才は、大阪のビル中心街である北浜の或る会社に勤める純粋のオフイス・レディである。

秋晴れの日曜日。はつきり日を

申し上げれば十一月十五日。この日は絶好の行楽日和の秋晴れ。年甲斐もなく、大和古寺めぐりのドライブとしやれ込んだ。彼女は短大では国文専攻とかで、古寺に関心を持っているとかで、大変

喜んだが、ボクは大いに彼女の白い胫と素足とに関心を持った。

秋篠寺で真白い素足のまま廊下を歩いて

破れ寺に車を停めて、斯くは後手しぱりと足首しぱりとは相成った次第である。



果して何を意味しているのだろうか。

奇ク誌上に発表された数々の論説を総合すると、女性に於ける切腹という行為は痛覚が性感覚と密着していて、その痛みが激しいほど強い性感を催して切腹の苦痛を償却して尚余りある効果をもたらすもののであるが、男性に於けるそれは問題にならぬほど弱いようだ。この理由によって女性側はしらふでその苦痛に耐え、男性側では睡眠薬の助けに依ってのみ

辛じて、それに耐えらるものと思う。

男性切腹に於ては、女性と同様事前のスリルは充分あるだろうが、文字通り痛快味を味って陶酔し得るものではなく、ひとり女装に依って自己を女性化し、その姿態を窃視することに依って夢にえがいた女性切腹の錯覚を生じる効果のみであって、その代償としての苦痛は、その悦びを差引いても、かなり大きなマイナスとなるだろう。

要するに男性は女性の切腹を窃視して悦に入るべきであるが、これは現実の問題としては不可能であって、映画・演劇・テレビなどの実演と小説・絵画・写真などにそれに近いものを求めるより外はない。この意味に於ける奇クの存在は実に貴重な物であるが、それに関する記事や絵や写真が極めて少ないのが残念である。今後ともこの種の企画の拡充に力を注いで下さるよう奇ク編集部にお願います。所以である。

いては、発行が遅れてしまふばかり。

○先月も東京から大阪へ出張してきたという中田明氏からの電話。丁度都条例に指定された箇所を検討と対策樹立という重要な打合せの最中。全精神力がその方へ集中している時、竹野みろ子への手紙がどうの、こうのと電話があっても、木で鼻をくくった返事しか出来ないのも納得頂けると思います。どうか邪魔をしないで下さい。



図の魅力

春川ナオミ

「図」梶山季之の長編推理小説である。奇ク愛読者の中にもご存知の方が多々あると思います。証券界の奇々怪々な裏面を覗かせる小説ではあるがM男性がこの小説を読み終ってさて、何が心の奥に残った事でしょう。人物と言えは混血児の様な妖しい美しさを秘めた原田福子と株屋の鈴江博、この二

人以外は私には必要ではなかったのである。鈴江と云う男が次第に福子のトリコになってゆくその文面は私の心をいつしか熱くさせていった。いつのまにか私が鈴江になつた様な錯覚をおこさせたのである。サディストの原田福子、マゾヒストの鈴江、早く云えば女王と奴隷である。

「ぼくを……買うんですって？」
「おいや？ いやならどうぞ帰ってちょうだい」……「交渉成立ね」「はあ……」「今夜は、あなたは私の奴隷よ」「よろこんで奴隷になります」「そう。では裸になりなさい」……「こんな会話の後「とったら、足にキスなさい」「キスするのよ。いやなの？」「指をなめなさい」「え？」「足の指をなめるのよ。私のいうことがきけないの？」

きびしく、凜とした福子の声であつた……。一夜限りの奴隷であつた鈴江はいつの間にか福子女王の専属の奴隷になつていた。そして小説の中で最も私の胸を熱くさせたところは無理な株の買物を命じた福子の命令を鈴江が実行しなかつたところである。……「あすの朝、第一番にやるんだよ！ 忘れたら、もう、絶交だから！」
「ああ、女王様……それは酷い！」
「酷いも、へったくれも、ありません！」「は、はい！」「さ、目を瞑って、口をおあけ」やっとな爪を立てるのをやめると、優しく福子は言った。「口を、あけるんですか……」「そうだよ！」鈴江は言われるとおりにした。また、彼女の甘酸っぱい唾液でも、口に入

れられるのだらうと思つたのだ。だが、その予想は違つていた。なにやら浴衣の裾をまくるような音がしていたかと思うと、次に顔の上に、なにか物体がゆっくり近づいてくる様な気配がした。そしてた。そして、ある独特な匂いを放つたものが、近づいてくる。彼は目をあげ、とたんに悲鳴をあげた。
もうMの方なら想像がつくと思います。鈴江は完全に福子の人間便器になつていたので。さて福子と言う女性、私、個人の想像として有名な人にあてはめれば、性格その他はぬきにしてテレビ俳優のムーザ毛馬内が最も当てはまる様な気がする。そんな想像を楽しみながら、何とも読みなおす図の魅力である。今も福子を想い浮べながらM画の製作に夢中である。こんな春川ナミオをS女性の方々はどの様にお考えだらう。一度私の手で春川ナミオを実験台にしてやろう、そんなすばらしい女性がいる様にも思います。青年画家、春川ナオミを奴隷にしてやろう、そんな野心のある奇ク愛読者女性は胸を張って呼びかけて下さい。そうすれば私のM画も、さらにリアルさを増し、すばらしいものになるであらうと確信します。

「妻の生首」

剣持逸人

相変らず筆不精で、その癖発表
したいしたいといつも思いつつ、
机に向って、柵目の原稿を埋める

のが苦手で、やっと又その気にな
りました。二月号で山本五城氏よ
りもお呼び掛けいただいたのが、

筆をとるきっかけ
かも知れません。
生首と申しても、

矢張り、私達夫婦

はSMプレイの実

践者なのでしょ

う。カメラの方は

新米ですので、到

底、水野弘氏のよ

うにうまくゆきま

せんが、私一人で

コツコツと撮って

おります。同封の

生首フォト三葉の

うちから、適当と

思われるもの一枚

御掲載下さい。昨

年十二月中旬、妻

の誕生日を契機に

正式に籍を入れま

して、現在妻は内

縁ではありません。唯、水商売当
時、二、三の男性と関係あった事
が、私の気持に少し引っ掛るので
すが、妻はそんなハンデキャップ
もあってか、SMプレイに対して
は、実に協力的で、籍を入れる時、
フォト撮り賃一枚に付百円の契約
は解消しまして、今は撮り放題で
す。でも結局、そのフォト代も、
私の下着やズボンの購入で、妻自
身、その金は何一つ、自分のもの
は買わなかったそうですから、改
めて文句を云う必要もないので
す。

妻と先日一緒に『日本拷問刑罰
史』を見に行き、ぼつぼつあの映
画の模倣をとり始めています。吊
りは既にそれ以前にやりました
が、駿河責めは、実際は不能と思
っていた処、目の辺りにその現実
を見せられ、敢行する気になりま
した。適当な仕置の場もないので、
実験的に座敷で両手足を後で縛
り、一緒に纏めて括り、太い棒に
つないで、タンスと鴨居の間に吊
り下げ様としましたが、体が硬い
のか、私の縛り方が拙劣なのか、
痛がって、体がたたみを離れませ
んでした。手足をうしろで一緒に
縛るのが精一杯で、もっと研究の
余地があります。映画の駿河責め

の様な、いいカッコには、どうし
てもなりません。妻は、私の縛り
方が拙いからだと申します。手足
で吊らずに、胸や腹に縄をかけ、
それに重心をおくと、何とか上り
ますが、映画ではそんなハンモッ
ク式にはなっていない、もう一度あ
の映画を二番館で見にくるつもり
です。

奇クに於て『日本拷問刑罰史』
の如きフォト版を特別号で企画さ
れたら、どんなにかうれしいこと
でしょう。それに、市販ではなく、
限定版で、奇ク宛に送られてくる
同好の方々のフォトの集大成の発
行をのぞみます。奇クのフォトを
飾る、モデル嬢は一切御遠慮願っ
て、水野、新宮両大家の生首処刑
を筆頭に、長谷好志男氏、六角京
之助氏、宝塚二三夫氏、辻村隆氏
の三十九夜物語中のもの等々フォ
トの集大成が、私達SM夫婦プレ
ーを愛する者の本当の望みです。
拙作ですが、そうなれば、私自身
も、私のフォトすべてを奇ク誌に
送って撰択していただき、僅かな
がらでも御協力させて戴くので
す。

山本五城様、この様な私のアイ
デア如何でしょうか。夫婦プレー
の真随として……。



まにまのメモ



「奇クと販売のあり方」

三 隅 良 信

我が愛する奇クが、悪書と云う銘柄で呼ばれるのは悲しいことです。しかし反面、奇クを読まれる方々は、恐らく家庭や職場では、皆等しく善人の方々許りだと確信します。かく云う私も家庭にあっては善良な夫であり父である平凡な一人です。さりとて、奇クは矢張り子供の目のつくホームゴタツの上へなんか、放つてもおけず、目につかぬ処へ蔵うところを見る

と、父としては、子供達には見せたくない雑誌と云えるのです。店頭で学生や子供が自由に奇クを手にとって眺められるとしたら、これはやはり社会問題として云々する方々の気持も分る気がします。それで販売方法の一手段として、F誌がやっている様に、グラビヤは、全部切り開く様にしては如何ですか。第一頁は見えますから、差し障りのないフォトを掲載し、買つて帰って切り開かねば、フォトの全貌が分らないと云うのも一手段です。グラビヤの好みを見て買えない憾みはありますが、持ち帰って、ナイフで切り開くのも、秘密めいた愉しさがあって、フォトのいいのを衆目に曝さず、購買者のみが見る権利ありというのもいいではありませんか。奇クの読者の場合、私自身ずっと大切に保存しておりますから、これを古本に売る方は少ないと思います。例え古本の値がタダ同然になっても、今後、奇クを古本として売られる方はグラビヤを全部切除しては如何ですか。膨大な製作費を使った松竹の「五弁の椿」より、安い製作費で「五弁の椿」に匹敵する収入をあげた「日本拷問刑罰史」の一例でも分る通り、残酷ブームで、泰平の世にな

ると、人々はこうしたモノに異常なまでの興味を覚えるのです。今仮に、悪書と呼ばれる種類の本がすべてなくなり、コチコチの堅い本許りの時代となったらどうでしょう。世の中が味気なくて仕方ないと思います。人間はすべてエゴイズムなのでしよう。我が家庭は平穩無事、自分の子供の非行はおそれ乍ら、一方テレビでは、又映画、雑誌では、チャンバラや、バク徒の悪に英雄視をおぼえ、ピストルの打合いを面白がって見ているのです。現実にはそんな事が身近に起つてはタマリませんが、他人事とならと面白がっているのが人間なのです。奇クもその夢を満足させる一環です。夫婦プレーも夫婦円満の一手段です。離婚寸前とか、冷めたい夫婦の仲に、SMの夫婦プレーはあり得ないので。私の知っている限り、夫婦プレーの方は、皆円満そのものです。しかも奇クは奇ク、実生活は実生活と、チャンとけじめをつけておられます。この厳しいそろそろ制限の時代に、奇クの生きて行く道を、読者の一人として真剣に考え、いかにすれば、奇クを永続させ得るかと考慮するのが、奇クと共にある、我々同好

者の義務ではないでしょうか。その意味で第一にグラビヤの隠蔽を提案します。苦心して撮られたグラビヤのフォトを、店頭で、タダで眼の保養をして行く輩の為に、更に一歩進めれば、将来奇クサロンが、投稿の方々のフォトで埋まる時、奇クサロンも隠蔽すべきです、只見の輩に、フォトは一切見せない——そこまで徹底されては如何ですか。

第二案は、奇誌からフォト一切をなくし、グラビヤフォトと巻頭の絵は附録として、セロファン紙か、ビニール袋に入れて、販売の場合添付すると云う方法です。正直いって、余り上手とも思われぬ挿絵は全部カット、フォトと四馬孝氏外画家の絵は別冊附録。こうすれば、例え店頭で奇クを拡げる学生、子供があつても、活字許りでは興味もないので、余り触れぬ様になりましょう。以前の白表紙の様なものが、堅いスタイルの雑誌でいいと思います。さすれば、奇クを買う者のみの特権がいよいよ発揮されます。それによって幾分コスト高になろうとも、恐らく奇クの愛読者なら、誰一人文句はいわないと思うのですが……。

「奇　ク　と　私」

森　本　博　司

一年程前の芸術生活誌に「地獄部屋」と題する一文が載り世界各國の性の風俗資料を秘蔵する図書館の紹介が渋谷竜彦氏によって述べられていたと記憶しているが、その中で特に優れた資料書庫としてキンゼイ博士の研究所の図書館があり「日本からは夫婦生活と奇譚クラブの二誌が蒐集されている云々」とあるのを見た時、改めて自分の蒐集した奇ク数百冊の価値と云うものについて考えさせられた。初めて奇クの名を知ったのは高校生の頃でささやか乍ら着実に刊行されていた時から、もう一ト昔も前の事である。勿論高校生

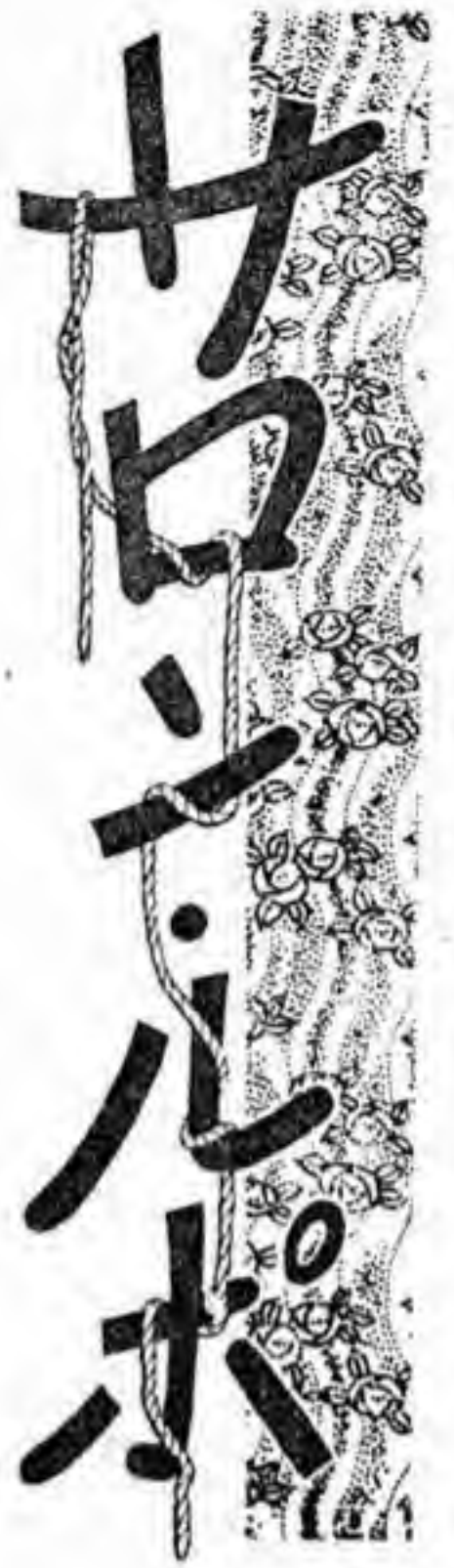
の頃から奇クの愛読者であった訳ではなく、大学に進んでから、馴染み初めたもので、まだその時分には例の白表紙の前の分厚な極彩色の旧号が市内の古本屋の店先でいくらかでも手頃な値段で求められたものだった。後で触れるが私の嗜好は極く限られた範囲のものであったので、新らしく発行される奇クを待切れず、市内の古本屋をヒマに委せて漁り尽くしたもので

あった。その結果、私の書庫には奇クの一大コレクションが出来上った次第である。無論、欠号の方が多い位のだが、昭和二十五年頃の新聞の三面記事には「奇ク発禁に云々」と云う記事が時折散見され、それ故、私のコレクションの中には、稀少価値のある奇クだつて二、三点埋れているのだが、何故発禁処分を受けたのか判らない内容のものもあり、時代の流れを痛感させられる。十二月で廃刊になった東京の裏窓誌の例を抽くまでもなく私の蒐集した奇クを部屋中に引出して眺めていると圧迫を受けた時代のもの、類誌が頻出した頃のもの、又その個々の雑誌に私の個人的な想い出が重って、私の青春の頃の思い出となるのである。一時、仕事の都合で友人に譲った事があったが、掌中の玉を失った様な空虚さに付纏われ、数日で返して貰った想い出もある。心の歴史、など大袈裟な形容だが、奇クの存在は正にそれに均しい、と思う。でも最近の奇クの傾向だが、先に述べた私の嗜好が殆どと

り上げて貰えない。嗜尿嗜糞、神の酒もよし、美女切腹も、女斗美もよい、オムツマニアもバラバマニアもエネマファンも美き哉である。他人の趣味は他人の楽しみ、お節介はしないが、斯う大山盛りにされるとどうも不愉快である。文豪谷崎の筆によらずとも、美少年を虐めるのには不思議な快感がある。世に謂う男責めは壮年男子の加虐であり、試みに風奇なる雑誌を編いて見給え、責められているのは熊とも見紛うムクツケキ大男の物語りであり、写真である。美少年が登場すればゲイの物語りに終始する。オカマは我々の嗜好ではないのである。少年囚獄記や悦虐回想録や三田岩隆画伯の絵や少年化され美少女の白描画、南村俊平画面の妖しい美の世界に浸っておられた頃を心からなつかしむ。長篇の「宇宙のどこかで」にも美少年の奴隷が登場したが、僅か一、二号で霧消してしまった。編集諸賢姉にお願したいのは、門戸を大きく広く、勿論専門化するの結構だが、小品の一つ位、昔日の奇クの面影、美少年責めに徹した作品を載せて頂きたいと希うものです。最



後に獄収一氏、北海道の三田岩隆氏、佐渡健児氏、三根耕二氏その他少年責めに興味お持ちの諸先生方との文通を希っています。お便りを下さるのなら大阪城東関目二局止め森本博司宛毎月末までにお送り頂ければ幸甚。



「素晴らしき哉竹野ひろ子」

富田林市 古川生七

小生はからずも、奇ク編集長殿並びに辻村隆氏の格別の御好意により、竹野ひろ子とおつき合い願える機会に接し、望外の喜びに浸り切っております。

中年の小生、万一の期待を抱いて、奇ク誌に竹野さんの御紹介をお題い致したる処、数ある文通の中より、彼女の目に、私の拙ない文がお目にとまったとは、思いもよらぬ事であります。辻村氏とのお約束で、奇クサロンへ、彼女とのプレイのレポートを送る事を約しましたが、何分にも文章の拙劣な小生、これは苦手中の苦手でありますが、辻村氏への御好意にも

酬ゆるため、敢えて投稿しました。竹野ひろ子さんは、勤務先をやめられて、今の処、小生経営の小さな会社ですが、その社長秘書という名目で、彼女の気のむいた時に出版社してもらっています。給料の手前、有能な彼女は、何かと小生の仕事を手伝いたがってくれますが、秘書は彼女を手離さない、一つの手段でありまして、何も仕事をせず、小生の傍らで小生の相手になってくれているだけでいいのであります。但し条件の一つとして、それは彼女の希望も半ばあるのですが、絶えずオシメカバーを着用している事で、小生がそれ

を交換して差上げる事です。ひろ子さんは、まるで幼児にでもなった様に、易々として小生の交換作業に従順にされるが俚になっております。彼女の為に、特に今月社長専用便所を新設致しまして、小生は時には、彼女を抱きかかえ、両脚をもって抱えて、幼児に用をたせる様にして、彼女を助けてやります。小生は余り縛ったりしません、これからは辻村氏にでも手ほどきを受けて、彼女をボツボツ縛る様に訓練するつもりであります。カバーはビニールより、表がフランネルで、ゴム引のものを彼女は喜びます。総ゴムのおしめカバーを最近手に入れましたので、これを使うつもりであります。生理期間中の交換は、小生にとっては、最高の生甲斐を感じさせます。あの理智的なひろ子さんが、まるで人が代った様に、その時は子供っぽくなって、小生のなすが俚になるのですが、今では彼女が小生の生活の全部を占めているといっても過言ではありません。

週二回、夕食を一緒にしますが、勿論街を歩く時もカバー着用です。ひろ子さんは、レインコートを四枚持っていて、着たがるのですが、最近憎らしい程雨が少なく、レインコートを着て歩いたのは、たった二回です。不器用な小生、未だカメラを撮った経験なく、編集長殿よりも要請ありましたが、近日中に、一番撮り易い、誰でもうまく撮れるカメラを探して買うつもりであります。今暫らくお待ち下さい。現像や焼付は、とても小生の今の職掌柄、カメラ屋へ出させぬので、その節は、現像の方、何卒よろしくお願申上げます。何といっても文章の書きなれぬ小生――。

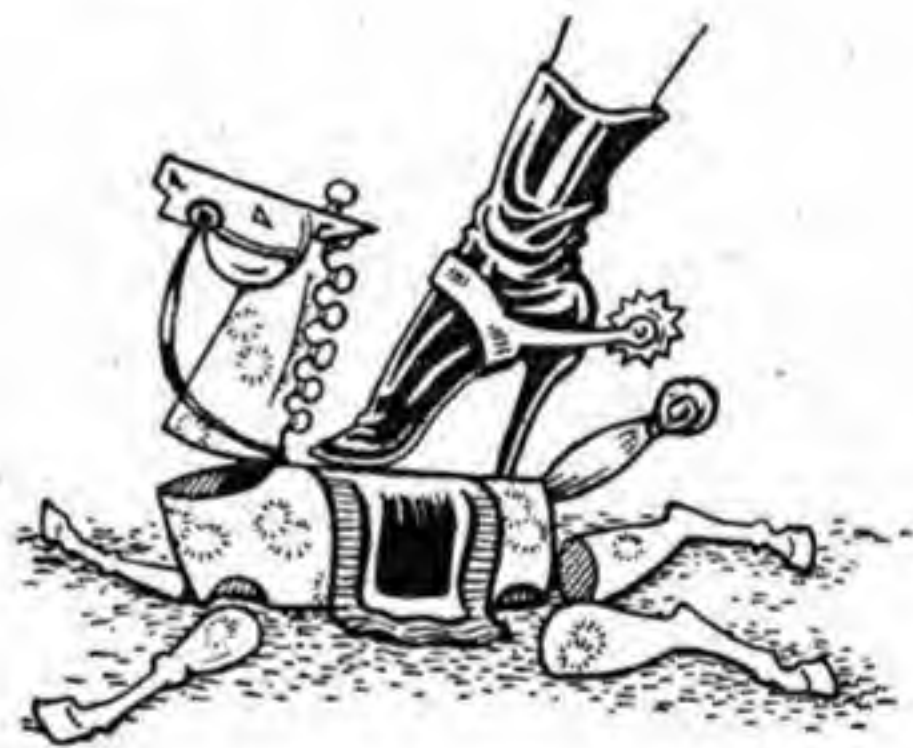
ひろ子さんとの事はもっともつと書きたいと思ひますのに、気がかりあせって、何も書けませんでしたが、この辺りで御勘弁願います。又、この次に御報告します。今の処、小生達はおしめカバーだけの綺麗な仲です。ひろ子さんの心をしっかりと掌握したら、小生正式に妻に迎えたいと、そんな事を真剣に考えております。大正初期生れの律義さが、矢張り小生にあると見えます。しかし、これも小生のひとり合点の希望なので、果して、ひろ子さんの方は、どういう気持か今のところそこ迄の推移は予測しかねますが、いずれ又詳細御報告することは致します。

SEXの考え方に就いて

「蛇のような革帯」

を拝見して

芳野眉美



一畳の部屋だから、夜具を敷けばそれで一杯だった。それでも三面鏡が壁に吊ってあった。棚の上に洋服箱が並んでいる。売春禁止法以前の青線（赤線ではない）には、こんなのがあったものだ。

夜具がはみでて戸が閉まらないままに、客と女が同衾している。そんなのを横目でにらみながら、せまいハシゴ（階段ではない）を登って女の部屋にたどりつく、途中、客を送り出した女が、しどけない長襦袢姿でトイレに下りて来るのとすれ違ったこともある。どういうこと、これ。

前の客と入れ違いに部屋に入ると、

「何人目」

「八人目」

どちらが客だかわからない。

せいせい十五分で回転するから、女はそんなにくたびれないらしい。前客の落物が生々しい。

大学が近かったせい、夜になる本を売っては通ったものだ。図う図うしく正服正帽である。子供の遊びと思えばいい。

私の部屋は机と本棚しか置かれてなかったが学生の部屋らしくはなかった。

本棚の本が、すべて小説である。文学部だったからそれでいいのかもしれないが、大学とはなんの関係もない本ばかりである。

一千冊を軽く越していた。雑誌は勿論含まない。その本が急にキライになった。理由は無い。とにかく見ているのがイヤになった。

だから本を売っては女と遊ぶことになる。十五分五百円の頃の話である。せっせと通った。売る本はうんとある。

その頃から私のSEXは変っていた。

即ち（私のトレードマークの）神酒にしか興味がない。

図うといつて、いくら赤線、青線でも、そう簡単に飲ませてくれる神様みたいな女なんているものじゃない。せいせいその真似ごと（発禁になると困るからくわしくは書けない——ゴメンネ）

かくて、本が無くなるまで続く。

鍵のかかる本箱に、KKを始め、SMに関する資料写真珍本がかくしてあった。

さて、すっからかんになって不用になった本棚を甥たちに持っていったら、最後に残った本箱の中味を見ていたら、それもキレイになった。

これは理由がある。

自分の性傾向がイヤになったのである。本箱の中味を庭に開けて火をつけた。

「せっかく集めたのに」

と兄貴が云った。「もったいないな」

「忘れようと思って」

燃え易いように、一冊一冊をちぎりながら火にくべていった。時間がかかった。KKの自分の作品が目についた。その時だけ悲しかった。

売れば高く売れた雑誌や珍本もあった。が売らなかった。焼くことによって、はっきりと区切りをつけようと思った。

× × ×

白い表紙のKKを私はあまり見ていない

× × ×

最近、私はまたKKに書き始めた。書いていて気がついた。

自分の性傾向に就いての考え方が学生の頃と変っている。

区切りがついている。焼いた事は無駄ではなかった。そう思ったとき、うれしかった。

焼く前は、自分の性傾向に対して、必要以上に悩み苦しんでいたようだ。

何枚か。

答えは簡単だ。

アブノーマルという言葉に罪悪感を持っていたからだ。

くだらねえと思った。

ノーマルもアブノーマルもあったものじゃない。女性の神酒を愛するのでもSEXじゃねえか。

男が女の神酒を飲み、女が男に神酒を飲ませ、最高の熱愛をしているカップルを私は知っている。

私もそんな恋愛をしてみたい。

私の文章に就いて辻村さんから、お手紙の中で（洒脱、あか抜け、フンワリ）というおほめの言葉をいただいくすぐだったかった。

事実、私は、悩み苦しみ型の絶叫スタイルで書くことをさけています。フンワリと書くようにつとめています。底脱けに明るく表現しようとしています。

でも、それは、自分の趣向が神酒であるとはっきり認めたからできることだと思っています。

私の主題は、あくまで、私は女性の神酒が好きだ、ということですよ。

俺はMだ、アブノーマルなんだ。だから正常にならなければいけない、ということではない。どっちつかずに悩み苦しんで絶叫する

ことではない。

私は私の性傾向を是定しているのです。

私のSEXの考え方が、おわかりになったと思います。

× × ×

こんなことを書く気になったのは、一月号で、福田久文さんの「蛇のような革帯」を拝見したからだ。

読んでいて、なんとまずしい、重苦しい

「SMの情事」なんだろうと思った。別に批評するわけではない。感想。

何故、まずしくて、重苦しいのか、その理由は福田さん御自身が書いている。即ち、

「幸福とは、好きなことに没入することである。没入できることが多ければ多いだけ、人は一層幸福なのであるが、よりよい幸福をより数多く手に入れるためには、棄てるべき幸福もあることを知らなければならない」とあり、

「男女のいかなる情事よりも、もっとすばらしいものが世にいくつもあり、SMの情事などに没頭しては、それらをすべて失ってしまうことが分る」

ここが福田さんの本心であると考え。はっきりいえば福田さんは「男女の情事」

に負けたのですね。

でも、福田さんの云いたいことは理解出来るし、それはそれでいい。

福田さんの考え方が、いわゆる道徳に従った常識的なあまりにも常識的であるが故に、福田さんは「SMの情事」に没入することができなかったものだろう。

福田さんは御自分の性傾向(Mですか)を否定し、私は肯定した。これがSEXに就いての考え方の相違であり、どうしようもない個人差というもののだろう。

だから、お互いに批評し合う性質のもではない。平行線。

私が庭で焼いた頃に「蛇のような革帯」を読んだとしたら私は同感し感激しただろう。

だが、今は違う。

くどいようだが、福田さんはKKを中心とするいわゆるSMの世界から離れて、一般的な夫婦生活をいとなむ方に、御自分の性傾向を決定されたのだし、私は、私の性傾向のおもむくままに、いわゆるSMの世界を楽しむうとしている。

私は、福田さんの生き方も認めるし、私自身の生き方も認める。

ただし、前に書いた、

「SMの情事などに没頭……」

の行は、納得できない。「情事」よりも「もっとすばらしいもの」

一般的に、常識的に考えて、その「もっとすばらしいもの」を「男女の情事」「SMの情事」をしなから、いくらでも自分のものにして人達がいるという事実だ。

裏返しに言えば、「男女の情事」「SMの情事」もできないものが、なんで「もっとすばらしいもの」を得ることが出来るだろうかということである。

「あなたの人に秘めた性癖は奇クに親しむだけで癒すことができるし、できるならばそうされた方が賢明である」

と福田さんは書いておられる。

私も認める。同感だ。そういう人もおるとだろう。

ただし、各個人のSEXは、それぞれ御自身が大切に育てていけば良いのであって、他人に強要する必要もないし、教育めいたことをいう必要もない。

「賢明」であるかないかは、御自身で判断すればいいのだ。断定は許されない。

「賢明である」と思った方はそれでいい。御自分のSEXに自信が無くなったときは、静

かに去ればいい。

自分のSEXを裏切るのが最も罪悪だと私は信じる。

福田さんが、簡単に

「賢明である」

と断定されるほど、人間のSEXは甘くはない。井の中の蛙的な知識はふりまわさないほうがいい。

ことわっておくが、私は別に福田さんの個人攻撃をしているわけではない。

断定的なものの考え方をされると、やりきれなくなってくるのだ。馬鹿々々しくなる。

人間の一人の知識なんて小さい小さい。

すべからず、大陸的に、すべてを包容してしまうようなものの考え方をしていただきたいと思う。

とくに、SEXに就いては。

「蛇のような革帯」からは、前進的ないぶきは感じられなかった。あまりにも暗すぎる。

いつでも不満顔をしている文章だ。日記ですね。人に発表する必要はなかった。

「奇クサロン」に発表されている。夫婦のSMプレイのようなものが、発表される価値があるというものだ。

前進的であくまで明かるい。



SMの混同と作品への希望

岩井 鬼 軸

性医学書等によると、サディズムは加虐色情症と定義づけられてあることは衆知の如くであって、これを、自身の性欲を亢進させるがための偏執めいた一種の手段。と一応具体化すれば、その到達する地点において、生理的エクスターゼをもたぬ場合は一体どうなのか？ かの定義は曖昧ではないだろうか？ また、マゾヒズムも同時に、被虐によって性欲を亢進させるの意であるならば、これもその目的地に性的満足をもたねば、やはり定義

からはずれるのではあるまいか？ そして加被共々生理的エクスターゼを持たぬ場合が多々ある事実を思い合せて、K誌上の小説、感想を読みながら考えてみると（この場合その名の由来するサド、マゾ両氏の先入観から離れて）生理的エクスターゼをもつ場合もそうでない場合も、一様にサディズム、マゾヒズムとあつかわれており、そこで、この両者を私は次のように二分して考えたいと思う。

先ず、サディズムの場合は、加虐色情症

（生理的エクスターゼ）と、殺人淫楽症（淫楽とは精神的エクスターゼ）。マゾヒズムの場合もやはり被虐色情症と、自己傷害（自己傷害の極は当然自殺となろう、切腹等はこれに属する）

S・Mの心理をこう二分してみる時、加虐色情の持主は、往々、一般生活者の裡にも見出せるが、殺人淫楽の場合は非常に僅少である。ローマの暴君ネロ、チベリウス、豊臣秀次、殷の紂王、等は明らかにこの後者であった。僅少なのは当然であり、一見して巨大な権力者ばかりである。美女を柱に縛りつけてライオンに喰わせ、妊婦の腹部を裂いてその感興が頂点に達した時、彼等が生理的エクスターゼ（射精現象）をみたとは一寸想像し難い。やはり精神的なものである。そしてこれ等暴君に共通の異常な感興は、恐らく彼等の生立ちがその胸裡に巣喰ったコンプレックスに由来するのではあるまいか？、権力者でない普通人の場合でも（天才とでも称すべきか）アレキサンダー・デュマの如きは常時、細君を殴ったり頭髪を引抜いたりしている。デュマの生立ちについて私は今、これを詳細にし得ないが、ともかくかような傾向の持主は、巨大な権力者の場合ならば何等かのコム

プレックス（猜疑心、被害妄想、等もこの中に含まれるだろう。或は酒精濫用も幾らか作用しているかも知れぬ）。そうでない者の場合ならば、極端に道義の念の稀薄な人物が多いのではあるまいか。又、中世紀のフランスの名将ギュー・ド・レー男爵は数百人の小児を城内に連れ来て犯して末、これらの小児を一人残らず殺害した。これ等はさしずめ、加虐、色情、殺人淫楽、且つ同性愛者という事になろう。

さて、前記の様に淫楽から全く離れた虐殺というのも多々ある。一八六〇年代、通説、睡眠蠟燭（人体の脂肪から作った蠟燭を携えて強盗に入ると家人は殆んど仮死状に熟睡して、了って眼を覚さぬと信ぜられていた）が行した当時であるが、ロシアでダリアンという男が、他の家庭の女中さんを殺して腹部の肉を抉り取り、これで睡眠蠟燭を作ったという。又、シューワーベンでも、胎児の指を懷中していれば同様の効果があるというので、妊婦の虐殺が屢行われたそうである。欧州のみではない。我国の『今昔物語』にも平貞盛が悪性の疱瘡にかかり、胎児を喰えば治ると医者から聞かれて、やはり女中の腹を裂くというくだりがある。更に又ずっと近世になっ

て、明治十九年に馬場某という男は生胆を取るのが目的で二人の女性を虐殺し、長野地方裁判所で死刑の判決を受けている。

最後に段違いに巨大なのは、バトリイポーランド王の姪、ネダスデー伯爵夫人の行為であるが、六百人余りの少女を城内に連れ来て殺し、その血液で風呂をわかつて入浴した。これは永く若さと美貌を保たんが為の犯罪であつた。これ等はすべて狂信、妄信の類であつて、性医学によるサディズムの定義からはほど遠いものであるが、これ等も誌上に現れれば、広義な意味でのサディズムの中に含まれてしまふかも知れない。漱石の有名なロンドン塔に出てくる首斬人の心理はどんなものであろうか。研ぎすました斧の刃を吟味して、「俺達が斬れるとしても、これ位ならいいですぜ」と言うのだが、これ等は人道の全き欠如であつて、斬首も昌仕事も彼にとつては同等の勤労であり、他人の首を落すのも何とも思わぬ代り、己れが首を斬られる事態となつてもやはり同様、別段の感慨も湧かぬ、つまりサディズム等とはてんで次元が違ふのである。

さて、自己傷害であるが、これは権力者や否やにかかわらず宗教的狂信が根元になつて

いる場合が多い。ロシア帝国のスコプチー（去勢）は有名である。スコプチーは男女、両性共に行われ、男性は陰茎の外に睾丸をも除去したが、女性の場合は外陰部、乳房を傷つけるに止つた。施術に使用された器具は、剃刀、針金、焼けた鉄片等であつた。去勢に関連した回教徒の割礼の習慣（陰茎包皮の切断）がユダヤ人、エジプト人の間で行われるのは衆知のところだが、どちらが歴史的にその起源が古いかは判然としない。ユダヤ人はエジプト人から入つたと云い、エジプト人はユダヤ人から入つたと云い、現今の謂わばフレンチキスとアメリカンキスのなすり合いの様なものである。又去勢には、宗教的意味あいを全然もたぬ宦官というのが嘗ての中国にあつた。これも衆知のところだ、妻や妾の番人をさせる為に好都合であるからだ、性格が殆んど女性化し、嫉妬心が異常に強かつたという。更に細分化すれば、思う男への誓いとして小指をつめる女、相互の名を肉体に刻む刺青、剃髪等も自己傷害の一端であろう。しかし、何といつても自己傷害の極、自己殺傷となると、我国の切腹の右に出るものはあるまい。そしてこれは習俗、風習等というより（それには相違ないが）儀式と呼称した方が

思わず吹出してしまった。浣腸をすれば逆に衰弱するのが必然であって、或る程度の夢、空想は致し方がないとしても、あまりにも概念から逸脱しすぎるとかえって読むにたえないものになって了う。

概して最近の誌上では、内輪話的、空想幻想がその数をしめ、まがりなりにも小説、と呼び得るものが姿を消して了った。S小説と云えば十年一日の如く、鼻責め、浣腸、おしめカパー、メンスバンド等、読者の幻想から摘出したそれら諸要素を編成して、悪人側はきままってやくざ組織を描き、それへ人形を配

置したにすぎず、新しい女性が縛られる度毎に又しても以前と同じ責めが繰返されるに到っては、御都合主義のストリップ劇を二度見物させられるような気分になる。もう少し荒唐無稽でない。ただ文字を追っている間だけでも、その筆の世界へ引ずり込んでくれる程度の現実味をもった作品は出来ないものであろうか。こうした世界も、広大な現実社会のどこかには、或は存在するかも知れぬと云った読後感をもたせてくれる作品。その意味で浣腸や鼻責めを描かねばならぬ現代よりも、場面を江戸以前にとった方がまだしも良いも

のが出来るような気がするが如何なものだろうか。歴史には脱落している部分の方が多いのであって、想像力を伸ばせる領域が現代に較べてはるかに広大なのだから。無論江戸期に手ぶらで推参する事は出来ないし、それ相当の参考書は具備しなければならぬだろうが――。

回想すれば初期の誌上には時代物もかなり載っていた様に覚えている。そして又、感やエッセイ等も現在よりは今少し高級であった様にも。

願わくばK誌よ、私の郷愁する以前の誌面にもう一度立戻らん事を――。

「最新版」女体責写真五十粒選

A組五十集 大手札判印画紙(9×13種)焼付

一組一枚	一五〇円
五組五枚	五〇〇円
十組十枚	九〇〇円
二十組二十枚	七〇〇円
三十組三十枚	五〇〇円
四十組四十枚	三〇〇円
五十組五十枚	四〇〇円

A1	フミツケ汚辱縛り(新井)
A2	手吊り乳房責め(五月)
A3	ハリツケ猿ぐつわ(新井)
A4	全裸正面柱しばり(遠藤)

A5	亀甲強烈乳房縛り(遠藤)
A6	全裸手吊りムチ打(遠藤)
A7	豊満乳房いじめ(遠藤)
A8	乳房責め股間縛り(遠藤)
A9	鼻責め鼻梁いたぶり(遠藤)
A10	全裸後手高小手(遠藤)
A11	膨隆臀部さらし(遠藤)
A12	全裸正面強烈縛り(長野)
A13	うねる緊縛裸身(長野)
A14	色縄の開股しばり(長野)
A15	正面縛蛙股ひらき(長野)
A16	裸自慢縛りヌード(長野)

A17	正面アグラしばり(長野)
A18	正面大の字開股縛(長野)
A19	遅ましき裸しばり(長野)
A20	荒縄縛豆絞り猿轡(大塚)
A21	両手前縛り髪首絞(大塚)
A22	両手吊り股間吊り(大塚)
A23	両手膝下しばり(大塚)
A24	疼れんする裸身像(大塚)
A25	両股縄掛け開股縛(大塚)
A26	正面裸身強烈本縄(大塚)
A27	乳房晒し肉体自慢(大塚)
A28	責衣にはみ出る肌(大塚)
A29	投げ出し全裸縛(大塚)
A30	捕われの全裸縛(大塚)
A31	羞らぬの全裸縛(大塚)
A32	猿轡の全裸縛(大塚)
A33	荒縄全身縛り豆絞(大塚)

A34	盛り上る乳房縄目(長野)
A35	亀甲本縄鼻いじめ(大塚)
A36	ムチ打悶えポーズ(大塚)
A37	椅子またぎ汚辱責(大塚)
A38	縦縄股間縛り正面(大塚)
A39	ゴム猿ぐつわ全身(大塚)
A40	くさり乳房責め(大塚)
A41	強制片足挙げ責め(大塚)
A42	正面乳房くびり縛(大塚)
A43	鴨居正面ハリツケ(大塚)
A44	手吊りパンティ落(大塚)
A45	白バンド後手吊り(大塚)
A46	豆絞り高小手呻(大塚)
A47	裸縛り鼻いじめ(大塚)
A48	ガンジラメ立縛(大塚)
A49	亀甲本縄股間縛(大塚)
A50	立木縛竹棒責め(大塚)



保藤久人

“最近の読者通信から”

『つぎはぎだらけの愚かしい夢』

そんな筈はないと、何度も首を振って否定して見た。本当に私は読者通信に投稿して隷属を懇願した事は一度もないのである。

それなのに、今、私の前には傲然と麗姿が聳え立っている。気付いて見ると私の全軀は冷やかな空気にふれていて腕は自由を失い首にも何やら絡みついているようであった。

「この卑怯もの／＼お前のような横着な奴はなき声も出ない程いためつけて、二度と“M”など口に出さぬようにしてやるッ。」

——これが女王様というものか？。と私は呆然と仰ぎ見ていた。しかし、私には覚えのない事であり、私は痴呆のような瞳を瞠目して、尊厳ともいえる偉大な女性を見上げてい

るだけであった。

「手紙でいくら美辞贅言を書き並べても、この私には通じないと、前以て断つてある筈だよ。お前が余り哀願し続けるものだからわざわざ遠くまで呼びつづけてやったのに——。雪枝はお前の考えているような生易しい女じゃないッ。」

私は愕然とした。すると、この女性……いや女王様が噂に高い“東”という方であるのか——と。

「そら、あれを御覧。お前と同じような馬鹿な男達だが、お前のように卑怯じゃない。あの通り苦痛に耐えておとなしく“豚”と“犬”のテストを受けている。」

女王様が二つ折に撓わせた鞭で指差す方を見ると、二人共誠に哀れな姿を曝している。

その人達がY氏なのかM氏かH氏かS氏か私には判らなかつたが、“犬”といわれた男は変な形の筒のようなものを口に咥えて、時々痛いのか顔をしかめながらも舌を動かしている。奉仕する為の運動の修練だという事であった。“豚”の方は前にある二つの皿を情なそうに眺めている。見ていると顔を近づけて片方のものは吸るのだが、もう一つの皿はチヨイと舐めただけで驚いたように首を竦め

る。二人共、背中から太腿にかけて恐しい程の条痕模様が装飾のように彩られて附着している。二人の現在の姿勢は、確かに私の心の何処かで追い求めていたものと似通ってはいたが――

次の瞬間、私はウワツと喚きながら逃げ出していた。女王様の鞭が私の背中に叩きつけられたのである。本当なら、唇を噛みしめて耐え、お礼をいわないといけないのかも知れない。あの二人の忠実な同性は、それを有難く受け、次のテストへと進んで来たのに違いないのである。しかし、私の背中の痛みは、過去に感じたものとは程遠く、全身を引裂くかと思う程痛烈なもので、其処には何の甘美も愉悦もなく、恐しい程の苦痛があるだけであつた。

「アツ……助けて――」

私は思わず咽喉声で絶叫していた。

「うるさいわね。お前など相手にする気はないが、お前達の仲間の面汚しだから、私が代って制裁を加えてあげます。」

私は泣き喚きながら逃げまどうばかりで、さんざん罵しられつつ鞭で追われて転げ廻る。

「あの豚や犬の爪の垢でも煎じて飲むといい

わ。」

私はとうとう追つめられ踏みつぶされたようでもあり、絞り取られたようでもあった。

× × × × ×

私は蛙のようにギフツと呻いたようだが、暫くして「アツツ、熱ッ。」と、もがいている。私の血潮は熱気で沸き滾り汗が沸き流れる。頭がフラフラして目が茫とかすんで来る。息苦しかったが、口の中の舌は蒸れてその香りが意識の活剤となり、私は大きく呼吸していた。

不意に爽やかな女性の声がした。その言葉を、私は何処かで見知っている。何処だったかと血走った目をキョロキョロさせる私の前へ白いものが近づいて来た。途端は私は、アウツと咽喉で呻いていた。それが、芳野眉美という人の書いた情況の再現であることに気がついたのである。すると先程の声の主は、「美歌夫人」。前に迫って来るのは赤ちゃんのような形に古城真に抱き上げられた「アリサ嬢」。私は……私は何時の間にかSの代りに其処に入っていたのである。美歌夫人のものとされる華奢な指先が伸びて来て、口の中のものが抜き取られ、私は、アーウ、と声を出した。

もう熱さも苦にならず全神経は眼前に集中し、思わず、「綺麗だ……」と呟いていた。

「そう、綺麗だよ。」

突然、背後で若い男の声がして、私は驚いてその方へ首を戻し向けようとした。

「綺麗だね。純粹の『美』だよ。だから。」

男は手にしたカメラのシャッターを切ったようである。「誰だい……。失礼な……。」神聖なものを汚されて憤激した私の抗議の声は綺麗だ、と賛美したもので閉ざれて中絶し、私は芳香にむせてクラクラと昏迷の中へ惹き込まれて行った。私の咽喉は乾き切っていたようである。

だから、それは、滋味溢れる甘露であり、文字通り神様よりの下賜水であつた。

× × × × ×

「嫌ッ、堪忍して、こんな恰好はいやッ。」

突如響いて来た悲痛な女性の叫び声に、私は頭をもたげてそれを見、アツ、と瞳をそばだてた。

狼藉には違いないが、パツと花が咲いたように華麗であつた。

「尚子さん。嫌だ嫌だというけれど、そのポーズは、あなたが何時も心の奥底に秘めて、希求し続けている姿です。『どうでもして頂

戴スタイルの美津子嬢」と同じな尚子さん。如何？」

四囲を見廻したが男の姿は見えない。男を見出した処で私には何処の誰か判らない。この冬木尚子さんでさえ、私は知らないのである。知っているのは直ぐ前で咲き香っている明花一輪だけであった。「綺麗だッ。」と私が感謝すると「そう綺麗だよ。真実の『美』だ。だから。」と私の賛辞を待っていたかのように、また、あの男の声がする。「無茶だよ、君は——。」私はN・Iと称する男の顔を睨みつけた。

「何が無茶なものか。真面目な『美』の真理の探求だよ。」

特殊なポート・レートを、この上もなく愛するという青年は平然としてうそぶきつつレンズを向ける。その瞳が、獲物を見出した時のように輝くのを見て、突然、私の内部にある女性崇拜の思想が炎を上げて燃え始め、私は明花を自分の顔で覆って、写線から隠していた。だが、この私の行為は結果的には逆効果であり、彼女は羞しさでさめざめ泣き、陰の声の男や、N・Iまでも喜ばず結果となっていました。N・Iが笑っていった。

「どうだい、お前さんが京都の家に持ってい

るというポートレートを俺に譲らないか。俺に提供するなら、お前さんを、助手にしよう。何？。助手の仕事？。決っているじゃないか。お前さんの嗜好、ほら、今やったようなことをして、被写体の映像効果を増長するのだ。判るだろう。この意味？。お前さんに最適だッ。」

真実私は、その男の助手になりたいと思ったようである。

× × × × ×

「さあ見ろよ。遠山静子夫人だ。」

突然にまた、違った男の声がして私は背中を押されてよろめきながら見て、思わず、ウツと唸っていた。静子夫人は架空の人物の筈である。だが、私には非現実も幻想でもなく唯、見たままの姿に魂まで惹きつけられていた。

「違うわ。違うのよッ、私は遠山夫人じゃなくて小島寿子よ。何故判ってくれないの？。あの方は私のように若くないわ。どうして他人の私がこのように……。」

柱にぐるぐる巻きにされた美事な姿態の女性、悲哀の声をふり絞り、髪を乱して必死になって訴えている。確かに、私を押え込んだ男がいた筈なのに、その姿は見えず、たと

え、見えたとしても私にはその男がKになるのかTなのか、見知らぬ男というより外判らない。声だけが冷たく響いて来る。

「君は寿子じゃないよ。小島でもない。夫人と呼ぶのは可哀そうだけど遠山静子に間違いない。それ自分自分をよく見給え。」

「ア——ッ」と消え入るような声がして、みるみる中に全姿を鮮やかな薔薇色に染め上げて行く女性を見詰めている内、私の中にある「M」と「F」を押しつけて、僅かに存在していたらしい。「S」が勢力を増し、やがて

「F」と堅く手を結んだようであった。「ああ美しい！」と喘ぎつついう私の目は貪婪な輝きを見せていたのだろうか。完全に緊縛されて身動きも出来ぬ立姿の女性は、恐怖の眸で私の動きを追っていたが、私が残忍な気配を見せて近よると一際高く悲鳴をあげた。真珠のような涙がポロポロと零れ、頬を濡らして頸から落ちた。

「そうだッ。美しい。『美』の極限だッ。」

アッ、またあの嫌なポート・レートの男。

と思いつつも私はその声に誘われるように牙え牙えとした部分にふれていた。女性は呻き、四肢が忙しく痙攣した。私はその蠢動の総べてを味覚と共に察知し、弛緩を感じた時

私の「S」は消滅し「F」だけが、その事に夢中になっていた。

「お前さんは、本当に助手に最適の男だな。」
笑い声で、写し終えた男がいった。

× × × × ×

二人の男が私を引立て行く。互にMさんとかHさんとか呼んでいるが、やはり未知の人である。

小さな部屋の中には、女性が一人蹲んでいた。

壁に△中川芳子。飼育中▽と木札が打ち付けてあり、その下の紙に細かな日程が書き込んである。説明によるとアイデアを主体にこの苛酷なスケジュールが組まれたという。

△組板の女、宇野淑子▽。括られている女性の名前らしい。可哀そうに、あんな姿を野卑な男の目に曝して……。私の内部の何時もの思想が目覚めて来て、先程、静子夫人に對した荒々しい動作は、もうどこにも見当らない。空恐しくさえなつて来て思わず逃げ腰になる私を、男の一人が蹴りつけた。

「お前の行き場所は向うだッ。」

壁に真正面から突当たったようであり、軀がファッと浮き上ったようであった。

× × × × ×

私は床の上に横わっている。その私を三人の女性が見下していた。その人達の手にある鋭いような鞭を見て、私はアッと脅えて飛び起きたが、直ぐ足先で蹴倒されていた。

「三原さんどうする？。この男……。」

「こんなの駄目。つまらない、有光さんは。」
「私は三原さんや川田さんと違って少しづつ楽しみみたいから……。でも少し頼りない。」

「参考品として京都から送られて来たのだから少し遊んで見るかな。しかし、何故また、このような不良品が来たのでしょうか。東京でも充分間に合っているのに……。返送するまでにまだ時間はあるわ。マゾヒストの何であるかを、ほんの少し味あわせてやりましょうウフフフ。」

君臨する女神たちは美しい眸をキラキラ光らせながら、逃げまどう私を追い始めた。

——もう苦痛は沢山である。一人一人にひれ伏し哀願する私の背中に鋭い鞭が炸裂し、喚き叫びながら、一際激しい下腹部への痛撃に私はギャッと叫んでいた。——そして、その自分の声で漸く目覚めた。

× × × × ×

目覚めてから私は「M」なんてもう嫌だ。と思った。しかし、不思議な事に「甘美」が

あるのである。痛苦ではあったが目覚めた今何の苦しみもなく、私は現実に快よい気持が四肢に残っているのを知った。加えて、アリサ嬢と静子夫人に對しては限りなく愉悦を貪っていたようである。私のMは。

私のFは。自分の性を教えられたように、改めて愕然として、手にした本を見た。

——奇クを見ながら私は二、三十分仮眠したらしい。その間に、私の魂は東へ西へと遊び廻ったようであり、夢想の内に貴重な体験をしていたのである。

× × × × ×

愛読者の皆様の切実な呼び声を、独り勝手な痴夢の中に登場させて申し訳ありません。でも、夢なればこそ許される事であり、現実には厳しく冷たく、容易に私のようなものに、その機会を与えてくれません。自分自身が憶病なのかも知れない。勇気を出して、と励ます心と、いけない、いけないと制する心と。相反する二つの心理の中で私自身はウロウロするばかりです。こうして書きながら、誰方でもよい。本当に真摯な心で、真実の感覚的な「SM」を語り合う折があれば、どんなにか心が晴れ晴れとするだろうか、などと思いがら——。



映画

「日本拷問刑罰史」

について

おもだか・しの

全盛を極めたお色気映画も、流石に出つづいたものと見え、映画会社も、我々の存在を思い出してくれた様です。

此の映画の大筋については、一月号に、砂川氏が発表されました。私もまだ六・七回しか見て居ないので、見落しも多いと、思いますが、少々気になる所も有ります。

何分、小さな独立プロダクションの作品なので、セットを使わずロケだけでまとめるため、建物は必ずしも適当と云えないのは止むを得ません。

最初タイトルのバックに出る、各種の逆磔と逆吊は大変なもので、次の話の落城の後と

云った有様で、男は侍や兵、女も武家の妻女や女中達で、それぞれ薄汚れたなりで、男は大文字、女は十字か、足だけ揃えて縛って吊されて居り、鎚で突かれて死ぬのも有り、まだ息の有るのも居て、嬉しい見所です。

第一話は、戦国時代から始まり、一旗上げた大将が、武運拙く、一族と共に、捕えられた所が出ますが、出演者の中でも、特に男優諸氏は、練馬の産、(関西の方には楽屋落になると思いますので、註を入れますと、関東では、大根は練馬の名産と云う事になって居ます)が多い様で非道いものです。何分特殊な企画の作品でも有り、出演の人数を集める

だけでも大変でしょうから、有る程度我慢しなければなりません。それにしても、監督たる人に今少し気を付けて、いただきたかったです。しかし、合戦や落人行はすぐに終って、全員捕えられ、それぞれ仕置を受ける事になり、先ず大将は引廻しに成ります。

引廻しに乗馬を使う様になったのは、天正頃の様で、此の時代には、牛車等の荷車を使うのが普通だったと思いますが、此の大将は太い縄で胸をぐるぐる巻きにした後手縛りの背中に罪状の小旗を差して、薙をかけた裸馬にまたがると云う古式と新式の折衷で、今時使い古しの牛車を都合する事の困難を示して居ます。

仕置は串刺しで、馬乗りの無いキ字架に大文字に結付けて、下から鎚で突き上げ、大分手間をかけて、鎚先が口から出る所を見せます。ただ、縛り方が今迄の映画同様大変ゆるいので、折角の熱演も、いささか空廻り気味でしたが、完了後の遠景は先ず先ずと云う所です。

大将の一族の主立った者は、生理めにして鋸引きです。穴に追落して、土を掛ける所は中々よいものです。しかし、映倫の関係から

か、子供は縛って無いので、穴のふちに手を掛けてもがく仕種は変なもので、かえって埋め終った所だけ見せた方が、よかったでしょう。

次の土曜は砂川氏が書かれた通りのもので無くもがなと思われます。

その次は少し時代が下って、キリシタンの弾圧になり、首にクルスを掛けた母子が沖の方を眺めて居ると、五千トン位の貨物船が白浪を蹴立てて進んで行きますが、此れは見えない事にして置かなければなりません。

やがて、村でも一二と云った豪農である母子の家に役人が踏込んで、一同を引立てて行きますが、乳児は若い母の手から取上げて、空家になった座敷に捨置きにされます。

引立てられる者の縄は、方円流の早十字の様で、名和氏の指導によるものでしょう。しかし此処でも、六七才の子供は縄無しで、両手をぶらぶらさせ乍ら歩いて行きます。

やがて此の中の一人の女が木馬に乗せられますが、木馬は随分急角度な太いもので、またがった姿と、関係方面との都合によって、こういう寸法にしたのではないかと思えます。此の上に、腰巻に色襟の襦袢姿で、荒っぽく結られた女を吊下して、跨がらせ、足に

石の垂りを結付けてから打ちます。その後、夜のシーンで、別の女の馬上姿を見せますが此度は腰巻だけの半裸で、静かに身悶えして居り、今少し明るく見ればと、気を持たせる名シーンでした。

翌日は蛇責めで、腰巻一つの女の腕を開いて、棒縛りにして、仰向けに寝かした上に蛇を落し、更に足の間に落ちた蛇が、女の悲鳴と共に、するすると見えなくなり、胎内に這入って行った事を暗示します。やがて全部の囚人の額に十字の焼印を押してから、海岸で水磔に行われます。

ここでも亦、沖へ向けたカメラに大きな汽船がはっきり入って居ます。重要なカットですし、船が通り過ぎるのを、のんびり待って居られない事は判りますが、一寸、手間を掛ければ、技術的に消せるのですから、取去って置くべきです。しかし、とにかく此の水磔は出演者にとっては、非常な労作で、波の打寄せる浜辺にずらりと立て並べた刑架に、逆さ十字や、逆大文字に縛付けられて、波がまともに顔へ打掛けて居り、潮が満ちて、鼻や口が波の下に這入って苦しむ所など、演技以上の演技でした。どうも此の作品の監督は、逆吊りの好きな人の様で、逆吊り、逆磔のシ

ーンは中々丁寧に撮って有ります。

つづいて、残った子供の話や、踏絵が有にかくれ切支丹が見付かって、磔に成ります。

刑架は江戸後期型のもので、男は大文字、女は足台付十字架で、結方は相変らずのズルズルな非道いもので、監修に有名人の名を上げて居るのは、何の為だか判りません。

此れを遠矢で射殺しますが、胸のあたりに一矢ずつ射込むと、血が景氣よく噴き出します。少し血糊を作り過ぎたらしい。一人に一本ずつ射込んだだけで、一日掛りで死なせる方法は、平安朝頃から行われたと云われる古式の磔なので、縛り方さえ今少し確りすればすばらしい画面に成る所を真に残念です。

此の後、年代が飛んで江戸中期に成り、町家の家付娘と番頭と女中の三角関係で、娘が女中を火付死人に仕立上げる話になります。ここでも密会シーンの生垣の向うを、自動車が行きます。

余談はさて置き、此の話から江戸町奉行式の拷問や、刑罰が始まります。ただしセットを使用しない為、取調べは、始めから拷問倉内です。先ず囚衣を肌ぬぎにした素肌を菱縄風に縛られて、帚木尻で笞打が行われ、次に手足を背中に廻して、縄を巻締る私刑風の責

が入ります。

その次が石抱きで、裾をまくられて、真木の上に坐らされる所など中々よい演出です。

石は二枚乗せますが、半裸を乳首の上に結目を作った変な縛り方にして有り、乳首をかくす映倫への気使いか、監督の好みなのか、又は出演者の希望なのか、一寸見当がつきません。

此の女優は中々素質の有る人らしく、石抱きは見事な出来栄です。引廻しは囚衣でなく、腰巻に肌襦袢姿で、荒縄で菱縄風に縛られて、裸馬にちゃんと跨って行きますが、此れも映倫の関係でか、余りはっきり見せてくれません。

腰巻と云っても、此の映画の出演者の使用して居るものは、すべて二布では無く、立つとくるぶしまで届く長い裾除けですから、馬に跨っても、大腿が見える様なものでは有ませんから、今少しはっきり見物させてくれるもよさそうなものだと思います。

又此の御仕置の供の非人達はどう云うわけか、皆揃いの白い単衣を着て居ります。

此れはどうも書物に白衣と書いて有るのを白い色の着物と感違いして居る様です。

江戸時代に白衣（びやくえ）と云ったのは

いわゆる着流し姿の事で、例えば、侍ならば極く親しい友人等や、内輪の者以外の人に会ったり、公式の場所に出る時は、最少限度袴だけは、着けて居なければなりません。町人でも、家持、地持等と云って、区別される上級の者は、役所等に出向いたり、祭礼の時など、羽織袴、或いは紋付羽織等の略式礼装を着用しましたが、町家の使用人や女、又は更に身分の下る非人等は着流し姿が正装に成って居り、公式の場所では、羽織の着用も許されませんでした。又、武士と云っても、与力は侍ですが、同心は、身分が下って、仲間や足輕に近い最下級の侍でしたから、役向きで出張する時でも、白衣羽織姿で、二本差しては居ても、一般の侍とは差別されて居ました。

したがって、本に書いて有る、（供の非人白衣）と云うのも彼等が普断着用して居る、ぼろ着物の事で、禪一本の裸ではいけないと云うわけです。更に白い色の着物については公家、大名、高祿の武士等、官位を持つ男子の着料と定められて居り、無官の一般男子が白むくの着物を着る事は、上着下着にかかわらず、禁止されて居り、相当重い刑罰が定められて居ました。

それ故、古来から白むくを用いて来た死装束も、江戸時代には浅葱色を用い、囚衣の色も、亦浅葱色に定められたので、刑場人足が白むくを着用するなどとてもない話です。

刑場の広場では、ほぼ形の如く用意が出来て居り、襦袢を取って裸にした女を荒縄で柱に結付け、輪竹も少々たより無いのが附いて居ります。しかし定法の首と胴の鎖縛りは有りません。此の場面はスチルにして、ポスターにも使われて居り、縄の工合など多少不満は有りますが、とにかくうれしいもので、此の後藁束を積上げて行き、縛縄を土で目塗りもしませんが、名前をあらためた後、すっかり積上げてから火を附けるまで、十分楽しめます。ただ燃え上ってからは、役者の代りの物が、何も入って居ないので、あっけ無く燃え落ちて了いますが、関係方面とのかね合いもある事ですから、仕方が無いでしょう。

場面が変わると、今度は武家の妻女の不義で男は現場で斬られ、女は屋根裏部屋の様な所で、腰巻一つにされて夫から責められます。両手首をそれ／＼梁に結付られた女を、夫がのしり乍ら、手に持った洋ローソクで、先ず前の毛を焼き、更に腋の毛を焼払った上、口唇や乳首にも火を近づけて責めます。後日

改めて、検使の前で、生胴にされますが、服装は例によって、腰巻肌襦袢姿で、太い綱で後手の胴巻に縛って吊上げられて、静かに廻って居る所は大変よろしい。斬る所は見せませんが、斬られた足が、地面にバサツと落ちると血が飛散り、頭が下に廻り、続いて首も斬られて落ちます。首は人形ですが、一瞬の事ですから、まことに真に迫った出来映えです。

その次は、男女二人組の泥棒で、二人共海老責と、吊責に成り、女だけは続いて駿河責に成ります。海老と吊しは生身の出演者ですから、余り無理も云えませんが、吊しは相当激しいものです。駿河責も本式に作り物の石の重りまで付けて、随分丁寧に廻して見せてくれます。

ただ腰巻のまくれた所から、白っぽいパンティが見えるのは非常に興覚めで、目立たない肉色の物を使用した上、裾がまくれぬ様もって注意するべきです。

二人共仕置は磔で、引廻しは省いて、直に磔の場に成り、男は禪一つの裸で大文字、女は袖を取った肌襦袢に腰巻姿で、足台付十文字の刑架を用い、襦袢は一応形の通り、両腋を破って結付け、腋腹を出して有ります。刑

架への縛り方はユルイもので、女は足首の上が胴縄で膝が縛って無いので、腰巻がだらしなく下って居るのは、甚だ残念です。

見せ鑑の後、突き始めますが、仕掛鑑でなく、身体の後へ通して肩先へ出る所を見せ、腰から下を見下すカメラで、血が流れる所を見せます。此所はよい演出で、腰巻の上から血が流れて足や足台に溜り、下では非人が鑑を伝って流れて来る血を藁束で拭ってから力を入れて引抜く所など、身内がゾクゾクする楽しさです。

更に首に止めをさすと、首が前に垂れて死んだ姿は美しく、何と云っても磔で無ければ見られぬ所です。

次は幕末で、所謂志士達の中、藩士の一人在切腹申付られます。庭先に畳二帖を敷いた中級の扱いの正式なもので、死刑の切腹ですから、いわゆる切腹マニヤの方には向かないと思いますが、三方へ手をのばす所を斬る高級な打首刑です。

又同志の浪人の情人の芸者を抱主の女将が若い衆に手伝わせて、私刑にして責める場面が有り、ブリ／＼だの、瓢箪責だの水責などを、随分丁寧に見せてくれます。

最後に浪人三人が死罪に成る為に、斬場に

曳出され、続いて芸者も曳かれて来ます。何れも囚衣に細い帯を右寄りの前結びに締めて、縄は荒縄で可成り本式の斬縄に縛られて居り服装縄目共最良と云えます。縄もかなり良く引しめて有り、見ごたえが有ります。特に女の縛縄姿は美しく、囚衣が大変よく似合います。ただし斬縄は胸に縄を廻さないで、物足りなく思われた方も有ったでしょう。

最初に女に目隠しの紙を結付、男達は坐って見物させられます。女を斬場に引据え、喉輪の縄を切取って、囚衣を肌脱ぎにして、肩を出させて、斬る仕度をする所は古書にも有り、又私が御仕置覚え書にも書いた通り、ゆっくりと忠実に見せてくれ、すばらしい光景で、此の場面だけで、他の欠点をつぐなう余り有ると思います。刀を振下す所はうまくかわして見せませんが、身体が前にのめって血が飛ぶ所は一応ちゃんと見せてくれます。

次に男囚も浪人乍ら庶人同様に、目かくしを附けられて、次々に斬られて行き、その後打役の山田浅右衛門らしい人物の苦悩をあらわすシーンで終わります。

色々アラさがしや悪口を並べましたが、これも此の企画が見事だと思えばこそその愚痴でまったく夢の様に楽しい一時間半でした。

メトミミに就いて

増田トシロー

メトミミ、この言葉は、可なり以前から本誌上に使用され同好の人々の間ではもう事新しいひびきも感じられなくなった様な現在、あえてもう一度此処にそれを採り掲げたのは他でもない。其れは先般来、折ある毎に通信欄をかりてメトミミ同好の諸兄にその研究を呼びかけて来たのであるが、其れが唯直感的にメトミミとは女の相撲美であり斗争美への追及だと考えて居る様である。全く其の通りで誤認ではないが、もう一步深い意義を探究する為に本文を発表する訳である。

さて本誌創刊以来、各号に女子

斗争の記事文獻等を發表し其の文中にしばしばメトミミと云う新語を使用したのは実に土俵四股平氏であった。

同氏は戦前すでに私設の娘相撲部屋を作り婦女有志若干の人数を集め実際に相撲の技を教授し又共に研究して居ったのであった。

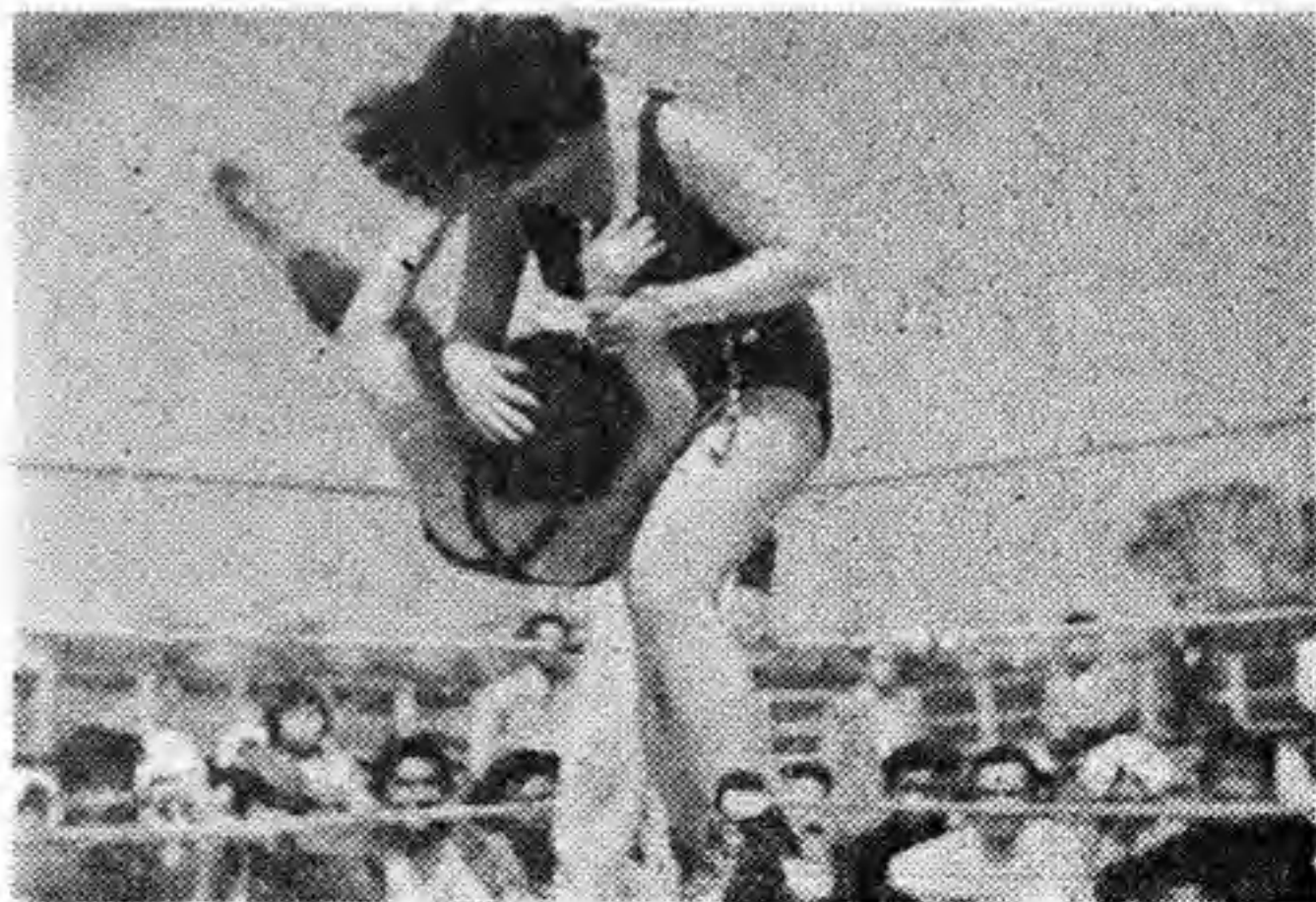
之等整状な技を通じ自然に女の肢体の健康的な発達をとげさせ、かえって当時としてはよき美容体操にさえもまさるものと考えられて居た程であった。然し其の後色々社会事情の変化と、ことに次第につくる戦雲の激化と、そして其の後には終戦後の混乱期を迎えて

何時しか有意の人達も四散し、遂に再びこうした計画も出来得ない状態となつてしまったのは残念である。

然し此の様な女子相撲美への研究の執念と願望は以後誌上に色々な型態により發表され其処で初めて女闘美、即ちメトミミと云う語句が創造された所以である。

そして、之等女の斗士、又は力士達をメトマーズと呼んで古い女相撲のイメージをくつがえして新様式の女子スポーツとしての構想が練られたのであった。

其の後益々此のメトミミに関する記事や小説等は誌上にうるおして、現在に至って居る事は御存知の通りである。さてその間に在って一方世上には女の相撲興行も東京を起点として旗揚げされたが、残念乍ら之は旧態依然とした内容の為何時しかその影を失ってしまった。そして其の後には男プロレスの影響と共に外国女子プロレスの影響と共に外国女子プロレスラー等の来日に刺戟されて



か忽ちのうちに日本女子レスラーの集団が各所に出来て、花々しい試合に全国的なファンを集め一時は相当な勢で最盛期を迎えた之等興業も所詮は、女性自身の持つ体力的な条件と興業的演出の不的確さにより財政的な維持すい進もはばまれて最近では全く見られなくなってしまう。

唯時折は劇場やキャバレー等の



ショーとして行われて居るのを見聞するのであるが、何となくうら淋しい限りではあると云う可きであらうか。総べてが此の様な状態に至ったのは単に女体斗争美への追慕が男性側の好奇心趣味にのみ走り、之れが育成を忘れた事と、女性側にも之をスポーツとして健全に体得してゆく勇気が失われたの

にも原因するのではなからうか。

ともあれ今後メトミは女子スポーツの一助として健全な発展開眼の時を願うのは一人筆者だけではないと確信して居る。

そして次に参考意見を少し記し度いと思う。

我々は御承知の様に先頃の東京オリンピック大会で体操競技に日本選手初め諸外国女子選手

達の美しい数々のフォームをまの辺りに見て、其の均整のとれた肢体にしばし憧憬の目を見張ったのである。之れこそ身体鍛錬の賜であり演技に見る動と静のりりしさに女体美の再発見した様な思いであった。

同様にメトミも女子相撲スポーツとして将来は国際的な競技の場に登場する日を願うや切である。

他面日本国技の柔道も遂にオリンピックの種目に登場し、今回は外国選手に一步勝者をゆずったとは云え敗れて悔ない一戦であった。又女子柔道家も日本に

は古くから有段者を数えて各々其の美技をほこって居る処から、女子相撲も続出してよい訳ではなからうか。外国ではやはり女子の柔道熱も盛大で可なり練習者が有ると云う事で、又女子プロレスラーは依然として存続して居る現在本家日本相撲道の為にも女子有志の奮起を期待する訳である。

然し乍ら附け加えて云い度いは先にも記した様に旧態依然たる相撲の様式を少しばかり改新補整して女性の体質にマッチしたメトミプレーを実現しなければならぬ。先ず男力士の様にチョン髷や巾広のまわしスタイルには多少の抵抗が有るので、髪は斗技に差し支え無い程度のアップでよいと思う。そして裸身に白又は卵黄色系の肌色に近い水着を用い、黒とか紺等のよくしまる布地のまわしを、締め込んだら十分ではないだろうか、そして行司は審判つまりレフェリーの姿に代り左右の選手メトミーズをコールアップすれば双方土俵ならぬマット上に勇姿を現わすのである、一礼の後しばし互の呼吸の合った処で試合開始となり

力量あふれる斗技が披露される事であらう。そして試合回数も三回から五回位にして一勝負毎に数分の休けいと次回への準備時間を置き乍ら最終的にダウンされた回数が多い方を敗者と決める様にすれば、それ程体力的にも女性特有のファイトは低下する事なくメトミの真価を発揮出来るものと思う。

メトミとは此の様な段階に到達してこそ本来の相撲技の真意を失うことなく女性が進んで公開の場でも堂々で行う事が出来る立派なスポーツとして、いつまでも存続出来ることであらう。

メトミに就いて、その解明と私見を雑然と記したに過ぎないが今後益々建設的な意見や資料を誌上に発表してくれる有意の人が有ることを、同好の士として大いに期待して居る者である。

(注) 掲載した二葉の写真は、筆者の提供によるものである。

× × ×

× × ×

革の服の流行

山 口 広

―革マニヤの幻想―

寒さがきびしくなってくると、革のオーバー、スーツ、上衣などが見られる様になったのは、ここ二、三年前からであり、今年は益々多くなって来た。以前に少し流行ったビニールレザーのコートなどは影をひそめてしまった。やはり本物には敵わない。

黒、赤、紺、茶、緑等々……色とりどりの革の服が街に、乗物に見られる様になって、寒い朝の通勤を楽しいものに変えてくれた、この流行は本当に有難いことである。

婦人雑誌にも、これが取上げられている。

―革の服は世界的な流行です。丈夫でイキ

で持っているだけでゆたかな気分になれるのが魅力。――軽くて暖かでゴージャスな気分になれるのが革のコート――等々……。

辞書をひいて見よう。

「皮」

動植物の外被とある。もっと限定すれば動物の毛皮である。

「革」

毛皮の毛を除いてなめしたものである。

革のしなやかさ、冷たさ、暖かさ、ぬめぬめと光る光沢、その強靱さは何物にもまして私たちの幻想をかき立てる。

勿論、一本の麻縄は女性の体をどの様にも緊縛することは出来る。高手小手、首縄、股間縛り、海老責め等々……。しかし革の持つあやしい魅力、機能美は私たちマニヤの心をしっかりと捉えてしまう。

一般に「かわ」と云われるものの中に毛皮と革があり、更に革にも表革と裏革がある。鹿の裏革と云えば高級品であるが、手触りと光沢の点で私たち革マニヤには満足を与えない。表革の感触が人間の肌に近いことから革マニヤは生れるのであろう。

最近も、毛皮の流行は一向におとろえな

い。「ミンクのオーバー」は相変らず庶民の手がとどかないが、襟や袖に小さな毛皮をつけただけでも、いかにも良家の子女と云う感じになるのはふしぎである。

しかし毛皮から連想されるのは、冷い眼ざしで庶民——奴隷を見下す女王や貴族夫人である。女王様の足もとにひれ伏してあわれみを乞う奴隷——男女の——の願ひも聞かずにとがった靴で——皮の乗馬靴で踏みつけ、蹴倒し、革の鞭で気を失うまで叩きのめす、そんな女王様を想わせるのが毛皮のコートである。たとえ襟や袖に小さくかざられていても毛皮は私たち男性にとっては女王様につながるマゾヒスティックな夢を呼ぶものである。

一方、なめした革のしなやかさ、冷たくて暖かい感じ、鈍く光る光沢は、男性にとってサディスティックな衝動を呼び起すものである。革マニヤのあこがれはこの「なめし革」に集中する。その意味からも革の服は女性が身につけてこそ価値がある。

革の服の材料は、特殊なものを除けば牛、小牛、羊、山羊の革が用いられる。牛の皮は強い点では一番であるが厚いので女性の服としては不適當で、黒や茶系統の色に染めて土建屋か單車乗りのジャンパーに仕立てた方が

適格であろう。革の中で最も私たちの夢を充ててくれるのはインド産の羊である。うすくしてしなやかで、手触りはしっとりとして人間の肌に最も近い。

あのごわごわした牛の革といえども責め具としては、他の何よりも責める人と責められる人の感情がにじみ出て来る。麻縄は罪人と岡っ引を、荒縄は強盗と被害者或は山賊と良民を、金属の手錠は警察官と犯罪者を思わせる。しかし、たとえ牛革であっても革の手枷足枷は、責めのプレイによって愛情を交わしているマゾとサドの感情がにじみ出てくる。

現実にお目にかかるのは、防寒用の革の服だけであるが、昨年の夏にはトップレスの水着のかげにかくれてしまったが、革の水着がレジャーウェアとして新聞に報ぜられたのを本誌の読者は見逃さなかったであろう。もし本当にそれを着て水に入ったら、じわじわと締めつけられて、それこそ最上の責め具になったであろうし、それを作った人はプレイの道具として考えたのかも知れないと思うのは私だけではないだろう。

街で見かける革の服も、最近の色と形で多くの変化があり、目を楽しませてくれる。女性の服として、多く見かけられる順に並べる

と、第一が黒、以下赤、緑、茶、紺で白とか黄色は非常に少ない。何分にも革の服は他の布地で作った服よりも高価であるので一番多いのは上衣だけである。普通の上衣か七分丈のコートが過半数をしめるが本命は何と云ってもオーバーである。あのしなやかでしつとりと光る革のオーバーを身につけた女性に思わず目を惹かれる。だが数は少いが革のスーツも時折り見かけられる。オーバーよりも、より肌に近いだけに革のスカートと上衣をつけた女性は思わず話しかけたい気にさせるものである。私は昨年冬に池袋で黒い革のスーツを着た女性を見かけて、デパート中を歩いて歩いたり、神戸駅で赤い革のスーツの女性に見とれて出勤に遅れた事もあった。

毎号の本誌をかざる四馬氏の挿絵の革の拘束衣に身をいましめられた美女のファンは多いであろう。あのぬめぬめと光る革の持つ緊縛感は、氏の絵の価値を充分に高め、氏もそれを十二分に心得られて、幾分のマンネリズムに陥りながらも、私たちを飽きさせないのは心憎いと云えよう。

以前にグラビアを飾り、分譲品にもなっている大塚嬢の「革の猿ぐつわ」「貞操帯」桜井嬢の「革の顔枷」など私の最も惹かれた作



品である。しかしながら本誌には革の拘束具が少いのには不満を持つのは私だけではないであろう。「宇宙の何処かで」にある革の褌、白表紙時代のSF的な創作にも革の拘束具は小説を引きしめていた。

その意味でも、革のスーツ（スカートと上衣）をつけた女性の緊縛、或は革のオーバーを素肌の上にまとった女性の緊縛、一歩進んで、革の下衣（ブラジャーやパンティ）をつけた女性の革ベルトでの拘束などがグラビヤ

を飾ってくれるなら、革の服の流行の時代にふさわしいものとなるだろう。

一昨年来、読者を魅了している団鬼六氏の「花と蛇」についても、前編はヒロインの静子夫人、京子、桂子と美津子が川田らの手に捕えられてから数日間の出来事であり、続編もまだ一日を終わっていない。四人の美女の拘束は裸で、麻のロープで緊縛されるだけである。私としては今後の進展がどうなっても、この四人の美女にはそれぞれ革の服を与えて

やってほしいと思う。四人とも体の各部のサイズは川田や鬼源によってくわしく測られてしまったので革の拘束衣は立ちどころに出来上るのである。今や森田組にいる革職人であった手下によって、四人の為の革の拘束衣は次々と仕立て上げられてゆく。まず静子夫人には革のホルセット、これはうすくてしなやかな羊の革で作られる。紫のホルセットは前面と後面が股下で連がり両脇が革紐で締められる様になっている。乳房の出るだけの丸い穴が二つ明けられている。胸の前でY字型になった縦の革ベルトの背中部分で両腕が固定される。

男役になった京子は厚い牛革の褌をはかされる。唐手の足わさを封ずる為に両膝の上を革ベルトで固定され膝から下だけのよちよち歩きだけが許される。更に首にも犬の様に革の首輪がつけられ、後手にされた両手首のすっぽり入る革の袋（ボクシングのグローブの様な）をしめた紐が首輪に吊される。

あきらめ切ってすっかり従順になった桂子には真紅のバタフライ、勿論しなやかな羊の革で作られている。そして胸から首までをしめつける短い上衣を着せられる。背中に締め紐のついた上衣の袖は充分長く、袖口は閉じ

ているので指先の自由は全く封じられ、しかも閉じられた袖口についた革紐で後手にも前手にも容易に固定することができる。自由にしておいてもバタフライの紐さえも解くことは出来ない。

いつまでもズベ公や森田組に対する反抗心を捨てず、逃走をはかる美津子は緑の牛革で作った乳枷だけが彼女の服になってしまう。この厚い乳枷の両脇と背中につけられた革ベルトで高手小手に締め上げられると、指を動かすことだけが彼女の自由のすべてになる。

四人の今や飼育される美女は、それぞれの革の制服の上に、いつまでも羞恥心を失わない為に革のオーバーが与えられる。このオーバーは、四人とも手を通す必要がないので袖はつけられていない。しかしマントの様にふんわりしたものでなく、膝でしめられたサックドレスの様な形になっている。革袋の上から首が、下から二本の足が突き出ているだけに見える。紫は静子夫人、黒は京子、赤は桂子、緑は美津子と、下着の制服と同じ色に決められる。革の嵌口具も同色のものが用意されて必要に応じて声を封じ、悲鳴をこもらせる。

森田組にとっては逃走される事は、組織の

壊滅につながるので警戒はきびしい。組の眼のとどく昼間は、それぞれの革の服できびしく拘束されているが夜間はドル箱である四人の美女のシヨウや調教が終ると、すべての小道具や拘束服を外されて体を清められ、勿論外部も内部も、そして静子夫人と京子、桂子と美津子が、二人一組で全裸のまま馬革で作った寝袋の中に押し込まれ、首だけを出して疲れはてた体を休める。厚い馬革の袋は内側からはどうもがいても開く事は出来ない。土蔵の中の密室には、四人の美女の入った二つの革袋が転がり、壁には四人の制服が吊されて明日の着用を待っている。高い窓から冷たい月の光が降り注いでいるのみ……。

このような幻想を抱くのは私だけでなく、革につかれたマニヤの共通の想いであろう。グラビヤを四馬氏の筆が飾るなら、そして団氏の「花と蛇」がその様に進展するならば、街に見かける革の服が一層楽しいものになるであらう。

最近号の奇クサロンを飾った小川明氏の告白にも革への願望があらわれている。私は革のパンツ、ブラジャー、猿グツワで責められる小川夫人が実現することを祈る。それを実現させる為にも小川氏に御自分で或は夫人が

お作りになることをおすすしたい。主婦の友十一月号に革の服の特集があり、縫い方や手入れの方法が述べてある。革マニヤなら一読しても良い。

革の幻想は果てしなく拡がってゆく。この私の革への願望をひき出したのは、本誌の第一期全盛時代の「蜘蛛と蝶々」であろう。悪プロデューサーの手に落ちた清純な新進スター御法川里枝が牝犬として飼育されるとき、革の首輪をはめられ革スリッパを口で運ばされ或は革袋の中で責められ、休息の時には全裸で革の袋を両手につけられて指の自由をうばわれ、ベッドにつながれた紐を首輪から外すことさえも、両腕は自由になりながら出来ない。そんな場面からであつたろう。

日本中で或は世界的に革の服の流行時代である。我等の「奇譚クラブ」も革の流行にのっていただきたいものである。

革の流行、パンザイ。

(おわり)

×

×

×

×

×

×

楯ほたの宿やど

……悦唐絵灯籠（その十二）……

万 田 不 仁

★

午後早い汽車に乗る心算だったのが遅れたため、海辺の小都市で軽便に乗換え、田舎の駅に着いた時は、冬の日が落ちて闇のとばりが刈田の広がる佗びしい村落を静かに蔽おうとしていた。

ト部圭三は、乗換駅で軽便の到着を待つ間に下車して買った潤目鱒と数冊の娯楽雑誌を入れたりリュックを負っていた。

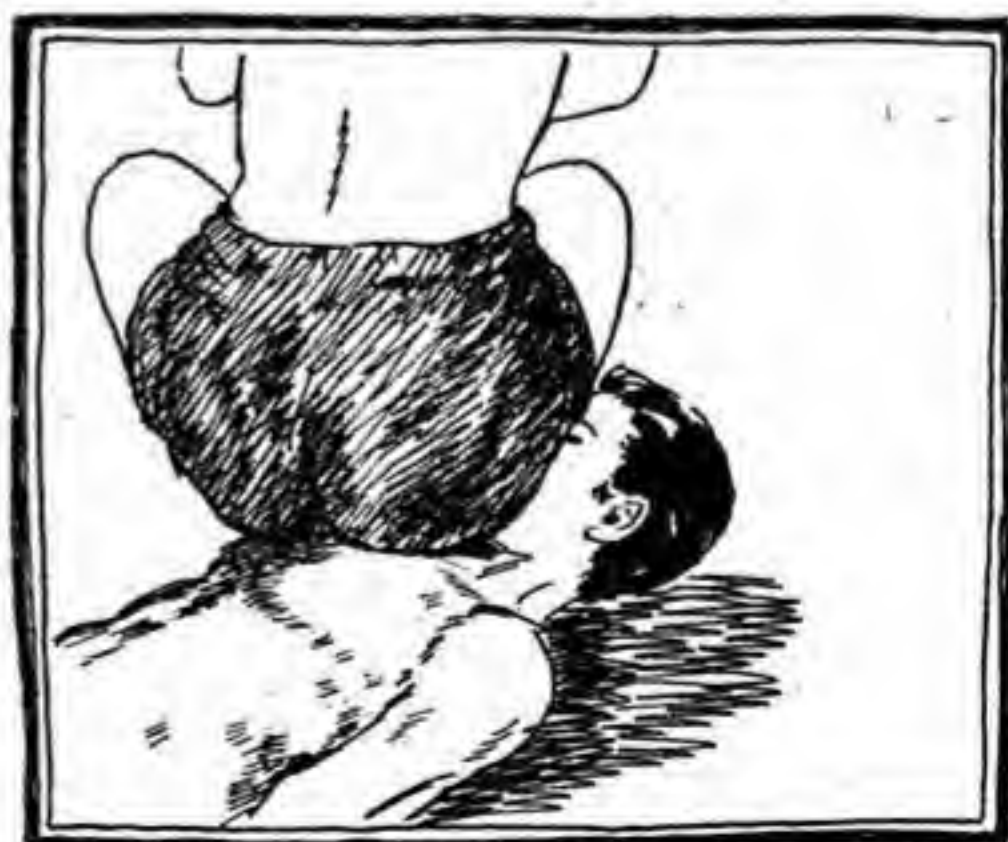
改札口を出た時は四五人連れもあり、中に東京からの米買人らしい陽気な高声など聞え

たが、彼等は間もなく村道の方へ消えてしまった。刈田を渡る風は冷たい。

泣くな小鳩よ 心の妻よウ

うしろから自転車の燈がさして、ネッカチーフに髪を包んだ娘を乗せた青年が唄いながらペダルを踏んでいった。軽便の中にも数人いた復員服は半長靴の青年たち、そんな連中の一人だろうと圭三は思った。自転車の燈がみるみる遠くなると、風が吹き出した。眼路の果てに藪か木立に遮ぎられるのだろう家の燈がチラチラ見え隠れする。高い空に星が鋭

くまたたいている。圭三は俯きがちに足を早めた。終戦後の混乱の中で、彼は友達と僅かな資本で小さな出版社を経営していた。商売は一時うまくいくかに見えたが、経理面を引受けた友達が使込みした挙句行方知れずになったのが躓き初めて、漸く立直って来る出版界の波の中で根の浅い彼の社は仲々に楽観を許さぬ有様だった。しかも彼は若さと、文学青年的潔癖性から俗受け一本の低級な娯楽雑誌を出していく味気なさとも内心で闘わねばならなかった。兎も角生活が第一だ、と何度



も自分にいきかせていた。生活といえは恐ろしい食糧難だった。百万の餓死者が出るなんてひと頃は噂された、そんなこともなさそうだが、厨は実に淋しかった。圭三は母の故郷へ度々米や芋を買いに出掛けた。が、母の両親がとくに死んで養子夫婦の代になって、いるその農家の空気は彼をしんから歓迎するものではなかった。

母が生れた村へ入る、村境の川辺にさしかかって圭三は呆然と歩を止め佇んだ。仮橋だが可成り岩文そうだった橋が流されて、残骸が向う側から水の中へ折れ曲って潰かっているではないか。彼は何時も遠回りになる村道を行かずに田圃路を歩いて、その仮橋へ達するのだったが、橋の流失は思いもよらなかった。

——この秋の大雨で流れた後、架け直さなかったのかしらん。

星明りと水明りに針金で結んだ橋の丸太の数本が徒らに黒々と見える。

——これから村道まで引返すのは業腹だ。確か下にも橋があるそう。それは流れたとしてもきつと修理してあるだろう……。

ここまで来て元へ引返すのが嫌だった。それにひどく疲れてもいて、何でも近回りの道

を選んで、早く母の生家の炉端へ着きたかった。この二週間というものは社運を賭けて新しく出す風俗雑誌の準備に追い飛ばされて、すっかり消耗した圭三である。

駅から仮橋まで一里半、夜は未だ浅いが、田圃の冬、遠い犬の鳴声も四辺の静寂を殊更感じさせる。圭三は、それ迄一度も渡ったことのない、見たこともない橋を当てにして、川下の知らぬ村落の白く乾いた埃っぽい路を歩いていった。それは易きにつこうとする心に似た——というより凭りかかった壁がたとい脆いものであっても、そこからひと思いに身を引離せない、物憂い投遣りな気持ちに似ていた。——魔に魅入られたんだらう。

後日、彼はひそかに呟いたものだが……。
月の出ない暗い夜に灰白く浮かぶ路を何処までも何時までも歩いた。その路は彼が向う側へ渡らねばならぬ川から段々隔たっていくようだった。しかし、彼は歩いていくうちに間もなく目の前に再び川が現れて、そこに水の香の高い架けたての橋が虹の懸け橋のように在る光景をありありと頭に描いてひたすら急いでいった。

火の見櫓があった。白壁の立派な蔵のある家があった。寺があった。頬被りして寒そう

に馬を曳いていく男に出逢った。両側に深い森のあるあたりに来て圭三は堪えようのない睡気に促された。

田舎の家の囲炉裏端だ。大々と太った祖母がけんどんから黒砂糖の塊を出して皺だらけの大きな掌に乘せてしゃぶれとすすめる。焼栗の香ばしい匂いがする。圭三は幼児になっている。

祭の夜に賑わい。祖父の肩車に乗って村芝居の木戸口を通る。若い女たちの髪油の臭いと甘ったるい体臭、青年の意味ありげな口笛どろどろと太鼓が鳴る。

圭三は歩き続けたが、夢を見ているようだった。

落葉が頭にかかった。見上げると夜空に高く朴らしい。路はじめじめした、落葉の積み重なった藪陰の窄い一筋の先細りするような心細さで、彼はそうなって始めてはっと目を見張った。

星は見えなくなり空は重たく曇っている。ずっと遠くに微かに軽便の汽笛が流れた。

——あれは終列車だ。すっかり遅くなった、もう川ッぶちへ出そうなんだ……。

初めての路を半ば当て推量でこんなに歩いて来てしまった自分がそれが夜道であるだけ

随分無謀に思えた。圭三も流石にいささか心細くなって暫く佇んでいると、向うから提灯が近づいて来た。提灯のあかりは、花のように闇に浮き出して、その火色は暖かそうだった。藪が漸く強くなるふうにぞうぞう騒ぎ出していた。

「あら、この先の橋を渡るんですか？あいくねエ、橋は駄目ですわ、秋の大雨で流れたきりですの」

圭三の前に立った女は若く、背の高い、しっかりした体つきだった。白い顔が提灯の火に浮き出して目がキラッと光る。

「ああそいつは困ったナ、上ミの橋へ引返せば間違いなかったんだが……」

「そうネ、あなた知らなかったのネ、東京からいらしたの？」

「ええ、仕方ありません、後戻りしよう」

「……一寸、あのウ、もう大分遅いでしょ、どちらまでいらっしゃるの？」

「鬼出村の根上ミです」

「えッ、それは大変だわ、ここからじゃ三里もあるわ、この夜更けに大変だわ」

「そ、そんなにはないでしょう」

「いや、ありますとも、それにあなたお疲れでしょう、お嫌じゃなければ……私の家へお

泊りになって明日早くに発ったらいかが、なに氣詰まりなことではない家です。何しろもう夜中よ、ホホホ、まあ他人のいうことで氣味悪かったら、お戻りになって」

「いやア、そんなことはありません、実はさつきから睡たくて、どうにもかなわないんです。よろしかったら、お言葉にあまえさせて頂きます」

圭三は歩き疲れに往生して腰をかがめて、女に言った。心の中に山中の一軒家に誘われた旅人が美しい女——山賊の情婦か娘——にしびれ薬を入れた酒を飲まされる、そんな講談や落語のひとつまを泛かべた自分を苦笑しながら……。

★

「今夜、いやに冷えるわネ、でも十一月末ですものネ、これが陽氣でしょうネ、あなたもつと火の傍にお寄りなさいナ」

女は立膝で炉に櫓をくべている。塩鮭と粕汁で暖かい御飯を振舞われた圭三は、体の隅々から精氣が湧いて来るように炉火に頬が赤い。紺飛白の着物の上に革羽織を羽織った女は櫓のいぶる煙に片目をつむったり、眉をよせたりしながら世間話をした。よくいう男顔で美しい上に凛々しさのある顔立だった。

今年は先ず先ず豊作で東京から米買人が多勢近郷に來ていること、百姓が次第に利敏くなり、米買いたちとの懸引に慣れて、偶普通の者が買出しに來ても扱いが悪くなっていること、村の青年たちの中には文化國家になるんだなどと言ってガリ版誌を作り、下手な小説や詩を書いている者が多こと、もともと豊かな土地で男女の風儀の悪かったのが、戦後の自由謳歌で更に輪をかけてひどくなったこと、先ごろ女相撲の一行が來て話題を撒いたことなど……。

「女相撲って肉襦袢を着てやるのネ、私ネ、素ッ裸に褌しめてするのかと思ってたからがっかりしちゃった。でも相当の人氣だった」

「あなたが渡ろうとした橋ネ、あそこで秋の始めに刃傷沙汰があったの、女の奪い合い、いいお爺さんと青年が……橋が血で汚れて、それから雨で橋が流れて、そのまんまになっているの」

女は笑った。齒が白珠を並べたようにきれいだ。圭三の耳に女の言葉が友達同志のように既にくだけているのが快い。彼は櫓火に手をかざしながらそれとなくこの家の様子に氣をつけていた。藪陰の小家だったが、まさか女一人ではなからうに家中しんとして物音も

人の気配もない。たとえ寝静まっているにせよ何か人のいる様子が感じられるものだが……。女の背後の煤けた茶筆筒、襖の破れを塞いだ婦人雑誌の口絵の色が褪せている。自在鉤の陰が映っている。ひび割れの見える太い柱に能狂言の乙を模した面が懸かっているのも何かおかしい。暗い電球の光りのよく届かぬ欄間に並んだ二枚の額入り写真。真夜のしじまを遠く何やらひびく。

「何でしょう、今頃、空ラ雷なんてへんネ、ホホホホ」

女は仰向いて白い喉を見せて笑う。楯を足す時俯くとうなじの白さがまた鮮かだった。

——雪おんな……

少年時代から空想癖の強い圭三はふっとそんな荒唐なイメージを浮かべて愉しくなっていた。空腹も疲労も癒えて、こんな場合に頭をもたげる男の好き心を彼も内心に蠢くがままにしていた。家の裏の木立に風が狂っているらしく、枯葉が雨戸に打ちつけられる音が聞える。

「あら、あら、もう本当に夜中になりましたわ、おやすみになりたいでよ、今隣に床をとるわ、あ、寝る前にこれ一杯いかが、よく睡れてよ」

女の膝の上に朱塗りの陶の壺があった。形ちよく、くびれたひさご型の壺の口から茶碗に酒のようなものが注がれる。

「よく睡れるの、暖まって、松葉酒よ」

「松葉酒？」

「ええ、松の葉を刻んで、水と砂糖を混ぜてお日様の熱で醸酵させたものよ、歳時記にも出てるわ、寒さ凌ぎにいいの、召しあがれ」

圭三は酒を好まなかったが、それなら飲んでみようという気になり、茶碗を受取るとひと息に飲んでしまった。

★

祭の笛の音がひよろろと流れていた。野天の踊場でひよっとこの面を被った女がおかめの面を被った男と絡れ合って踊っている。それを見上げてゲラゲラ笑っている男女大勢の黒い頭が鈴生りの果物みたいだ。花火を打上げている。紺の夜空に貧弱なる花火の華が開くと大勢は踊りを忘れて一斉に上を仰いで、ああとかわッと歓声をあげている。

圭三は村芝居の庭の上に紅い座蒲団を敷いて、ちよこなんと坐っていた。幼ない彼の傍にいかつい体付きの祖父が愛用の鈍豆の煙管を片手に熱心に舞台の役者の動きを眺めている。舞台では、ちよん齣の小粋な若者が酌婦

のような女と長火鉢をはさんで一杯飲んでいゝる。その女は圭三が預けられてそこで七才まで育った田舎の家の附近で小料理屋を営んでいたお関おばさんによく似ていた。彼は祖父がその小料理屋で酒を飲んだ時、大柄なおばさんに可愛い児と抱きすくめられて息が詰まりそうになったこわいような嬉しいような記憶があった。舞台の二人は盃を互に交わしながら何やら高い声で喋っているのだが、こちらにはよく聞き取れない。聞えても圭三には大人の話で解らなかつたろう。そのうちに若者は酔い潰れて他愛なく横臥して睡ってしまった。それからが圭三には何とも不可解でこわい次第になった。女は男の傍に蹲んで寝息を確かめて、おもむろに紫の腰紐をほどき、それを正体もなく寝入っている男の首に纏きつけた。見物客がへんにしんと咳もしなくなつた。固唾を飲んだあたりの空気が子供心にも圭三に解つた。女はゆっくりとした動作で男の上に乗りかかり跨って、腰紐の端と端を持った両手に力をこめ、きつい横顔をこちらに見せて容赦なく男の頸を締めにかかつた……

——う、う、うううう……

圭三は自分が締められでもしたような苦しみを覚えて目を覚ました。

「ホホホホ、どうなさったの？ え、うなされたわネ」

襖が少し軋って開いて、赤っぽい灯影が圭三の顔にさした。八畳程の暗い部屋に彼は寝ていた。絹の夜具で、低い屏風が裾の方を囲い、その屏風には何やら黒々と描いてある。

「いや、なに子供の時分のことを夢で見たんです、ハハハハ」

彼は笑って、体を横にしようとした。するとどうした訳なのか、体が利かない。動かそうとすると体の節々が痺れ、無理に力を入れると鈍い痛みが体中に広がる――。

「あれッ、へんだぞ、動きがとれない」

彼はまるで夢の中で、もうひとつ夢を見ているのではないかと自分を疑った。

「ホホホホ、どうしたのサ、え、おかしな方ネ、妙な恰好なさって、どうなさいました」

女は開けた襖を更に開けずに身を横にして上背のある体を猫のようにしなやかに運んで圭三の枕元にすわった。

「どうしたのよ？」

丁寧な言葉使用と、ぞんざいないい方をまぜこにした女の口調に明らかな嘲けりのひびきがある。

「フフフフ、無駄よ、今更どう足掻いても。

ホラ助けを呼ぼうとしても、声が出ないでしよう。さっきのお酒よ、張本人は勿論私、どうしたばたしても、無益なことが解るでしよう。何しろ身動きもならないんだからネ、ホホホ、私はネ、時たまこうして若い男の精水を頂くのが楽しみでもあるし、趣味でもあるのよ。男らしく観念して私の意に従いなさい、決して生命まで取ることはしないから御安心、ホホホホホ」

圭三は憤った目で女の妖しい笑顔を睨みつけたが、女は無論平気で膝を崩し片手を後についた反身で彼を斜に見据えている。

「先ず何をしてあげましょか、先ずお灸ネ、お灸が一番、あなたの体中、といってもお腹や胸、股、それに男のなやみにもぐさを置いて火をつけて、私、扇で煽いでやる、そりゃ熱いぞ、焦熱地獄、フフフフ」

いそいそと女は次の間に姿を隠したが、直ぐ戻って彼の蒲団の傍に身をかがめた。

「おべべを脱がさなくちゃ、大きな赤ちゃんネ、そら、どッこいしょ、下着も脱がなくちゃいけないわ、恥ずかしい？ フフフフ」

裸にされた圭三の体は忽ち鳥肌が立つ。柔かい夜具の上に、若々しい彼の五体が白々とむき出しになっている。その腹の上や腿の上

に大きなもぐさを基石を置くように女は並べた。彼の胸に屈辱感がどす黒い嵐になって狂っていた。

「私、看護婦みたいネ、子供のお医者さんごっこみたいでもある。ホホホホ、でもそら、火がついたら大ごとよ、お線香に火をつけて……そろそろもぐさが燃え出すわよ、扇で煽ごつと、ホラ熱くなるまえに、この扇の絵ごらんさない、面白いわよ」

女は昔の軍扇のような大きい扇を圭三の顔の上に広げた。隣の部屋――そこはさっきまで彼がいた囲炉裏のある座敷らしいがその薄暗い電灯の光が差込んで、それに炉の熾火の明りも加わった赤黒い光の中に、扇に描かれた絵はその鄙びた筆使いを鮮かに見せた。

坐布団の上に立兵庫に結ったおいらんの華やかな姿が牡丹の崩れるように傾いている、おいらんの緋の下着と僅かに覗く白い腿、その間に押し拉がれながら恍惚とした町人の目をつむった顔があった……人物の上に達者な字で「敷初は何がな礼と茶臼なり」と草書。

「ホホホ、いい絵でしょう、若旦那御遊蕩の図よ、ホホホ、いかが、もうそろそろ熱くなつたでしょう」

いうまでもなく圭三は火の玉となったもぐ

さの数々によって灼熱焦熱の坩堝に落されたのである。

★

「おや、おや、また夢見たの？ 凄いうなされようネ、どうなさったの、あなた他人の家ではよく睡れないたちのネ、びっくりしちゃうわ」

女は白い寝間着姿で膝をついて圭三の顔を心配そうに覗きこんでいる。

狐らしい、鋭い声が風の中に聞えた。

「あまりうなされると心配よ、あなたまさか東京で悪いことしてる人じゃないわネ」

圭三は黙って首を振った。体の熱くないこ

とも自由に寝返れることも全く奇妙だった。

「おかしな方、向う向いて、恥ずかしいことはないわ、でもうなされかたがひどいわ」

そういつて女はすらりとした後姿をくらがりに見せて隣座敷へ去った。

……その女の驕った笑声に圭三はまた驚いて目を開けた。浅い濁った睡りの後の重たい頭がずきずき疼いている。

「さて、今度は鞭で叩いたげる。百叩きよ。

あなたの血を沸騰させ、精気をたぎらせるには鞭が最適よ。びしびし鞭打ってあげるわ」

女は先の紺飛白の着物に革羽織の姿にかえて、右手に長い鞭を提げている。今し方白

緊縛写真と悦虐絵画満載の超弩級版

臨時増刊 写真と絵画 文献 特集号

直接お申込を 定価一部五〇〇円（送共） 略号（文献）

◎サド、マゾ、フェチ、女体切腹、女体浣腸、フェチ、女斗美、女相撲、とあらゆる趣向を網羅した本特集号は、今後二度と発表できない特殊文献を集録しました。

◎文字通り「文献誌」としての真価を発揮しました本特集号は、発売以来マニヤの方

々の座右の宝典として非常な人気で書店の店頭から姿を消してしまいました。特に直接申込用として発行所に確保しました分がごさいますから、未見の方は何卒この際略号（文献）とお書きの上、お申込下さい。一部定価五〇〇円（送共）です。

い寝間着を纏うて優しげに現れた姿は幻であったのだろうか。圭三は己が目を疑い頭をいぶかしんだ。それに情なくも体がやはり動かない。重たい疲労感がべったり手足に貼りついた無気力な、虚な状態、げんなりした麻痺感……ひゅッ、ひゅッと鞭が女の頭上に輪を描いて鳴り出した。

「叫びたくても声が出ないわネ、フッフフ」

彼の仰向けの体をまたいで立った女は、彼に後姿を向けて、思うさま鞭を揮う。鞭は細長い蛇のように彼の内腿に下腹に血の筋を浮き出たせていく。忽ち彼は悶絶しかけた。

……真紅の緞帳が炎の風に煽られている。そのいやが上にも紅蓮に燃える背景を前に無数の年寄や子供が手を挙げ、身をよじって右往左往逃げ惑っている。炎を一層荒れ広がらせる大風の中に凄じい鞭の唸りがひびく。

あああ、あああ、ひい、ひい、ひい、ひえッ

老人や女たちの悲鳴、天の救いを求める沢山の手が嵐に戦ぐ草のよう。哀訴、号泣の間を長い髪を乱した丈高い女の影が黒々と横断っていく。びしっびしっとな肉を撃ち裂く鞭の音。地獄図の巻物を繰広げたような無惨な光景。

……家の裏手で鶏が夜鳴きした。

「まア、まア、どうしたというんでしよう。私、睡れやしないわ、よっぽど疲れてるのネあなた」

女が白い寝間着の衿を掻合わせながら圭三を見下していた。背光のような明るさは新しく炉にくべた楳が、威勢よく燃えあがったらしい。パチパチ炎と木切れが弾き合う音がする。外の風音も未だ衰えそうにない。

「お水でも飲んでみる？」

「ええ、すみません、どうも今夜は寝苦しくて……」

「ホホホ、こんなあばら家で気味が悪いと思っただけでしょう、ホホホおやすみになる時、そんな顔してたわ」

枕元に水の用意がしてあった。

……冷たい水が喉を通り、それこそ五臓六腑にしみ渡るよう。圭三は今度こそよく睡ろう。明日は早いんだと混乱した頭を冷静にする思いで目を閉じた。すると間もなく何やら固いものが鳩尾をびったり抑えて、それはぐりぐりと小突くように力を加えてきた。

「フフフ、驚かなくてもいい、私よ、あなたが今飲んだ水ネ、あれ汚い水よ、悪酔いの薬だから飲ましてあげたけど、もう吐き出さなくちや毒になるの、フフフ、何の水かって

……解るでしょ、薄めてあるけど、解るじゃない、だからここをうんと押して吐かせてあげる」

部屋の中は暗かったが、襖の隙間を洩る灯影が女の姿を仄暗く浮き出させている。女の紺飛白が匂うような鮮かさで圭三の目を蔽った。彼の鳩尾を押している女の膝頭が青白く別の生き物のような生ま生ましきで、着物の開き目から女の体臭がむっと漂う。

「吐き気がきたら直ぐ教えるのよ、どいてあげるからね、ええ、まだなの、そんな筈ないんだけど……あなた私にこういう風にされるの楽しんでるんじゃない？」

女はみだらに聞える含み笑いをして愈々膝頭にその体重をかけてくる。圭三の胸の上の重みは次第に増して、磐石の下敷きになった苦しさは、こんなではないかと思う程になった。彼は唯せいせいと息を小刻みに喘いだ。依然声は喉が乾干びていて出ない。

「ねエ、まだ吐きたくない、もう少し下かしら……世話をやかせるわネ」

女のじれったそうな声がうつとも夢の中ともつかず聞えた。女が向きを変える時、前が乱れて、純白の下着が冴々と花びらのように見えた。

★

百舌鳥のけわしい声で起された。

「お早ようございます。むさ苦しい処でよく寝られました？今日は雨か、雪になりそう」

囲炉裏の傍に坐った圭三に女は笑顔を見せた。昨夜の風は止んで、寒かった。

熟睡の後の快い目覚めが彼には不思議でなかった。あのお灸責めや鞭打、汚水を飲まされたことなど、あれは全く冬の夜の夢魔のいたずらだったのだろうか。

「ホホホ、私の顔に何かくっついていて？そんなにまじまじと見られると、何だか恥ずかしいわ、これでも未だむすめですからネ」

いぶかしげな彼の眼差を女は別に気に止める風もなかった。

彼が女と朝餉の膳に向かった時、パラパラ軒が鳴った、霰だった。

母の生家へいって、彼は何も話さなかったが、その次にいった時、自転車を借りて、女の家を訪ねた。記憶を辿ってかの藪陰のあたりを探がして、通りがかりの人にもきいた。「そんな家はねエ、そんな女は知らん、村が違ふベエ」

圭三は何度も首をかしげた。彼は秋成の物語など思い出して、明るい冬日差の中で暫くぼんやりしていた。

(おわり)

限定版
写真集

美しき縛しめ

第三集 略号「美3」
頒価一〇〇〇円 (送共)

美人モデルの縄にあえぐ姿態が、両面特アート紙にギッシリとグラビヤで印刷されて、皆様のお求めを心からお待ち申しております。内容は次に掲げた百二十態の写真で、いずれも今まで一回も発表されたことのない、とっておきの秘蔵品ばかりです。何卒未見の方は、今すぐお申込み下さるよう、お待ちします。

◎緊縛女体百二十態 〔本誌優秀モデル総登場の写真集〕

樹間にさらされる (絹川)	美貌を踏みつける (絹川)	顔枷の装着中 (四方)	被虐のマゾ女性 (東浦)	首吊りのプレイ (大塚)
豆しほりの猿ぐつわ (絹川)	悦虐の園にさまよう (水本)	鼻孔ゼムピン責め (絹川)	大きな猿ぐつわ (竹野)	後手縛り猿ぐつわ (絹川)
縄目と裸身の羞らい (長野)	若肌に襲う白ロープ (若原)	鼻孔から薬液注入 (大塚)	可愛い足首 (絹川)	電光に肌は映えて (梨花)
後手首に喰込む縄目 (梨花)	蚊群の襲うにまかせ (絹川)	豊軀にまつわる黒縄 (若原)	黒髪なぶり (大塚)	囁まされる猿轡 (東浦)
荷造り縛り人形 (大塚)	きびしき縄目に喘ぐ (加茂)	ピンクカバーと豆絞 (絹川)	喰い込む柔肌に縄 (大塚)	柔肌高手小手 (梨花)
バンド着用しほり (遠藤)	麗しき裸身の縄目 (絹川)	斬首処刑フォト (新宮)	裸身に投げたタオル (加茂)	高手背高しほり (水本)
替ゴム猿ぐつわ虐め (東浦)	猿ぐつわ黒フン縛り (愛川)	両手首吊りさらし (大塚)	緊縛の優美ポーズ (絹川)	後手小手股間縛り (絹川)
ゴム布に包まれて (梨花)	あえぐゴム布嵌口 (大塚)	後手足首逆エビ縛り (梨花)	くわえた赤い花 (絹川)	柱後手縛りにて (山路)
椅子利用エビ縛り (東浦)	美しい顔をなぶる (梨花)	丈なす黒髪 (大塚)	エビしほり正面 (梨花)	下げられたズロース (梨花)
厳しき胴絞 (絹川)	飛び出す双丘と後手 (長野)	責衣からのぞく乳房 (大塚)	美貌美身の緊縛 (大塚)	十文字しほり (桜井)
輝く白肌をさらして (関谷)	首縄胴縛り股間縛り (絹川)	美貌放心の表情 (梨花)	首を締めるくさり (絹川)	木洩れ陽に白き肌 (絹川)
荒縄黒皮フンドシ (大塚)	被虐に耐えた表情 (水本)	後手強烈しほり (梨花)	手吊りのけぞり姿態 (桜井)	叫ぶ捕われの乙女 (大塚)
野性的な緊縛模様 (絹川)	生首フォト (新宮)	従順なるマゾの発散 (竹野)	乳首に咬みつく蛇 (大塚)	汗まみれの被虐 (梨花)
全裸のいましめ (愛川)	祭壇のささげもの (大塚)	手錠足錠首くさり (四方)	後手縛りと臀部 (絹川)	洋服ダンスに吊る (大塚)
白晒六尺フンドシ (遠藤)	越中フンドシ緊縛 (大塚)	白晒六尺フンドシ (大塚)	ピンクの腰巻さらし (東浦)	全裸にてもだえる (関谷)
百CC浣腸器責め (大塚)	飛びだした双丘 (加茂)	ガンジガラメの縄目 (絹川)	重圧に耐える表情 (大塚)	黒縄地獄 (四方)
荒縄のトゲに喘ぐ (大塚)	塩水を無理に飲ます (大塚)	首縄胴絞め股間縛 (桜井)	強烈アグラしほり (絹川)	るせつの裸身 (梨花)
両手吊りさらし (桜井)	胸部と臍窩の魅力 (遠藤)	引き回される裸身 (絹川)	ポリウムの誇り (桜井)	セーラー服を縛る (梨花)
M女性の本領発揮 (梨花)	臍窩を狙う蛇の舌 (梨花)	豊胸を彩る茶の縄 (大塚)	鏡にうつす裸しほり (山路)	首縄から膝縄まで (大塚)
足錠をつけられる (四方)		捕われの女学生 (竹花)	惜しみなく晒す裸身 (大塚)	高々と上った後手 (梨花)
			ゴム帽子麗身晒し (梨花)	くびれた胸と腹部 (大塚)
			首絞めに苦しむ (大塚)	カクテルドレスの女 (絹川)
			麗身をもだえさす (絹川)	浣腸責め (大塚)
			猿ぐつわの苦悶 (加茂)	首のくさりに悶える (絹川)
			黒縄にもだえて (大塚)	黒のズロース (絹川)
			全裸の手吊り責め (大塚)	破られたズボン (梨花)
			ゴムの猿ぐつわ (絹川)	正面立姿全身縛り (大塚)
			汚れた縄と輝く白肌 (絹川)	くさりに捕捉される (山路)
			手首足首椅子しほり (梨花)	亀甲型股間しほり (大塚)
			あえぐ夫人の表情 (関谷)	長襦袢と腰巻 (館)

贗作・悩ましのサディズム

《芳野眉美》

森山美歌夫人に関する小品

Q 日曜日午後二時

美歌夫人が拷問の部屋と呼んでいる、夫人の寝室の赤い絨氈に、ロープで後手に縛られた三人の男が背中合わせに坐らされていた。

いや、坐っていたと云ったらうそになる。

三人の両足は天井に向って大きく開かれ、片足ずつはめられた足枷の鎖がカーテンレールの滑車につながっていた。

SとMと古城真のあわれな姿である。

恥知らずな浅間しい恰好をさせて、男を虐めるのが好きだという美歌夫人の好みなのかもしれない。

美歌夫人は口紅を取り出すと、Sの額に、

「雄犬」

と書き、Mの額に、

「奴隷」

と書いた。そして、二人の鼻をはさんで

「H」

と乱暴に書きなぐった。

真だけが、

「カワイコちゃん」

と顔一面に書き込まれた。

美歌夫人は、SとMの中間に坐ると、しなやかな指で二人の胸を、脇腹を、太腿を激しくつねりあげ、足の裏を、腋の下を擦った。

二人の呻めきのたうつ表情の変化が面白いらしく、美歌夫人のやわらかな指は器用に敏捷に動き続けた。

そのうち、くたびれたのか、美歌夫人は針を持ち出すと、二人の肌をちくりちくりと刺し始めた。

それまでが美歌夫人の準備運動だったらしい。

美歌夫人は三人を、そのまま放置しておいて、アリスにSの土産の品である皮の拘束ドレスを着るように命じた。

「人間は誰だって、人知れず爆発させてみたい奔流ってものがありますわ。思いのままに振舞いたい衝動はある筈です。ところが、社会の常識的な環境が、その欲求を押さええているのではないのでしょうか。どんな事でも自由に出来たら、それはとても奔放になると思いますわ。凄い遊戯はいくらでもあるものよ」

古城真が受け取った美歌夫人の手紙の中の一節である。

美歌夫人の性の奔流は、とどまるところを知らないらしい。

アリサに皮の拘束ドレスを着せると、美歌夫人ははじめて満足そうに微笑を浮かべた。その拘束ドレスを、どう説明したらいいだろう。

アリサは足の先から頭の髪にいたるまですっぽりと黒光りする皮でおおわれていたのである。手袋と長袖のシャツとタイツとハイヒールを、一つに組み合わせたような皮着であり、目と鼻だけしか出ない皮マスクがフードの役目を果していた。

そのなめらかな皮着は、ぴったりとアリサの美しい肢体を、あますところなく包んでいるのである。

ただ、胸と尻の部分が丸くくり抜かれて、アリサの白い肌が丸く露出するようになっていた。

美歌夫人がアリサを責めるために、わざとくり抜かせたものだろう。

この全身の拘束ドレスを、もう少し詳しく説明するところなる。

腰の部分はチャックがつけられて、下腹部が露出するようになっている。チャックを締めれば、完全に肌に密着した一枚の皮でありチャックには小さな錠が付いていて、排泄する自由も奪っている。

両脚は部分的にゴムを入れて伸縮性を持たせた柔軟な一枚皮であり、ぴったりさせるために、皮ベルトで締められるようになっていた。

エナメルの高ヒールは五吋以上もあり、先が金属製になっていた。そして、数本の皮紐でアリサの足に結びついている。

ぴったりした皮マスクに口と耳を密閉されたアリサを見たとき、真は美歌夫人が興奮していると思った。目と鼻だけの皮マスクは、妖しい官能を燃えたたせる何ものかがあふらしている。

美歌夫人はアリサをロープで後手に縛ると一脚の折りたたみ椅子を持ち出して、椅子の後方の両脚にアリサの両足をベルトで固定した。それから、アリサの首にロープを巻いて椅子の前方の脚に結びつけた。

アリサの皮で包まれた身体は、腰のところまで前かがみに二つ折りになった。尻を切り抜かれて露出された二つのふくよかな小山が、全く無防備のまま突き出されたわけである。

二つ折りにしたアリサを、美歌夫人は真の前に置いた。

胸の部分をくり抜かれ、くびれあがって外に突き出たアリサの乳房が、真の顔に押しつ

けられた。

そうしておいて、美歌夫人はしなやかな細い皮鞭を持つと、アリサのうしろに立った。

しなやかな皮鞭がアリサのまっ白な尻を赤く染めるたびに、豊満なアリサの乳房は真の顔に激しく衝突した。

江戸小紋も美しい和服の美歌夫人が、皮の拘束ドレスを着たアリサを鞭打つ風情は、ロマンのベールに包まれた甘い戯れといっても過言ではなかった。

アリサが美歌夫人と知り合ったのは、アリサがデパートの高級化粧品売場のマネキンをアルバイトしていた時だという。アリサは美歌夫人に感化されたけれど、皮の拘束はアリサの好みなのかもしれない。

美歌夫人はアリサのむっちりした尻を軽く打ったあと、腰のチャックをはずして、アリサに浣腸をしている。それが目的だったらしい。

屈辱と羞恥感を与えるには、浣腸にこしたことではない。

成人の大腸は千から千五百CCの液で充満するらしい。意外に大量の液が入るといふ。

この腹圧は液を逆流しかねない。

深呼吸して全身の力を脱けはいいのだが、

アリサの顔をおおっている皮マスクは、目と鼻しかでていない。腹を軽く撫でて腹圧をかけないようにしてもいいのだが、ぴったりしたナイロンパンティのような皮のドレスがまとわりついている。

液の逆流と対抗するためには、嘴管とイルリガートルの水面の高さの間の落差を二米以上にして、高い圧力で急激に液を注入するしかない。

二米以上の落差でゆっくり注入すれば、たいてい苦痛もないだろうが、圧力を高くして液を二千CCと大量にすれば、それだけ痛みも強く、苦痛と疲労で歩くことも出来なくなるだろう。

アリサの表情は皮マスクにかくれてわからない。金色に輝く目だけがうつろであった。



R 日曜日午後三時

バー「焰の部屋」のマダムみどりが、シェ、パードを連れて、美歌夫人の寝室に入ってきた。

たのは、アリサにイルリガートルの液が注入し終わろうとする時だった。

みどりは、SとMと真の顔に書いてある字を見て吹きだした。そして、三面鏡から口紅を取り出すと、三人の鼻の顔にぬりたくったのである。

「三人の顔ったら」「お似合い」

美歌夫人とみどりは顔を見合わせて笑い転げた。みどりがシェーパードを美歌夫人にわたすと、

「ちようどよかった」

と美歌夫人がみどりに云った。

「助手が一人はしかったの」

美歌夫人は、Mの両足を天井の滑車から降しMを浴室に連れて行くようにたのんだ。

浴室のタイルの上に、後手に縛られ、足枷をはめられたまま、Mは寝かされた。

京染め小紋も美しいみどりがしなやかな細い皮鞭を持ってMの横に立った。アリサの尻

を打った鞭である。

「少しなら、わたくしのをパンにつけてたべたことがあるくせに」

「手足を縛っておいて、無理に口に押し込んだのじゃないか」

「そうだったかしら」

その時、アリサの限界が来たらしい。

Mの太腿に、脚に、みどりが激しく皮鞭を振り下ろした。

Mの悲鳴は、アリサの滝の中に消えた。

Mの胸に、腹に、みどりは皮鞭を振るい続けた。

考えられないことであった。

「このくらい責めないと気がすまない」

と美歌夫人が誰となく云った。

「いつかは責め殺してやる」

美しい眉がきつとあがり、本気で云っているようでもあった。

美歌夫人はMのあと始末を真にやらせている。

ただ一人、Sだけが天井の滑車に両足を開けて吊るされているだけとなる。

美歌夫人はそのSの前に、椅子に縛られたままのアリサを運んできた。

今度は、何が起ころうとしているのだろう

か。

美歌夫人はみどりが連れて来たシェパードに頬ずりをした。みどりのパトロンの犬だという。

「雄ね」

みどりはうなずいた。足が皮でつまれているのは、爪をたてない為のはからいだと思われる。

「みどりさんは経験済み」

「まさか」

みどりの顔が赤く上気しているのは、Mを鞭打ったばかりではないらしい。

「大丈夫かしら」

「だから実験をするのよ」

二人の会話は意味深だ。

「これから何をするつもりだと思う」

と美歌夫人がSに云った。

「四九一ごっこよ」

「四九一」

「スエーデン映画よ」

題名の「四九一」は、新約聖書の中にある「罪は七の七十倍の、四百九十までは許される」からとったものであるという。即ち「四九一」は神の許しの限界を越えた数字を意味している。

神の許しの限界を越えた罪とは一体なんだろう。

映画「四九一」の中に、少年の一人が連れて来た街娼を数人の少年がおさえつけて、迷い込んでいたシェパードをけしかけるシーンがある。

絶叫している街娼の声が次第にもだえに変っていく、ショッキングなシーンである。

キリスト教ではタブーとされている獣姦を「四九一」はあつかっている。

スエーデン、ドイツ、フランスでは、宗教団体が上映を反対し、結局全部カットになって公開されたという。

「わたくしはクリスチャンじゃない」

と美歌夫人が云った。

「それに、わたくしは神を信じない」

耳をふさがれているアリサは美歌夫人の声は聞こえないのに違いない。

美歌夫人は、さもおしそうにシェパードに頬ずりを続けた。アリサに浣腸したのはこの為だと思われる。

「不潔だと思う」

「——」

「決して不潔じゃないわ」

みどりの切れ長の目が異様に輝やいた。

アリサの全身をすっぱり包んでいる皮着をみどりのきらきら光る瞳がなめまわした。

S 日曜日午後五時

まっ赤な焰が燃えているようなレースのカ―テンは、美しい光の影を美歌夫人の輝くようなまっ白な裸身に落していた。

浴室で汗を流した美歌夫人は、そのまま寝室のゴージャスなベッドに横になり、残虐のけだるさの中に我が身をゆだねていた。

みどりはシェパードを連れて帰り、皮の拘束ドレスから解放されたアリサは、別室で古城真の看護を受けているはずだった。

急激な嘔吐を繰り返したMは、口臭をすっかり取り去ると、浴室を綺麗に掃除し、姿を消した。

ただ一人、Sだけが、まだ許されず、後手に縛られたまま美歌夫人の足下にうずくまっていた。天井の滑車から吊るされた足枷からは解放されていたけれど。

「アリサ、どうしている」

美歌夫人が寝室に入ってきた真にいった。

「少し眠るそうですよ」

「心配しなくていい」

「大丈夫でしょう」

「残酷だったかしら」

「かなりのショックは受けていますね」

「かわいそうなことをしちやった」

「アリサも無神論者ですからね」

「それならいいけれど」

眩しいほど美しい美歌夫人の豊満な肌を見つめて、真は目をしばたいた。美歌夫人は黒水晶のような瞳を輝やかせて真を見つめた。

「Mさんは」

「逃げちやったわ」

「逃げた」

「わたくしに殺されると思ったのでしよう」

「まさか」

「Mったら、ずいぶん苦しがっていたわね」

「そりやそうですよ」

「古城さんは苦しくないの」

「今日は、まだ」

「そう、じや苦しめてあげましょうか」

「――」

「その前に」

床に転がっているSの顔を踏んづけながら

美歌夫人がいった。

「この雄犬を縛り直してちょうだい」

「ぼくが、ですか」

「そうよ」

「でも」

「ヤキモチを焼いて、縄を解くかもしれないよ」

「――」

「箆笥の抽出に太いロープがあるわ」

「本当にかまいませんか」

「いいわよ」

「それじゃ」

美歌夫人の命じるままに、後手に縛られたSに座禅を組ませると、真はSの足首をロープで縛った。

そのSの前に、ベッドから起きた美歌夫人がすくっと立った。足でSの背中を踏みつけると、Sの上半身をぐっと前にかがませた。

真はSの足を縛ったロープを、Sの肩から背中へ回し、胸に回して強く締めつけ、ぎりぎり締め上げた。

一種のエビ責めであった。

美歌夫人はSの頭に足を乗せて、楽しそうにSの身体をゆすった。

「わたくしが古城さんを可愛いがるところを見てらっしゃい」

美歌夫人は真の手にすがりながら、無惨に前に屈曲したSの背中にのぼり、足踏みを始めたのである。

みしみしと骨が鳴り、筋肉がきしんだ。

Sが動物めいた呻き声をあげた。

美歌夫人はローソクを取り出すと、

「マッチ」

と真にいった。

「どうするんです」

「Sの背中に蠟をたらすのよ」

「――」

「さあ、早く」

「傷がつきませんか」

「やけどなんかしないわ」

真はマッチをすった。美歌夫人がローソクを横にした。

「あっ」

とSが叫んだ。

「あついの」

「うむ」

「あつくないわね」

蠟涙はSの背中に点々と赤い斑点をつくっていった。

新発足 懸賞／告白、手記、体験／原稿募集

☆賞金☆

優作	一篇につき	参万円
秀作	一篇につき	五千元
佳作	一篇につき	二千元

☆規定☆

一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここに新しく、「告白、手記、体験」の原稿を広く懸賞募集いたします。

一、従来、「告白」の分野で文献味豊かな告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告白をもって誌面を飾る考えであります。一、事実味溢れる告白、万人の共感を得る

「ほら、興奮している」

と美歌夫人が叫んだ。

蠟涙の点は線に代ってSの背中に流れ始めた。

Sが絨氈を汚したのを見つけると、美歌夫人はハンカチで汚れをぬぐい、Sの口にそのハンカチを押し込んだ。

そして、Sの頭にすっぽりとパンネットをかぶせた。

Sの奇妙な恰好を見ながら、美歌夫人は真にベッドの上へあがることを命じた。真は一瞬戸惑う。

「言うことを聞かないつもり」

美歌夫人の白い足が宙に舞って、真の頭を蹴上げていた。

伸びやかな肢が真の頭に当り、乳房から腹に、なだらかな起伏が、白い波のように動いた。なよなよとした美歌夫人の両腕と両脚とが、交互に運動をくりかえした。

「どう、ちっとはこたえた」

真の頭を踏まえた美歌夫人の素足の、桜貝のような爪先が、きらりきらりと宝石のように輝いた。

真は無抵抗のまま、ベッドの下に平伏していた。



バリウム便秘

栗瀬

長

齡（よわい）三十五もすぎれば、そろそろ癌年令、知人友人からすすめられるままに、癌の検診ぐらい受けてみようかと思うのも、最近の風潮、いや流行のしからしむる所かも知れない。

癌といっても、申すまでもなくいろいろある。上からいえば、舌癌、喉頭癌、食道癌、乳癌、子宮癌は我々男性には縁がないとして胃癌、肺癌、肝臓癌と枚挙にいとまがない。そして私達浣腸マニアにとって、最も関心の深いのは申すまでもなく直腸癌だ。

直腸癌の検診、果してどんな方法で行われるのであろうか。検診台に寝かされる。仰臥して足を挙げさせられるのだろうか、膝を立て

てた伏臥だろうか。何れにせよ、肛門を全開にして、触診、そして肛門鏡の挿入、ついで直腸鏡の挿入、想像しただけで、全身に血のぼる思いだ。

それだけに、直腸癌の検診を受ける勇氣は今の私にはなかった。肛門から出血するとか異常な便秘とか不規則なしぶり腹ならば兎も角として。

日本人の癌の大部分は胃癌という。その胃癌の原因としては、米飯、あついお茶漬け、佃煮等の過剰な塩分等いろいろな要素が原因としてあげられているが確証はないらしい。しかし結果的には胃癌が原因となり、自覚症状がない内に、転移して各種癌が発生すると

聞く。とすれば、やはり一応胃癌の検診を受けるべきだと考えて、国立第一病院の門をたいたのであった。

この所無病息災にして、凡そ医者と縁のない私は、——お蔭で、浣腸を受ける機会の全然ないのは甚だ残念なのであるが——バリウムなど飲まされるのは生れて始めての経験であった。

「昔は飲みづらくて大変だったんですよ、今はちゃんと甘味がつけてありますからね。」

看護婦さんは問わず語りにいって、紙コップに八分目程のどろっとした白い粘状の液体を渡す。大体私は、訳の分らぬ食物はきらいだ。口にするものには多分に神経質の方で、

齒磨にしろうるさい程。今や観念の眼は閉じていても、この甘ったるい、ざらざらするバリウム一杯には正に閉口した。眼を閉じて、一口一口のみ下す。ジュースの紙コップ一杯と、量は同じながら、幾口飲んでも終わらないこと。今更引き込む訳にもいかず、やっと思いで飲み下す。

「では、こちらにどうぞ。」

導かれたのは最新式を誇る断層レントゲン室。後から、前から、横から、斜から。胃の形を四方八方から万遍なく撮影されて、検診は終わった。バリウムを一杯に飲みこんだ胃袋はレントゲン光線を透過することなく、胃壁の異常の有無を、余す所なくフィルムの上に露呈するのだ。そしてこれを第一期検診とし異常らしきものが発見された場合、精密検診として、胃液、胃壁細胞の採取、胃鏡、胃カメラの使用が行われるという。

今日はこれで放免。何かバリウムのつまった胃が重苦しい。得体のしれぬゲップが出て、気持の悪いことおびただしい。その晩の晩酌のまずいこと。

さて夜。何か下腹部に重苦しい感じ、それが、時間につれて移動するように思われるのは、バリウムの腸内移動ではないだろうか。

私の腸内を真白いバリウムが腸の蠕動に従って静かに移動してゆく。そしてそれが、翌朝真白い便となって排泄される。たしか、人間ドックとして、ものの本で読んだことのある真白い便、おお、そうだ。私は実験の方法を思いついたのである。

翌朝、さしたる便意はなかった。勿論私は我慢した。その晩、ほのかなる便意を敢えて我慢する。もうこうなれば、意識的便秘だ。その翌朝、偶々私は早朝の所用のため、朝食もそこそこに一日の活動に入ったため、排便など考慮の余地がなかったのが幸であった。

さてその夜。思い起せば、三日目である。完全なる意識的便秘、さすがに下腹部の張りが甚だしい。真白な便、私は期待に胸躍らせつつ、トイレに入ったのである。

いきばる、出ない、いきばる、出ない。何か嬉しいような気がして、勿論私は、五〇℃のグリセリン浣腸を行った。たまりにたまった下腹部には、猛烈な便意を感じ、いつも我慢する苦痛の喜びはどこへやら、あわてて再びトイレにしゃがんだのである。

ところが、一気に排泄されたのは、今のグリセリン浣腸液ばかり、水洗便器の底は、ほんのりと黄味をおびた水のみである。これは

いけない。足りなかったか、弱かったかと、私は再びとって返して、七十五％グリセリン溶液を一〇〇℃浣腸した。忽ち迫りくる便意、我慢もどこへやら、あわててとって返すトイレ。しかし再び排泄されるのは白い便どころか今の浣腸液ばかり。

懸命にいきばってみれば、肛門は全開すれど、一片の便のかけらも出ず、肛門に固い栓がされている感じである。しまった。水溶液で飲んだバリウムは、腸内を通過して直腸下部に達して三日、その水分は腸に吸収されて、今やバリウムそのものの固りとなって、肛門を塞いでいるに違いないのだ。

どうしよう、浣腸しても駄目だ。いつか聞いたことがある。常習便秘を放置したため水分を失った古便が肛門を閉塞し、浣腸も効果なく、止むなく看護婦さんに、割箸にてはじくり出してもらったと。

今やそれが実感となって私に迫っているではないか。まさか医者に行くもならず、尾篋な話で恐れ入るが、そっと私は人差指を挿入してみた。おお、すぐそこに、ものの一、二糞のところに、固い固い固型物が、指で触れば、肛門より一周り二周り大きな固りが、びったりと栓をしているのだ。

これはいけない、私は指先でその固りをほじくってみた。固い、まるで石のようだ。爪でひっかくようにすると、ぼろっと小豆大の片が崩れた。しめた！、又ひっかく、崩れる。三度、四度、少しずつ崩れてゆくのは、まぎれもない真白なバリウムの固りであった。

遂に崩れた。二つに割れたバリウムの栓はさっきの度重なるグリセリン浣腸液でなめらかになった肛門壁を、それでも、ポコッという音がするような圧力をかけつつ一瞬に通過した途端、ドドッとはかり、三日間の宿便が迸り落ちたのである。

やれよかった。すっかり空になって、ペコンと凹んだ下腹を私はいとおしげになでるのであった。

閑話休題——このバリウムを浣腸責に用いたら面白いのではなからうか。

美女を緊縛し、食物を絶って飢餓状態にしようまく味付けしたバリウムを、オートミルと称して与える。飢餓状態だから、結構飲むであろう。或いは病気の薬と称して飲ませるのもよい。無理に病氣だとして寝かせて飲ませるのも面白いだろう。

そして、三日間排便を我慢させるのだ。もうこうなればしめたもの。バリウムの固型化した栓のため、便意はあれど絶対に排泄は困難である。下腹は張ってくる、腹痛は起る。

「おトイレに行かせて。」

「ああ、いいとも。うんとしておいで」

「ああ、出たいんだけど、どうしても出ないわ、どうしよう、こんなにお腹が張ってしまつて、どうしましょう、困ったわ。」

「じゃ、可哀そうだから浣腸してやろうか。」

「いや、いや、浣腸なんて恥ずかしいから。」

「それじゃ、もう一度、やってごらん。」

「どうしても駄目。お願い、浣腸して。」

「よし、浣腸してやろう。さあ、どうだ」

「駄目、お水ばかり出しやって、どうしても出ないの。もう一度、もっと強いのでして」

「よし、それじゃ一〇〇パーセントグリセリン液で一〇〇グラム浣腸してやろう。」

「ううん、ああ、ひどいわ、とつてもきくわああ、もう我慢できないわ、トイレにゆかせて、お願い」

「駄目、駄目、もう少し我慢しなくちゃ。あんなに固いんだもの、やわらかくならないよ」

「でも、でも、もう洩れそうよ、ああ、しみ

出してくるわ」

「よし、いいだろう」

「うーん、うーん、又、お水だけしか出ないわ、うーん、うーん、駄目だわ、どうしましよう、うーん、出ないわ、あ、痛、お尻が切れそうよ」

「どうした。駄目か。弱ったな。浣腸しても駄目となると——。よし仕方がない。一寸横になってごらん、みてやるから」

「いやよ、お尻みるなんて恥ずかしいわ、いやよ、いやよ」

「こら、駄々こねるんじゃない。そら、横になって。どれどれ。うーん、こりやひどい」

「いやいや、いや」

「指でさぐってみなけりや分らないよ。こりやひどい、石のような固りになってる。これじゃいくら浣腸かけたって、グリセリンで柔くなるわけがないよ。」

「浣腸して駄目なら、どうすればいいの」

「そうだな、仕方がないから、箸でほじくり出すんだな」

「まあ、いやよ、そんなこと」

「それじゃ、このまま溜めておくかい。それともお医者に行つて、とつてもらうかい」

「いやあ、お医者なんて恥ずかしいわ。仕方

注文殺到！ お申込みはお早く
(定価一五〇円分在庫若干あり、売切れ近し)

本誌既刊号在庫案内

○本誌の既刊号は、非常な人気で毎日注文が殺到しておりますので、在庫が非常に少なくなっております。切れの号も続出しております。○最近倉庫を整理しましたところ、昭和36年度の定価一五〇円の分が表に掲げましたので、御入用の向きは至急お申込み願います。○左記一覧表のうち、定価の記してあります分は、只今でしたら在庫しておりますから、御送金次第急送申し上げます。○昭和35年5月号以前の号は、全部売切れとなりました。限定版特別号第一弾から第四弾まで、サデイズム特集号第一集から第四集まで、「美しき縛しめ」第一集、第

「それじゃ、箸でほじるよ」
「痛いんでしょう、お尻切れないかしら」
「大丈夫、心配するな。どうだ、そら、痛い
か。ほら」
「あ、痛、痛ーい」
「我慢するんだ、少し位。ほれ、少し崩れた

ぞ。今度はどうだい

「痛」

「我慢しろ。よいしよと。ぼろぼろ崩れてく

るぞ。よし、その調子、その調子、そらどう

だ

「あ、痛、痛——い」

「それ、崩れたぞ、うわーっ、出る、出る」

「ああ、ああ、出るわ、出るわ、みんな出るわ、ああ、ああ、よかったわ、すーっとしたわ。」

「馬のウンコと変らない位出るなあ」

「いやあ、馬だなんて、恥ずかしい」

といった具合に、バリウム便秘治療が行われたら、どんなに楽しいことであろう。

二集。いづれも在庫ありません。
○送料は当社にて負担いたします。
故、誌代のみお送り下さい。

在庫雜誌及び定価

昭和36年6月号	昭和36年5月号	昭和36年4月号	昭和36年3月号	昭和36年2月号	昭和36年1月号	昭和35年12月号	昭和35年11月号	昭和35年10月号	昭和35年9月号	昭和35年8月号	昭和35年7月号	昭和35年6月号
(定価一五〇円)	(売切)	(定価一五〇円)	(定価一五〇円)	(売切)	(売切)	(売切)	(売切)	(売切)	(定価三〇〇円)	(売切)	(定価三〇〇円)	(定価三〇〇円)

昭和38年8月号	昭和38年7月号	昭和38年6月号	昭和38年5月号	昭和38年4月号	昭和38年3月号	昭和38年2月号	昭和38年新年号	昭和37年12月号	昭和37年11月号	昭和37年10月号	昭和37年9月号	昭和37年7月号	昭和37年6月号	昭和37年5月号	昭和37年4月号	昭和37年3月号	昭和37年2月号	昭和37年新年号	昭和36年12月号	昭和36年11月号	昭和36年10月号	昭和36年9月号	昭和36年8月号	昭和36年7月号
(売切)	(売切)	(売切)	(売切)	(売切)	(売切)	(売切)	(売切)	(売切)	(売切)	(定価二〇〇円)	(売切)	(定価二〇〇円)	(売切)	(売切)	(売切)	(定価二〇〇円)	(定価二〇〇円)	(売切)	(売切)	(定価二〇〇円)	(定価二〇〇円)	(売切)	(売切)	(定価一五〇円)

[illegible]

懸賞【告白体験手記】入選作品

S
M
レ
タ
ー

佐 中 晴 成

第二の手紙
——(岸野マキ子)

S M レター第二信は、堺市の岸野マキ子嬢からのものであった。

矢本八重子女史と別れて、悲しみに打ちのめされていた私の心には、耐えがたいほどの孤独と餓えが襲ってきた。

女性を縛りたい、女性の鼻をなぶりたい、という心の叫びは、日を追うごとに高まり、はては毎晩夢にまで見るほどになった。そして、その夢が、現実のものなのか、夢の中の出来事なのか、判然としないまでに混乱し、役所での仕事にミスを重ね、上役からはどなられるし、同僚からは皮肉られるという状態が続き、まるで、禁断症状にも似て、心の平

衡を欠きがちであった。

何とかしなければならぬ、という心のあせりはあっても、マゾ女性を得なければこの問題は解決しないし、さりとて、マゾ女性という稀少な対象が、そう簡単に見つかるはずもない。まさか自分の背中に「マゾ女性を求む」という布切れをぶら下げて歩くわけにはいかない。

たまさか、好意を持ち合う相手が出来ても「私は、サディストです」などと言おうものなら、

「いやあHノ」の一言で交際は終りである。

私は、従来から、女性と交際する場合、相

手からの指示がない限り、自分からは電話したり訪問したりしないことにしている。なぜなら、相手が求めているのに相手を追っかけまわすことは、私のささやかなプライドが許さない。第一、私から相手の会社なり、自宅なりに頻繁に電話をかけたりしたら、相手も迷惑この上ないだろうし、縁談にだって差支えようというものである。そのことが、相手の立場を追いつめ、結婚せざるを得ないようになつたら、こっちだっていささか困惑する。だから、私は、いつも相手からの電話待ちという態度をとらざるを得ない。交際していた女性からの電話がとできれば

「亦、ふられたな」と思うし、

「しかたがない」とあきらめる。

事実、私は、よくふられる。第一、ハンサムでないし、背だつてチビである。

ふられないほうが不思議な位である。たまさか、好意をもたれたりすると、心がとまどいウロウロしたりする。

私は、女性から電話があると、いそいそとしっぽを振る思いで指定の場所まで出向いて鼻の下をのばし、目じりを下げて相手が来るのを三十分でも、一時間でも、ポカンと待っている。だから、女性が私をふるのは、いとも容易である。嫌になったら、電話をかけないか、スッポ抜かすかすれば事足りる。女性に取って、これほど便利な、これほど軽蔑に価する存在はないだろうと時々自分で苦笑することがある。しかし、このように頭に馬鹿の二字がつくほどのフェミニストぶりも性格だからいかんとも為し難い。私の心には、サディストとフェミニストとが何の矛盾もなく仲良く同居しているのである。

私が、岸野マキ子嬢からの手紙を、アパートの郵便受に発見したのは、ちょうど、心を孤独と餓えが支配し、SMの禁断症状に悩まされていたときであった。

私は、あたかも、砂また砂の砂漠をさまよう旅人が、偶然得たオアシスの水に飛びつく動作にも似て、封を切る手も、もどかしくわずか数秒で、全文に眼を通した。余りガツついて読んだため、何を書いているのか、さっぱり解らなかつた私は、心の中で苦笑しながら、二回目は、一字、一句をかみしめるように、ゆっくりと、くり返し、くり返し読んだものである。

.....

前略、失礼いたします。

突然のお便りに、私の住所もはっきり書かずに局止め郵便にしたりして、本当に申しわけありませんが、貴男の（女性との交際を望まれるかたなら多分男性だと思いますが）ことやその他のことがらはっきりし、貴男が信用出来るかただと解るまで数回の文通の後、貴男が私に害を与えない人だとわかり不安がなくなれば、私のこと詳しく、はっきりお知らせします。それまで、このままにて、お許し下さいませ。

自分勝手な申出ですみませんけど、弱い女性の立場を御理解の上、お許し下さいませ。貴男様のお名前は、奇ク〇月号の読者通信欄にて拝見しました。

「お互の人格と意志を尊重し、お互の社会生活と私生活を浸さないという前提のもとで御交情をいただけるマゾ傾向の女性ないしはSMファンの御夫婦からのお手紙をお待ちしております」

と書かれていましたので、この人ならば、私の人生に害を与える人ではないだろうと思いい、失礼ながら、突然お便りしたのです。それでも、やっぱり何度か文通してみませんか？ 貴男のことをよく知りませんし、しますので私の住所は郵便局止めにしましたのです。

私は、今までに奇クという本は二冊程度しか見ておりません。それは、女の身では、このような本はそうちよくちよく買いに行けないからなのです。

この前奇クを見てから、すっかり夢中になり、読みたくて、読みたくて、たまりません。でも、家の方に送ってもらうわけにも行きませんし、困っています。貴男の読者通信欄の投書を拝見した時からせひとも文通したかったのですけど、字が下手で恥しいので、どうしようかと思っていたのです。でも、そんなことも言っておれず、字が下手なのも顧みず、夢中で、こんな手紙を書いております。

私は、一人子ですので、余り大きな部屋ではないのですが、自分の部屋がありますので部屋に取りつけのベッドの赤いカーテンを閉じてからは、色々と男の人にいじめられたりなぶられたりすることを空想して自分で慰めて居りますが、何かもの足りないのです。

だから、貴男と文通して色々な楽しい暗示と刺戟を与えていたきたいのです。そして私の世界も楽しいものにしたいし、もちろん貴男にも楽しい夢を与えたいのです。

マゾの傾向をもっている私には、力の強いがっしりした男性に荒々しく抱きしめられたり、私の体がギクギクいうまで荒い縄でがんじがらめに縛りあげられ、無茶苦茶になぶってほしいのです。顔をふみつけられたり、バンドでめった打ちにされたり、責めて責めて責め抜かれます。

私自身も、普通より体が大きいから（身長一六一センチ、体重五十八キロで色は白く、皆から、ファッションのモデルになったと言われたりします。十人並し上位の容貌です。）佐中さん、貴男が体のがっしりした背の高い男性的なかならないのになあと思っております。

申し遅れましたが、私は二十二才です。貴

男は何才でしょうか。

その他の事、例えばプレイの方法だとか、貴男の好みだとかを、詳しくお知らせ下さいませ。

以上、私のことについて、恥しいことまでつつみかくさず書きましたから、ぜひ、貴男も色々と赤裸々なことをお知らせ下さいね。この手紙がついて、一週間以内にお返事下さい。

大阪から、ここまでは、二日位の日数をみて下されば充分です。

よろしくね。

岸野マキ子

.....

貴女の御希望が、サディストの男性であるとのこと、喜びの上ありません。

といいますのは、私が男性であり、しかもサディストであるからです。

私は、自分で撮した写真が、アルバムに二冊、一杯に貼っていますので、御交際願えるようになりましたら、まず、その自慢のアルバムをお見せしたいし、また、貴女と二人でサド、マゾの遊びをしたりしたら、どんなに楽しいだろうかと空想したりして、今から、貴女とお会い出来る日を心待ちにしております。

す。

お互に、お互の将来のことを考えて、出来るだけ深入りはさけたいし、それに、お互にこれは遊びなのだから、好意を持ち合うことは必要でしょうが、それを相手に強要したり相手の立場を追いつめたりしないよう、愛し合うことのないよう注意したいと思っています。そして、あくまでも、お互に遊びだと割り切って、結婚するとか、または、結婚してくれとかいって相手を困らせないよう。初めに、お約束し合ひましょうね。

私の簡単な、自己紹介をしましょう。年齢二十八才、独身、身長一メートル五十八センチ（貴女よりチビなのが残念ですが）、空手（三段）柔道（二段）で、テニスは職場の代表選手として対外試合に参加しています。これらのスポーツのおかげで、筋肉だけは充分についています。体は毛深く足などは毛がモジャモジャとはえ蚊がとまっても、なかなか刺しに入れないほどです。顔は同封している写真により御判断下さい。

私は、仕事の関係で普通の日時間に時間の余裕を持たないのですが、土曜日の午後なら、いつも閑ですから、出来れば、土曜の午後にお逢い出来る日を御都合いただければ有難いの

ですが、いかがでしょうか。

なお、私は、現在、府営の单身者住宅に一人で住んでいますので、貴女さえよければ、私の部屋に来ていただければ有難いのですがいかがでしょうか。それから、失礼で恐縮ですが、堺から私宅までの往復の電車賃や当日の夕食費などは私に負担させて下さいますなら幸いです。

また私宅までお出になるのが御都合が悪ければ、天王寺附近の適当なホテルでも結構です。貴女の御都合のよい場所と時間を御指定下されば、御指示に従い、お待ち申し上げます。

なお、同封しました私の写真、ハンサムでないのが残念ですが、もし、この写真を御覧になられて御交際の御意志がない場合は、お返しいただけますようお願い申し上げます。また、幸いにして御交際いただけますなら貴女の御写真を次便でお送り下さいますようお願い申し上げます。

佐仲 晴成

岸野マキ子様

.....

前略、失礼いたします。

先だっては、住所も書かずにお便りしたに

もかわらず、お返事をいただき、本当にありがとうございます。

改めて、本当の住所をお知らせします。住所は、堺市〇〇町〇〇番地です。勤務は天王寺の近くの〇〇喫茶店です。あいまいなことで本当にすみませんでした。貴男がどういう人か、はっきりするまではと思っておりまして、あのようなお手紙を出したのです。

貴男が、サディストで、しかも男性であるとのこと、とても、うれしく存じます。でも余り強度なのは私恐いし、嫌ですが、晴成さんはどうでしょうか。

晴成さんのお手紙を拝見して、私、少し失望しました。あまりにも普通の内容でしたから、もう少し、刺激的な内容だったらいいのになあと思いました。サド、マゾの遊びには賛成しますし、ぜひとも近いうちにお逢いたいのですけど、その前に、もっと手紙でお互いの気分を高め、ムードを作ってからお逢いしたいのです。

それに、晴成さんを疑うわけではないのですけど、貴男の部屋は单身者住宅ですから、好都合ですが、貴男が不自由な私の体を、あられない角度から写すことの恐れがあるのですがそんなことも絶対にしないと誓って下

さいますか。晴成さんを信用していても、やはり女は弱いのですから不安なのです。

私は、二十二才の今日まで、男出入がないと近所でもよく言われていますが、私には、普通の男の人ではもの足りないのです。だから、三つ四つある結婚の話にも耳をかたむけたことはありません。

一人で、夜になると色々責められたり、いじめられたりする空想にひたっています。空想だけではつまらなくなったのです。

ぜひ、晴成さんにいじめられたいのです。夜になると体が熱くなってしかたがないのです。胸がうずくのです。私は自分の体が無茶苦茶にもてあそばされたいのです。

私は、よく会社の男の人から、モデルになったらいいと言われます。電車の中でも、私の顔をじっと見つめている男の人がよく居ります。私も自分で自慢したい時があります。そのくせに、私は男の人から、ちやほやされたり、御機嫌をとられたり、お上手言われたりすると嫌な気持ちになります。

晴成さん、

貴男でしたら、そんなことはしないでしょ。うね。貴男はサディストだから、きっと、私が自慢にしているこの鼻を足でふみつけたり

して、私を恥しめてくれるでしょうね。お願いですから、そうして下さいね。

それから、貴男のアパートに行く時の地図を教して下さい。そして、すみませんが、強いウィスキーを一本用意しておいて下さいませ。私は、手紙では、こんな思い切ったことを書いていますが、実際にその場になつて恐くなつたらいけませんので、お逢いしたら、すぐウィスキーをぐっとのんで、酔いたいのです。

私の写真を同封しました。バックは大阪城です。お友達と二人で写してもらったものです。左側の背の高い方が私です。一寸、太陽がまぶしかったものですから、顔をしかめていますけど、本当はもっと優しい顔です。ずいぶん背が高く、のっばに見えるでしょうけど、それは隣のお友達が普通の人より特別背がひくくて一メートル四十五センチしかないのです。だから、私が特別のっばに見えるのです。

最後に、貴男から私に出されるお手紙はぜひ女性名でお願いします。

お便りを一日千秋の思いでお待ち申し上げます。

佐仲 晴成様

岸野 マキ子

.....

御返事有難うございます。
堺市といえば、南海本線でナンバまで出てナンバから地下鉄で梅田まで来て、梅田から阪急（正確には京阪神急行といいます）に乗り十三（じゅうそうと読みます）でお降り下されば、私の居ります十三団地まで徒歩で五分もかかりません。駅からは一本通ですし、駅のホームから団地の給水塔が見えているくらいですからすぐに解ります。でも、念のため、十三駅からの略図を同封しておきますから御参照下さいね。

もっと刺戟的内容の手紙がほしいとのことですので、貴女が私宅においでになられたとき、貴女にどのようなすれば御満足いただけるだろうかと色々と考えておりますが、その私案についてお話ししましょう。

まず、貴女を自分で動けないように縛ります。上半身も、乳房のところだけをあけて、残りはぐるぐるとがんじがらめに縛り上げそれからゆっくりと楽しみながら貴女を責めるわけですが、その方法は、次のとおりです。

最初は画筆を使います。私が持っている画筆はたぬきの毛ですから、あまり硬くもないし、そうかといって柔らか過ぎることもあり

ません。ちょうど手ごろの硬さなのです。その筆で初めは軽く、ゆっくりと貴女の肌をなぞまわします。貴女は、そのくすぐったさには最初は笑い出すかも知れません。しかし、貴女は、いじめぬかれ、責められて、苦しみの泥沼でのたうちまわらなければならないのです。

私の手にはブラシが握られています。このブラシは猪の毛ですから、たぬきの毛よりはだいぶ硬く、肌に直接さわりますと、チクッと軽い痛みを感じます。そのブラシではじめは軽く肌にふれるかふれぬ程度の強さでなぞまわし段々と力を入れ出します。肌にチクッ、チクッとさす痛みも、そのうち段々と気持よくなってくるでしょう。

私は、この日のために、わざわざ百貨店で購入してきたバイブレーターを机の抽出しから取り出します。バイブの先をコンセントにつなぐと、ブーンという振動音が私の手に伝わり、この振動を貴女の美しい肌に伝えることを思うと、私の手は、バイブを持ちかねるほどふるえ、私の心臓は、息苦しくなるほど高鳴るのです。

やがてバイブ責めにあきてきた私はバンドをズボンから抜きとり、画筆、ブラシ、バイ

ブと段階的に刺戟され感覚が麻痺している貴女の乳房に、さらに強い刺戟を与えるべく、ピシッ、ピシッとたたきはじめます。

ああ、その時の情景を思うと、お手紙を書くペンがふるえ、文章が混乱し、サドの血は激しくふき出してくるのです。

早く、一日も早く、貴女にお逢いしたい。そして、この素晴らしいプレイを貴女と試みたい。

いかがでしょうか、今度の土曜日（今月の二十一日）の午後二時頃か、日曜日（今月の二十二日）の午後かにお逢い出来るよう御都合いただけますなら、喜びこの上ありませんが、御都合はいかがでしょうか。

なお、念のためですが、貴女のお好みにならない写真は絶対に撮しませんし、また貴女の女性としての誇りは必ず守ることをお誓い申し上げます。

御返信を心からお待ちしております。

佐仲 晴成

岸野 マキ子様

.....

お手紙をみて、今でも胸がドキドキしています。

貴男とのプレイはきっと素晴らしいと思います。

す。今度の土曜日には、きっと行きます。

地図を入れて下さっているのですが、私は十三のほうには一度も行ったことがない故不安なのです。

お願い、梅田まで迎えに来て下さいね。梅田の地下鉄を下りて一寸歩いたところに、阪神映画劇場というのがあります。（地下街です。）その前でお待ちしております。

左手の小指に白い繻帯でまいておきますしそれだけで万一誰かとお間違えになられたらいいけませんので、さらに右手の小指にも、同じように白い繻帯をまき、よく見えるように前で手を組んで立っていますから、必ず貴男のほうからお声をかけてね。

必ずその日に来て下さい。そうしないと私が困りますから。

それから、この手紙は、念のため、速達で送ります。まだ五日も先のことですから、普通便でもいいのですけど、万一のことがあるといけませんので念には念を入れたのです。

早く、土曜日になってほしいと思います。

晴成 様

マキ子

.....

土曜日午後の梅田地下街は、人の波でこっ

たがえしていた。

楽しそうに肩をおっつけあいながら、クツクツと笑って通り過ぎる若いアベック、気ぜわしそうにせかせかと百貨店へ入って行く中年の御婦人、五、六人かたまってキャッキョットとふざけあっている可愛いグループ。

土曜日の午後、深刻ぶった馬鹿ヅラには余り繁華街ではお目にかからない。どの顔も皆、週末の解放感から明るく楽しげである。しかし、その日の私ほど、数時間後に来るべきもののへ大きな期待に胸を高鳴らせ心に楽しみを充ちて歩いている人は、数少なかったであらう。

阪神ビル映画劇場の前では、二人のBGタイプ（失礼しました、OLタイプと言わねばでした。）が、人待ち顔に立っていたが、そのどちらにも目じるしの白い繻帯はない。約束の時間を三十分過ぎても、一向に現れないう。期待が大きかっただけにがっかりした。

（あのように言っていないで、若い女性のことだから、いざとなるとビビッタのかもしれない。それとも、亦、例のいたずらなのかもしれないし）

と思ひながら、帰ろうかどうかと私

は迷っていた。

その時、私の居るすぐそばに背の高い女性が現われ、両手をさりげなく体の前にまわし組み合せた。

白い繻帯である。

自分で十人並より少し上であるとか、ファッションモデルになりたいとかと手紙に書くだけあって、なかなかの美人である。それに私の心をいたく満足させたのは、彼女の鼻が心もち上向き加減であり、しかも、その鼻翼がやや横にはっていたことである。梨花嬢の鼻を軽く指先で上向けたら、こんな鼻になるだろう。この鼻ならいじめがいがあるというものだ。

「失礼ですが、岸野さんではありませんか」という声に私の方をふり向いた彼女は、

「晴成さん？」

といって、しばらく私の顔を見つめていたが、やがて、にっこり笑うと

「思っていたほどチビとちがうやんか。手紙で顔はたいしたことないを書いてあったよって、よっぽどやめとかかと思ったんやけど、来てよかったわ。写真より実物のほうがましやんか。うちな、チビでケツタイな顔してたから逃げて帰ったと思うとったんや、そんな

やったら二人で道歩くのカッコ悪いよってなあ」

とまるで人見知りしないお嬢さんである。体が大きい上に色が白く美しい顔をしているのだから目立ってしかたがない。そばを通る野郎どもがジロジロと見て行く。そのどれもが、きまったように、初めに彼女を見て一寸目を見はり、次いでその相手たる男性（私のことである）を見て「なんだ、たいしたことない奴じゃないか」と言わんばかりの軽蔑の影が走る。そして二、三步通り過ぎると申し合わせたように私達の方をふり返って行く。私のほうを見るその眼には、十人が十人、はつきりと「うまいことやってやがる」というかのような羨望の光が宿っている。

体が大きく、美人で、よく舌のまわる彼女に対して、チビで顔に自信がなく口下手な私は、どうも圧倒され劣等感を覚えてしかたがない。

その劣等感がぶつつけられたのだから、その日のプレイがどんなにすさまじかったか、御想像いただけると思う。

それに、このグラマー美人岸野マキ子は、サディストをもって自認する私をタジタジとさせるほど、責められることに対して爆発的

情熱を示した。

その美しく大きな鼻孔をさいなむときの彼女の恍惚の表情。乳房をバンドでたたいた時などは、もっと、もっとと督促され、たたいている私自身が、彼女の美しい肌に鞭跡を残さないよう気をつかわねばならないほどであった。

前の矢本女史、そして、今度の岸野嬢とともに、美しく、勝気な性格の女性がマゾであったという事実を、私は、非常に興味深く思ひ出す。

× × × × ×
佐仲 様

先日は、本当に有難うございました。

お蔭で、長い間夢見ていたことを、実際に体で味って、とても楽しかったです。

それに、帰りにはわざわざナンバまで送って下さって、感謝感激よ。

私ね、晴成さんに重大なお願いがありますの。それは、私と結婚してもらいたいのです。と、いいますと、あまり突然なのでびっくりされたでしょうけど、晴成さんかて、私のこと、嫌いじゃないでしょう。

私、晴成さんが、とても好きになったのです。結婚したら、もっと、もっとすごい責め

かたをして下さい。貴男のすることなら、どんなことでも我慢します。

貴男のこと、みんなお父さんに話しましたら、家では反対なのです。家の人達は、そんな人と結婚したら殺されてしまうというのです。

そして、貴男のように、女の人を縛ったり、バンドでたたいたりする人は精神病だというのは気違いのことだというのです。今のうち、手を切らないと、相手は気違いだから何をされるか解らないから、お金でかたがつくのなら、早く手を切れと言っています。

それに、近所のお金持ちの家に早く嫁に行けと言われています。今なら先方もまだ何も知らないから今のうちだと言うのです。晴成さんのことがあってからこの話は急に

進み、もう親同志では結婚式の日取りまできめているようです。その後取り息子がぜひにと言って強引に私の親に頼み込んだのです。いつも蝶ネクタイをしめ、英語の雑誌を

手にもっているきざなやつで、道で会っても何とか、かんとか言って話しかけてくる、しつこい毛虫みたいな男です。あんな男と結婚する位なら死んだほうがましです。

もう、堺に居るのが嫌に

なってしまうました。私、

家を出て来ますから一緒に暮しましょうね。今住んでいるアパートは、二人で入ったらいけないのですか。もしいけなければなら木造のアパートでも我慢します。

二人で住むアパートを見つけておいて下さい。近いうちに必ずすきを見て逃げ出していきます。私も大阪で働きます。貴男の月給で二人がたべて行けるようになるまで、アルサロにだって、行きます。私、お料理だって出来るのです。クッキングスクールに通ったこともあるのです。アパート、必ず探しておいて下さいね。今夜はきつと貴男の夢を



見るわ。

愛する晴成様へ

貴男のマキ子より

.....

私のようにくだらない男でも頼りにして下さる貴女のお気持は、私にとって身にあまるほど嬉しく思います。と同時に、そこまで追い込まれた貴女の立場に心からご同情申し上げます。

初めに、貴女とお約束しましたように、私達のプレイは、あくまでもお互いの人生を傷つけないという前提で行うべきで、それによりお互いの将来が左右されるようなことは絶対にさなければなりません。

その意味から、貴女の御意志を尊重し、貴女のお許しのない行為はとらない旨の誓約をいたしましたし、その誓約も守りました。

御両親が、私から貴女あての手紙をみて、私との絶交を強要し、貴女の御結婚を急がれるお気持は当然のことでしょう。しかし、貴女あての私信を取り上げられたり、貴女が嫌悪している相手との結婚を強制することは、いかに親といえども許される行為ではありません。

貴女が、その嫌な相手との結婚をさけるた

め、家を飛び出したいというお気持もよくわかります。仮に、家を出られて、私と同棲したとしましょう。私は、貴女のように美しい人と結ばれている自分を他人に見せびらかしたい幸福感で一杯になるに違いありません。

貴女も最初のうちはいいかも知れません。しかし、夜、アルサロにお勤めになり、数多くの男性と貴女が接している間に、貴女の心が私から離れないと私には思えませんし、その自信もありません。私よりも男としての魅力をより多く備えた男性は数限りなく居ります。例えば、私よりもお金持でハンサムで若くてしかもサディストである男性が貴女の目の前に現われたら貴女に私のもとから離れるなど言うほうが無理というものでしょう。しかも、そのように魅力的な男性ほど対女性関係はルーズだし、無責任なものなのです。貴女がアルサロにお勤めになられたら、貴女の歩かれる将来の人生が私には目に見えるような気がいたします。それに、貴女は毎晩十一時過ぎにお勤めが終る関係で帰宅は十二時をまわることがしばしばあるでしょう。私は、朝七時半には家を出なければなりませんので毎朝七時に起きております。この睡眠不足がお互いの心をささくれさすだろうことが充分

予想されます。

そうかといって、現在の私の給料では、貴女と二人で暮して行くのに十分ではありません。

御両親が貴女の御結婚を急がれているのは貴女の将来を案ずる親心からでしょうから、貴女が、その相手との結婚が嫌なため家出を真剣に考えていることを御両親に告げ、はっきりと結婚を拒否されるならば、その結婚がかえって貴女の不幸をまねくことを御理解になられるに違いありません。

貴女が、万一家を出て私のアパートに来られても、私には

「早く家にお帰りになって、御両親を安心させ、何度でも、くり返し、くり返し、その相手との結婚が嫌であることを御両親がなっとくされるまでお告げなさい。それでもだめなら、近くの民生委員のかたか、あるいは、御両親が日ごろから尊敬されているかたにお会いになり、その人から御両親に話してもらいなさい」と言う以外にありません。

私は、はじめにも申し上げたように「結婚を前提としないで、お互いの人生に支障をおよぼさない範囲と方法で、SMプレイを楽しめるかた」

との御交情を望んでおり、そのような前提での御希望や御意志であれば、いかなることでも積極的に受け入れ御協力いたします。

一度しか与えられない貴重な人生です。家出するとか、アルサロに行くとか、決してそのような無茶な考えや、やけくその行動をお取りにならずに、慎重に、大切にされるよう切望いたします。

岸野 マキ子様

佐仲 晴成

.....

前略

手紙をみて、あほらしくなってきました。勇気のない、ええかつこしいの貴男に、あいそをつかしました。

あの手紙、貴男の心をちよっとためしたものです。私が、貴男みたいなちびで女を養う甲斐性のない男を好きになるはずがありません。貴男みたいな男が、ほかの女からも慕われたことがあるなんて、男の株も下ったものだ、おかしくなってきました。その女の人はいくらと違いますか。二度と貴男と逢いたくないから、今後は手紙をくれないように、私の住所も名前もあのこと全部忘れる、意気地なし。永久にバイバイ。

× × × ×

当時の私はまだ若かった。この手紙を読み終えたとき、胸がムカムカしてきて、二カ月ほど気分が悪かった位である。

「SMレター」をまとめようと試みたとき、当初は、内容を取捨選択して発表することも考えてみないでもなかった。

しかし、それでは、自分に都合のよい部分だけの発表にとどまり、読者諸賢に不快感を与えるかも知れないことを恐れた。それに、このSMレターの巻頭に

「手紙の内容には、いささかのフィクションをも加えていない。手紙は、すべて、その紙面から文字を忠実に転記したものである」と偉そうに大上段にふりかぶってしまった手前、今さら自分に都合が悪いからといって削除しては読者諸賢に対する信義にもとうとうというものである。

早いもので、岸野嬢とのSMプレイの日から数えるすでに三年が過ぎ去っている。

今日、こうして再び当時の手紙を読み返してみると、そこに、マゾである一人の女の悲しみと孤独が怒りの形で表現されたのではないかという反省があり、岸野嬢には、まったくすまなかったと思っている。彼女は、き

と、私の心に潜在する男のエゴイズムを、処女特有の鋭い本能的感觉でさっちし、それを攻撃したのに違いない。現在の私の心は、当時の私の余りにも露骨なエゴイズムに対する自己嫌悪で一杯である。

万一、岸野嬢と再びめぐり会う偶然があったら、私は躊躇なく彼女の前に頭を下げ当時の私のエゴイズムを心からお詫びしたいし、私で出来ることがあれば、どんなことでも出来る限りの努力をおしまないつもりである。今頃になって、それほどのことを言うのならなぜに当時、もっと彼女の立場を理解してやらなかったのか、今頃になって彼女に頭を下げたっていかほどのプラスになろう、結局は自分の心に残るものを頭を下げることによって消滅させようとするエゴイズムに過ぎないではないか、と言われると私には一言もない。

手紙交換をもとにした交情は、必ずしも、いい結果のみを招致しないという見本のために、この一文を取って発表する次第である。

.....

次号—第三の手紙—

(輪島 実子)

かずひこの雑記帖

秋の味覚を楽しみつ

とやま・かずひこ

KAKIYA

ことしの東京は、予想に反して暑く、かつ湿気が高かった。そのためか「ミズムシ」にやられた人が多かったようだ。

気にしなければなんでもないが、いったんカユミをおぼえたが最後、トコトンまで、それこそヤニが吹きだし、血が流れるまで搔かないと、納まりがつかない。そのくせ、搔くと、ある種の快感がある——。厄介な水虫。そこで、ご本人に代って、マッサージによって、水虫を搔いて(?)あげましょうという

う新商売が生れた。

客筋は大部分が水ショーバイのひと。料金は一時間三〇〇円。六〇〇円だしてくだされば、テッテイ的マッサージで、あとくされなく患部を治します——というキャッチフレーズで、常連のファンをかく得したというはなし。

客となった一人のひとから、体験談を聞かせてもらったが、さすがに、堂々とカネを取ってやるだけあって、撫でるが如く、さするが如く、その搔き方は、とてもすばらしいそうだ。



指先で、スロー……スロー……クイックとくるとおもうと、指の腹でやさしく撫でる。くすぐったさや、痛みはない。イスにかけて、ひざまずいている術者に、足をあずけていると、痒みがなくなつて、気持よく治つたような気がするという。

そして、術者自身も、けっこう楽しさを得ているのではなからうか。

「搔くと、ポロポロ、皮がむけるでしょ、それを大切そうに集めていたわ」

使いみちは、云わないけれど、当然のような顔をして、甘皮を集めて持ってゆくとい

う。これが、甘美な食べ物になるのかもしれない。

しかし、私だったら指や手先などは使わない。そんなまだるっこいことなどは一切云わず、場合によれば自らの口を用具として供すること、あえて辞さぬであろう。ご主人さまが喜んで下さることなら、いかなる不潔なことでも進んでやるだろう。まして、ひそかに、おみ足の芳香かがせてもらえたり、その甘皮を食べられるなどは、密室、床にひざまずいて、掻かせて頂くことの楽しさとともに最高のものであろう。

この一篇は、足フエチの方々に捧げておこう。

楽しい処理仕事

東京のベッドタウンとして、ヨコハマの相模鉄道沿線はいまや開発、土地分譲の大ブーム。

私が関係しているY不動産会社も数万坪にわたり山林を切り開いて、営々と宅地をつくり分譲している。

団地内に、数軒のモデルハウスを建てて、来客の展覧に供している。

宣伝がきいて、連日のように、車で見にく

る客も少くないが、高級ムードを売り物の団地だけに、来客の顔ぶれはわるくない。

多くは、車に、おくさんやお嬢さま、又はそれに類する女性をのせているので、時たまうれしい体験が得られるのである。

広大な敷地、駅まで歩いて十五分、まわりには人家もまばらとあって、従って、トイレなどあるわけがない。

男性なら、あたりかまわず処理もできようが、ここでも困るのは、女性。

お客さまはまだよい。多少ガマンをすれば用事がすみしだい、帰りがけに、駅前のドラッグストアか、レストランで用も足せようが最も困るのは社側の接待女性だ。

感じのよい接客係をと、心をくばって、ある芸能プロから二人の女性にきてもらっているが、いくら用事だからとて、一々車を車にのせて、駅前のレストハウスまで運ぶのは面倒だし、ご本人もいやがる。

考えた末、会社の許可をえて、モデルハウスの一軒のトイレを使うことにした。

しかし、このハウスもゆくゆくは売る計画だから、汚すことは困るし、だいいち、水一滴出ない水洗なのだ。

要するに、人目をさけて、ドアの中で、用

をたすだけ。一滴たりとも水はすてられないという条件つきだ。

そこで、二人の女性だけに使用をゆるす。それも、大きいほうのばあいも、なにか容れもので、外へ捨てること、男子は禁制という鉄則がつくられた。

ところで、なかみの処理はどうするか。考えたすえ、ポリバケツのなかに、ポリ袋を入れ、用済み後それを林のなかへそっとすてることにした。

私は、遊軍で、セールスの応援をするていどの仕事だから——という理由で、この願ってもない処理を買ってでた、というのは愛用の軽四輪のライトバンが運搬に便利だから、という大義名分があったからだ。

一日一回のこの作業の、なんとたのしいことか、ボチャボチャ水音のするバケツを、そっと車に積み込み、スタートをきる。

林は、くらく、生いしげって、少し奥へ入れば全然人目にはつかない。

なかみを捨てようが、どう処理しようが、誰にも干渉されず自由にできる、そのすばらしさ、水ばかりじやない、それ以外のものまで、お目にかかれるのだ。神聖なものを前にして、私は美しいお二人のお顔を思い浮べつ

つ、自由に振舞う楽しい日課だった。

けられる嬉しさ

中央線大久保駅。ホームは高く、階段はけわしい。下からみあげて、右が昇り口、左が下り口と定められている。ここで、私の楽しい舞台のひとつなのだ。

というのは、左側通行という日本人の本性はここにも生きていて、何人かの人、市の広い下り口をのぼってゆく。

私も、左党の一人。

ただし、私は、ある目的のもとに、意識して交通違反をあえてするのだ。

きょうも、朝のラッシュに、わざと左をのぼる、それも、女性の姿をもとめて、のぼるのがコツである。

運がいいと(?)下りてくる人と、正面衝突する。

それも、出勤時のこととて、下りている女性も、急ぎ足でかけおりてくるのだからタイミングがよいと、美しいおみ足で、こちらのミゾオチのあたりを、グン！ とばかりにけとばすことになる。

見上げるような、急な階段(十三階段かな?)をのぼってゆく、目のまえに脚がおど

ハイヒールがおど、そして、全身にこたえる痛み。ここにも、ロマンティックなマゾヒズムがある。

逆に、下車のときは、こちらがけとばす番だ。わざと見当をつけて、ヤローの向うズネをけとばすときの痛快さ、このあいだは、あやまって、若い女性に体当りをくわせ、かの女、あやふく手すりにつかまって、転落はまぬかれ、こちらもビクツとした。

しかし、右側をのぼるという違反をしている弱味からに、先方はおこれない。

私は、まいにちの昇り、下りに、公然とこうして、けられる快感と、けとばす痛快さを計画的に味わう、マゾと、サドを併せ味わえる、天国と地獄というわけだ。

ジュース

日本にいる外人のスラングのひとつに、液体をさして『ジュース』というのがあるそうだ(週刊アサヒ芸能9月20日号)

ジュース——なんと味わいの深いコトバであらうか。残念なことに、同誌は、いかなる種類の液体をジュースと呼ぶのかは、ハッキリかいてないが女性のと断つてあるからには大よその想像はつく。いずれにせよ甘く、香

りたかく、おいしいジュースの名を性的スラングにあてるのは、なにか意味ふかいものを感じさせる。

弁当

仕事をかねて三泊四日の水上温泉(上州みなかみ)のKホテル泊りを終えてのかえりみち、12時44分発の急行『佐渡』は、ウィークデーなのに、案外の混みようだったのは、旧盆のあけの日のためだったかもしれない。でも、ようやく席にありついて、ヤレヤレだった。ボックスは、老いた両親らしいのと、その娘らしく、親にくらべて、十人並みの顔と都会人らしいスタイルで、ホッとさせる。三人は、水上で買い込んだ弁当をテンデにひろげだし、私は、これからの三時間ばかりの旅に、仕事先でくれたサントリーの瓶の封をきる。私は、汽車ではあまり弁当はたべない。せいぜいウイスキーと、チーズさえあれば、それで結構、せまくなるしい座席で、ハシをとるのは好まない。

ウイスキーをちびりながら、娘のたべる様子をサカナにするのもよいものだ。

——二時間あまりで、大宮着、車は目立ってすいてくる。

三人連れも、ここで下りていった。

座席には、三つの弁当ガラ。娘の、幕の内のカラは、ちゃんと、彼女のいた席の下にすてられてある。いや、彼女が食べ終って、すてるところまで見ていたのだから、絶対に間違いはない。

これから、30分ばかりで、終着駅上野だ。ボックスに一人のこされた私は、ゆう／＼と彼女の弁当をひろい上げ、フタをとる。

カマボコの食いかけ、残された白いめし、ハシには、口べにの色もあざやかに残されている。うまい。梅干を彼女は好物とみえて、ていねいにしやぶっていたが、なるほどハダカになったタネが残されている。

快よくまわったウイスキーの酔心地とともに、動かすハシのうまさ、女は小食だというが、カツの食いかけ、イカのくいかけ、そして魚のホネのハキだされたのなど、この幕の内の、ステキなおいしさはどうだ！

新調の、ダブルをリユウときこなした一見紳士ふう（私は、タイプから、よく、社長と間違われ、重役さんと呼ばれる）のりっぱな（？）男が、まさか、ガツ／＼と乞食のごとく通路からひろった弁当をあさるとは、誰もおもうまい。しかし、私は、娘のツバにぬれ

たカマボコをくらい、同じくツバにまみれた梅ぼしのタネに、舌つづみを打っているのだ！

ご主人さまの食べのこしを、めぐまれて、ガツ／＼とテーブルの下にうずくまっておなさけの余りものをめぐまれる犬のごとく、私は、娘のおあまりを頂く。

『鍵』

友人のSが、池袋に不動産の店を開いたからきてくれという電話。

なか／＼の景気らしく、ビルの一階にかまえたしような事務所だ。

久しぶりだと、とっときのジョニウオーカの封をきつてくれる。

呑むほどに、酔うほどに、トイレをおもいだす。私は、はじめてのところにゆくとかならずトイレをのぞく。用をたすフリはするがそれが目的のすべてではない。そして片すみに、例の『汚物入れ』のホローびきの容器をみつけると、或る期待にワクワクしながらついフタをとってします。

とにかくトイレは、私にとって、魅惑そのもののものだ。

小のほうから、さらに、奥へ進むドアがあ

り、ここが、大のほうの入口。

いつもの如く、用をたすフリして、いきおいよく、中へ足を踏みこんでおどろいたね。いやうれしかったね。

むこうむきにしゃがんで、今や、まっさい中の女性、みるともなしにチラリと眼にふれる、水。形をなしたものの。そして、すばらしい芳香。

『失礼！』

と、あわててドアをしめて、逃げだしはしたものの、それは、強烈なシーンだったし、中なる女性は、私以上に、おどろいたであろう。

『そうかい、話さなかったかな、カギがこわれているんだ、だから、はじめにノックしなくちや……』

Sは、おかしそうに声をたてて笑う。

こちらは、それどころではない。カネをだして、みせてもらうような、ツクリものの場面ではなくて、文字通りの封切りをみたのだから。みてきた、目にまぶしいまっしろいお尻の形を、思いうかべながらの思い出話を浮わのソラでききながら、思いがけなく行き合わせた『ひとときの眼の幸福』を反すうする私だった。

歯痛の妙薬

内外タイムス紙、9月14日附、直木賞作家寺内大吉の『だいきち、縦横無人』より。

歯の痛みを治すクスリとして、コップの中におのれの液体をとり、これに蜂蜜か砂糖をまぶし、大サジ三杯の水でうすめてのめば、痛みは去ると書いてある。

もしも痛みが治るのなら少年のころの『悪癖』をおもいだして、コップに採取してみるのも一法かもしれない。

しかし、このアイデア、いささか、コプロのおいがないでもない、まして、自分のものを用いるよりは、これはと思う人に乞うて一滴をめぐんで頂き、これを妙薬として、使うことになれば、これは、五反の畑だ。妙薬といえ、つぎのような話もある。

修業

以下は文芸朝日10月号よりの取材を、『日本観光』9月13日付が新刊紹介の形で紹介したもの。(話のたね本「奇人怪人物語」黒沼健)

センゼン教というのは、カトリックの一派で、コルネリムス・ヤンゼンの主張する教理

に基づくものである。もっぱら体験を重んじて、教権に反対するのでローマ・カトリック教からは異端視された。

極端な体験主義なので苦痛や苦行はすべて身をもって経験しなければならぬ。しかしその熱狂的な信者はほとんどが女性である。その教徒のすざましい苦行の中には、鉄棒やハンマーで体中をうたせたり、舐膿、食汚、十字架刑などいろんな苦行があった。舐(し)膿というのは、熱狂的な信者が、一室で骨と皮ばかりの少女の、全身繃帯だらけの患部をなめてなおすのだ。繃帯の下は爛れた腫物で熱して割れたザクロのようだった。割れ目の中に、骨の見えるところさえあった。舐膿をする若い女は一瞬、さすがに顔が蒼白になったが、次の瞬間、顔をきつとあげると「おお救世主キリスト様、私をお助け下さい。主はこの少女の腫物の治療を私にお定め下さうた。あなたを心から祝福いたします」はじめは蒼ざめた顔に涙さえも浮べていた若い女は言葉の終る頃には、落着いた柔和な顔に戻っていた。彼女は膿み割れた腫物の上に顔を押しつける膿を舐めていたが、ついには音をたてて膿汁を吸いはじめた。

次の室には、当年十八歳の乙女がやはり苦

行のため、食糞の行をしているのだ。現在では一カ月のうち、二十一日間、糞尿を食べ飲んでゐる。その量は毎日五百グラム。しかもこの食事は毎日献立が変わっているという。しかし、彼女の側に行くと、いい匂いがふくいくと漂ってくるという不思議さである。

(文芸朝日十月号)

いかにも、かずひと好みで嬉しくなる。原文を一読したが、筆者が文中で「飲食の前には読まないほうがよい」と読者に忠告している如く、ノーマルな人々には、いささか刺戟がつすぎるかもしれない。ある日は、それを水でうすめてすすり、あるときは、これを煮て食べる—とくるからすばらしい。

よいアイデアだ。いちど、この調理法をまねてみようかと、楽しい夢想はつきない。同好の諸氏よ一読されてはいかが。

食欲の秋

銀座裏に、マルという中華そば屋がある。一ぱい百二十円のラーメンが評判で、一日中繁昌している。店はすぐくせまい。店内一ぱん奥に、私の愛用するテーブルがある。

なぜ私は、そのテーブルを好むか。実は、テーブルから、二メートルのところに、トイ

レのドアがあるから。

九月十七日の午さがり、例のごとく、そのテーブルでラーメンのハシをとっていた。

と、そのときだ。洋装の小柄な女性が、私の眼のまえを通りすぎて、ドアのむこうへ姿を消す。こうなると、ラーメンの面倒なんかみていられない。このトイレがまたこつていて、ドアを開くと、自動的に、中のライトがつく。そして、都合のよいことに、ドアのつ

△愛読者の皆様へ▽

○電話にてのお問合せや照会並に直接の御訪問は固くお断り致します。ご連絡はすべて書面にて住所氏名明記の上お願い致します。必要のある方には、編集部から電話連絡或は面会の日時場所などお知らせ致します。面識のない方の直接のご訪問は御容赦願います。

○編集部又は編集者に対して、ご依頼或はご相談などがございましたら、事前に通信にて、その旨お申出下されば、時間の許すかぎり、つとめてお逢いするよう致しておりますから、ご遠慮なくお便りを下さい。

いている柱と、蝶番の間が、そう、二センチちかく空いてしまつて、眼をこらせば、中の人の動作が、よく見えるのだから嬉しい。

——その女性は、やがて、しゃがんだ（あたりまえだ）

時間から推せば、小のほうだけでなく、大のほうか、あるいは、他のことの処理のようだ。おからだのゆれ動く様子が、かすかながら見えたのだから、なんとも楽しい。

○分譲品のお問合せも、必ず通信にてお寄せ下さるようお願い致します。

○本誌では、投稿者やモデル嬢の住所氏名の照会には一切応じておりませんし、手紙の転送、文通幹旋なども原則として致しておりません故、はっきりお断りしておきます。読者間の交歓は、すべて読者通信欄にて行って頂くようお願い致します。

○読者通信は用紙は問いませんが、必ずタテ書きにお願いします。尚切手を貼らずに投函される方も時々ありますが、入手に手間どり遅延のもととなり、場合によっては「受取拒絶」することがありますから、ご留意願います。

私の、ドレイとしてのユメのひとつに、こんなものがある。

眼の前に置かれた洋ザラには、カレーライがある。ドレイは、やっと許されて、スプーンをとり、一口二三口、と口にはこぶ。やがて、本もののカレーに、それとよく似た物体が補給され、ドレイは、いやでも、それとカレーを混ぜて、食べるというユメ。

あるいは、ラーメンのシルはぜんぶ捨てられ、シルの代りに、別のものをかけてくださる——それを、ありがたく、というユメ。

ハシをつかいながら、その女性のことを、あれこれと空想すると、ラーメンが、よけいうまくなる。……やがて、水の音、ドアが開く、ツンとすまして、出てくる女性は、仲々美しい。

（ごちそうさまでした）

女性に、心からの礼をおくれるのだから、わが人生はいつもたのしい、食欲の秋を、大いにたのしみたい。

.....

次号

かずひこのノートから

「私は美食家である」

映画通信



一つの視点

小森白先生への書簡

田村清彦

拝啓、去る十一月三日（火）の夜と十一月七日（土）の夜とに、大阪千日前のオリオン座で左の作品を観賞させていただきました。

日本拷問刑罰史

配給 新東宝株式会社
製作 小森 白氏
企画 並木謹也氏

原案 名和弓雄氏

脚本 吉田義昭氏

監督 小森 白氏

監修 名和弓雄氏

スタッフの方々もキャストの方々も、すべての人が一つの目的に全力を集中して努力しておられるように感じました。情熱を傾注して制作されたこの映画の興業成績がどうぞ良

好でありますようにとお祈り申しあげています。終始一貫して、まじめになされた芥川隆行氏による男声のナレーションと、管絃楽による効果音楽が、内容の残酷さのある程度まで救っていました。

三日の夜も七日の夜も、観客は男性ばかりでした。尤も、この映画は、企画された初めから男性客を狙ったものであり、女性の観客がこなかったことは奇とするに足りないのかもしれないかもしれません。しかし、女性をも魅きつける美しい映画も、御社なら作りうるのではないのでしょうか。刑罰史であるために、しかたがないのかもしれませんが、あまりにも流血や拷問や半裸の場面が多くて、時には気分がわるくなりました。後味もよいとは言えなかったようです。心を楽しませてくれる夢のような雰囲気や、女の衣装の美しさなどを味わえなかったことは、やはり残念でした。

ともあれ、日本拷問刑罰史に出演された俳優は全員、迫力のある演技を示されました。監督に当られた小森白氏の才腕と相俟って、このように秀れた迫真の作品ができあがったのです。この次には、残酷さをなくして、長い袂を胸にかき抱いて悶える武家娘や、これから捕われようとする良家の乙女や、捕えら

れて後ろ手に縛られて引っ立てられていく大家の令嬢や、括られたまま牢屋に入れられているお姫さまなどの、優美さと可憐さと哀切感に溢れたロマンティックな作品を制作してくださいますように心からお願い申しあげます。

そういった、夢幻的な、浪漫的な作品であれば、女の人も飲んで観にくるだろうと考えるのです。貴プロダクションには美しい女優さんや達者な男優さんがたくさんおられることであり、私の構想する作品も十分に作る事ができるのでないでしょうか。たとえば日本拷問刑罰史のなかで、無実の罪で放火犯人にされてしまった娘と、不義をしたとて責められた娘を演じた二人の女優さんは、容姿も端麗だし、両腕の線もおやかな魅力をもっていました。さぞかし、振り袖に胸高帯の日本女性の盛装がよく似合うことであろうと想像されました。

振り袖はオリンピック大会に色を添えた衣装でもあり、また国内航空や国際航空のステューデスさえ着ることのある、日本女性のあこがれのコスチュームです。振り袖の着物や華やかなお太鼓結びの帯や絞りの帯揚げや袂の長い長襦袢や、あるいはさらに、振り袖姿

の美女そのものに寄せる日本女性の憧れはまことに根深いものです。女性をも対象とする映画では楚々として美しい乙女が、大きな庭のある豪華な屋敷のなかで絢爛たる衣装を上品に着こなして暮しているという場面の設定がよいように思えます。美しいがゆえに囚われ、美しいがゆえに縄をかけられる純日本的女性が主役でなければなりません。そういうシチュエーションは、女性を夢幻の世界へ導き入れる魔力をもつものであります。老若を問わず、日本のあらゆる女性を陶醉させる情景が必要なのです。

画面にてんめんと流れる優雅な情趣と憂愁美に満ちた情調が、観る者の胸のなかにしみじみとした感動を呼ぶものであってほしいのです。そこには、美しい振り袖姿のまま緋扱帯で後ろ手に括しあげられ、長い袖を震わせて身悶えしている少女が登場します。女の優しさ、女の身の悲しさ、女の哀れさが、清らかな音楽（短調のものがよい）の助けをえて、一つの詩を形成し、妖しい雰囲気を出してくるような場面が次々と展開されていく映画をお願いしたいのです。

そういった映画では、「あたくしは、今はもう、逃げることでないめしうどなので

す」と観念して、おとなしく両手と両肘を後ろに回される前屈みのポーズの振り袖姿のお姫さまが必要です。さらに、「あたくしは、もうどうすることもできない捕われの身なのです。高胸をきっちり縛られてしまうのです」と諦めて、うなだれて、縄尻を腰元女中にとられ、引っ立てられて歩を運んでいく胸高帯の武家の令嬢が扱われます。あるいはまた、座敷牢屋や倉のなかで、後ろ手、高手小手に括られたまま、うつむいて端座している盛装の日本娘等々、運命に身を委ね、諦め切った美少女が主役となってきます。切々たる哀調が全編を貫くものであってほしいのであります。お正月のかるた会で負けた女子高校生が、お仕置きとして、他の少女たちの手できびしい縛しめを受けていく過程を描くのも一つの方法でしょう。

それらの場合の美女の縛られ方として特にお願いしたいことは、両肘を後方へ強く出して、両方の「二の腕」を背中の後ろで横に連結している縄目がほしいということです。この縄目は、彼女の胸の前に回っている縄とはいちおう別のものです。「二の腕」を背後に制肘しているものです。そしてその中央に両手首が括られています。手の指は女らしく自然

に開いています。「二の腕」は上腕に平行に沿ってはいないで、後方へ斜めにつき出ているポーズになります。「本誌」昭和三十八年二月号の第一グラビアのなかの梨花悠紀子というモデルの括られ方が理想的であります。しかし、女性には正坐さすべきものであって決してあぐらをかかさないようにねがいたいものです。気品と女らしさが減殺されるからです。

さて、私の願う作品というのは、たとえば次のようなオムニバス映画なのであります。

× × × × ×

題名

振り袖幻想詩

(捕われの姫君)

第一話 皿屋敷のお菊

昭和三十八年八月に東京新橋演舞場で公演された中村吉弥・長谷川季子主演の「青山播磨」の劇の手法を参考にする。ただし、お菊の衣装の袖丈をもっと長くする。

第二話 夕姫物語

本誌昭和三十五年十二月号六二頁以下と昭和

和三十六年二月号一九四頁以下にある「雪姫物語」のストーリーと台詞を、そのまま使う。ただし、ヒロインの名を夕姫と改める。

第三話 八百屋お七

本誌昭和三十二年七月号二八頁以下と昭和三十三年九月号三二頁以下に所載の作品、「炎の娘」のストーリーと雰囲気と情感と台詞と衣装をそのまま使う。秀作だ。

第四話 雲姫幻想曲

本誌昭和三十一年五月号から昭和三十一年八月号までに掲載された「赤い花は泣いている」のなかの日本舞踊の師匠と弟子の被縛舞踊の物語を参照する。

第五話 乙女櫓

これは特に傑れている。本誌昭和三十四年十二月号一五四頁以下に所載の哀切感に満ち溢れたストーリーをそのまま劇化する。ただし、いれずみを施す場面と断首の場面を削除し、断首の直前で場面を転換させるか、または物語を完結させてしまう。

× × × × ×

以上の例に見られるように、私が特に美女の振り袖姿を強調するのは、ひっきりょう、この国に生れ育ったすべての女の夢が、女の想いが、女の憧れが、女ごころが長い袂に秘められているのだという確信によるのです。美しい絹の着物をきちんと着て帯をお太鼓にしめ縄や腰紐で縛られることによって、女性は楽しみを味わうのです。女性は縛られていっそうのたおやかさを示し、ひそかに悦びをかみしめています。そして心のレクリエーションをしているのです。むごたらしい場面や血の場面をやめてムードを盛りあげ、情感で包んでしまいたいものでございます。

脚本は吉田義昭先生に、そして演出は小森白先生にお願いしたいと存じます。また、ナレーターは、できれば、女優の花柳小菊さんに担当してほしいと考えます。この人こそは日本女性として、きわだって女性的なセンチメントを具えておられる不世出の女優だと思われるからです。その声にも語り口にも独特のフィージングをもっている女性です。小森白先生。どうも失礼を申しあげました。末筆ながら、小森、並木、名和、吉田、諸先生のご自愛をお祈り申しあげます。まずは、右、とり急ぎお願いまで。

拝具

臨月腹妊婦フォト

田中弘氏特別提供
モデル 田中美佐子

六月号の読者通信にて便りを寄せられた福岡市の田中弘氏の特別の御厚意によって、ここに妊婦フォトの方々のために、貴重な資料を提供して頂きました。
モデルの田中美佐子夫人は、本年満二十二才の初産婦で、このフォトの撮影は予定日の十日程前で文字通り出産寸前の臨月腹の写真ということがいえます。

臨月妊婦緊縛

大手札印画紙焼付
三枚一組 四〇〇円
略号 (にち)

診察を受ける妊婦

大手札印画紙焼付
四枚一組 五〇〇円
略号 (にし)

臨月腹開陳 (座位)

大手札印画紙焼付
四枚一組 五〇〇円
略号 (にり)

臨月腹開陳 (立位)

大手札印画紙焼付
三枚一組 四〇〇円
略号 (にす)

柱縛りの妊婦

臨月のヌード

大手札印画紙焼付
三枚一組 四〇〇円
略号 (にわ)

妊婦の裸身立像

大手札印画紙焼付
二枚一組 三〇〇円
略号 (にた)

縛られた妊婦

大手札印画紙焼付
二枚一組 三〇〇円
略号 (にる)

臨月の裸身像 立位

大手札印画紙焼付
三枚一組 四〇〇円
略号 (にお)

臨月の裸身像 座位

大手札印画紙焼付
三枚一組 四〇〇円
略号 (にぬ)

突き出た臨月腹

大手札印画紙焼付
三枚一組 四〇〇円
略号 (にい)

最新Mフォトシリーズ決定版分譲

読者通信をはじめとして、投稿原稿や編集部に対する通信などによって、Mフォト分譲について熱心な要望がありました。もとよりSフォトとは違い、注文の多きは期待しておりませんが、少数とはいえ、Mフォトを要望されるファンのために、ここに最新撮影の分譲品を発表いたします。

犬男の訓練風景

大手札印画紙焼付
十枚一組 二〇〇〇円
略号 (みら)

男を刺し殺す美女

大手札印画紙焼付
十枚一組 二〇〇〇円
略号 (みむ)

男を尻の下に敷く

大手札印画紙焼付
十枚一組 二〇〇〇円
略号 (みう)

足下にうごめく顔

大手札印画紙焼付
六枚一組 一四〇〇円
略号 (みれ)

汚物を受ける男

大手札印画紙焼付
六枚一組 一四〇〇円
略号 (みわ)

男を馬にする女性

大手札印画紙焼付
五枚一組 一三〇〇円
略号 (みか)

人間椅子の御褒美

大手札印画紙焼付
五枚一組 一三〇〇円
略号 (みお)

飼犬に餌を与える

大手札印画紙焼付
四枚一組 一〇〇〇円
略号 (みた)

浣腸器で弄ぶ女

大手札印画紙焼付
三枚一組 八〇〇円
略号 (みつ)

股に絞められる首

大手札印画紙焼付
三枚一組 八〇〇円
略号 (みね)

芳香を嗅がす尻

大手札印画紙焼付
二枚一組 六〇〇円
略号 (みな)

—— 起訴されたミシュリーヌ ——

西 条 操

シモール婦警はミシュリーヌを檻の外に立たせたまま、二号檻の女囚達の手錠を手足から解いてやって袋にほうり込んだ。

「さ、二十六号、これを綺麗に磨くのよ。全部よ。」

ずしりと重い袋を持たされ、ミシュリーヌは壁際に立って言い渡された。

「こ、このままですの？」

「そうよ。文句云わずにサッサとやるのッ」
床にうずくまったミシュリーヌは溜息をついて、冷たい鋼鉄を油布でこすり初めた。お尻が痛くて下ろせたものではなく、台もない

ので中腰のままだ。ままならぬ両手は泣きたい程で指は切なくかじかむ。取落した金属音を聞いた婦警が飛んで来て、いきなり撲りつけた。「それを何だと思ってるのッ。今度落とすどひどいわよ。」

「すみません。気をつけます。」

詫びながらミシュリーヌは涙ぐんだ。

ガッチリ嵌められた手錠の短い鎖がガチャと鳴り、鋼鉄環が手首にこじれこすれて、時々手を休め環をずらせて撫でる。みじめな仕事だ。取落さない様に気を配ると、どうしてもスカートが油に汚れた。

(こんなことさせられるなんて、泣けて来るわ。自分を縛る道具を磨かせられてるのね)

いい様もない悲哀が胸に迫り、ミシュリーヌは油にまみれた指先で眼頭を押えるのだった。一応磨き終えると、シモール婦警が一個宛調べ、五、六個が突き返された。磨き直した。暫く休めて居た手首が猛烈に疼いて、ミシュリーヌは呻いて手を止めた。

「休んじや駄目ッ。続けるの。はやく」

「ハイ。でも、どこが汚れてますの？」

「口答えするんじゃないのッ」

どうせ、半ば懲罰の意味でやらされて居る

仕事だ。ミシュリーヌは唇を噛んで手錠を膝に抱えた。じっと見下ろして居るシモール婦警が恨めしかった。泣いて頼んだとて、此の手錠を外してくれはしないだろう。シモール婦警は見せびらかす様に鍵を指先で弄んで、かじかんだ指に油布を握り直すミシュリーヌの金髪を暫く眺めて居た。例の其の鍵は、デスクの脚の陰から発見されたのだった。みじめな仕事を漸くやり終えて檻に戻されたミシュリーヌを、女囚仲間達はいたわりの眼と声で暖かく迎えてくれた。

「見直したわ、ミシュリーヌ。」

「このひとは、こんな人なのよ。だから、男にいい様にされるんだわ。」

手のままならぬミシュリーヌと、体の弱ったポリヌとに、アンジェラの提案で世話役が決められた。問題の鍵があったと聞いた女囚達は齒ざりして口惜しかった。

「いいの。自分で出来るわ。」

ミシュリーヌが断わっても、マドレーヌがまつわりついて、身の回りの世話をうるさい程に焼いてもくれた。打たれたお尻と腿が痛くて、ミシュリーヌは二、三日の間と云うものを、立つたり跪まずいたりして過した。腰をおろすと飛び上がる程だし、昼は横にな

ることは許されないのだ。そして、言い渡された懲罰期間中は、どんなことがあるうとも絶対に、一瞬たりとも外してはくれない手錠だった。

「ああ、いやんなっちゃうねえ。クリスマスだと云うのに朝っぱらから床掃除だなんて。」

ボヤいたイレヌが二号檻を覗き込んだ。

「ミシュリーヌ、可哀想なこと。ミシュちゃん、手を握り合わせてた方がいいよ。何かと云えばすぐ手錠と来るんだから、ほんとに癪にさわることに。けど、ミシュリーヌなんかはどうして檻に入れられたんだろ？ もっとつまらない女が、個室で納まってるって云うのにさ。」

「なあにミシュリーヌが綺麗過ぎるからよ。」とテレーズが口を出した。三、四日前から入って居る女詐欺師の年増で、今はまあしどけない恰好で、たのたして居るが、ちゃんとすれば立派なマダムで通る金髪だ。

「綺麗な女には反感を持つよ、この主任のおばちゃんは。私にだって、そうなんだから。」

「ぶッ、シヨってるわねえ。」

と、ステラが吹き出し、

「あんた位のきりようで、誰がやつかむもの

か。笑わせないでよ。けど、ミシュリーヌは段違いねえ、口惜しいけどさ。ミシュちゃんは芯からの女なのよ。あたしの見る所じや、男を喜ばせるのが、本能みたいになってるのね。男に尽くすのが生き甲斐って云うタイプ。生れるとこを間違えたのよ、ミシュリーヌは、裏長屋に生まれた方が却ってよかったのにねえ。」

「ところで、イレヌ。あんたもうじき出るんだろ？ 頼んだこと忘れないでね。」

「あら、あたしもよ。覚えてる？」

あちこちからイレヌに声がかかった。

「覚えてるわよ。北ホテルの裏のアパートの三階だろ？ えーと、何てったつけ？」

「そら忘れてる。ロベルトよ。ロベルト・フユールネ。用件、覚えてる？」

「お尻に書いていておやりよ。」

婦警が現われて、女囚達は檻の内外に散った。

クリスマスとは云え、檻の中の女達にはいつもと同じこと、スチームもあるかなしだし食事も一向に変わりはない。それでも、ひる前に婦警が花束を抱えて現われた。檻の一つに割れば五、六輪の其の花は、婦人補導連盟とか云う所から、クリスマスの慰さめとして寄

せられたものだ。マドレーヌがいそいそと受取り、与えられたゴム紐で鉄棒に結び、眼をうるませて眺め入った。

「ふん。笑わせるじやない？ こんなことをしてさ、いっぱし立派なことをしたと喜んでやがる閑人が居るんだよ。どうせ、パーティの残り物さ。」

と、シャーロットが肩をすくめた。

「ほんとに気の利かないことを思いつくもんだわ。飴玉かなんかの方がよっぽどいいよ。」とアンジェラもそっぽを向く。ミシュリーヌはマドレーヌと寄り添って、花びらに顔を寄せた。

「綺麗ね。」

「ほんとね、久し振りだわ。」

ミシュリーヌは去年のクリスマス进行を思い出した。

（花を飾って待ってたら、ジェラルムが戻って来てくれたの。とても嬉しかったわ。やっぱりクリスマスには私の許に帰って来てくれるんだと思って……）

更にミシュリーヌの思いは、コモ湖畔の昔に立ち帰った。

（庭には、いつもいろんな花が咲き乱れてたわ。懐かしいこと。シャルルのお墓の花壇、

どうなってるかしら？ 誰か手入れしてくれてるといいけど……）

両手に顔を埋めて咽ぶミシュリーヌの背をマドレーヌがやさしく撫でてくれた。

「あら、あの二人ったらほんと純真なこと。」

「おお、主よ。心清らけき二人の乙女に祝福を与え給え。睨がジンとして来たわ。」

「あら、ちよつとお、婦警さんてば」

立ち去る婦人警官に、テレーズが呼びかける。

「ご立派なマダム達に伝えといてね。お蔭様で迷える小羊二匹が救われましたって。」

「フ、フ、フ。ミシュリーヌが怒ったわよ。」

怒った顔が又可愛いこと。あ、そうか。お花がそれじゃ少いから不服なのね。いい子ちゃんだから我慢おし。ママの稼ぎが悪いのよ、すまないわねえ。」

からかうステラの尻馬に、シャーロットが乗って、

「ミシュリーヌ、待っといで。あたしがコンピエーヌかリヨンへ行けたらさ、うんとこさ作って送ったげるから。尤も造花だけどね。」

あちこちに屯ろした女囚達は、ベンチにしどけなく坐ってなおも語り合う。なにしろ、しやべること以外にすることがないのだ。突

然よろよろと立ったクラレンスが、鉄格子扉にしがみついて泣き悶えた。

「出してよう。お願い。出してくれたら靴だって舐めるわ。も、もう、堪まらないのよ、お願い。出してったら。」

横眼で眺めて女囚達は鼻で笑う。こんなことをして無駄な哀願を繰返す女が、どの檻にも一や二人は居るものだ。

「マドレーヌ、そんなのに構うこたないのよ。ほうっておきやいいの。あれで結構、趣味なんだから。しばらくしがみつかせときゃすぐケロリとするわ。」

「ステラ、あんたはどうだったの？ 去年のクリスマス。」

「あたし？ あたしはカプリ島でシャナリシヤナリよ。男は胸がキュウとする程だったし素晴しかったわよう」

「私はモンブランよ。スキーはしなかったけど、お山はよく見たわ、下からね。」

「フフフ。それで、いいカモ居た？ テレーズ」

「あたし、今年こそ娑婆でクリスマスが過せると思ってたのになあ。あーあ、詰らない。」ダニエルがこぼした。

「あたし、ツーロンの穴ぐらで過したのよ。」

懲罰喰って、鉄丸手錠を抱っこしてたと思うわ。あすこは全くひどいよ、とうとう満期までミッチリ絞られたわ。」

「お気の毒に。けど、今度はうまくおやりよ。けどさ、考えると忌々しいったら。娑婆の奴等、今頃は……。ちくしょう。」

アンジェラが唸って、デスクの婦人警官を顎で示した。

「あいつ、今夜ランデブーするんだよ。一生懸命爪なんか磨いてやがる。」

「あら、ミシュリーヌ。立ってないでここへおいで。末だお尻痛い？ だったら、あたしの膝に坐っていいわ。ジゼルじゃないから安心おしよ。」

ミシュリーヌは、云われるままにステラの膝に腰をおろした。

「ほんとに素直なひとねえ。ミシュリーヌは。」

「次はあたしの膝におかけよ。所でさ、あなたお金を隠してるんじゃない？ イレーヌに云っとくことないの？」

「あーら、テレーズ。あなた末だよく知らないんだろうけど、ミシュちゃんはね、そんな汚ないことは、これっぽっちもしないの。身も心もひとりの男に捧げたのよ、ねええ。」

「心打つ物語りなのね。」

「何とでもお云いよ。」

ステラはミシュルーンの背や肩をいとおしげに撫でた。

誰かに注意された通りに手を握り合わせて居ても、三日も経つとミシュリーヌは手首の苦痛に呻いた。勿論、下着も取替えさせては貰えなかった。廿九才のクリスマスから新年にかけて、彼女は其のふくよかな両手首に鋼鉄の環をまとして過した。夜、寝棚の中で寒さに震えつつ両手の手錠をしみじみ眺めて、ミシュリーヌはみじめさに忍び泣いた。これからの何年間かを、こんな扱いを受けて暮らすのだと思うと、手錠の冷たさ硬さが骨にこたえる心地だった。

張本人のクラリスは、ゴムホースで全身を打たれた後、独房にはうり込まれて居た。勿論普通の独房ではなく、便器の外には何一つない小さな鉄扉付きの監房だ。定められた時間毎に身の世話をしに行く勾留刑女囚達の話によると、クラリスは電灯を消された闇の中で、後手錠のまま震えて居ると云うことだった。鉄扉を透して檻の中まで洩れ聞えて居たクラリスの呻き声は次第に激しくなっていたが、二、三日すると時々しか聞えなくなっ

た。食事を与えられる時以外は、寝ても覚めても嵌口具をかけられてしまったのだ。

「二十六号。手を見せなさい。」

クリスマスも過ぎて二、三日経ち、朝の点呼の時にミシュリーヌは手錠を調べられた。此の鋼鉄の錠がどうかなって居る筈もない。「お前、案外弱音を吐かないのね。そんな顔してて、芯は強くて強情なんだね。」

鉄格子の間から差し出して検査を受ける両手首は、所々皮膚も破れ、色も変わって居た。後手錠にされてしまうと諦らめてしまうので、案外手首は傷まないのだが、前手錠だとどうしても手を使い勝ちなので、却ってひどくなるものだ。

「ちよつとお。薬つけてやったらどうなの？ ずい分ひどくなってるじゃないか。」

アンジェラが怒りをこめて云ったが、冷たく検査を終えた婦警は握って手首一杯に引き寄せてから、邪慳な仕草で下へ突き放し、思わず悲鳴をあげるミシュリーヌを声もなく嘲笑した。

「おや、痛かった？ 手錠の味はどうお？ 外して欲しい？」

婦警は摘まみ出したキーホルダーの先で、小さな鍵をクルクル回わし乍ら云う。ミシュ

リーヌは唇を噛んで、背の高い婦警を口惜しく睨んだ。どうせからかわれて居るのだ。

「そりゃ、外して頂きたいですわ。けど我慢します。私、哀願なんてしませんこと。」

眉をあげてミシュリーヌは、きっぱりと云った。

三十日には、女囚達全員で檻の鉄格子磨きだ。ミシュリーヌも容赦なく油布を手錠の手に持たされて、鉄格子の下の方をこすらねばならなかった。怠ける女囚は階端から引き出されて、檻の前で見せしみのゴムホースを受ける。殊に態度の悪いアンジェラは、したたかに打ち据えられて、さしもの彼女も遂に悲鳴をあげ、這う様にして檻に戻った。

「誰が休んでいいと云ったの？ 続けるのよッ」

泣き顔を歪めたアンジェラは、一声呻いて肩を落し、油布を再び手にして力なく鉄格子に取りついた。今年最後のヤキ入れだ。檻へぶち込まれ番号を打たれた以上は、どうせもう人間とは扱って貰えないのだ。押えかねてつい洩れそうになる苦痛の呻きを意地にでもとこらえつつ、ミシュリーヌは自分を獣のよう閉じこめて居る檻の冷たい鉄棒の内側にうずくまって、こみ上げるみじめさと怒りに

歯を喰いしぼるのだった。

クラリスは卅一日のひる前に、見るも哀な姿で戻って来た。髪は乱れ放題、眼は落ちくぼみ、口から頬にかけて嵌口具の痕が無残だった。それでもクラリスは精一杯の明るさをやつれ果てた顔に浮べ、前手錠姿で檻に入るや、仲間の囚達に肩をすくめて見せた。

「御苦労様だったわね、クラリス。ま、お楽にしてよ。」

「ありがと。」

腰をおろしたクラリスは、大きな吐息を洩らして見回わした。

「あら、ミシュリーヌも未だやられてるのね。悪いわ。けどさ、正直な話、私が現職の時よりもずっとデラックスなお仕置きだったわ。刑務所並み。ちっとばかり疲れたわ。」

クラリスは伸びをして、眼をパチパチさせた。

「まだ眼が痛いわ。無灯、掃除しないで欲しかったのに」

「ま、そんな口が利けるんなら大丈夫だよ。よくまあ、肺炎にでもならなかったこと。」

「こないだ、ほら、フーディニの真似したでしょ。それもあったのね、暗室一週間は煙草

二本じゃ少し高過ぎたわ。それで、ほら、見てよ。此の手錠。刑務所用だって」

クラリスが突き出して示す手錠は鎖が極めて短く、鍵穴は平鍵用の細長いものだった。

「これはもう、針金じゃ無理ね。」

「ずい分と敬意を払ってくたれじゃないの。」

「フ、フ、フでも、有難いことだと思わない？ 娑婆じゃ大晦日で忙しいと云うのにさ、私達こうしてのんびりしちゃって。あら、花なんか飾って凄いいムード。少し居眠りするわよ、私、では、失礼をば。食堂が開いたら起してね。」

婦人警官がやって来て、クラスを横眼で睨んで通った。ベンチに横にでもなって居たら嘔鳴りつけようと云う訳だ。そんなことのない様に、ステラとナナが両側から狭んでクラリスの居眠りを支えて居る。婦警達は四号檻からイレエヌを引き出した。

「一〇三号、出なさい。釈放よ。」

イレエヌは、のそのそと立ち上った。

「今日は何日？」

「一九×二年のおしまいの日よ。」

婦警は顎をしゃくる。

「おや、出たくないの？」

「だって、せめておひる位、すまさせてよ。」

「あら、じやもう九十九日間ここに居る？
理由なんかいくらでもあってよ。」

「あ、あッ。出るわ、出るわよう。」

イレエヌはあわてて出て来た。檻に残る囚衣の女達が、音高く閉じる鉄格子扉を恨めしげに見やる。

「悪いけど、あたしお先に失礼しちゃうわ。
みんな元気だね。」

イレエヌは檻のあちこちに手を振った。

「名残り惜しいわねえ。なんだったら、すぐ戻つてよ、何のお構いも出来ないけどさ」

「ありがと。思い出したら電話してね。午後三時には起きてるから。」

婦警が肩を寄せて叱る。

「黙って来なさいッ」

「あらもうえらそうに云わないでよ。腕をねじ上げないの？」

婦警は舌打ちしてイレエヌの腕を掴み、イレエヌは包み切れない喜びを全身に浮べつつ扉の向うに消えた。ミシュリーヌは両手に手錠を光らせたままで新しい年を鉄檻の中で迎えた。黒パンをかじり、水を啜り、汚れた下着の着のみ着のままでベンチに頬杖をついて居ると、囚われの身と云うものが、どんなも

のか、骨身に沁みて分つて来る様だった。

（これから先、どんなにか辛い目に逢わされるだろうけど、辛抱して耐えて行くわ。決して弱音や泣き言は云わないつもり。泣いたってどうしたって、結局なんにもなりはしないんだもの。自分がみじめになるだけだわ。何と云おうと、私悪いことしてしまったんだものね。後悔したって初まらないわ。けど：：：けど、あの静かに美しいコモ湖。ああ、あそこにはさえずって居たら……）

あれを思いこれを考えて、ミシュリーヌは二たび三たび、悲しくも健気に思い定めるのだった。

時間を持て余し、話の種も時には尽きて、どの檻もたまには静かになる。これも時間を持て余したデスクの婦人警官が、電話器を取り上げてダイヤルを回した。プライベートの話らしく絶えず声に媚さえ浮べて笑いころげる。

「ちくしょう、今晚の七時に、エコール通りの橋の袂のキャフェだってノクソッ」

アンジェラが唸って髪をむしり、女囚達はデスクの大きな鍵を遠く眺めて鉄格子を握りしめた。三号檻で誰かが唄い出した。

「幻の影を慕いて雨に日に……」

二、三人が和して合唱になり、デスクの婦警は横眼で睨んだが、そのまま爪の手入れを初めた。

「わびしさよ、せめての痛みのなぐさめに……」

クラリスが顔をしかめ

「うらぶれてんのねえ」

とこぼす。ダニエルとマドレーヌは何かしんみりと語り合い、シャーロットがクラリスに訴えた。

「ねえ、あたしだって昔はこんなじやなかったのよ。あたし、ボルドーで生れたの。秋になると野も山も葡萄の香りで一杯だったわ、あの頃がしみじみ思い出されて来るの。楽しかったわ、葡萄酒の樽が積んであつて……」

「わが谿は緑なりき。おお、忘れじのわらべ唄よ、今いずこ……」

「娑婆で初まったことは娑婆で終わるのよ。」

明日も明後日も、陽は昇るわ。」

と、ステラが誰かに説法口調。

「あら、深遠な新年の御演説だこと。」

三号檻の合唱は物悲しく続く、

「君故に永き人世を霜枯れて

とわに春見ぬ わがさだめ

永ろうべきか うつせみの……」

クラリスが立ち上ってスカートを揺すり、
明るい声で笑った。

「ほんとにお隣りさんは貧乏性なのねえ。佗
びしくなっちゃうじゃない?」

そう云ってクラリスは顔をしかめ、手錠を
窮屈そうにいじった。今度は一号檻で独唱が
初まる。寝棚の柱に背をもたせ、立って歌う
栗色の髪の女はなかなかいい声だ。それもそ
の筈、彼女は酒場の歌唄い、裏切った愛人を
クリスマス明けの朝刺して、二十七日の夜な
か捕まって来た女だった。

「冬は逝きて 春過ぎて 夏は去り 秋も巡
りて 年ふれど 年ふれど……」

「ピアノを誰か弾いてやらないの? でも、
いい声ね。ハスキーだし情がこもってるわ」
とクラリスが聞き惚れる。

「……誓いしままに ただわれは ただわれは
かしこに君を待ち侘ぶる 待ちわぶる……」

「いいわあ。そこで弦楽器が囁々とトレモロ
を囁り泣く所よ」

「あれ、何て唄?」
とアンジェラが訊ねる。

「歌の名なんか、どうだっていいじゃない
の。」

咳払いしたクラリスが、ソルベージの詠唱

への拍手の真似事をガチャガチャと終えて、
今度は自分が歌い出した。

威勢よく明るい其の歌は、歌劇トロヴァト
ーレの鍛冶屋の場の曲。嵌められて居る手錠
で鉄格子を叩き、チンカン、チンカンと合の
手を賑かに入れる。

「合唱してよ」

「何て歌なの? あたし達、知らないわよ、
無学なもんでね」

「悲しいこと云うわねえ。ああ疲れた。やめ
とくわ。あらずっと知ってるけど、ここから
先は声が出ないのよ、顎の調子が変わるね。」
デスクの婦警が雑誌を伏せて睨んで居た。

「ひびが入ったか調べて見ない?」

クラリスが両手を檻の外に突き出し、眼を
キラリとさせた婦警は回転椅子を回わして、
そのまま今後は新聞を取り上げた。眼を落し
た紙面には、丁度法務大臣の所感が載って居
た。

「……近来とみに、女性及び青少年の犯罪が
激増する傾向にあることは真に憂慮に堪えな
い所であって……女性や未成年者と云え
ども徒らに温情に走ることなく……遺憾なが
ら厳罰主義を以て臨み……」

(そうよ。全くその通りだわ。生温いことし

てるから駄目なのよ)

婦人警官は回転椅子を軋ませて何度もうな
ずくのだった。

「ね、踊らない? クサクサしちゃったわ。」

「そうね、クラリス。」

とステラが立ち上って腰を媚めかしく動か
した。

「あら、マドモアゼルは私よ。ステラはタキ
シードの方。」

「フ、フ、フ。薄汚ないマドモアゼルね。」

「女中達がストライキやってんの。それに、
此の令嬢はヘレン・ケラーのいところで、両手
が一本棒になってるのよ。さ、いい? しっ
かり抱いてよ。ウツトリとまでは行かないわ
ねえ。」

クラリスとステラは檻の中でステップを踏
み初めた。二人がハミングで口ずさみ、誰か
が口笛で和する。メロディはおお『憂鬱なワ
ルツ』

「やめてッ。やめて頂戴ッ」

ミシュリーヌは我を忘れて叫び、金髪を掻
きむしって喘いだ。つい忘れた手錠がガチッ
と鳴って、非情な鋼鉄環が手首をこじる。

「やめておやりよ。何か思い出してしまふの
よね。」

呟いたアンジェラがやって来て、手首を静かに撫でさすってくれ、クラリスとステラは済まなそうな顔で離れた。

「静かにおしッ。いつまで騒いでるの？」

婦警がデスクに坐ったままで呷鳴る。

「もう、やめたわよ。でも、あんたに叱られてやめたんじやなくてよ。ミシュリーヌのためにやめたんだからね。」

クラリスが聞えるか聞えない位の声でやり返した。一号檻の一人が鉄格子にしがみついて婦警に訴え出した。

「ねえ、お願い。あのひとの写真返してよ。」

一目でもいいから見せてよう。ねえったら。泣き声で哀願する小柄な女は見すばらしい服装だが、金髪だけが豊かに美しい。男の歡心を買うため、盗みを働いたパン工場の女工だ。

「ねえ、お巡りさんたら、お願い。」

「駄目よ。静かにしてなさいッ」

婦警は雑誌から眼も離さずに叱りつける。

「だって、あたしの物なのよ。あれまで取り上げるなんてひどいわよう」

「お黙リッ。規則です。」

婦警はモード写真から漸く眼を上げて呷鳴った。

「規則だなんて、何でも規則なのね、なくしたら承知しないわよ。そんな規則なんか悪魔に喰われるといいんだわ。薄情者ッ。こんな頼んでるのに、ひとでなしッ」

最後の言葉を耳にしたクラリスがハッと息を飲み同時に婦警が色をなして立ち上った。

「あれ云っちゃ駄目なのに。規則と警察官に対する侮辱の言葉はタブーよ。馬鹿な女。」

とクラリスが呟いた。クラリスがいつも楽しんで居る皮肉と毒舌は、明らかな侮辱の言葉にストレスで、彼女は其の限界を心得て居るのだ。

「ひどい目に逢わされるわよ、可哀想だけど」クラリスがそう云った通りだった。応援の婦警が化粧半ばに駆けつけ、恐怖にわななく女を引き摺り出す。

「あんな手錠のかけ方もあるのね。」

ミシュリーヌは恐ろしげに呟いた。右腕を肩の上から背へ、左腕は下から背へとねじられ、無理矢理手錠をかけられた女は忽ち苦痛の呻きをあげた。

「あの娘、腕が短いらしいわね。私なんか長いから割と平気よ。あれでやられたってね。」とテレーズが顎をしゃくり、鎖の短いクラリスの手錠を示して云った。

呻く女はデスクに背を向け、檻の全員から見える所で床に坐らされた。両膝を折り、踵に尻を乗せてコンクリートにじかにだ。

「あれはほんとにこたえるわよ。」

とダニエルが肩をひそめる。

「ツーロンじや未だやってるの？」

「勿論よ。朝と晩に一時間宛。毎日よ。崩すと革鞭半ダースが去年の相場だったわ。まごまごすると鉄丸手錠を膝に抱かされるし」

「未だツーロンあたりは中世紀ね。私、こんど出たら、仕事初める前に東洋へ留学しようっと。」

「それがいいわ、それに、子供には赤ン坊の時から、ああして坐る稽古させとかなきゃ可哀想ね。」

床に坐った女の額から脂汗が滲み、斜めにあげた右肘が微かに震え続けた。

「又崩しかけたわねッ」

婦人警官がやって来て、ゴムホースを腿の上に叩きつける。

「ヒーッ、か、かんにんして。」

「何を寝言云ってるの？ 未だ十分と経ってないよッ。一時間と云っただろ。」

婦警は女囚の右肘を憎々しげに揺すぶってデスクに戻った。

「これッ。足首を立てちゃ駄目よ。」

今度は足裏の土ふまずにゴムホースの雨が降る。

「いいかい？ 警察官侮辱罪は半年が相場よ。お前は分際が分際だから一年は間違いないわね。お仕置きが嫌なら告発してやってもいいのよ。」

脅かされた女は泣き喚き乍ら苦痛を耐え忍び、見せしめの呻き声と悲鳴をタップリ一時間堪能させてくれたのだった。

懲罰期間は一週間と云うことだったのに、ミシュリーヌの手錠は三日の朝になって漸く外して貰えた。そんなことをかれこれ云った所でどうなる世界でもない。

「二十六号。外してあげる。」

ミシュリーヌは、いそいそと鉄格子に寄った。

「よく分った？ これからは詰まらない嘘は吐かないわね？」

「ハイ。」

「ちゃんと赦しを乞いなさい」

「はい」

いわれるままにミシュリーヌは跪まずき、檻の床に額をすりつけた。不思議にみじめさは感じなかった。

（これが人生の規律というものだわ）

ミシュリーヌは婦人警官のスカートの裾を見つめて静かにいった。

「悪うございました。お赦し下さいまし」

「案外、素直な所もあるのね。手をお出し」

手錠がゆっくりと外され、ミシュリーヌの両手は十日振りで別々になった。

「辛らかった？」

「はい、とても、辛うございました」

手首を撫でながらミシュリーヌは素直にうなずき、思わず涙ぐんだのだった。クラリスの手錠は七日まで嵌められたままだった。

翌日の朝、ブランシェ検事は、年末年始の休暇を楽しんだニース海岸の陽光や夜を思い出しながら、三二五号室のデスクでコーヒを啜っていた。ノックが聞え、婦人警官に曳かれてミシュリーヌが入ってきた。窓の朝陽に手錠がキラリと光り、女囚が眩しげに眼を伏せる。

「ふん、大分やつれたな。しかし、ちゃんと化粧でもさせりや相当な別嬪だよ。小柄だが色気のある体つきだし、男を惹きつける何物かがあるなあ。元貴族夫人なんかでなけりや、手加減してやるんだが」

デスクの向うの丸椅子におすおすと腰をか

けるミシュリーヌを無遠慮に眺めつつ、検事はそう思って額を撫でた。

「どうだった？ 檻の中のクリスマスは」

女囚は黙ってうなだれたまま、手首をなでる。

「ま、これから五、六回はだな、人並みのクリスマスは出来ないと思うんだな。おてんと様の光が懐かしいだろう？」

室内の暖かさに、色褪せた女囚の唇に血の色が微かに甦えった。

（そりゃ久し振りだもの嬉しいわ。でも、鎖に繋がれて街を通るのよ。皆がどんな眼で眺めるか御存知？ 口では何だかだというけどまるで獣の群を見るような眼で見てるのよ）女囚は手をあげて眼を押えた。陽の光が眼に沁みて痛いせいもあった。

「おや、手をどうした？ えらく痛めてるじゃないか」

ミシュリーヌは顔をあげ、思い切って訴えた。何日振りで男性の声と姿に相對して、思わず縋りつきもしたい気持ちが動いたのだった。

「ずい分と、あの、ひどいことされるんですの。頬を打たれたり、ゴムホースで撲られたり。そりゃ囚人ですから、外に出る時には縛

られるのは仕方ありませんけど、十日間も檻の中で手錠かけられたままなんです。懲罰だとおっしゃって。いくら規則だといってもあんまりですわ」

ブランシエ検事は眉をひそめて見せた。

「そんな目に逢わされたのかい。何か反則したんだろう？」

「ええ、けど、つい詰まらない嘘をついただけなのよ。それなのに、撲りつけて手錠かけて、そしてそのまま仕事もさせられたの。こんなになっても薬もつけてくれないわ。あんまりだと思いませんか？」

ミシュリーヌは両手首を検事に示して、眼に涙を溜めた。

「そうかい。それは可哀想だったな。しかし僕には管轄外だからな。何なら、証拠を添えて告訴して見るか」

検事はそういつて煙草を揉み消し、きびしい態度に変わった。

「ここで僕と話す時にはね、口の利き方に気をつけた方がいいぜ。もっと丁寧に敬語を使つて話すんだな。お前が、拘留中の処遇について不服を申し立てたということ自体は記録しとくよ。まあ何だな、いつまでも伯爵夫人のつもりでおるのは止した方がいいな」

ミシュリーヌは力なく両手を膝に落し、唇を噛んでうなだれた。所詮、不平の一つも訴えることは出来ない身なのだ。取調べが初められた。

「もう一度訊ねるが、ラグランジュ氏とは何もなかったんだな？」

「はい、ありません」

「ふん、それで、あんなことをやって、知れずに済むと思つてたのか？」

「……」

「バレたらどうする気だったんだ？ その体と顔でまる込めと思つてたんだろ」

「まあ、そんなこと。私、どうしてもお金が欲しかったんです。それで、前後も見境もなく、ついふらふらと。すみません。私、悪いことをしたんですから、罰して下さい」

「隠してないな？」

「はい、少しでも残ってましたら、お返ししたいんですけど、ほんとなんです」

「そうか、じゃ、これでお仕舞だ。公判廷でまた会うか。しぶとい女だ。情状酌量の余地なしだな。おい、サインしろ」

署名する前にミシュリーヌは、検事調書に眼を通した。

（ふん。これでなかなか、しっかりしてやが

る）

ブランシエ検事は、そんなミシュリーヌを小憎らしげに眺めていた。

「あの……私、何年位……ですかしら？」

ミシュリーヌは立って手錠を受けながら、検事を振り返つておそろおそろ訊ねた。留置場の女囚仲間の話だと、重くて二年、軽くて済めば一年位ということだった。

「ふん。そうさな。ともかく、小切手偽造不正行使は最高十年だ。それに業務上横領が当然併科されるから十五年までは行けるな」

ミシュリーヌはまさかと思いつつも、眼前の暗くなる心地だった。

（けど、よかったわ。ジャンとのことを隠し通せたんだもの）

手錠の革ロープがガツと引かれた。

「来るのよッ」

女囚は苦痛の声を洩らし、思わず動く指先がロープを握ろうとする。

「又、ロープを握る！ 触っちゃいけないっていつてある筈よ。反抗に取られてもいいの？ お放しッ」

「フ、フ、フ。規則はお守りになった方が身のおためですぜ、伯爵夫人。これから未だ先の長いことだし」

曳かれて去るミシュリーヌの背に、ブランシェ検事の嘲笑が浴びせられた。ミシュリーヌの話を聞いてアンジェラがいった。

「そう。ミシュちゃんは今もう済んじゃったのねえ。あたしもいい加減に諦らめてゲロしゃおうかな」

アンジェラは未だ頑強にポイントを否認し続けて居るのだ。

「二回や三回ならまあいいけど、十回もとなるといい加減に嫌気がさして来るわね、バスで検事局へ通うのもさ」

と、これも手古摺らせて余罪を吐かないダニエルがぼやく。

「ここに居る間は刑期に入れてくれないんだものねえ、全く馬鹿にしてるよ」

と、ナナが髪をどしどしと掻く。

「起訴するかしないか、期限を切ってくれなきゃ不公平よねえ。大西洋の向うじゃそうだってね、うちのひとがいったわ」

「ま、今度何かに立候補するといいわ。ざっと数えて、そうね五十票は絶対よ」

とクラリスがひやかした。

「あーあ、誰か保釈金積んでくれないかしら」

とシャーロットがあくびをした。隣りの檻

で金切声が喚く。

「何だって!! 肥ってるからって、私のことみんなして馬鹿にするのね。ちきしょうッ」

「ヤレヤレ。豚とかまきりの取組み合いか」
駆けつける婦警を横眼で眺めてクラリスが慨嘆した。

五日経って、ミシュリーヌは鉄格子越しに起訴状を受け取った。

「有価証券偽造不正行使並びに業務上横領」

この身に科された忌むしい罪名を読んで、彼女の胸は今更のように打ちひしがれる思いだった。

「しっかりとるんだよ、ミシュリーヌ。あたし達が教えたこと、忘れるんじゃないよ」

「ほんと、あんたは純情で氣立てがいいから心配だよ。奴等の口車に乗せられて身をすり減らすことはないんだからね」

前科のある女囚達は口々に励ましてくれるのだった。一月の寒い朝、ミシュリーヌは唯一人拘置所へ送られて行った。

「二十六号ッ。押送よ」

同囚達に別れを告げる暇もなく檻を出るミシュリーヌの手を、素早く寄ったクラリスが握りしめてくれた。デスクの所で番号札を取り上げられ、布スリッパも脱がされて、素足

にハイヒールを穿かされた。台上にはふくらんだスーツケースとコートが投げ出されてある。

「あの…」

「駄目。コートは持って行くの。着せては上げられないわ」

シモール婦警はそういつて、厚い外套のボタンをかけ終え、手錠を取り出した。

「おとなしくするわね?」

「はい」

揃えた両手の右手だけに手錠の環がからまった。

「おいで」

右手を曳かれたミシュリーヌは、スーツケースとコートを左手に持って、鉄檻を振り返った。一カ月余りの中で過した鉄の檻、今そこを出て今度は別の檻の中へ行くのだ。クラリスの言葉を借りれば、その檻の中は、哀歎極まりない人生模様なのだそう。一カ月の身を以て、つぶさに味わった数々は、ミシュリーヌにとっては未だかつて想像も出来なかった世界だった。

(みんな親切にしてくれたわ。みんないい人達ばかりよ。ありがとう)

その心根に打たれてミシュリーヌを愛して

くれた女囚仲間達は、鉄格子の間から手を振って送るのだった。

曳かれて廊下を行くと、メグレ警部とすれ違った。

「あの、お世話になりました」

眼を伏せて挨拶するミシュリーヌに警部は頷いて、その姿を見送った。シモール婦警の外套の右肩に吊ったバッグが黒く揺れ、その左側にコートも無しで寄り添う女囚の服は薄汚れてしわだらけ、右手の袖口から手錠が銀色に光って見え隠れしていた。

（保釈にもならず未だ居たんだな。あの女がねえ。不思議だな。可哀想に。）

警部は首をかしげたが彼は忙しかった。警部は調べ室の扉を押し、ミシュリーヌは裏口に待つパトロール・カーに素足を寒風と人目に晒しつつ乗せられた。

パリ拘置所は、検事局や法院の建物の裏手に接して、コンクリート塀を高々と繞らせて灰色に建っている。側面は獄庭を隔ててセーヌの支流。向う岸の高い建物からは、小さい窓の鉄格子や黒い鉄扉や獄庭等が塀越しに眺められた。その女檻区画の建物の事務室で、ミシュリーヌはあちこち引張り回わされ、どこでも立たされたまま収監手続を受けた。

シモール婦警のショルダーバッグから取り出された一件書類が、検事局からの送付書類と照合され受理されて、一括して綴じ込まれて行く。婦人職員がカードや書類に無表情に書き込んで行く自分の名を、ミシュリーヌは悲しい思いで見やるのだった。

ちよっと騒がしくなると、婦人職員が髪をペンで掻き上げながら眉をかしめた。若い女が男の警官に引き摺られて、精一杯のふてぶてしさと反抗を示しながら連れて来られたのだ。

「ちくしょうッ。あたい、何も悪いこととしてないんだってば。ボヤボヤしていた店員がいけないんじゃないの。くそッ。痛いわよう、放してったら」

「ま、いいからおとなしくするんだ。あ、この阿魔めッ」

咬みつかれそうになった警官が女の肩を押えつけてブルネットを驚掴みにする。女は、ボタンも手切れた安物の派手なドレスをしどけなく着て、腰に締めた分厚い革ベルトは服装の一部ではなくて戒具の腰バンドだ。その革ベルトに両手錠を前で押えられ、金具をガチガチ鳴らしてもがき喚いていた。靴をどこかへ飛ばしたらしく片足ははだし、忌々しげ

について来る婦人警官の手に小さな包みがぶら下げられて居る。

「勾留六十日ってところね」

薄汚れた女の顔から眼を離した婦人職員が呟いた。

「そうね。そんな所ね。けど、どこの署かしら？ ナメられてるじゃないの」

とシモール婦警がいつて、ミシュリーヌの片手錠を握り直す。

「北第二よ。はい、お待ち遠さま」

「ありがと。さ、おいで」カードを受け取った婦警が手錠を引張った。

婦人監房区画への鉄格子の前の一室。シモール婦警が手錠を外し、ミシュリーヌを立たせたカウンターにカードを差し出した。

「何だい、この送り状は!!」

堂々たる体躯の婦人看守がカードを一べつしてぶっくさこぼした。

「マリーだね。あの娘はいつまで経っても字が下手で困るよ。読めやしない」

ボヤきながらカードを眺め、カウンター越しに冷たい眼でミシュリーヌを見据える。品物同然に送り状付きで受け渡しされるみじめさに、ミシュリーヌの眼がうるんだ。カウンターの内側に若い女性が一人、そのほかの数

名の女性には皆制服姿だ。ミシュリーヌは新しい支配者達をおどりと盗み見た。彼女達はここの婦人看守、婦人警官と同じような制服だが、ネクタイの色が少し濃いいし、デザインもどこことなく違う。一カ月も居ると、留置場係りの婦警達とは大抵顔見知りになっていたのだが、今日からは全然見知らぬ支配者達に囚人として取扱われることになるのだ。堪え難い心細さとみじめさを感じながらミシュリーヌは足を踏み替えた。久し振りのハイヒールが痛いし、持たされたまま引張り回わされた荷物が腕にだるかった。しかし、許しなしに荷物を床やカウンターにおくことは出来ない。「名は？ 生れはどこ？ いつ？ 荷物を置いて。所持品はこれだけね？」

「靴をお脱ぎ」

いつの間にか背後に立った婦人看守が背を小突く。冷たい床に素足で立ったミシュリーヌは、体が縮んで行くような心地だった。

「お前、初めてなんだね？」

カウンターの向うの婦人看守の声は男のようで、威圧するように鋭く太い。

「ミシュリーヌ・ダリユー。お前を刑事訴訟

法第十九条の規定に基いて拘置します」

「は、はい」

「ここがどこだか、分ってるね？ 規則を守らないとひどい目に逢うよ」

主任婦人看守が顎をしゃくり、背後の婦人看守が黙って女囚の腕を引張った。爪を磨きながら新入りの品定めをしていた指紋係りの娘が、水色の上張りを盛り上げた胸を張り手袋をはめて、ミシュリーヌの手首を握り指に黒インクを押しつけた。

「じゃ、お願いしましたわよ。さよなら」

身柄引受領収書にサインを貰えば、シモール婦警はそれで御用済みだ。手錠をほうり込んだバッグの留金を閉じた婦警はそういう捨て、ミシュリーヌにはもはや見向きもしないで立ち去って行った。新入りが二人連れて来られた。

「あたし、名はミレーヌ・モレシャル。一九一七年八月十日生れ。獲れた所は、カサブランカ」

カウンターに立たされた一人が問われる前にまくし立て初める。

「……勿論、れっきとした独身。職業はカッコいい自由業。でも、これからは囚人。住所はグラントホテルほか数カ所。身長一六七セ

ンチ、体重五十八キロ。いや、少しやつれて五十五かな。赤毛、眼は暗褐色、左内腿に可愛いホクロ。震いつきたい美人。逮捕歴は今度で七回、前科三犯。これ位でいい？ あ、そうそう主な知人はド・ブローイ大統領」

主任婦人看守は、舌打ちして顎をしゃくった。先刻反抗していた若い女が引き摺られて来た。

「気をつけないと咬まれますぜ。全くもう、世話を焼かせやがって」

女は手錠を外されるや否や、パツと両手を振りもぎり、官憲達に歯を剥く。心得て領いた婦人看守が忽ちその両腕を左右から二人がかりで背にねじ上げた。女は口惜しげに唸って痛みに喚き、腰バンドを解く警官が力まかせにお尻を引っぱらいた。婦人警官にしる婦人看守にしる、女囚の腕をねじ上げるのは慣れたものだ。

「ま、喚くのも今の中だよ。すぐおとなしくさせてやるからね」

婦人看守の一人が更に強くねじ上げてそうきめつけ、髪振り乱して呻く女を意地悪い眼で眺めた。

騒々しいカウンターをあとに、ミシュリーヌは鉄格子扉を潜った。既に、牢獄の臭気に

混って女の匂いが強く感じられる。連れ込まれた一室でミシュリーヌは悲しかった。又も身体検査を受けねばならないのだ。観念した彼女は涙をこらえて最後の一枚をも脱ぎ捨てた。脱いだ衣類をうずくまって一まとめにさせられ、それは取り上げられ全部持ち去られた。もう再び着ることは出来ないのだ。悲しい思いだった。口惜しさに喚きたくなる程のしみめな検査が入念に済むと、そのまま今度は体格検査だ。小突き回す婦人看守は未だほんの小娘、それが支配者の優越を顔や仕草に漲らせて、碌に口も利かない。身長が測られ体重が秤られ、歯や体の特徴が記録された。一糸まとわぬしみめに、後ろ手に組んだ手がつい動くと、頬に平手打ちが無言でバシッと飛ぶ。ここはもう拘置所、そしてミシュリーヌは既に起訴された被告人の未決女囚ビンタ位は日常茶飯事なのだ。

「ここへ立つのよ。手を横におろして。初めてのは面倒臭くてやり切れないわ。何故うつむくの？ めそめそしたって同じよ。お前、少し足りないんじゃない？ さ、右向いて」屈辱に胸熱くして床のマークの上に直立すると、正面には大きなカメラ、頭上四方の照明に眼がくらむ。真正面、背面そして両側面の全身写真。ついでレンズがジーと切り替わり、位置はそのまま顔面だけのアップが前と両横から撮られる。ボタンを押す度にカメラは自動的に操作されてシャッターが切られて行き、ミシュリーヌの浅間しい姿がフィルムに計七枚、通しの整理番号を共に焼きつけられて記録された、家畜か何かになったような情けなさだ。

「ヌード写真の五枚や十枚が何だというの？ もう、済んだわよ。こっちへ来るのッ。モタモタするとヤキ入れるわよ」

シャワーは微温湯で、有難いことに石鹸まで与えられて、全身を念入りに洗わせられた。隅のデスクからじっと眺めていた年配の看護婦が手を振る。健康診断は省略しようという訳だ。

「いつまで拭いてるの？ いい加減におし。あら、櫛だって？ 笑わせないでよ、そんなもの使える訳がないじゃないの。さ、これを着るのよ。寒くないの？」

初めて身にまとう囚衣を手に、ミシュリーヌは一声だけ吸り上げた。上下各二枚宛の木綿の下着は洗いざらしの青灰色。これからはどんなに寒くとも、これだけしか下着はないのだ。

（そして、とうとうこんな物を着せられる身になったのね）

しみめな灰色の不恰好なワンピース。ミシュリーヌは泌々とそれを眺めて頭からかぶった。寸法等が合う筈もなく、首は折返しもない丸首で袖は肘まで、上から下まで筒状の木綿はごわごわと硬く、ウエストはだぶだぶのくせに裾は窮屈で狭い。膝頭の少し下までの裾が脚を拘束して、大腿には歩けない仕掛だ。与えられた革サンダルのバンドを、ミシュリーヌはかじかんだ足首に巻いて尾錠を締めた。

（昔、ローマあたりの奴隷が穿いてた革のわらじみたい）

ミシュリーヌはそう思いながら立ち上ってうなだれ、馴染めぬ革の固さに足首をよじった。

「お前、初めてだったのね。服に縫いつけてあるだろ。それがお前の番号。忘れるとひどいよ。服はいつもキチンと着てるの。髪も乱れてると罰よ。これで括って」

ミシュリーヌは精一杯掻き撫でた金髪を、与えられた短いゴム紐でやっと束ねた。胸と背には七十八号の番号。

（これでもう、私は誰が見ても女囚なのね）

ミシユリーヌは自分の姿を映して見たかったが、どこにも鏡はおろか透明ガラスさえもない。

ミレーヌともう一人の女とがシャワーの下に立って、嬉しげにはしゃぎながら体を洗っている。初めた。

「静かにおしッ。床にはねさせると舐めさせるわよ」

「あら、カーテンもないのに無理よ」

「何だって!! 口答えするのね」

「あッ、すみません。もう、ここは拘置所だったっけ。気をつけますわ。でも、体を洗うの、一週間振りなのよ。場末のサツは設備が悪くて。ああ、いい気持だこと」

「石鹸だってあるし。これだから拘置所は好きよ、ねええ。辛らい労役もないしさ」

隣りの身検場で叱り声やビンタの音が聞えて居たが、やがて鋭い音がピシッと鳴って、魂消る悲鳴が糸を引いた。例の若い女が遂に革鞭を喰ったのだ。シャワーの女達がビクリとして唇をわななかせた。

「ねえ担当さん。革鞭だけは当てないでね。お願いよ」

「なら、規則を守っておとなしくお裁きを受けることね」

「分ってるわよ。お仕着せ、どこ? あら、割と新しいじゃない? 嬉しいわ」

又も鞭音が肉に鳴って、ミシユリーヌは耳を掩った。

「七十八号ッ。手を出して」

「は、はい」

手錠をキラリと取り出したうら若い婦人看守の前に、ミシユリーヌは又両手を揃えて差し出した。囚衣姿で初めて受ける手錠は身に泌みるものがあつた。右手に叩き込んだ制服の小娘は、女囚が左手をも寄せるのを待ってからませ、馴れた手付で環を押えて縮めた。

拘置所では独房が建前だった。吹き抜け天井の広い通路の両側に、上下二層の独房群の鉄扉がコンクリートの灰色に黒々と並んで居る。通路の突き当りには長方形の大きな鉄檻が三個、中には勾留刑の女囚達が数名宛ベンチにきちんと腰掛けていた。互いに腰を連鎖でくびられて、通路のあちこちで床を磨いて居る二人組も勾留刑の女達だ。中には、近く刑務所へ送られて行く予定の女囚達も居る。着せられて居る囚衣は同じで灰色地に赤縞だが、既決女囚の番号は一〇〇台で勾留刑の女囚は二〇〇台だ。近くを通るミシユリーヌを横目で眺めた大柄な女囚が、獄衣の前裾

をつまみ上げて顔をしかめ、腰の鎖をそっとしごいてモップを握り直す。小娘看守の斜め前を追われて歩むミシユリーヌも、ともすれば裾が膝につかえて歩き難かった。薄い囚衣を透して、氷のような冷気が全身に泌みる

「又、裾をあげるッ」

床掃除監視の婦人看守が叱りつけて、大柄な女囚の頬を撲りつけた。走ることは勿論厳禁、歩き易いように裾を持ち上げること禁制なのだ。裾を持ち上げて小走りにでも走ろうものなら、逃走の意図ありと認められて最高の懲罰を喰ってしまう。木のような革サンダルは足に馴染まないし、革バンドの金具は足首に喰い込むし、裾は一步毎に膝の邪魔をする。ミシユリーヌは鉄の階段を昇りながらともすればよろめいた。通路の向う側を手錠姿の女囚が二人、両手を前に突き出して革ロープを曳かれて行く。見るからに厚さを思わせるコンクリート壁に整然と並ぶ黒い鉄扉、みじめに打ちひしがれて競々とした女囚達、その哀れな姿に傲然と君臨する制服姿の婦人看守達、そしてその腰には手錠が、あるいは革サックに納められ、あるいはむき出しに光って吊られている。ここはもう獄舎なのだ。多数の人間を何年間でも拘禁しておく設備を

もち法の権威で鎧われた牢獄なのだ。冷たきびしく、非情を極めて厳めしいその雰囲気、うなだれた頭が上がない程の威圧に打ちひしがれるのだった。

二階の七十八号監房。外した手錠で小娘看守がミシユリーヌの背を小突いた。

「壁の規則をようく読むの。時間はタツプリあるからね。懲罰は刑務所並みよ」

頑丈無比の厚い鉄扉が閉じる音は、ミシユリーヌの耳をろうせんばかりに響き裏いた。

臨時増刊号……愈々残部僅少……

悦虐小説と悦虐写真特集号

本誌全盛時代の昭和二十七年から昭和二十九年にかけての「悦虐小説」の傑作をすべて網羅して、本特集号の第一集から第五集（但し第一集、第五集は残念ながら売切れしました）までの五冊に収録いたしました。従って、「悦特」の五集によって、当時の代表的な小説をござらんになることが出来ます。更にグラビヤ口絵としては、華麗な緊縛女体を、ふんだんに掲載しました。未入手の方は是非この際お求め下さるようお待ちいたします。

第一集「女体緊縛特集」（売切）

第二集「悦姿態特集」定価三〇〇円 略号「悦二」

第三集「嵐を慕う蝶」定価三〇〇円 略号「悦三」

大型のダブルベッドならそれだけで一杯になる程の狭さ。壁に鎖で吊られた狭い寝棚にしようぼり腰を下ろしたミシユリーヌは眼の前の壁の規則書を虚ろな眼で読み返す。鉄扉と向き合って小さい窓、その下に便器。窓には太い鉄格子と鉄網、その外側の手が屈かぬ所に窓硝子。硝子は摺りガラスで外は見えないし、その開閉は監房の外から各房一斉に行われる仕掛けで、囚人の自由には出来ない。鉄扉の上部には監視孔、下の方には差し入れ穴、その両方とも内部からは開けられない。監視

孔に並んで請願用の信号把手があるが、規則によればこの信号棒を使用できる場合は限られて居る。みだりに使って看守を呼ぶと、懲罰の理由になるのだ。未決囚ミシユリーヌは独房内を一わたり見て回って再び腰をおろした。こうして両手を膝に坐っていなければいけないのだ。規定の時刻のほかは、立つことも寝ることも用便すらも出来ない規則だ。この不細工で痛い革サンダルも、就寝時以外はキチンと穿いて居らねばならない。

第四集「拘束美態特集」定価三〇〇円 略号「悦四」
第五集「緊縛風景一二〇態」（売切）

最近刊行本誌特集号限定版案内

○臨時増刊「写真と絵画」文献特集号

定価 五〇〇円 略号（文献）

○臨時増刊「花と蛇」小説、絵画、写真、特集号

（売切）

○限定版「美しき縛しめ」第三集

頒価一〇〇〇円 略号「美3」

○限定版【豊満と清楚】写真集

頒価一〇〇〇円 略号「限二」

看護婦さん と 浣腸について

高砂 浣 好 生



第一話 手術前の話

姫路の某病院へ十二指腸潰瘍の手術のため入院したのが、十三年前の春でした。

それまで瘦の大喰いとかで、酒類は全然飲めないのに、食べることだけは、本当によく食べたものでした。おかげで胃拡張に初まり胃炎をやり、遂に十二指腸の手術と相成りま

した。手術の前日の朝から、お茶以外、何にも口に入れてはいけなと看護婦さんにいわれ、夕方まで、手術への不安や家庭のことなど、色々と考えていました。

朝から絶食の筈なのに、緊張のためか、お腹の空いたことも忘れた程でした。当時小生の部屋は生憎と七人のベッド数がある大部屋で、満員でしたが、病室だけあって、さすが

に静かな雰囲気がありました。勿論全部の患者が大なり小なり手術を受ける人達ばかりですから当然のことでしょうが、その静かな空気の中で空想にふけっていると、いつの間にか、枕元に一人の看護婦さんが立っているのです。

はっとして、その看護婦さんの顔を見ると共に、両手に捧げ持っている白布をかぶせた物を見ました。話に聞いた石鹼浣腸のあれです。看護婦さんは「高砂さん」とだけ比較的大きな声でいって、後は何にもいわないのです。被せた白布をとると、白色のホロー塗りのパットです。金属製の浣腸缶の握りをもって内容液の攪拌をやっているのです。

茶色のゴム管、黒い嘴管、初めて眼の前で見ました。しばらくして彼女は「右を向いて下さい」とだけいって、小生の看ているガウンを大きくまくったようでした。本当にまったく事務的な調子で、かねがね空想していたようなムードなんか全然ありません。第一、彼女は院内一の男性的な看護婦でした。態度動作、言葉など何れもハキハキしたタイプでした。その最も苦手の彼女に浣腸されることにはある意味で残念で仕方ありませんでした。果して横向きになると、左手は全然使わず

嘴管を一ぺんに挿入しました。その早い事、痛いと呼ぶ間もない状態でした。注入がすむとチリ紙を当てがい、しばらく押さええていて便所へ行って下さい、と言ひ残すと風の如く部屋を出てゆきました。

第二話 手術後の話

手術後の苦痛は大変でした。一生忘れることの出来ない思い出です。

術前一昼夜、何一つ食べてないのに、胃の内腸の内にガスが溜まり、加えて排尿が全然ないのです。そのため下腹全体が大きく張ってポンポンになってしまいました。手術の経験者には話には聞いていましたが、こんなに苦しいとは、思いもよらぬ事でした。

手術室から自分のベッドに帰って一昼夜の間、水一滴も飲まして貰えず、口はからからに乾ききり口内炎を起して、カサカサになってしまいました。完全看護のため身内はおらず、枕元のベルを押して看護婦さんをよんでみても、辛抱して下さい。といわれるだけで、この世の地獄かとも思えたものです。

翌朝、回診の先生によって初めてカテーテルによる導尿を受けましたが、その時は早く排尿さしてほしいという一念で、術前の甘い

空想であつた看護婦さんからの導尿を優しく受けたら、どんな気持ちだろうかなといった考えなど何処かへ吹っこんでしまいました。

一回の導尿でやや楽になりましたが、腸のガスが全然出ないので、回診後、すぐ看護婦さんと呼んで聞くと、夕方ガスを抜いてあげます。辛抱してねと言われました。

やっと待ちに待った夕方がきました。やってきたのは、男性的看護婦ではなく、おとなしい看護婦が石鹼浣腸の用意を揃えてやってきました。前回の浣腸と違って、今度は完全に苦痛に喘いでいる状態の自分でしたので、その浣腸の待ち遠しかった事も手伝ってか、看護婦さんの顔が天使のように見えたものです。仰臥位の小生に一言の言葉もかけず、黙ってガウンのすそを遠慮深かにひらきました。注入を終えて便器と尿器を当てがってもらいましたが、ガスだけは相当出ましたが、尿の方は出ずじまいで、以後、各種湿布、促進注腸、浣腸、導尿、マッサージ等を数回施行されて、やっと十日後に回復に向いましたが、小生としては貴重な体験でした。

第三話 友達の手術前後

小生が入院していた当時は、同室に友人が

一人、胃の手術で入院していました。

彼の手術したころは、小生も相当回復に向っていた時でしたので、冷静な気分で彼の様子を観察することができました。彼は小生以上に大喰いで、絶食を言いわたされた術前の日も、昼間はベッドにもぐり込んで饅頭を食べていたほどで、無茶な人間だと思っていました。後で聞くと手術をしたら、当分好きな饅頭も食べられないと、つい食べたのとことでした。

その彼の内緒を誰が告げたのか、詰所に知れたらしく夕方、二人の看護婦が胃洗滌の器具を持って現れました。小生は寝た姿勢で見ていたのですが、黒いゴム管を口から入れて眼を白黒させて、漏斗に水溶液を入れられては吐き出させられていました。見ている方でゲーツとなりそうなので、途中で室外に出してしまいました。

そのうち洗滌も終って看護婦も帰ったので室内に戻ると、また、一人の看護婦が入室してきました。見れば院内一のおとなしい優しいそうな、小生あこがれの看護婦さんです。その手には石鹼浣腸の揃った、あの白布を掛けたお盆を持っているではありませんか。

彼女は友人の枕元に立つと、小さな優しい

声で「〇〇さん、お浣腸をしましょうね」といって浣腸器具を置くとベッドの端にスクリーンを立ててしまいました。しかし、スクリーンが少しずれていたもので、小生のところから幸いにも一部始終が見えるのです。

注入中も再々、お腹の具合はどうですか、何んともありませんか、と尋ねるのです。注入が済んでも、彼のお腹を軽くさすりながら彼の顔をじっと見ているのです。まるで手術後の重病人を看護するようないたわり方で見ている小生の方が、たまらなくなってきたものです。こんなわけで、約二カ月の間、病院生活を送ったのですが、大部屋であったため退院するまで、十数人の患者が手術してゆき

ました。その前後の各種の処置、下剤、胃洗滌、浣腸、注射等たくさん見てきましたが、つくづく感じた事は、それら医療のための技術のあり方が、看護婦個人の技術もさることながら、各人各人の個性の違いで、はっきりとその雰囲気異なってくることでした。

(後記)

現在、小生は家庭を持ち、妻も子供もあって平和に暮しています。

斗病当時の思い出は今も実感として、いきいきと蘇ってきます。その後は健康状態も良好で嬉しいのですが、時々便秘を起したとき妻に頼んで浣腸をしてもらうのですが、仕方

が下手で、いつまで経っても上手にならないのです。

硝子浣腸器(一〇〇CC)の大型器でカテーテルを付けて浣腸してもらうのですが、ワセリンをつけ忘れたり、面倒なのか、カテーテルをつけ忘れたりでその度に注意するのですが、このごろでは浣腸器を使うのがいやなのかイチジク軽便浣腸でやりなさい、という仕末です。イチジクより小生の買ったエスエス製薬の兎浣腸(他の軽便浣腸より嘴管が長くて大きい)を使わせてみたところ、これの方が使いよいわ、といって最近ではもっぱら、この兎浣腸の世話になっている状態です。

四人の美女の縛られポーズの代表的作品集

女体緊縛写真のアルバム 限定版グラビヤ印刷写真集

豊満と清楚

一般書店には一切市販しません。是非直接発行所へお申込を!

限定版頒価一部一〇〇〇円(送共) 略号「限二」

〔モデル〕 長野 良子——大塚 啓子——五月亜紀子——新井マリ子

限定版第一号として、グラビヤ写真集の「美しき縛しめ」第三集、略号(美3)を本年二月に刊行しましたところ、多数のマニヤの方々のお求めを頂き有難うございま

した。嘗て十数年前コロタイプ印刷の女体緊縛写真アルバムとして刊行いたしました「美しき縛しめ」第一集、第二集は忽ちのうちに売切れとなり、今では見ることもさえ

かなわぬ稀少な文献となっています。

皆様のご熱心な要望によりまして、ここに限定版グラビヤ写真集刊行に踏み切りました。本誌グラビヤ口絵では種々な制約のため、思いきった企画編集を遂行できませんので、直接販売の限定版写真集によってファンの方々のご期待に応えたいと思います。

今度、限定版第二号として、前集とは、いささか趣を変えた緊縛女体アルバムを作製いたしました。若々しい豊満な肉体を誇る長野良子、大塚啓子の二人の女性の美しさを最高度に発揮した縛られポーズの大胆

奔放のかずかずを、画面いっぱい、所狭ましと活躍させました。特に迫力を増すためとグラビヤ印刷の効果をフルに運用するために、写真面を大きくしました。加うるに清楚にして純情なフェイスと初々しい肢体の持主である五月亜紀子と新井マリ子両嬢の痛々しいばかりの可憐な緊縛裸身を以て誌面を飾りました。

緊縛フォト・アルバム

限定版第二号 豊満と清楚 内容

△美しき縛しめ(第四集)▽

(一)、豊満をくびる……大塚 啓子
胸と胴をくびった縄にもだえる女体。
(二)、グラマーの縄目……長野 良子
むくむくと肥った肌に縄目も埋もれて。
(三)、豊満裸身の陶醉……長野 良子
うっとりとした表情は、縄にか紐にか？
(四)、鼻をいためつける……長野 良子
指にて鼻を弄ばれて恍惚とした表情。
(五)、荒縄の緊縛感……大塚 啓子
とげとげとした荒縄が柔肌を痛める。
(六)、黒と白の対照……大塚 啓子
白い晒と荒縄のケバとのコントラスト。
(七)、責めに疲れて……大塚 啓子
責め抜かれてぐったりとなった女体。
(八)、戯れの縄プレイ……新井マリ子
アパートの一室での緊縛プレイの一コマ。
(九)、襲いくる魔手……新井マリ子
恐怖のまざなし、黒い触手が迫ってくる。

(一)、首締め縛り……新井マリ子
のびやかな肢体が痊れんする首絞め姿態。
(二)、猿ぐつわ非情……新井マリ子
開股しばかりの上に非情の猿ぐつわが……
(三)、開股棒しばかり……新井マリ子
革の口枷が頬もくびれよと締めつける。
(四)、絶叫のワンカット……大塚 啓子
縄目が埋もれるような凄惨な緊縛感の味。
(五)、痛さに喘ぐ……大塚 啓子
責められて急所の痛さに思わず呻めく。
(六)、首縄と足縄……大塚 啓子
首に掛った縄と足の縄が女体を変える。
(七)、縄に狂う……大塚 啓子
悶えても拘束された麗身は逸脱しない。
(八)、足首の縄目……大塚 啓子
反りかえった足の指が縄目に可愛い。
(九)、縄による姿態の変転……大塚 啓子
二筋の縄がかくも美しい姿態を現すか。
(一〇)、緊縛美の誇示……長野 良子
誇らかな成熟の匂を十分に撒きちらす。
(一一)、美しき肢足……長野 良子
投げ出された肉づきのよい肢、足、脚。
(一二)、全裸緊縛の羞ら……長野 良子
はにかんで見せた美しい全身のポーズ。
(一三)、両手吊りと足首……五月亜紀子
両手両足を縛られて一本棒に晒される。
(一四)、けがされぬもの……五月亜紀子
清純な美しさが、この全身に漂っている。
(一五)、猿ぐつわを噛ます……大塚 啓子
晒の白布が鼻も口も一緒に掩って締める。
(一六)、荒縄への誘致……大塚 啓子
荒縄をさばいて次第に捉らわれる蝶々。
(一七)、噛まされた猿轡……大塚 啓子
珍しく完全に噛まされた息苦しい猿轡。
(一八)、猿ぐつわと縄……大塚 啓子
厳しい縄目と息づまる猿ぐつわの烈しさ。

(一九)、緊縛女体操縦法……大塚 啓子
縛りに変化をつけられた女体はどこへ。
(二〇)、くねらす豊満女体……大塚 啓子
瑞々しくて柔らかな女体が縄にくねった。
(二一)、棒責めの序曲……新井マリ子
両足首の両端に縛られて、さて、
(二二)、答打ちのポーズ……新井マリ子
さあ、打って、とながし目の艶なこと。
(二三)、素晴らしき美身……長野 良子
輝くような美しい裸身もあらわに。
(二四)、ポリウムを縛る……長野 良子
縄をはねかえす素晴らしい女体の重量感。
(二五)、むくれた双丘……長野 良子
情容赦のない縄は巨大な乳房をへしゃぐ。
(二六)、開股しばかりの表情……大塚 啓子
開股しばかりになった女の顔のアップ。
(二七)、開股しばかりの全貌……大塚 啓子
両肢を開けて縛り上げられたポーズ。
(二八)、伸ばされた足の表情……大塚 啓子
ぴんと一直線に伸ばして縛られた脚。
(二九)、開股ざらしの表情……大塚 啓子
放置されて全身の痛さに耐えるシーン。
(三〇)、強盗侵入の構想……新井マリ子
押し入った強盗は女を縛って転した。
(三一)、緊縛女体の鑑賞……新井マリ子
自宅侵入した賊の目的は美体の鑑賞？
(三二)、炊事場の嗜虐場面……新井マリ子
台所で縛られていたぶられるシーン。
(三三)、美しきトルソ……大塚 啓子
胸、臍、ウェストが縄によって捕捉。
(三四)、逞ましき臀部……大塚 啓子
くねらせた見事な臀部を捉えたレンズ。
(三五)、全裸の背面緊縛美……大塚 啓子
後手高小手の美しさは素晴らしい。
(三六)、ビニール・コード……大塚 啓子
柔肌を喰いちぎるようにくびるコード。

女子寮と女子事務員

高木紀久枝

女子寮と女子事務員

私等の会社には女子工員とは別に約二十名余りの女子事務員が勤務しています。人数から云えば私等とは比較にならない位少ないのですが、どうしたわけか彼女等と私等女子工員とは同じ年頃の若い女同志乍ら、何かと対立し合つて不思議に仲が悪いのです。彼女等は高校卒で優遇されていますし、それに私等の様な不格好な仕事着とちがつて、しゃれた事務服にタイトスカート、ハイヒールと云った服装で、楽な仕事をしているのが、私等女子工員から見ればシャクの種で女らしいしっしと心を起すからなのでしょう。それでも職場は、はなれていますし、始終顔を合わせるわけ

ではありませんから、面と向つてトラブルを起す様なことは殆どありませんが、何かの拍子に彼女等の噂話が話題に上つたりすると、それこそ聞いていてだけでも顔が赤くなる様な悪口をぶちまけることも珍しくありません。私等女子工員は、そんなことでもしなくては日頃のうつぶんを晴らせないのでしょうか。

所で、其の女子事務員の中に、何うしてあんな美人がまぎれ込んだのか知りませんが、映画女優やファッションモデルにも引けを取らない、それはそれは美しい女性が一人居ます。陽子と云う名前で私よりは一つか二つ年

長なんでしょう。すんなりと均整の取れた美しいスタイルと云い、整つて愛嬌のあるマスクと云いほんとうに綺麗いで女の私でも見とれる位なのです。それだけに誰の眼にもひときわ目立つものですから、私等の風あたりも一層強いらしく、何かと云えば彼女を眼の仇にして散々こきおろすことが多い様です。例えば

「陽子って、美人は美人だけど私、大きらいよ」

「私もよ、ほんとに、にくたらしいわ」

「あら、何かあったの？」

「ううん、そうじゃないけど、彼女だった

ら、私は美人でございますって書いておろ下
げてるみたいな顔してるじゃない？」

「そうそう、たしかにそうね、鼻もちならな
いわよ」

「綺麗なのが余程得意なのね。シャクだ
わ、何かでギャフンって云わせられないかし
ら？」

「ホホホ降参ごっこで負かしてやればいいの
よ。きつと傑作だわ」

「紀久ちゃんが押え込みをすれば、彼女だっ
ていちころよ」

「バカねッ！ そんなことが出来るものでは
か」

「ハハハハ、たえ話よ」

「フフフフ」

等と、此んな調子です。

勿論、私にしても美しい陽子と降参ごっこ
をすれば負けない自信はあるつもりです。背
文は高く一六〇センチはあるでしょうが、体
重なら幾分ふとり過ぎの私よりは数キロ軽い
はずですから、力量はそれ程あるとは思えま
せん。それに何と云っても彼女は女同志の格
斗には不馴れでしょうし、其の点、私は断然
優勢になることは間違いありません。まして
首の上に跨って押え込みで、彼女の顔を内股

の間に、きっちりとはさみ込めば、美人の陽
子もびくとも出来ず、遂には私に屈服してし
まうでしょう。そんなことを空想しています
と、私は本当にそんなことをして見たい衝動
にかられるのですが、まさか現実に実行出来
るわけはありません。何故って、同じ女子寮
の友人同志なら降参ごっこの機会もあります
が、相手が女子事務員の陽子では、無理なこ
とが分り切っているからです。私にして見れ
ば残念なのですが、致し方ありません。色々
と考えをめぐらしている中に、ふと面白いこ
とを思いつきました。降参ごっこで陽子を負
かすことが出来ないのなら、せめて別のこと
で彼女をひどくいやがらせてやったら、何ん
なものでしょう。此れなら場合によっては、
私だって出来ないことではないかも知れませ
ん。そう考えると、私は早速、便箋を取り出
して陽子宛に手紙を書き始めました。勿論、
私が書いたことを彼女に知られてはまずいと
思いましたから、態と名前は書かず陽子と同
じ女子事務員の中の一人が出した様な形にし
ました。次に其の手紙の全文を御披露して置
きましょう。

◇ ◇ ◇ ◇

陽子様、相変らず御元気で毎日お勤めの御

様子、心からお喜び申し上げます。いつも会
社でお会いしているのに、今日はあらたまっ
てお手紙差し上げたりして御免なさいね。御
不審に思われるかも知れませんが、面と向
っては、少々気恥しくて云いにくいことだっ
てあるんですもの、悪く思わないで下さい
ね。

夏の間は幾分日焼けしていらっしやった貴
女も、此の頃では、又すっかりお肌の色が白
くおなりになって、つやつやとほんとにお綺
れいになりましたこと。貴女って何うして
そんなにお美しいのでしょうか。私等の会社
には貴女にかなう女性は一人だって居ません
の、断然群を抜いているって云う感じがす
わ。あらあら、おせじなんかじゃありません
のよ。美しく整ったお顔立ちと云い、スタイ
ルブックから抜け出した様にすんなりと均整
の取れたお身体と云い、あまりにもお綺麗
い、私なんか少々シャクにさわる位ですわ。

所で話は変わりますが、つい先日のこと、私
は時間をもてあましたものですから、映画で
も見ようと思っ行って行きずりの映画館に題名も
見ずに飛び込んだことがありました。すると
何とまあ、ニュースの次には思いがけもなく
短編の「女子レスリング」の映画が上映され

るではありませんか。私は女子レスリングなど見たことも聞いたこともありませんし、何となく恥かしくて頬がほてりましたわ。

でも総天然色で眼も覚める様に美しく普通のプロレスと違って、ほんとに派手ではなやかで随分面白いものですわね。私は見ている内に次第に興奮してしまつて、どうなることかとハラハラし乍ら手に汗をにぎる思いでしたのよ。だって、女子レスリングともなれば若い女性ばかりが赤、青、黄、色とりどりの流行の水着を着て、あざやかな色のガウンをかけて出てくるでしょう。念入りにお化粧をして、真赤なマニキュアまでしてまるでファッションショーなみのメーキャップですよ。いよいよゴングが鳴るとパッとガウンを脱ぎすてて試合が始まるのですが、女とは云い乍ら、投げる、絞める、押え付ける、跳ね返す、ドッタンパッタン、それはそれはすさまじい格闘で全くスリル満点です。でも矢張り流石に若い女同志だけあって、荒っぽい中にも優しさがあって何となくエレガントな感じですよ。

所が彼女等の中で一番美しく、人目を引いていた女性が不思議な位貴女に似ていて、まるでそっくりでしたのよ。あまり似ているも

のですから、私は見ている内に貴女がリングの上でレスリングをしていらっしゃる様な錯覚を感じて困りましたわ。でも其の女性は美人なだけに、あまり腕力はないと見えて、烈しくせり合った末にもんどり打って投げ出され、寝技で押え付けられたあげく、首を絞め上げられて、遂に「参った」の合図をしました。それで勝負がきまつたわけですが、其の時ふと、負かされたのが貴女で、貴女を負かしたのが私だったら、さぞ面白いだろうに、等と考えましたのよ。ほんとに御免なさいね。

ところが、それだけならまだよかったのですが、其の日の夜、すぐく傑作な夢を見ましたのよ。こんなことを貴女に申し上げてよいかしらと大分迷ったのですけれど、夢の話なら他愛もなく罪はありませんし、思い切ってお知らせしますわね。

場所は会社の横手の広場だったと思います。が、お昼休みに貴女が同寮の昌子さんとお二人でレスリングをしていらっしゃる夢でしたの。まわりには私等女子事務員連中が多勢集って来て、珍しそうに眺めていましたわ。

でも、貴女はまるでスタイルブックから抜け出した様にすんなりして、どちらかと云え

ばきゃしゃな位の美人でしょう。それなのに昌子さんは御承知の通り体格のよいふとりじしの、体重だって六十キロを越えている大がらの女性ですもの、腕力では相当のひらきがありましたわ。ですから、貴女は見る間に昌子さんに捻じり倒され、忽ち太い脚を開いてむんずと馬乗りに跨った昌子さんの大きいヒップの下に、どっしりと組み敷かれておしまいになりました。貴女は友人等の眼の前でこんなひどいことをされては、さぞくやしいとお思いになったのでしょうか。

「うっ！」

と、白い頬を首筋の付け根まで真赤になすって、烈しく手足をじたばたさせ乍ら、昌子さんを突きつけようとなさるのです。其の拍子に貴女の紺色のスカートがぱあーとめくられて、すっきりと均整の取れた美しい素足が抜けるように白い太もものあたりまでむき出しになり、ハイヒールが片方脱げ落ちたまま地面をお蹴りになるのです。でも、何と云っても体重のまさった昌子さんにびったり押え付けられては、貴女のお力ではそう簡単に跳ね起きることは出来ません。

「イヤー、陽子さん、押え付けられたわ」

「矢っ張り昌子さんの方が強いわ」

「此んな時は、美人は損ね」

「ほんと、陽子さん、くやしがつて暴れてるわよ」

「でも、昌子さんを跳ね返すの、無理じゃない？」

「それは無理よ」

「まあ、陽子さんったら脚がまる見えよ。可哀そうね」

「でも昌子さんに負かされたんだから、仕方がないわ」

「それもそうね、でも応援しようよ」

「いいわ、陽子さん、がんばって！ 負けないでネーッ」

「陽子さん！ しっかりネーッ」

中には貴女に同情して黄色い声を出し乍ら貴女に声援する者も居ますが、逆に美しい貴女が負かされているのを小気味よさそうに眺め乍ら

「昌子さん、しっかりッ！ 起こしちゃだめよッ！」

「思い切りやつつけてネーッ」

等と昌子さんに応援する女性も居ます。すると昌子さんは顔を上げて、声のした方をふりかえり乍ら、

「ああ、大丈夫よ、陽子さんなんか負け

るものですか、まかしといて！」

と自信あり気に、にっこり唇をほころばせています。

つづいて昌子さんは、貴女の細っそりした両方の手首をつかむと、力を入れてぐっと地面の上に押しつけました。見れば貴女は、丁度万歳でもする様に両腕を頭の上まで高々と差し上げた格好で、はりつけにあったみたい

にびくとも出来なくなっていらいっしやいます。どうするのかしらと思ひ乍ら見ていますと、昌子さんは、

「さあ、もうじたばたしたってだめよ」

と、勝誇った表情でぐっ、ぐっとヒップをずらせて前の方へにじり上って行きます。たくれたスカートの下からはみ出した太い膝頭を、貴女の肩の上にのせかけて、白い二の腕のあたりを踏み敷き乍らずり上るのですからたまりません。真赤に上氣していらいっしやる貴女の綺麗な顔が、それにつれて、膝を曲げて八の字型に開いた昌子さんのむちむちした太ももの間にはさまれて来るではありませんか。

「ああ、よしッ！」

貴女はあまりのことに顔色をお変えになり乍ら、やっきにのがれようとなさいますが、

何うにも思う様に動きがとれません。やがて貴女の細くくびれた首の上にずしりと馬乗りに跨った昌子さんは、貴女のお顔をあらわな内股の間深くギュッととはさみ込んでしまいました。何とまあ、異様な光景なのでしょう。貴女は唇のあたりから下を、たくれた昌子さんのスカートにかくされて、見えていません。ただ鼻から上ばかりが昌子さんの股の間からやっとのぞいていらいっしやるのです。

「う、うッ！ 苦しい」

貴女は苦しそうな呻き声をお出しになりました。それもそうでしょう。昌子さんの全身の重量で喉首を絞め上げられては、貴女も眉をしかめ唇を食いしばって悲痛な表情を浮かべていらいっしやいます。

「まあ、陽子さん、散々ね」

「ほんとだわ、陽子さんのくやしそうな顔！ 私あんな顔、初めて見たわよ」

「私もよ、でも昌子さん、強いね」

「陽子さん位、いどころよ、勇ましいじゃない？」

「でも陽子さん、意気地がないわね、あんなことされても跳ね返せないなんて、みっともないわ」

「ほんとよ、顔を脚にはさまれて、あわれな

格好ね」

女は表面優しそうに見えても生来残酷性があるのですから、さっきまでは貴女に同情して声援を送っていた連中までが、今では弱い貴女が昌子さんにひどい目に会わされるのを嬉しそうに見つめ乍ら、勝手気ままなことを云っています。

何時しか貴女のお顔にはじつとりと脂汗がにじんで、ハアハアと肩を喘がせ乍ら、早い呼吸をくりかえしていらっしやいます。私は見ていても勝負はついたも同然だと思いました。昌子さんはさも得意そうに貴女を見下し乍ら

「まだじたばたなさるの？ 降参なら早く降参と仰云い！」

と云います。すると貴女は、苦しそうに唇をおかみになり乍ら

「くやしい！ 降参なんかしません！」

と仰云います。

「まあ、貴女って、案外強情ね、じゃあもつと苦しめるわよ」

「知らないわ！」

「ようし、息の根をとめちゃうわ」

昌子さんはそう云うと、貴女の首の上ののせていた大きいヒップをやや中腰の姿勢で浮

かせるのです。それから膝をずらせて一歩前に、にじり上りました。すると昌子さんのヒップは貴女のお顔の丁度真上に来ています。私は昌子さんが何うしようとしているのか分りませんでした。次の瞬間、そのままべたっとヒップを落すではありませんか。

「あらッ！」

「まあ！」

「イヤー」

かたづを呑む思いで見つめていた私等は、あまりのことにハッと息をとめて、眼を血の様にしています。何とまあ昌子さんは貴女のお顔の上にべったりヒップをのせて、まともにどしつと馬乗りに跨っているではありませんか。たくれていたスカートが落ちかかって貴女のお顔をすっぽりと蔽いかくしましたから、外からは見えませんが、其の中で貴女のお顔は薄いパンティだけをへだてて弾力のある大きいヒップにびったり敷きつぶされているらっしやるのでしよう、お鼻もお口もすき間もなく押しふさがれては第一呼吸は出来ず声も出せず、貴女だってグーの音も出せませんわね。

「ううっ！」

と苦しきまぎれの呻き声が昌子さんのスカート

トの奥の方からかすかに聞えて来ました。とたんに貴女のお身体がまるで気でも狂った様な烈しさでくねくねと波打ち始めます。貴女に見れば居ても立っても居られない程の苦しさに耐えかねて無我無中の抵抗なのでしよう、やがて

「う、こ、こうさんッ！」

と、とぎれとぎれの声が聞えると、昌子さんはやっと貴女のお顔の上からぱっと飛びのきました。遂に美しい貴女は力量のまさった昌子さんに完全に屈服なさったのです。昌子さんは誇らし気に手を上げ乍ら立ち上りました。矢張り貴女を物の見事に負かしたのが嬉しいらしく、如何にも満足そうな表情です。一方貴女は自由はなったものの些かグロッキー気味、そうすぐには身体をお起しになることが出来ません。未だ地面の上にうつぶせたまま肩を波打たせ乍ら、くやしさに涙ぐんでいらっしやるのかも知れません。

「まあ、とうとう陽子さんの負けね」

「それも完全な負けよ、問題にならなかったわ」

「そうね、綺麗な顔をお尻に敷かれたんですもの、あんなひどい負け方ってないわよ」

「陽子さんったら、昌子さんに大変な所、嗅

がされたのね」

「まあ、ホ………」

「でも面白かったじゃない？」

「ほんとよ」

皆はお二人のすさまじいレスリングにやや興奮の色を見せ乍ら、がやがやと騒いでいます。丁度その時、スーッと私は眼をさましてしまいました。

「なあーんだ、夢だったわ」

と、やっと私は正気にかえってそう思いました。それにしても、何とまあ奇抜で奇妙な夢だったのでしょう。女子レスリングの映画などを見たからでしょうが、貴女が昌子さんとレスリングをなさるなんて、全く突飛で自分乍ら、あきれてしまいましたわ。

それにしても今から考えて見ますと、夢の中で美人の貴女が昌子さんに、力及ばず馬乗りを組み敷かれ、手足をじたばたさせ乍ら、もがいていらっしゃるお姿の何と美しかったことでしょう。ほんとに此の世のものとは思えない位でしたわ。貴女が白い頬を真赤に紅潮させ乍ら、切れ長い眉をつり上げきゅっと唇を食いしばって、世にも悲痛な御表情をなさったお顔って随分魅力的ですね。

所で私、貴女にたった一つだけお願いがあ

りますのよ、貴女は、

「いやだわ」

と仰云るかも知れませんが、是非是非私の願いをお聞き入れになって頂けませんかしら？ つまり、私はあの夢を見て以来、ほんとうに貴女と二人でレスリングをして見たくてたまりません。勿論二人共レスリングは知りませんから、本式には出来ないでしょうけど、ほんの見よう見まねの形ばかりで結構ですわ、とにかくどちらか一人が

「参った！」

を云うまで争ってみましょうよ、でもあんなに友人連中に見られていては私だって恥しいし、貴女だっておいやでしょうから誰も居ない所で二人きりで行いましょうね。そうすれば貴女と私だけの秘密ですもの、誰にも知られないですみますわ。私は昌子さん程の体重はありませんからあれ程の腕力はありませんが、貴女よりはまさっているつもりです。ですからレスリングとなれば、私の方が優勢なことは先ず間違いないですね。そして、それで丁度よいのではないのでしょうか？ 何故って貴女は、まれに見る様な美人に生まれついていらっしゃるのですもの、私等普通の女性に対しては、普段から一種の優越をお感

じになっいていらっしゃるのでしょうか？ あら、おかくしにならなくてもいいんですよ、貴女はあまり意識してはいらっしゃらないかも知れませんが、何時も私等同性を屈服させている勝利感を味わっていらっしゃるはずですよ。ですから貴女は平常からお化粧やおしゃれにしても、私等にはすきをお見せになります。でも逆に私等普通の女性はほんとにたまりませんわね、貴女の美しさに常に圧迫されて引け目ばかりを感じさせられています。そして、くやしいことに貴女に屈服させられてでも居る様な敗北感をじっと我まんしていただきますわ。

そんな状態ですから、一度貴女をレスリングで負かす位は当然だと思いますし、貴女だって、喜んで負けて下さっていいはずですね。

ですから、レスリングともなれば私は断然遠慮はしませんのよ。美しい貴女がお弱いのに乗じてうむを云わせず一気に捻じり倒し、むんずと馬乗りになって組み敷くのです。何んなに素ばらしい心地でしょう。此の時ばかりは、普段の敗北感が綺麗いさっぱり吹き飛んでスーッと爽快になるでしょうね、美しい貴女に云い様もない優越が感じられるのも此

の時ばかりかも知れせんわ。そう思うと私は又とない此の機会に貴女を息も絶え絶えになる程ひどい目に会わせてやりたい様な衝動にかられるでしょう。所で私は、貴女を何んなスタイルで組み敷いたら一番快いだろうかそして貴女が最もくやしい思いをなさるだろうかと随分色々考えて見ましたわ、それでも飛び切りの名案は浮びませんし、矢張り夢で見た昌子さんの真似をすることにきめました。つまり仰向けに捻じり倒した貴女の細くくびれた喉首の真上にどっしりと馬乗りに跨って、貴女の奇れいな顔を膝を曲げた、あらわな太ももの間にギューツとはさみ込むのです。貴女は御存知でないかも知れませんが、こうして押え付けるのを「押え込み」って云いますのよ。女が女を組み敷くには「押え込み」に限るって云いますが本当かも知れませんが、何故って、女は同性の上に跨ると不思議にいい気持がするそうですが、それと同じ馬乗りになるのなら、身体の上の部分に乗る程快さもふえるって云う話です。ですから私も貴女の首の上に跨って胴や胸の上に乗った時よりも一層気持がいいかどうかためて見るつもりですわ。其の時はスカートを思い切りたくし上げて、裸の内股の間に貴女

の顔をきっちりとはさみ込むのですから、貴女のすべすべした頬のなめらかなお肌と、私の太ももの内がわとがぴったり直かに密着した気持はきつと悪くないでしょう。それに貴女の丸味のある顎のあたりがくれたスカートの下で私の下腹部をぐつと圧迫するのが又何とも云えないだろうと思います。

貴女は勿論、昌子さんに「押え込み」をされた場合と同じく、身をくねらせ、手足をじたばたさせて烈しく抵抗を、なさるでしょうね、ぱつとスカートが踊り、すっきりと伸び切った貴女の美しい素足が意外に肉付きのよい太ももの付け根までむき出しになり、中に跳ね上るお姿は、何んなにお見事ですしょう。其の度に私の内股の間にはさまれた貴女のお顔はかすかに右に左と僅か乍ら捻じ向けられるのです。女が女を組み敷くには「押え込み」に限ると云いますのも、此んな快さが満喫出来るからなのでしょう。美しい貴女を押え付けるだけでも嬉しくてたまらないのに、素敵な満足感まで与えられて、私はきつと夢中になるでしょう。貴女にはお気の毒ですが此んな素晴らしい「押え込み」なら、何時までも続けて貴女を放してやりたくない様な気持さえしますわね。

でも、まさかそんなことも出来せんわ。

何故って、貴女だって此んなひどい目に会わされて、そうそう何時までも耐えることはお出来にならないでしょう。見れば、私の全身の重味でパンティ一枚の股のあたりが、ぐつぐつと貴女の喉首へ食い入っていますから、首を絞められる苦しさに貴女は顔を真赤にして悲壮な御表情で

「フーフー」

云っていらっしゃいます。それでも未だ貴女は

「参った！」

とは仰云いません。私はお奇麗で優しそうに見える貴女が案外強情なのに感心しましたわ。でも本当は私に此んな散々な目に会わされ乍ら、貴女はかえって御満足なのではないかって云う気がしましたのよ。だって、貴女はレスリングでは私に負かされていても、美人なるが故ですもの。貴女にとってはちっとも不名誉ではなく、逆に名誉なことかも知れません。ですから、私に苦しめられれば苦しめられる程、貴女はかえって私に対して云い知れぬ優越をお感じになって、御満足ではないかしらって云う気がしますわ。そんなことを考えますと、私は貴女を負かしてばかりい

ながら、相変らず屈服させられているみたいで、くやしくてなりません。

えい、くそつと私は内心負けん気をふるい立たせて、断然貴女に「最後のとどめ」を実行する決心をしました。貴女は「最後のとどめ」を御存知でしょうか？ ほら、夢の中で昌子さんが最後にやったあれですよ。つまり私はもう一歩前ににじり上って、貴女の美しいお顔の上にべったり大きいヒップをのせてまともに馬乗りに跨るのですわ。私は其の時スカートはあらかじめうんとたくし上げて置きますし、パンティは態とわきの切れ上った、すけて見える様な薄手のものを用いますから、貴女のお顔は殆どじかに私のヒップにぴったりすき間もなく密着したも同然になるでしょう。お鼻もお口もお顔の下半分以上がお尻にギュッと敷きつぶされて息も出来ませんし、声も出せませんわね。こうなったら貴女は何うなさいますかしら？ いくら美人の貴女でも、何より大事にしていらっしゃるお顔を同じ女性のヒップに敷かれては、とてもじっとしてはいられません。すさまじい重量感に押しつぶされムートとする様な同性の体臭にむせながら、泣くにも泣けない、いやらしさにくやしさに死ぬよりつらい思いをな

さるでしょう。

「どうだ、これでもか」

私は誇らしさと得意さに、ドキッ、ドキッと胸が烈しく高鳴るのを感じ乍ら、顔をうつむけて貴女を見下しています。もう貴女の奇れいなお顔は鼻から下を完全に私のヒップに蔽いかくされて見えなくなっています。ただ僅かに眼から上だけが股の間からやっとのぞいているばかりですわね。何とまあ、あわれな格好でしょう、流石美人の貴女でもこうなっては、ほんとにぶざまで見られたものではありませんわ。貴女は息がつまり、眉をつり上げ、苦痛にお顔を歪め乍ら、苦もんの表情を浮べていらっしやいます。額のあたりはべつとりと汗ばんで、青い静脈がぷっくりとふくれ上り、大きい瞳は血走って何時しかくやし涙がにじんでくるでしょう。

「あ、あっ！」

と貴女は叫び声を出そうとなさるのですが、それすら声にならず

「う……」

と云う、かすかな断末魔の様な呻き声に変わります。貴女はついに力つきて

「参った！」

と、云っていらっしやるのかも知れません

が、全然声になりません。貴女が必死になってじたばたなさる度毎すける様に薄いパンティをへだてて、ぴったり私のヒップに密着している貴女のお顔がムズムズッ、ムズムズッと動くのですから、私のくすぐったさと云ったらありませんのよ。でも私は貴女が参ったを仰云らないのに許して上げるわけには行きませんもの、くすぐったいのを我慢してお顔の上に乗れ続けるつもりですわ。二秒、三秒五秒、今度は貴女のかすかな息が薄いパンティを通して伝わって来るでしょうが、それが何とまあ、ムートとびっくりする程熱いのです。

「ヒヤーン」

きっと私は無意識の内に、そう叫び乍ら、反射的にヒップを貴女のお顔の上から浮かすことでしよう。見れば貴女は可哀そうに、くやし涙にくれ乍ら半泣きになっていらっしやいます。私は云い様もない満足感に胸もはち切れんばかりでした。でも、未だ貴女は参ったとは仰云っていないのですから、もう一度繰り返して見ようかしら、と意地の悪いことを考えました。

「もう一度よ！」

私はそう云うと、やっと一息入れた貴女の

お顔の上に再びべったりと跨るのです。

「う……むッ！」

かすかな叩き声、ムズムズと動く、くすぐったさ、それにムーンと、やけつく様な異様な温か味までが、さっきと同様、ズーンと伝わって来ます。

「ワーッ！」

貴女はもう其の時には声を上げてみえも外聞もあらばこそ、みっともなく泣き出していらっしやるでしょう。無理ありません。いくら貴女が美人でも、女が同性に力づくで組み敷かれ、こともあろうに大切な顔をヒップに押しつぶされては、其のくやしさ、いやらしさは如何ばかりでしょう。貴女は上体を起こす気力もなくうつおせて髪振り乱したまま肩をふるわせて泣き入っています。相変らずスカートは大きくめくれたまますっきりと美しく均整の取れた素足が真白い太ももの付け根までむき出しになっていますが、貴女はそれをなおす元気ありません。

でも、私の方は普段から引け目ばかりを感じている貴女を完全に屈服させた嬉しさは、たとえば様もない位でしょうね。日頃のうつぶんもきれいさっぱり無くなって、かえって美人の貴女に優越を感じるのですもの。此んな

素敵なことって又とありませんわ。

あら、あら、まあ、私としたことが女だらにはしたくないことばかり書きましてほんとに御免なさいね。貴女は此んな文をお読みになつて

「まあ、失礼ねッ！」

とお怒りになるのではないかと心配していますが、もとはと云えば、貴女があまりお美しいせいなのですもの、悪しからずお許し下さいませ。

今でも私は会社で毎日の様に貴女にお会いしていますし、昌子さんとも顔を合わせますが其の度に夢で見た「押え込み」の光景が眼先にちらついて全く困りますのよ。仰向けに捻じ伏せられた貴女が、首の上に跨った昌子さんの、むちむちした太ももの間に顔ををはさまれて、ぐいっと喉を絞められていらっしやる悲壮なお姿がどうしても忘れられませんの。それだけなら未だよいのですが、貴女のお顔を見ていると、ついつい私は貴女を「押え込み」で組み敷いている場面を空想してしまつて、私の股の間からやっとのぞいている貴女の悲痛なお顔と、眼の前の貴女のお顔とが重なり合つてほんとに奇妙な気持ちになりますわ。おまけに貴女が誰かとおしゃべりをして

唇を動かしていらっしやったりすると、私はまるでくすぐられてでも居る様にムズムズする様な錯覚を感じるのです。そして、そんな空想だけではあき足りず、貴女の奇れいなお顔を本当にヒップの下に敷きつぶして見たい衝動に、とても我まんが出来ない位になりますのよ。

ですから私の願いを是非一度お聞き入れになつて、誰にも見られない所で私の下敷きになつて下さいませね。若し貴女がいやだと仰云つて私の願いを聞いて頂けないのでしたらきっと私は我まんが出来なくなり、人前をも関わず無我夢中で貴女を組み敷くかも知れませんのよ。そんなことにでもなったら、私ばかりか貴女までが散々笑いものになりますもの、此所は目をつぶったお気持ちで私の云う通りになつて頂きたいのですわ。

其の内に、適当な日時と場所をきめて、貴女に御知らせ致しますから、其の節は何卒よろしくね。私に負かされるのがこわくてお逃げになつてはいやですわよ。本当に失礼ばかり申し上げましたわ、さようなら又いずね。

陽子様へ

一事務員より

◆ ◆ ◆

あまりひどすぎるかとは思いましたが、私

は一気に此の手紙を書き上げると、女子寮のおてんば連中

「さあ、傑作な手紙が出来たわよ」

と云って得意顔で見せてやりました。皆は

「あら、何よ」

「何んな手紙？」

と、まるで奪い合う様にして我先きにと読んでいましたが、流石にあきれかえって眼を丸くし乍ら

「イヤー驚いた、すごい手紙！」

「まあ、紀久ちゃんたら、ようく此んなこと書けるわねッ！」

「でも傑作よ、紀久ちゃん、此れほんとに出すつもり？」

「陽子さんきもをつぶして眼を廻すわよ」

「ワッ、面白いわ、紀久ちゃん文才があるのね」

「いっそ、小説家になったら何う？」

「でも陽子さんが此れ読んだ時の顔が見たいわね」

「それは無理よ、でも陽子さん真青になってガタガタふるえ出すわよ」

「まあ、いい気味ね早く出しましょうよ」

「私がポストに入れて来て上げる」

私は手紙は書いたものの、何うしようかと

迷っていたのですが、女子寮のお転ば連中は

大はしゃぎ、早速会社の事務室宛、陽子さんへ送ってしまいました。きつと陽子さんは受けとって読んだはずですが、其の時美人の彼女が何んな顔をしたか、そして何うしたか、

何と思ったか、そんなことはまるで知る由もありません。でもとにかく私はあの手紙で陽子さんを散々いやがらせ、思い切り顔をしかめさせたことだけは間違いありませんから、

私は内心「ざまあ見ろ」と嬉しい気持です。其の後会社で時たま陽子さんを見かけることがあります、とたんにあの手紙のことを思い出して吹き出さなくなつて困ります。でもやつのことで我まんして成る可く知らん顔を装っている私なのです。

つい先日女子寮の友人等とにぎやかにおしゃべりをしていますと、此んな話になりました。

「ね、陽子さん、あの手紙読んだかしら？」

「きまつてるわよ、出したんだから」

「まあ、愉快ね、傑作だわ」

「きつと青くなつたはずよ」

「ハハ、顔が見たかつたわ」

「ね、紀久ちゃん、それからどうなつたか知らない」

「知らないわよ」

「陽子さんびっくりしてあの手紙人に見せたりしなかつたかしら？」

「あら大丈夫よ、あんな恥しい手紙彼女だつて誰にも見せられやしないわよ」

「それもそうね」

「ね、紀久ちゃん、今度は手紙でなくて、本当に陽子さんを押え込んで見ない？」

「バカね、出来っこないわよ」

「ああ、分らないわよ。皆で知恵を集めれば彼女を誘い出せるかも知れなくてよ」

「何云つての、そんなことしたら陽子さんカンカンに怒るわ」

「そうね。きつと喧嘩になるわね」

「でも喧嘩になつたつていいじゃない？ 面白いわ」

「まあ！ 人事みたいのにのんきなこと云うのね、私と陽子さんと喧嘩させるつもり？」

「喧嘩になつたつていいわよ、それとも紀久ちゃん負ける？」

「バカね、喧嘩だって負けやしないわよ」

「でしよう、陽子さんなら喧嘩で泣かしたつて丁度いいわよ、生意気なんだから」

「そうよ、そうよ」

「ハハ……」

本当に女子寮のお転ば連中と来たら、何を云い出すやら分つたものではありません。

【あるサジスチンの告白】

虹のあじさい

東 雪 枝

鍵をかける様に命じ乍ら私は、室内を点検し始めました。どんな設備で、どんな様式になっているかと調べる事は、これからの私の行動を大きく左右するからです。室内は洋式で、ダブルベッドがカーテン越しに見えます。日本間にして十畳位の広さの中に、最少限度の必要品が、こじんまりと設置され窓には、淡いグリーンのカートンが室内を引きしめております。一応部屋の内部を確かめてから、ドアの前に首うなだれている男に呼びかけました。

「ボヤッとしていないで、こつちへ来なさい」

見ると男は急に怖くなったのか、ガタガタ

と、見つともない位ふるえているのです。私はおかしくておかしくて大きな声で笑ってやりました。

「何ふるえてるの、此処迄来て急に恐ろしくなったの。でもダメよ、今迄に何度も逃げる機会を与えて上げたのに、お前は逃げなかったでしょ。私はお前を信用して、ここへ連れて来たのよ。今更どうのこうのと泣き事は聞けないね。さあ、こつちへ来るのよ」

私の声は絶対的の響きとなって男の耳に聴えた事でしょう。オズオズと私の前へ来ました。深々と椅子に腰を下し煙草を取り出し乍ら、きびしい声で言いつけました。

「立ったままで何が出来ると、ボヤッとして

いないで、私がタバコを出したら火をつけるのよッ」

男はあわてて跪まづきマッチを取り出し火をつけようとしたが、まだ手が震えて思う様にいかないのです。焦れば焦る程ダメでマッチ棒は四本五本と灰皿の上に重なるのです。私は、内心の笑いを噛み殺し乍らイライラした調子で

「バカ、何をしてるの、ライターはどうしたの本当に世話がやけるのねえ」

と、どなりつけました。その声におびえてポケットから、ライターを取り出しやっと火がつけました。深く煙りを吸い込んでから

「お前は、こんなぶざまな事で、これからの

私に従えると思ってるの。命令されたらテキパキとしなくてはダメよ。さあそのままの姿で手をテーブルの上に置き、忠誠をちかう言葉をはっきりと、私に聴かせなさい」

男は言われた通りジュウタンの上に、跪まづき手をテーブルの上に重ね目を落し乍ら

「ハイ、私は女王様の奴隷として……」と言いはじめましたが、その声はふるえ、甚だ聞き苦しいのです。「もっとハッキリ言いなさい」イライラした声の調子にビックリして、「ハイ」と言っただけで言葉が出ない様子です。私は皮肉な笑みを片頬に浮べ乍ら、男の様子をじっと見て居りました。

「私は女王様の奴隷として、全身全霊をかけて、御奉仕させて頂く事を光栄とし、女王様の御命令には絶対に違反しない事を、ここに誓います。私は一匹の犬にすぎません。人間としてどんなに恥かしい行為でも、女王様の御命令とあれば一匹の犬として喜んで従わせて頂きます」

男の声は途中で、ふるえも止り、ハッキリと快よく私の耳に響いて来ました。目を伏せたままの男は、すっかり観念した様に、いいえ、これから仕込まれる自分の哀れさに胸は喜びにおどって、次の命令を全身で待って

居る様でした。その後の状態ではばらくの間、私は足を組み直し、静かに煙草の煙りの行方を楽しんで居りました。

「お前の今の言葉が真実かどうかは、これから私を満足させられるかどうかでハッキリするでしょう。先程買収求めたものを、テーブルの上へ置き、服をぬぎなさい」

男は立ち上り小さな袋と紙包みを開けて、首輪とクサリ真鍮赤な引き綱。それに水色のパンティを、テーブルの上へソツと置き、服をぬぎ始めました。和服をぬぐ時の、あのなやましくも気にかかる衣ずれの音には遠いものですが、上着をぬぎ、ズボンを取りワイシャツをぬぐ時に、独特の重い音がして私のサジスチックな血を淡くかき立てたのです。ブリーフ一枚の男の身体はどちらかと言うとやせぎすで、でも肉はしまって弾力がありそうでした。

「足に接吻して、ストッキングをぬがせなさい」

私の声で男はひれ伏し、うやうやしく両手で片足を軽く接吻しました。接吻し乍ら、さもおもしろいものを愛撫する様に私のフクラハギを撫でて居るのです。突然、私は男の顔をケリ上げたのです。

「何時迄同じ事してるのッ、接吻が終わったらストッキングを取るのよ」

「ハイ」

男はオロオロと遠慮深かげに私のスカートの中へ手を入れ始めました。ガーターベルトの勝手が判らず戸惑う男の為に私はスクツと立ち上ってやりました。

「ホホホ、ガーターで、しっかり止めてあるのよ。お前知らないの」

私は、おもむろにスカートをぬぎ捨てて、ついでに上着もぬぎ捨てました。黒のシュミーズ一枚の私を見て男は、あわてて目を伏せました。

「今度ははずせるだろう。お前は本当にグズだわ」

跪づいている男の前に立ちはだかり私は愉快になりました。

「さあこれから、思い切りこの男をいじめ苦しませてやろう」

心の中で私は笑い声を上げたのです。男はオズオズとシュミーズをまくり上げ、ベルトから靴下を取り始めました。素足になった私の前に男の顔があります。

「ずい分お前のために歩かされて、つかれたし、足もよごれたわ。お前の舌できれいにし

なさい」

「ハイ、東様」

再び椅子に腰を下した私の足を、男はペロペロとなめ回します。

「もっと、丁寧にやるのよ」

足をブラブラさせ乍ら私は命じました。

「ハイ」

男は、片足を両手でおさえ、足の指を口に含み指の間をピチャピチャと、しゃぶり始めました。

「どう、美味しいかい」

「……」

「きいているのよッ」

「ハイありがとうございます」

「片方だけでなく両方、きれいにするのよ」

「……」

「返事ッ」

「ハイ」

その時、男の歯が足の指にごく軽くささりました。

「いたいッ」わざと大げさに眉をひそめて私



は足の指を含んだままの男を突きとばしたのです。

「足の掃除も満足に出来ないのねッ。よし、もう足はいいよ。今度はお前の力をためして

みるから、馬におなりッ」

「ハイ申し訳ございません」

四ツんばいになり乍ら男は謝るのです。「フンッ」せせら笑い乍ら私はクサリを手に取りました。そして男の口にそれを渡し、男の背中にもたがりました。

「いいかい、私がいいと言う迄、あるくんだよ。右と左を間違えたり、途中で止まったりしたら、お前の口へ渡したクサリをしごくからね。もっとも、まだお前には、それがどんなに痛いかわらないだろうね、ホホホ、楽しみだこと。合図をしたらあるき始めなさい」

そう言い乍ら私は身体の安定度を確かめて、クサリを両手で引っ張りました。「アッ」声にならない様な声を出しヨタヨタと馬は、あるき出しました。

「哀れな男も居るもの、犬にされたり馬にされたり、今にムチで、打ちのめされたり、それで喜こんでいるんだから、ハハ……」

静かに男に言って聞かせました。返事する

どころでない男は必死になって、あるいているのです。誠にいい気持です。

「左よ」「今度は右ッ」「間違えたねッ」と言い乍らクサリをしごくのです。ジャリッと音がして男の唇の端に喰い込む痛さに「ウッ」と声を出し乍ら、五十六キロの私を落すまいと、本当に必死にあるいています。

「重いかい、痛いかい。でも、ここはジュウタンだからまだいいのよ。板の間の事を考えたら、まだまだあるけるよ」「……」「返事ッ」「ウッ……」声を出したいにも出せないのは当り前です。「ホホホ、ハハハハ……」男の上で私は大声で笑いつづけました。男のウナジが汗ばみ、乗ってる背中も汗ばみ、大変乗りごちが良くなりました。男はと言えば一步一步が苦しくなり出し、「フアッフアッ」とあえいでいます。

汗ビッシヨリになった頃、遂に男はベッタリと、はいつくばってしまいました。「どうしたッえッどうしたのよッ。えッどうしたのよッ。まだ良いとは言わないよッ。まだ良いとは言わないよッ」私の声におびえて、立ち上ろうとしましたがダメです。「フンッだからしない。お前は駄馬だわ」私は男の上に立ち上りました。「アッ……苦しいッウッ……」

「何言ってるの、私をふり落した罰に、ふんづけてやるよ」

男の背中と言わず頭と言わず私はグイグイふみつけました。肉の上の足ぶみも又オツなものです。やわらかくふみごたえがあり、その合間合間に「ウフッ」「アアッ」と言う伴奏がきこえるのですから——。クタクタになった男の上へ、今度は少し、お行儀悪くあらをかいて私は坐りました。

「口程になく、ダラシないね。今度はね、お前の感度を試して見るわ」

男の腋の下に指をはわせて、ソロリソロリと、くすぐり出しました。「ヒエッ」ビックリした男は身をよじりました。私はその時完全に床へほうり出されました。その姿が横にある大きな鏡に映った時、私は自分のぶざまな姿を恥かしいと思いました。別に誰が見ていたと言うのではないけれど、奴隷の為に不本意にも、こんな有様になった事に怒りを感じたのです。

「よくも私を、ほうり出したわねッ」

「申し訳ございません。そんなつもりは決してなかったのですが、苦しさの上に、くすぐられたので、つい……」男は恐縮し切って詫げるのです。

「ついだってッノ 何がついな。私はお前なんか、ほうり出される事はないのよ。失礼なッ」

私はムラムラして、ハンドバッグを取り上げました。中からビニールを何本も重ねて編んだバンドを取り出し、手を振り上げて思い切り男の背中に振り下しました。「ビュスンッ」「ウアッ」男はその痛さに飛び上りました。ビニールとはいえ細いヒモを何本も編み込んだ美しく精巧なものです。それが肌に喰い込む時の痛さは又格別なものでしょう。

「うるさいッ何て声出すの」「でも……」「口答えしてはいけないッ」「ビュスン」「ウアッ」「ビュスン」「うおッ」けものじみた声を出し男は逃げ出します。私は気分爽快！こんないい気持はありません。強く弱く振る下すムチの手応えは私をゾクゾクさせます。ブスンッと肌に当たる時のあの感じは実際にムチ打った者でなければ、味わえない絶対的な喜びです。男の悲鳴は益々大きくなります。私は少し困って（外へ聞えますので）「うるさいのねえ、じゃあ、こつちへおいで」男はムチ打ちから解放されるのかと喜こんで私の前へ、はって参りました。「お前は、本当にオーバーだわ。野中の一軒屋じゃああ

るまいし、外へ聞こえるじやないの。やりにくくて仕方ないから、声の出ない様にするからね」私は舌打ちし乍ら、おもむろにパンティを下しました。男は未だムチ打ちが続く事を、さっして後へ少し退り乍ら、「ムチ打ち

は、もうおゆるし下さい」「何だって」「あの……私は……」「私は、どうしたって言うの？」「ハイ、あの私は、ムチが、こんなに痛いものだとは知りませんでしたので、その代り、他の事でしたら何でも……」

を下しビールのセンを抜いたのです。グラスにビールを注いで一気にのみ干しました。今の運動でかわいたノドに、快よくビールは流れ、私は満足気にビールを注ぎ足し静かに男へ言っけて聞かせました。

「お前はね、マゾヒストである事を忘れてはいけないのよ。私は女王。この時間は私の為にあり、お前は私の為にたた打って、苦しんで泣くのよ。そうすれば私は満足するしお前は、私を全面的に満足させる為に存在するのよ。お前の要求なんて全然聞けないね。私は、私の思う様にお前を使うの、お前は犬だよ。いいね、私はバカ犬は大キライだからね。私の気に入られるよう、最大の努力をするのよ、逆らったりすると承知しないから。」男は、そう言う私を恐ろしそうに見ています。もう一息ビールを飲んでから私は又、あのムチを取り上げました。男は瞬間少し身体を動かしましたが自由になりません。私は足で男の身体を横に倒しました。横倒しの男の身体に私のムチが飛びます。室内の淡いライトに照らされて、茶色のムチはチョロリチョロリと時々美しい光りを放ちます。

「ホホホ」「ハハハハ」こらえ切れない嬉しさに私は一人笑い続け乍らムチ打ちを楽しみました。男の背中にいろどられたみみず腹れの線は美しく適当な凸凹さえ造られて私の目を喜ばせました。男は汗をふき出し、それが又光線の具合で虹の様に淡く美しい陰影を出し、男の身体は虹の中にあじさいの花を連想させました。

少しつかれましたので、ムチ打ちは止めました。タバコに火をつけてから私は、男の側へ近づきました。グツタリとなった男は、それでも私の近づくのを感ぜたらしくウッスラと目を開けました。そして私がタバコを持って居るのを見ると、大きく目を開けて首を振りつつけるのです。タバコの火を押しつけられるとでも感ぜいしているらしいのです。

「ホホホ、大丈夫よ」私は優しく言い乍らタバコを灰皿の上へ置き、男の手足を自由にさせるぐつわも取ってやりました。起き上れない男を横目で見て、私は、浴室へ入りました。汗ばんだ身体を軽くお湯で流しながら、男を呼びつけました。「その位の事で、何時迄、ぐつたりしてんの、早くこっちへ来てお湯でもくんだらどうなのよッ」「ハイ」それでも男は少しの間来ませんでした。が、やがて

「あの、パンツもぬぐのしょうか」ですって、ハハハ、バカだわ。「当り前でしよう。何言ってるのバカね」

男は恥かしそうに私の前へ現われました。

「何、恥かしがってるの、私の家の犬は何時だって裸よ。ボヤッとしてないでお湯でもくんだら」男は急いで桶へ湯をくみ始めました。湯舟へ背を向けている男に私は少し、いたずらしてやろうと思いました。もう一つ残っている桶に湯舟の湯をタップリ汲んで、いきなり男へ浴びせかけました。「ウアッ」奇妙な声を上げて男はのけぞりました。みみず脹れの一面のムチ跡に、あついお湯をかけられたのですからタマリません。男は、あわてて前向き直り私へ頭を下げました。「申し訳ありません」

「四ツばいにおなり」私は男を台にして首から胸へと丁寧に洗い落しました。浴室の湯気と熱気その上私を背中の中にのせて男は苦しうに息づいています。石鹸を男の上で流した時「アアウウ」とその痛さに耐えている声ばかり聞こえました。お湯をタップリかけて流してから、「さあ、足はお前が流すのよ」命じながら、平然と男を見下したのです。目のやり場に困る男を叱りつけます。「何ぼーうとし

てんの、早く洗うのよ」「ハ、ハイ」男はタオルに石鹸をつけ始めました。「タオルはイヤよ、お前の手の掌へ石鹸をタップリぬってそれで洗うのよ」男は一寸、たじろいだ様ですが、叱られるのを恐れて言つけ通りにしました、「よおく、よく洗いなさい」「……」「お返事！」「……」声が出ない様子です。私は、おかしくておかしくて笑い続けました。

私の笑い声はバスルーム全体におおいかぶさる様に響き渡りました。もう一度湯舟につきり「正座しなさい」と命じました。言われた通り正座した男の前へザザッと勢よく湯舟から出た私は、足をつき出して言い渡しました。「のみなさい」「え？ ああ、ハイ、ありがとうございます」感激に男の声は震え、目がキラキラと輝やいています。足の指先から滴る雫を飲みはじめました。

湯上りの肌にシーツの冷たさは快適です。うつ伏せになり乍ら「タバコ」と命じました。火をつけさせてから私は「マッサージをしなさい」と命令したのです。首から背中そして腰それから足の爪先まで、ゆっくりと丁寧にみほぐす様言いつけて、心おきなくタバコの煙りを流しつつつけました。

鏡にうつる黒いシェミーズ姿の私は、何て美しいんだろうと思いました。こうして男をさげすんで苦しめている私の気分は最高です。

このような哀れな男達が世の中に存在する限り、私の美しさは増し、私の知性は又、格別の意味でみがかれて行くのです。ブラボウ・サジスチン！ この男の一生は長い事でしょう。でもその長い一生のうちで今日の様なマゾヒストとしての感激と光栄には幾度、めぐり逢える事でしょう。

この男は、今日の事は一生忘れないでしょう。

さて、私は哀れな男を前にして、それからしばらくの間、もっと、ひどい事をして楽しみました。書き度いとは思いますが、ずいぶん長くなりましたので止めます。又、機会があったら誰方かに話しても良いですわ。私は、フィクションをつけて自分を書く事をきらいいます。すべて真実のままの思い出を描いて筆で文章としたまでです。

.....

.....

花

と

蛇

続篇（第五回）

団 鬼 六

花 と 蛇 （続篇）

美少年と美少女

牢舎の中で、互に背を向け合い、屈辱に身を震わせている文夫と美津子をズベ公達は、格子の間からのぞいて、盛んにからかいつづけていたが、

「それじゃ、美津子、断髪式の用意が出来たら迎えに来るからね。」

と、銀子は声をかけ、朱美達をうながして外へ出て行くのだった。

身を小さくかがめている二人の間に、冷たい風が足もとから吹き上ってくるような無気

味な沈黙がつづく。

文夫は、美津子の方から顔をそらせたまま思いきって口をきいた。

「美津子さん。さぞ辛い目に合わされたのだらうね」

美津子は、文夫の方に背を向けたまま、消えいるようにうなずく。

「こ、こんな事を聞いて気を悪くしないでくれたまえ。君は、この屋敷にいる男達に、身体まで——」

文夫は、おろおろした声で美津子にいう。

美津子は、激しく首を振ったが、

「でも、でも美津子は、あの恐しい女達にひどい目にあって、純潔を失ったのも同然なのです。文夫さんの前に出られる美津子ではありません。駄目、もう私は駄目なの」
 そういうや美津子は肩をぶるぶる震わせて泣きじゃくるのであった。

「しっかりするんだ。望みを失っちゃいけないよ。僕がついている」

僕がついている、などといったものの、哀れな美津子を目前にしながら、どうしようもない自分の浅ましい姿、文夫は、何とかこの縄目から脱しようと身悶える。

その時、ギイーと再び、この地下へ通ずる階段の上扉が開き、ズベ公達の高笑い、つづいて、どやどやと地下へ降りて来る足音がする。

文夫も、美津子も、ギクツと身体を硬化させる。

銀子、朱美、悦子、マリ達が、牢格子に手をかけて中をのぞきこみ、

「あら、二人とも、まだ、そんなに離れ合っていたのかい。全く、内気なお坊ちゃんに、お嬢ちゃんね」

銀子は、そんな事をいって笑い、牢の扉を開けて、朱美達と一緒に入って来る。

「ちよっと時間が早いようだけど、今静子夫人達の朝の調教が終って、鬼源さんの手があいたのよ。貴女の断髪式に鬼源さんが立合っで下さるそうよ。サイズをとっておきたいのですって。ホホホ、だから、早い目に、させてしましましょうね」

銀子と朱美は、壁の下にうずくまっている美津子のきらめくように白い肩に手をかけて引き起しにかかる。

それを見た文夫は、逆上したように、後手に縛りあげられている不自由な身体を必死に動かして立上った。

「美津子さんに乱暴すると承知しないぞ」

文夫は、美津子を牢舎の外へ連れて行こうとする銀子と朱美に体当りして暴れ廻る。

あわただしく地下の階段をかけ降りる足音がして、吉沢と川田が飛びこんで来た。

「何を、どたばたしてやがるんだ」

川田と吉沢は、狂ったように暴れまわる文夫を羽交いじめにして、牢の中央に突き飛ばし、銀子達をせかして扉の外へ出ると、パタンと扉をしめ、錠をかけた。

一人、牢屋の中へ取り残された文夫は、口惜し泣きをしながら、

「待てっ、美津子さんをどうする気だ。けだもの！」

と、わめきつつづけている。

川田と吉沢は、美津子の肩に手をかけ、文夫に見せびらかすようにして、

「へへへ、これから、このお嬢さんが、どういう目に合うのか、そんなに知りてえってのかい。だが、そいつは、あとのお楽しみにしておきな」

さ、美津子、歩きな、と縄尻をとった銀子は美津子のすべすべした背をついた。

川田は、ふと、美津子の腰を見て、
「おや、今日はまた、ずいぶんとかわったも

のをはいてるじやねえか。なるほど、そいつは、文夫のサポーターでわけかい」

美津子は、そんな川田達の揶揄を無視したように、ハラハラ涙を流しながら、牢格子の間から文夫を見る。

「文夫さん。貴方だけは何とかここから逃げ出して頂戴。美津子の事は心配しないで。美津子は、美津子は、もう駄目なのよ」

そういうと美津子は、堰をきったように泣き出し、銀子や朱美に背をつつかれるまま、地下の階段に向って、前かがみに歩き出すのであった。

折檻部屋

川田と吉沢は、鬼源を連れて来るといつて三階の調教室の方へ行き、美津子は、銀子と朱美に縄尻をひかれて、一階の廊下を二つばかり曲った突き当りの物置、美津子がこの屋敷へ誘拐されて来た時、最初に監禁された五坪ばかりの板張りになっている部屋へ引立てられて来た。森田組のチンピラやくざ達に寄ってたかって丸裸にされた、あの恐ろしい思いは、今でも美津子の脳裡に生々しく残っている。

板張りの床の上には、角材が一本打ちこま

れてあり、部屋の中の様子は、チンピラ達の
鬨りものになったあの時と同じままである。

「あんたが始めてここへ来た時は、可愛い
セーラー服のまま、この柱を背に縛られたわ
ね。ふふふ、でも今じゃ、サポータをはいた
変った女学生」

朱美は含み笑いしながら、美津子の背をそ
の柱に押しつけて、銀子と一緒に、ひしひし
と縄をかけていく。

「美津子、こうして見ると、始めてこの屋敷
へ来た時とは違って、ずいぶんとおっぱいが
成熟してきたようね。」

「ヒップなんかも、めきめき色っぽく成長し
てきたようだわ」

上半身をがっちり柱に固定されてしまった
美津子は、びったりと両肢を閉ざして、首を
たれている。悦子は、ジープンのポケットか
ら、ピンクの新しいヘアバンドを出して、美
津子の艶のある黒々とした髪にしめてやる。

「素直になってきた貴女へのプレゼントよ。
別にお化粧しなくても、貴女は天然の美を生
かした方がきれいだわ。少し、お櫛だけ、当
てておきましょうね」

と、悦子は小さな櫛をとり出して、美津子
の髪をすきあげ、さて、と事務的に手をかけ

再び、櫛を使い始めた。

くすくす笑いながら、それを見ている銀子
と朱美。

「なるほどね。断髪式を行うに当ってのエチ
ケツトというわけね」

「そう。乱れ毛のないように、きれいに揃え
てやってるのよ」

悦子は、入念に櫛を使っている。

美津子は、もうどうともなれ、と観念して
いるものの、ズベ公達の行為の残忍さに、が
たがた身が震え出すのだ。

悦子が、はい、おわり、と立上ると、かわ
って銀子が美津子の前に立つ。

「さて、間もなく、吉沢の兄さん達がここへ
来るだろうけど、吉沢さんは、貴女の今朝か
らの成長ぶりに大変な喜びようなのよ。だか
ら、この際、吉沢さんの愛情を高めるために
一生懸命、甘えてみる事ね。あたい達が、そ
の甘え方を教えてあげるわ」

銀子と朱美は、くすくす笑いながら、また
二人で相談し合い、美津子が吉沢に語りかけ
る色々ないまいましい言葉を教え始める。

その身の毛もよだつ屈辱的な言葉に、美津
子が激しく首を振り、眉を寄せると、
「そんな風に吉沢さんに持ちかけて、楽しい

気分にさせてあげるのなら、文夫やその姉の
小夜子嬢に対し、あたい達は指一本、ふれは
しない。約束するよ」

と銀子はいうのだ。

「ほほ、ほんとに、文夫さん達にひどい事を
なさないなら、美津子は、美津子は、おっ
しやる通りに——」

美しい十八の乙女は、すすりあげながら、
銀子達の要求を承認するのだった。こんな蛇
のようなズベ公達が約束を守るとは信じられ
ないが、美津子が承知しなくとも、そのまま
だまって、ひっこむズベ公達ではない。

美津子が小さくうなずいた事に喜んだ銀子
や朱美達は、一生懸命、美津子の教育にかか
り出した。

やがて、吉沢、川田、鬼源の三人が、何か
高笑いしながら入って来る。

「なるほど、吉沢さんのいう通りじゃ。こい
つは不思議だ。一晚、見ねえうち、このお嬢
さん、ずいぶんと色っぽい美人になったじや
ないか」

鬼源は、柱を背に立縛りにされている美津
子を見て、うなづく。

吉沢は、我が意を得たというような顔つき
で、

「そればかりじゃねえぜ。実に素直になつてよ。男心をとろかせるような事をいつてくれるんだ」

銀子と朱美は、すっかり観念したようにうなだれている美津子の両側に立って、吉沢を手招きし、笑いながらいう。

「美津子がね。今日は、うんと夫に甘えてみたいというのだよ。一つ、美津子の前に立って聞いてやんなよ」

吉沢は、へっへへと、あごをなでながら美津子の前に立つ。

「なんでい、美津子。へっへへ、可愛いほつぺたをしてるじゃないか。そら、用意してきてやったぜ。これが新品の西洋剃刃、これが石鹼水、こいつは、ヒゲ剃りあとにつけるクリームさ」

吉沢は、そんなものを一つ一つ、美津子の鼻先へ押しつけるようにして見せ、

「俺としても、清純な美しい乙女に、そんなことをやりたくはねえのだが、社長や親分の特別のいいつけなんだ。悪く思わねえでくれよな」

美しい顔を横に伏せて、小さくすすりあげている美津子に対し、吉沢はそんな事をいつて笑ったが、朱美が横から口を出す。

「なんにも吉沢兄さん、そんなに氣を使う事なんかいらぬよ。このお嬢さん、そんな風にされる事を喜んで、お姉さんとどちらがいい形をしているか、皆さんに集まって頂いて、せひくわしく見くらべて欲しいなんて、たいそうなこといつてゐるのよ」

と愉快そうにいうのだった。そして、朱美は美津子の方に向き直り、美津子髪の手を入れするように見せかけながら、小声で美津子の耳元にささやく。

「いいかい。甘ったるい声を出して、あたいが教えてあげた通りの事を吉沢さんにいうのだよ。さ、始めな」

美津子は悲痛な決心をしたよう伏せていた顔をあげ、黒真珠のようにキラキラ光る黒眼を吉沢に向けるのだった。

「——ねえ、あなた、森田組のお仕事のためですもの。美津子、喜んで協力させて頂きますわ。でも、お剃りになるなら他の人に任しちゃ嫌よ。愛するあなたに美津子は、きれいに剃り上げて頂きたいの」

「へへへ、嬉しい事をいつてくれるじゃねえか。誰がそんな事を他人にさせるものか。俺がきれいに仕上げてやるから安心しな」

吉沢は泥えびすのような顔になつていう。

「——だけど、そんなになつた美津子でも、あなた、笑っちゃ嫌よ。永遠に愛して下さいますわね」

「勿論だとも」

美津子が吉沢に対していう言葉を忘れると朱美や銀子が、芝居のプロンプターのように美津子の耳にささやいてやるのだった。

「美津子、小学校を卒業する頃から、大切に育ててきたものですもの。ねえ、あなた、お別れのキッスをしてあげて」

そういう終るや美津子は、たまらなくなつたよう身体を震わせて泣きじやくる。

少し、離れた所から、美津子と吉沢のやりとりを眺めている川田と鬼源は顔を見合わせ、ケツケツと笑い合つた。

あつと美津子は声をあげ、い、いい——と白い歯を見せて、切なげに大きく首をのけぞらせた。べっとり脂汗が額ににじんでいる。ようやく、吉沢が美津子の足下から立上つたが、すぐに朱美は美津子の肩をつついて、次をさいそくする。

「——こ、これで、気がすみましたわ。さ、あなた、遠慮なさらず、きれいさっぱりお剃りになつて頂戴」

美津子が、真っ赤になつた顔を横にねじ曲



げるようにして、そういうと、銀子と朱美が
うろたえ気味に、
「おっと、お嬢さん、ごまかしちゃいけない
よ。大切な事を忘れてるじゃないの」

朱美は、美津子の耳に口を寄せた。
「ああ、と美津子は眉を八の字に寄せて、
耐え忍ぶ気力も失せたように嫌々と首を振
る。」

乙女の涙

一体、この羞恥地獄は何時までつづくのだ
ろうか。美津子は、天地がひっくりかえり、
世の中が消えてくれぬものかとさえ思うので
ある。

「せっかく、そこまで、つづけながらケツを
わっちや何にもならないじゃないか。さ、が
んばるんだ、美津子」

銀子は、おかしさを噛み殺すようにして含
み笑いしながらいう。

美津子は、死んだ気持になって、涙に濡れ
た美しい顔をあげる。

「ねえ。あなた、もう一つお顔があるの。
聞いて下さる？」

「ああ、ほかならぬ、おめえの云うことだ、
聞いてやるとも、なんだね」

「美、美津子ね。今日は朝かまだ一度も、御
不浄へ——。ですから、粗相したら大変です
わ。ねえ、ガラスピンを使って、先にすませ
て頂戴」

そして、美津子は、銀子にいい含められた
通りに、
「銀子お姐様、あのガラスピンを、夫に渡し
て下さいまし」

あいよ、と銀子は、いそいそとして、あらかじめ用意しておいたガラスピンを柱のうしろから取り出し、吉沢に手渡す。

「ああ——」

美津子は、全身を火柱のように赤く染めて狂おしく首を振る。そんな狂乱の美津子を銀子達は、面白そうに見ていたが、待ち切れなくなったように、

「時間がもったいないわよ。さ、早くすましておしまい！」

朱美が、美津子の背後へまわり、腕を伏せたような形のいい両乳房を両手で、ぐっとわしづかみにする。

「あつ、やめて、やめて下さい！」

美津子は逆上したように悲鳴をあげた。

「ぐずぐずするのは大嫌いなさ。あたい達は気が短いのだからね」

朱美は、手に力をこめ、更に美津子に悲鳴をあげさせるのだった。

「お願いっ、やめてっ、ああ——」

美津子は、観念したように、固く眼を閉じ真赤に染まった美しい顔を大きくのけぞらせる。首筋までが火のように燃え上がっているのだ。

川田は、ニヤニヤしながら立上り、魂が凍

るばかりの羞恥と戦っている美津子の火のついたような頬を両手ではさみ、じっと見つめる。美津子は、唇を小さく開き、可愛い舌をちよっぴりのぞかせて、あえぎつづけているのだ。

銀子や朱美がクスクス笑いながら立上る。

「さて、さっぱりしたところで、さっぱりと仕上げてあげようね」

吉沢はポケットから西洋剃刀を取り出す。

「石鹸水を使うかい。それとも普通の水をつけるだけでいいかい」

一気に目的を達しようとして、出来得る限り、美津子にみじめな思いをさせようと、吉沢は銀子達と調子を合わせて楽しんでいるのだ。

そのような姿に美津子を仕上げてから、次には、どういう方法で更になぶり抜く気なのか。美津子は、もう流す涙も涸れ果て、化石のように身動きもしなかったが、再び、銀子が美津子の耳もとに口を寄せた。

美津子の美しい顔に再び血がのぼる。しかし、美津子は、もう抗らう気力とてない。もうどうとでもなれ、という半分捨鉢な気分になっちゃってしまっていた。

「ねえ、あなた、美津子、無作法な子だと笑

われたくないの。今おトイレを使ったでしよう。ちゃんと後始末をして下さらなくちや嫌。美津子、お手々が使えないのよ」

おっと、そいつは気がつかなかった、と吉沢は、銀子からハンケチを借りて、身をかがめた。

毒牙は迫る

「さて、そろそろ始めるとしようか」

吉沢は、身も世もあらず、悶え泣きしている美津子を眺めながら、剃刀を持ち直す。

「おっと、そんなに固くなっちゃ仕事やりにくい。さ、楽な気分になつて——」

美津子は、そう吉沢にいわれても、一層、身体を硬張らせ、涙を一杯浮かべた美しい黒眼に心死な哀願をこめて、吉沢を見るのであった。如何に観念したとはいえ、花恥しい十八の乙女が、卑劣漢の手で、そんな姿にされるのかと思う時、たまらない屈辱感と恐怖感が突風のようにこみあがってきたのである。

「ああ、お願いです。かんにんして——」

美津子は無駄とは知りつつも、必死な思いをこめて、吉沢にいうのだった。

銀子と朱美が急に顔色をかえて怒り出す。

「なんだい。せっかくムードが高まってきた

のに今になって、嫌だなんていい出したら、あたいた達の努力が台なしじゃないか。馬鹿にするんじゃないよ」

銀子や朱美は、本当に腹を立てたらしく、美津子の横面をぴしやりと平手打ちし、身体のおちこちをつねりあげる。

美津子は悲鳴をあげて、身をよじった。

「何から何の始末までさせておきながら、今になって、かんにんしてくれなんて、よくもそんな事がいえるわね。さ、今の言葉を訂正してこういうのよ」

朱美は、美津子の身体のおちこちをつねりながらいう。

美津子は、一切の望みを捨てたような悲痛な表情をし、吉沢の顔に視線を向けた。

「あなた、我ままをまたいって本当にすみません。もう決してお手間はとらせませんわ。さあ、剃刃を当てて頂戴——でもね、美津子ちよっぴり、名残りおしいの。ですからたっぷり時間をかけて、仕上げて下さいまし。美津子、その間、色々、想い出にふけりたいのです」

死んだような気持で美津子は、やっと、それだけの事をいったが、次に、銀子がいい出した事を耳にして、再び、かっと身体中に電

流が走った。

「ねえ、せっかくだから、美津子の断髪式を文夫にも見せてやろうよ」

そうだ、そいっは面白い、と川田、鬼源などは、隅につんであった角材を一本担いで来る。美津子が立縛りにされている前方五尺ばかりのところには四角い穴があいていて、その中へ角材の根をねじこんだ川田と鬼源は、大きな木槌で、打ちみ出した。つまり、美津子の眼の前に打ちこんだ柱に、文夫も同じく立縛りにしようというわけだ。

「じゃ、お坊っちゃんを、ここへお連れして来るぜ」

と川田と鬼源は、廊下へ出て行く。

「待って、嫌っ、お願いです。文夫さんをここへ連れて来るのだけはやめて下さい！」

美津子は、おろおろし、けたたましい声を出した。

「後生です。美津子、何でもいう事を聞きます。どんな恥しい目に合わされても、かまいません。ですけど、こんな姿を文夫さんに見られるのだけは嫌っ。お願いです吉沢さん、ああ、お願い——」

激しく泣きじやくりながら、美津子は、前に立っている吉沢にくりかえしたが、

「もうおそいぜ。川田兄貴と鬼源さんは、文夫を迎えに出て行っちゃったよ」

ああ——と美津子は、眼を閉じ、激しく首を振る。ここへ、文夫が引立てられて来て、眼の前の柱に縛られ、そして、自分は、文夫の眼にとんでもない姿をさらさねばならぬのだと思うと、美津子は、恐しさにがくがくと歯がなり、慄えがとまらない。

吉沢は、そんな美津子を小気味良げに見つめていたが、文夫に自分の姿を見られるという事に、うろたえ、悲しみ、そして、文夫の身の事を案じつつける美津子に対し、ムラムラと嫉妬がわいてきたのである。

「やい、美津子、手前、まだ文夫が好きなんだな。いいか、手前は俺の女だって事を忘れるな。まだ、文夫に未練があるなら、仕方がねえ。未練が残らねえようお前の前で文夫の奴を殺らしてやる」

えっと美津子は顔をひきつらせる。

「この剃刃でよ。文夫のものをパツさり切り落すんだ。そうすりやもう三文の値うちもない男さ。いくらハンサムでもな」

吉沢は、ゲラゲラ笑い出した。

朱美がいった。

「つまりね。あんた、文夫の身を思うなら、

文夫とはっきり別れてくれなきや困るというわけよ。まだ、身体の関係はないとしても、あんたは吉沢さんのお嫁さんに決まっているのだからね。吉沢さんの気持もくんでやらなきや可哀そうじゃないの」

どう、文夫と別れる決心をする？ と朱美に頬をつつかれて、美津子は、小さくうなづいた。もう文夫の前に出られる身体ではないと美津子の心の中は、悲しいあきらめで占められている。何とか、文夫に無傷のまま、この地獄屋敷から逃げ出してほしい。あの美しい遠山夫人や姉の京子達を、ここから救い出す方法は、男の文夫の力が望みのつななのだ。

「文夫と切れるという事は、吉沢さんを喜ばせる事だよ。でもね。ただ、文夫に向ってあんたなんか大嫌い、と愛想づかしいうだけじや駄目よ。ちゃんと、文夫に証拠を見せてやらなきや面白くない」

証拠を見せる——一体、この気狂いじみた不良少女達は、また何を考え出したのであるう。身動きもできない身体を立縛りにされている狂乱の美津子の前へ、文夫を立たせるといふ残酷な方法だけでは満足せず、更に美津子に何をいわせ、何を演じさせようというの

か。

それについて、銀子、朱美、吉沢の三人は含み笑いをしながら、打合わせをし始める。

そして、銀子がそれを美津子に告げるのであったが、半ば失心しかけていた美津子もそれが耳に入るや、あっと声をあげ、青ざめてしまった。魂まで凍るような、恐ろしい悪魔の着想である。

「な、なんて恐ろしい事を——ああ、いっそ、殺して」

美津子は、わなわな震え出す。

文夫の前で、美津子を剃りあげるだけでは面白味が薄いと、銀子の考えだした方法は常軌を逸していた。

「いいかい。いわれた通りにしないと、あんたの見ている前で、文夫さんは、すっぽりと斬り落されてしまうんだからね。さあ、返事しな。あんたの気持をたしかめる一番大切な場合なんだからね」

死んでも、そんなことは——とキリキリ歯を噛みならしていた美津子であるが、この悪鬼達の望む事をしなければ文夫の命が危いのだ。美津子は、ビルから身を投じた気持で、仮面をつけたような冷静さをつくって顔をあげた。

「わかりましたわ。おっしやる通りに致します。そ、そのかわり、文夫さんには絶体に手荒な事はなさないで——」

わかったよ、と銀子達は、うきうきした顔つきでいう。

「じゃ、あたいはまた芝居の黒ん坊役をひきうけるわ」

と朱美は、美津子の柱のうしろに立ち、

「あたいが小声で教えてあげる通りにいってればいいのよ。もし、こぼんだりしたら、忽ち、文夫はばっさりよ」

と何度も念を押す。

やがて、がんじがらめに縛りあげられた文夫が、川田と鬼源に縄尻をとられて引き立てられて来た。引き立てられるというより、引きづられて来たようなものだ。文夫は猿轡を固くはめられていた。

うっ、うっ、と口の中でうめきながら、必死に抵抗しているが、馬鹿力のある鬼源と川田の二人にかかつては敵わない。鬼源は、まるで牛でも追いたてるように片手で縄尻をとり、片手に持った棒切れで文夫の肩をついている。

そういう風にして、文夫がこちらへ近づい

て来ると、美津子の全身は、みるみるうちに火柱のように真赤になった。文夫に自分のこんな姿を見せなければならぬという事は人間的な思念を超越した心境になったといっても、何といっても、まだ女子高校生である。

身体中がずたずたにされるよりも辛かった。

文夫が、前の柱に背を押しつけられ、鬼源達にひしひし縄をかけられるに及んで、美津子は、紅生姜のように真っ赤になった顔を右へ伏せたり、左へ伏せようとしたり、見ていて面白いはどうろたえる。銀子や朱美は顔を見合わせて笑うのだった。

文夫も、眼の前の美津子の白磁の全身像を見て、猿轡の中で、あっと声を出し、あわてて眼をそらせる。が、すぐに横手に立っている川田に向って、憤怒に眼をつりあげ、何か叫んだが、それは猿轡の中でぶつぶついったぐらいにしか聞えなかった。恐らく、文夫は川田に対し、女をこんなにいじめて、貴様達、それでも人間か。というような意味の事をいったのであろう。文夫の声をさえぎる猿轡は女物のパンティイらしかった。

川田は、ゲラゲラ笑いながら

「おい、お坊っちゃん。おめえが猿轡にしているブルーのパンティイはな。この美津子の姉

の京子のものなんだ。その腰にしているピンクのパンティイは美津子のものだ。おめえも幸せな男だぜ。美人姉妹のパンティイを上と下にはかせてもらってよ。どうでい。満更でもねえ気分だろ」

文夫は逆上して獣のように眼をつりあげ柱に縛りつけられた身体を必死に悶えさしている。

銀子が、美津子の横に伏せている真っ赤になっっている頬を指でつついて、

「さあ、お嬢さん。この坊っちゃんに、何か優しい言葉をかけておあげ。先程から妙にいきり立っているのよ。」

そして、銀子は、立縛りにされている美津子の横へ寄り添うようにしながら、文夫に向っていう。

「お坊っちゃんにわざわざ、ここへお越し願ったのはね。美津子嬢の希望で、あたい達、このお嬢さんを刺ってあげることになったのだけど、このお嬢さんたら、そうなった姿をせひとも文夫さんに見て欲しいというさく頼むのさ。だから、これから始まる事を見てあげておくれ」

朱美が柱のうしろから美津子の白い肩をついて、さ、始めな、と何やら耳元でささや

き始める。

ちゃんと、文夫に眼を向けて、大きな声で話しかけるんだよ、朱美にいわれるまま、美津子は、悲痛な決心をしたように、ヘアードのかかった、きれいな黒髪をひらりと動かせて顔をあげ、キラキラ光る黒眼を文夫に向けるのだった。

「文夫さん。本当の事をいいますわ。美津子は今とても幸せなのよ。こんな素晴らしい世界があるってこと少しも知らなかったわ。美津子って、本当は悪い子だったのね。文夫さんの恋人にはむかない女なのよ。それを知って頂こうと思って、美津子は貴方をこのお屋敷へおさそいしたの」

眼の前にさらされている美津子に眼を向けてはならないと、文夫は顔を横に伏せていたが、そのショッキングな美津子の言葉に、文夫はふと顔を美津子の方へ向ける。

文夫の視線と美津子の視線が、もろにぶつかりと、さすがに美津子はハッとして顔を伏せようとしたが、駄目よ、眼をそらしちゃ、とうしろの朱美が叱り、次をつづけさせる。

文夫を見る美津子の美しい瞳から、はらはらと涙が流れる。一つ二つすすりあげた美津子は、無理に作り笑いをし、朱美に指示され

たことを口にするのだった。

「あら、文夫さんたらいいじわるね。貴方ったら、美津子の下着をちゃっかりはいてるんですもの。そんなの、ずるいわ。」

川田と鬼源が、文夫に近ずき、美津子が見てえだとよ、と激しく身悶えする文夫から、剥ぎとってしまう。

文夫より、むしろ、美津子の方がよけいに顔を赤らめて、首をねじるのだった。

「そら、また眼をそらす。見なきゃ駄目よ」
朱美は美津子のおどを指で上へ持ちあげるのだった。

「まあ、文、文夫さんたら。す、す、すばらしいじゃないの。頼もしいわ」

美津子は、舌を嚙んで死にたいぐらいだ。
朱美が教示する事を口にするたび、美津子は眼まいが起りそうになる。しかし、口にせねば文夫の命が危いとズベ公達は、相変らず美津子をおどすのであった。

「ねえ、美津子だって、すばらしいとは、お思いにならない。どう、このおっぱい。このお屋敷へ来てから、一段と成熟したのよ。それに、腰の線も美しいでしょう。ねえ、よくごらんになって——」

文夫は、美津子の誘惑に負けたよう何時の

間にか何かに憑かれたような眼つきになって美津子の方を見つめている。実際、美津子の身体は美しかった。縄にしばられているが乳房は白桃のように美しい形をしているし、ゆるやかな起伏をもつ腹部からヒップにかけての曲線、如何にも処女らしい肉のしまった大腿、そして、全身雪白の美肌なのだ。

文夫は、陶然としたように、縄にしめあげられた美津子に見とれてしまったが、動物的になってしまった自分に、ふと自意識がこみあがり、うろたえ気味に眼をそらす。いきなり、美津子のきらめくような白磁の素肌を見せつけられて、気が顛倒し、また、始めて見る女性の全身立像に思わず唖然としてしげしげ見つめてしまったのだが、そんな自分を恥しく思い、文夫は眼をそらせてしまったものの、しかし、意志の力では、どうにもならないという事を文夫は、はつきりとさとり出していた。

ズベ公達が、それを見逃す筈はない。最初から、そういう事を計算に入れ、文夫を美津子の前へ立たせたのである。つまり、文夫の責め道具に、文夫の恋人の美津子をつかったわけだ。文夫は美津子にたまらない羞しい責めを受けているのと同じであった。勿論、ズ

ベ公達に強制され、文夫を誘惑したり、揶揄したりする美津子の方が、その数倍もやるせなく、苦しい事に違いはないが。

ズベ公達は、そういう状態になってしまった文夫を見るや、待ってましたと、ばかり、声をたてて笑い出し、

「まあ、このお坊ちゃんたら、嫌な子ね。レディのたくさんいる中で、みっともないじゃないの。」

銀子と悦子が、文夫の傍へより、くすくす笑って、一体、どうするのよ、などといって笑いこける。

「うっ、う——」

文夫は、顔面真っ赤にして、何とか、気分の転換をはかろうとあせったが、ズベ公達にはやし立てられて、むしろ、逆効果だった。

「——文、文夫さん。美津子、貴方が、どんなに私を愛して下さっているか、わかったわ。でも、貴方の御希望にそうわけにはいかないの。ごめんなさいね。美津子には好きな人がいるのよ」

朱美が、再び、美津子に強制している。いわないと、文夫のものを斬り落す、と美津子がためらうたびにおどすのだ。そして、朱美は、柱のうしろから、吉沢を手まねきし、美

津子の隣へ立たせる。

美津子は、朱美に教示されるまま、

「ね、文夫さん。美津子が身も心も捧げつくすお方は、この吉沢さん一人なのよ」

文夫は、嫉妬に燃える瞳を吉沢に向ける。

朱美は、吉沢と美津子に仲のいい芝居を演じさせ、文夫を逆上させ、嫉妬に悶えさし、そして、美津子に対する愛想づかしにまで持っていくとしてしているのだ。

吉沢と美津子は、やがて、ぴったりと口を合わせ、熱い接吻をし始める。うっとり眼を閉じ、吉沢に唇を吸われるままになってしまった美津子を見るや、文夫は、猿轡の中で獣のようにうめき、縄に締めあげられている全身を狂気して悶えさせた。あきらかに、嫉妬に苦しみ出したのだと見てとったズベ公達は、してやったりとばかり北叟笑む。そして笠にかかって、美津子に強要するのだった。

やっと、吉沢に口を離された美津子は、耳たぶまで、真っ赤にしながら、

「ねえ、吉沢さん、美津子、貴方の赤ちゃんが早くほしいわ」

川田と鬼源は、ゲラゲラ笑いながら、胸を錐でえぐられるような嫉妬に、悶え抜いている文夫の左右に立ち、

「どうでい。美津

子の気持がよくわかったろう。こうなりや、おめえも男だ。美津子の事はきっぱりあきらめ、吉沢兄貴と美津子の、これからの幸せを祈ってやるんだな」

数々の言語に絶する屈辱を、文夫の命を救うためだと、キリキリ歯を噛みしめて耐えつづけた美津子は、がっくり首を垂れ小さくすすりあげている。

よく、いって

れたわね、御苦労さま、と朱美は、

含み笑いしながら

うしらから、美津子の耳もとに口を寄せていう。美津子は涙の一杯にじんだ美しい瞳を朱

美に向けて、

「お願いです。文夫さんを、早くここから連



れ出して下さい」

もうこれ以上、文夫の前に、このようなあさましい姿をさらし、屈辱の演技をつづける気力は美津子になかった。

そうね、と朱美は、少し、考えこんで、「じゃ、これが最後よ。最後を美しくかざらなくちゃあね。それがすめば、文夫をここから連れ出してあげるわ。そうしたら断髪式を彼に見られなくともすむのよ」

断髪式を彼に見られなくともすむ——その言葉に美津子は、すがりつくように、最後の屈辱を耐えるべく、息をつめて、朱美の言葉を待った。

「ああ——」

美津子は、嫌嫌をするように首を振る。

「最後じゃないの。しっかりおしよ」

美津子に、朱美に、耳うちされ、ついに、ひきつったような顔になって、前方の文夫に眼をやった。文夫さん、勘忍して、と美津子は心の中で、叫ぶ。自分がズベ公達に強制されて、とらされる一挙一動が、どんなに文夫を懊悩させ、苦しませ、みじめな立場に追いこませて、悪魔共にそれを嘲笑されることになるか、美津子もよくわかつていたのである。だが、これが最後なのだと思津子は自分

の心にいいきかせ、火の玉のようなものを呑みこんで、わなわな唇を開くのだった。

「ねえ、文夫さん。これで、私がどんな女かわかりになったでしょう。美津子の身体の中には、こういう世界を喜ぶ血が流れていたのです。もう貴方とはお逢い出来るのも、これが最後なの。美津子は、京子姉さんと一緒にこれから秘密ショウのスターの道を歩くのです。ですから、最後に、最後に——」

美津子は、のどをつまらせ、肩をぶるぶる震わせる。

さあ、あと一息よ、しっかり、がんばってと朱美は、うしろから美津子を励ますのだ。

「——ですから、最後に、最後に——ねえ、もう、これでお別れなんですもの。思いきりお互いに……」

そこまでいった美津子は、気を失ったように、ぐったりと首を垂れてしまった。

朱美の眼くばせを受けて、川田は奥から、一米位の長さの棒を二本、取り出して来る。美津子と文夫に足枷をはめようというのだ。

銀子と朱美が、美津子に。川田と鬼源が、文夫に——それぞれ足枷をとりつける作業にかかり出す。

文夫は、足首をつかもうとする川田と鬼村

に猛烈な抵抗を始めた。狂乱したように両足をばたつかせ、猿轡の中でうめき声をあげつづける。

「やい。じたばたすんねえ。美津子がああいふから手伝ってやるんじゃねえか。——そら美津子の方を見てみな。あんなに素直に言う通りになってるじゃねえか」

文夫は、ふと、血走った眼を開けて、美津子の方を見た途端、あっと猿轡の中で声をあげる。その一瞬、ひるんだすきに、文夫の足首を左右からとった川田と鬼源は、ずるずるとひっぱって、素早く足枷をはめこみ、縄をかける。

美津子は、もう悪あがきはせず、銀子と朱美に素直に足枷をはめられ、化石になったように身動きしなかった。伸ばされた足の指の爪先が、濡れたように窓からさしこむ日の光に、キララと美しく照りはえている。上下を麻縄に固くしめあげられている、ふっくらとした乳房が、かすかに波をうっていた。

「美津子、眼を開いて、前を見るのよ」

銀子にあごを指でこじあげられ、そっと眼を開いた美津子は、びくっと身体をけいれんさせ、首をのけぞらせた。文夫の横に身を低くしてニヤニヤしている悦子を見たとき、あ

っと思わず声を洩らし、感覚的に嫌悪の戦慄が美津子の身内を走った。新たな恐怖に見舞われ、美津子の胸は高鳴った。

「全く、こうして眺めると、二人とも、申し分のない理想的なカップルだね。」

と銀子は二人を見くらべ、口を歪める。

「何しろ、童貞と処女なものな」

と川田も相づちをうつ。

「駄目よ。そんなに二人とも眼をそらせていちゃ。あたい達の努力が何にもならないじゃないの。さあ、今から五分間、二人でしっかり見つめ合うのよ。そうすりや、あんだ達の努力に免じて、今日はかんにんにしてあげる」

眼をそむければ何時までも、この状態をつづけていなければならないよ、と朱美は意地悪く、つけ加えるのだ。

あと、五分で、このいまわしい責めから、解放されるのだと思うと、美津子は、必死な思いで、文夫に向って叫ぶようにいった。

「文夫さん。あと五分の辛抱よ。お願いっ、私から眼をそらさないで！」

それは、朱美達に強制された言葉ではなく、せっぱつまって、美津子が血を吐く思いでいったのだ。文夫も、美津子が自分を救けよう

として必死に努力している、その心情がわかり、心の中で美津子に詫びつつ、美津子に視線を向ける。

互に視線を向け合った文夫と美津子を、ズベ公とやくざ達は、やんやと囃し立てる。

「じゃ、時間を計ろうか」

川田が腕時計に眼をやった。

恐怖のニラメッコ

悲痛な決心をし、それを文夫にも納得させた美津子であるが、がまんしきれなくなり、思わず眼をそらしてしまうのは、美津子の方が多かった。その度に川田は、

「また美津子が眼をそらしたぜ。あと五分、ニラメッコは追加だ」

などと、残忍さを発揮する。

何と五分の長い事か——。美津子は、血の気のうせた顔つきになり、何か、哀願するような気弱なまたたきをしながら、文夫と視線を合わせているのだった。

あと、一分——と川田が声をあげる。美津子も文夫も必死な思いである。

あと一分と聞くと、その辺に腰をおろし、美津子と文夫の悲痛なニラメッコを眺めていたズベ公達は、のっそりと立上り、また色々

と揶揄し始めるのだ。

とりわけ、そんな美津子の姿に数分も、まともに眼を向けていた文夫の方は、精神力を裏切るように、どうしようもない窮地に追いこまれていた。

「まあ、すごいわ。ね、銀子姐さん、これ何とかしてやらなきゃ可哀そうよ。身体に悪いわよ」

悦子が、くすくす笑って、銀子にいう。

そうね、と銀子も、それを眺めて吹き出したが、ふと悦子が、昔、場末のトルコ風呂にいた事があるのを思い出し、

「お前に任すよ。何とか解決しておやり」

悦子は、舌なめずりしながら、いそいそと文夫に近づく。

「ふふふ、お坊ちゃん。ずいぶんと苦しそうですね。」

銀子や朱美の好奇な眼は、悦子の方よりむしろ、それに眼を向けている美津子の顔に向けられる。

あっと、声をあげた美津子は、一瞬、呼吸も絶え、全身の血が逆流するばかりの衝撃を受けた。ハッと顔をそむけ、狂おしげに首を振る美津子のあごに朱美は手をかけ、

「また、顔を隠して、駄目じゃないの。最後

まで、ちゃんと見とどけてあげな」

美津子は、美しい瞳に憎悪の色を一杯にじませて、

「卑、卑怯ですつ、文夫さんには何もしないと、おっしゃったじゃありませんか」

「だってね。あんなに苦しそうにしているんだもの、捨てておくのは可哀そうよ。第一、文夫さんを、あんなに苦しめたのは貴女なのよ。貴女の美しい身体がいけないのよ」

銀子が、含み笑いをして、朱美と美津子の間へ割って入り、何をブツブツいつてるんだよ、という。朱美は、美津子に聞こえよがしに、

「このお嬢さん、不公平だとあたいに抗議を申込むのだよ」

「不公平だって？」

「そう。文夫さんだけに、ああいう素ばらしい事をしてあげて、美津子に何もしないというのは不公平だというのよ。」

「まあ、ホホホ、たしかに、あたい達もうかつだったわ。」

銀子は、声をたてて笑う。朱美は更につづけるのだ。

「今日は、葉桜流ではなく、森田組の殿方に責められてみたいというのよ。寄ってたかっ

て、どのようにされてもいいけど、肝心な所は、やはり、主人の吉沢さんに責めてほしいのだった。どれほど吉沢さんを愛しているかその証拠を見せるからって、必死になって頼むのよ」

それを聞くや美津子は、打ちのめされたように顔をのけぞらせる。何という恐しい人間達であろう。美津子は、もう哀願する声も出なかった。

一方、悦子のなれた手さばきで、残忍な責めを受けつつづけている文夫は、美津子の側の恐しいムードに気づき出したのか、再び、必死に身悶えし、ついに、猿轡を肩にこすりつけて外してしまふ。

「——美、美津子さんっ」

文夫は、血走った思いで叫ぶ。

「美津子さん。君が、この速中にどのような羞しめを受けようと、君に対する僕の愛情は変わらない。君も、僕を信じて——あううう——」

「文夫さん！」

美津子は、泣きじゃくりながら、文夫から視線をそらしている。

「た、たとえ、身体はどうなっても、美津子の心は負けないわ。決して負けない。あっ」

美津子は、美しい眉をハの字に寄せ、キリキリと歯を噛み鳴らした。

川田が、何時の間にか、美津子の背後へまわり、柱のうしろから、毛むじらな両手を開けるようにして、美津子の胸の二つの隆起をしっかりとつかんだのである。

「あっ、ああ——」

美津子は、額にこまかい汗の玉を浮かべ、白い陶器のようなうなじを大きく見せて、のけぞった。

「へっへへ、俺はただ、吉沢兄貴の仕事に、ちょっと手を貸してやるだけさ。どうだい。気分は？」

川田の大きな手の中で、雪原は、ゆるやかに揺れ動いている。

朱美と銀子は、顔を見合わせて、舌を出し合って笑い、茫然とした面持で、そんな美津子に見とれている吉沢をつついていった。

「始めておやりよ。あなたにお願いしますつて、美津子は頼んでいるのよ」

吉沢が、ワイシャツの袖をまくりあげると反射的に美津子は、かっとな頭に血がのぼり、涙で、充血した眼を大きく見開いて、血を吐くように叫ぶのだった。

「嫌よ、嫌っ。後生ですつ、そ、それだけは

「あつ、文、文夫さん、助けてっ」
美津子は、泣き、叫び、そしてまた、泣いている。

朱美は、そのように狂乱し、川田と吉沢の二人に責められ始めた美津子の火のように熱くなった頬を寄せて、

「そんな目に合っても、貴女は、まだ文夫さんの事が忘れられないの。案外、強情ね。でも、まあ、いいさ。いくら強情をはっても、そのうち、どれほど吉沢さんの方を愛しているかという証拠をさらけ出さなきゃならないのだからね。まあ、ゆっくり見物させてもら

うさ」
朱美と銀子は、美津子の方をのぞいたり、文夫の方をのぞきに行ったりし、二人をからかいつつけるのだった。

(次号へつづく)

〔新版〕 女体悦虐フォト七十選

Z組七十集 大手札印画紙(9×13 ㎝) 焼付各組一枚一組(送料共)

一組 一枚	一〇〇〇円
五組 五枚	四〇〇〇円
十組 十枚	七五〇〇円
二十組 二十枚	一四〇〇〇円
三十組 三十枚	二〇〇〇〇円
四十組 四十枚	二五〇〇〇円
五十組 五十枚	三〇〇〇〇円
六十組 六十枚	三五〇〇〇円
七十組 七十枚	四〇〇〇〇円

Z 1	ゴムの猿ぐつわ	(梨花)
Z 2	囚女第六十三号	(柳)
Z 3	猪型手足吊り	(梨花)
Z 4	逆エビ強烈縛り	(大塚)
Z 5	ローソク責め	(四浦)
Z 6	豊臀への珍責め	(絹川)
Z 7	淫らな変型縛り	(愛川)
Z 8	ザリガニしばり	(梨花)

Z 9	引き回しシーン	(東浦)
Z 10	全裸後手高手小手	(加茂)
Z 11	豊満な肌の被虐	(大井)
Z 12	黒髪いたぶり	(大塚)
Z 13	足吊り媚態責め	(絹川)
Z 14	黒縄高手小手縛り	(四方)
Z 15	強烈荒縄しばり	(梨花)
Z 16	肌に喰込む白い縄	(東浦)
Z 17	くの字の足指苦悶	(桜井)
Z 18	裸身にいどむ縄	(前本)
Z 19	無茶な猿ぐつわ	(竹野)
Z 20	ハリツケの女体	(梨花)
Z 21	おへソなぶり	(大塚)
Z 22	逆手足吊り	(竹野)
Z 23	美肌のいたぶり	(絹川)
Z 24	仰向きの鼻いじめ	(加茂)
Z 25	恐怖の表情一瞬間	(若原)
Z 26	火箸で責める乳房	(梨花)

Z 27	全裸の海老責め	(熱海)
Z 28	ベッド上の痴態	(絹川)
Z 29	足の裏の擦り責め	(大塚)
Z 30	閨の女体飾り縛り	(竹野)
Z 31	首絞め晒しもの	(大塚)
Z 32	鼻孔に加虐	(若原)
Z 33	悦虐責放状態	(梨花)
Z 34	手枷足くさり	(四方)
Z 35	寝室でのプレイ	(花本)
Z 36	猿ぐつわの妙味	(梨花)
Z 37	首縄、柱しばり	(絹川)
Z 38	巻煙草責め	(大塚)
Z 39	尻立て縛りポーズ	(桜井)
Z 40	厳しきエビ責め	(東浦)
Z 41	ゴムのカバー縛り	(竹野)
Z 42	ワンピースの縛り	(花本)
Z 43	荒縄縛り竹棒責め	(梨花)
Z 44	尻を突っ立てて	(大塚)
Z 45	鏡に映す縛り裸像	(山路)
Z 46	苦悶に喘ぐ柔肌	(大塚)
Z 47	酔後の淫らしばり	(絹川)
Z 48	逆十字エビ縛り	(大塚)

Z 49	全裸縛り猿ぐつわ	(東浦)
Z 50	欄間に宙吊り	(梨花)
Z 51	全裸逆エビ縛り	(絹川)
Z 52	荒縄のお仕置室	(梨花)
Z 53	庭園の惨酷風景	(館)
Z 54	被虐の果て	(大塚)
Z 55	痛められた裸身	(大塚)
Z 56	鏡の中の全裸像	(愛川)
Z 57	セーラー服縛り	(梨花)
Z 58	檻の中の緊縛裸身	(愛川)
Z 59	全裸の股間縛り	(絹川)
Z 60	オムツ逆エビ責め	(田中)
Z 61	胴縄に膨らむ腹部	(桜井)
Z 62	ゴム人形の女	(竹野)
Z 63	荒縄のトゲ責め	(梨花)
Z 64	女子大生恥態責め	(田中)
Z 65	白肌露出の全裸縛	(絹川)
Z 66	強要する開股縛り	(絹川)
Z 67	強烈縛り全裸の晒	(愛川)
Z 68	亀甲縛り乳房責め	(梨花)
Z 69	ベッド上のもだえ	(愛川)
Z 70	恥しさに耐えて	(館)

女体切腹資料 分譲品

血紅使用、腸露出

女体切腹シリーズ

大手札十二枚一組 一〇〇〇円

大塚 啓子 略号(せい12)

血紅切腹絶命ポーズ

大手札四枚一組 四〇〇円

梨花悠紀子 略号(せん)

血紅切腹祭壇の女体切腹

大手札三枚一組 三〇〇円

大塚 啓子 略号(せぬ)

禪裸女血紅切腹

大写真連続迫力フォト

大手札五枚一組 五〇〇円

大塚 啓子 略号(おお)

血紅使用苦悶表情悦楽

大手札五枚一組 五〇〇円

大塚 啓子 略号(くえ)

肉体美裸身切腹写真

大手札五枚一組 五〇〇円

長野 良子 略号(なせ)

女体切腹態

大手札二枚一組 三〇〇円

細川アヤ子 略号(ねは)

女体自刃態

大手札三枚一組 三〇〇円

細川アヤ子 略号(ねに)

血紅使用血塗れ下腹

大手札五枚一組 五〇〇円

大塚 啓子 略号(わい)

殿中の自決

大手札三枚一組 三〇〇円

大塚 啓子 略号(わこ)

切腹美態から絶命へ

大手札五枚一組 五〇〇円

大塚 啓子 略号(わは)

豊満に挑戦

大手札五枚一組 四〇〇円

東浦ひかる 略号(えん)

介添切腹

大手札四枚一組 四〇〇円

甘木 春子 略号(あか)

腹を切り裂く

大手札三枚一組 三〇〇円

大塚 啓子 略号(やい)

下腹に刺す刃

大手札三枚一組 三〇〇円

大塚 啓子 略号(やお)

柔肌を切り裂く

大手札三枚一組 三〇〇円

大塚 啓子 略号(やえ)

浣腸関連フォト

只今浣腸実施中

大手札三枚一組 三〇〇円

東浦ひかる 略号(かみ)

強制空気浣腸

大手札三枚一組 三〇〇円

東浦ひかる 略号(かく)

百CCの浣腸

大手札三枚一組 三〇〇円

東浦ひかる 略号(かな)

浣腸責の極

大手札三枚一組 三〇〇円

東浦ひかる 略号(かむ)

浣腸シリーズ

大手札十二枚一組 一〇〇〇円

梨花悠紀子 略号(れち)

強制浣腸三態

大手札三枚一組 三〇〇円

絹川 文代 略号(きか)

イルリガートル

大手札十二枚一組 一〇〇〇円

梨花悠紀子 略号(いるり)

太い浣腸器

大手札三枚一組 三〇〇円

東浦ひかる 略号(かふ)

浣腸をする女

大手札三枚一組 三〇〇円

遠藤百合子 略号(ゆか)

浣腸器と女

大手札三枚一組 三〇〇円

絹川 文代 略号(ほの)

エネマ・シリーズ

大手札四枚一組 四〇〇円

大塚 啓子 略号「るい」

イルリの嘴管挿入

大手札五枚一組 五〇〇円

大塚 啓子 略号(るは)

浣腸プレイ

大手札三枚一組 三〇〇円

大塚 啓子 略号(ほは)

進ばしる液

大手札三枚一組 三〇〇円

大塚 啓子 略号(ほい)

浣腸後排便

大手札五枚一組 五〇〇円

大塚 啓子 略号(へき)

便意苦悶像

大手札五枚一組 五〇〇円

大塚 啓子 略号(へか)

「映画『日本拷問刑罰史』とS子」

お恥かしい話だが私は『日本拷問刑罰史』を三回も見る羽目になった。第一回は竹野ひろ子と別れた日、大阪で独りきりで――。

芸術祭参加蹴られ作品「裸虫」と、スターの伊豆肇演出の「女」とか云う作品の三本立をオリオン座でタツブリ四時間かかって見て帰った。

『日本拷問刑罰史』の内容を説明するつもりでいたら、奇クの沢山の方々が、立派な紹介を我れ勝ちに書かれて先を越されたので、今更ことでその蒸し返しをしても、要は見た人なら、皆同じ事を感じ嘆、讃嘆して書くのだから、私が下手な文で、今更くどくど書く必要

もない。謂うなれば、諸賢とくに御承知済である。

第二回は箕田編集長に誘われて、恰度見た
いといっていた三十九夜同人のドクター氏と
三人で、再びオリオン座を訪れたが、この時
は上映時間をはかって、おめあての一本。い
うまでもない『日本拷問刑罰史』のみを覗い
た。専ら次のシーンの説明役に廻る。

三回目は夫婦プレーの同好者、京都のT氏が訪問され、彼は未だ見ていなかったのも、喧かましく同行をせがまれて、さらばと再度腰をあげて、この時もお目当一本を覗く。

S子との話は、この時より始まる。

流石に第三回目、それも、十日か半月おい
て、次々と見たため、T氏は無我夢中だが私
は一寸見飽いた感じで、暗がりには眼が馴れて
くると、辺りの観客層を観察していた。矢張
り、殆んどが男性で、キチンと背広をきこな
した紳士面らが案外多い。それに中年を超え
た人々。女性とはと、客席の隅から隅へと目を
移して行くと、いたいた、扉に近い、それも
ボンと離れた、私の席より数列前で、劇場
内唯一人の女性が、熱心に画面に見入ってい
た。映画は今、駿河責めが終って、例の火つ
け容疑のポチャポチャした娘が、石抱きの責
めを受けているシーンである。

私はT氏に声をかけ便所に立つふりをして席を立った。T氏の返事は上の空である。無理もない、私だって第一回目なら、相当の尿意をこらえてでも頑張っただけに見続けたに違いない筈だ。

薄汚れたW・Cは私一人、放尿の音が、奇妙に大きくはねかえる。この種のもの専門の映画館だから、ラクガキを一通り眺めていても結構たのしい。ここには吐かしきれぬ欲望の成果が、大きく、乱暴に、丹念に壁面狭しと書きちらかされてある。

ゆっくりと終って、私はここぞと見当をつけて扉を開く。紛れもなく扉のその近くに女性先刻の位置のままで座っていた。

何気なく、私は女性と席を一つ隔てて、同列に座る。夫婦連れとか、アベックならとも角、この映画に女性一人でくるということに私は激しい興味をおぼえた。こんな時、私はいつでも咄嗟に、自分でも不思議に思う位大胆になる。ハイド氏がムラムラと起き上がるのだろうか――。

「お一人ですか――」

私は全然前ぶれもなく、声をかけた。声をかけるチャンスをおぼえていたのだった。非人が火あぶりの娘が見えなくなるまでワラを

つま上げ、火を放つシーンが終って、場面が転換したからである。この映画は要するに、ストーリーは、刺身のツマ、拷問の結果を見せ場にするのであって、それまでの道程は、ごくつまらぬ素人めいたお芝居である。小森監督もその処を心得えて、刺身のツマはごく簡略に進めている。その刺身のツマのシーンの、ホッとした処をねらって声をかけたのであった。女性は暗がりでも判然とする程、まさにギョツとした。きつと心臓が躍り、身の毛がよだつた事だろう。返事はなかった。女性性は肩をすくめてもじもじし、辺りを何かなしに見廻し、私の視線をさけるようにした。きつと痴漢と思ったに違いないのだ。

私がある場面でじつとしてゐるものだから、気味悪そうに、女性は身をじらすようにしてそっと立上り、周辺を見回して、二列ばかりうしろへ下って、そっと腰を落した。どうも私は恰好がつかない――。しばらくじつとしていたが立上ると、通路の中央を通過して、T氏の傍らの自分の席へ戻った。レディハントは完全に失敗――。

私はそれでも、こちらから、件の女性の動静を見ていた。彼女は又、元のようにスクリーンに眼を移し、気になるのか私の方を振返

った。判つきりせぬが、三十前後の、痩せ型の美人に見えた。落ち付いた洋装姿で、ごくありきたりの風体である。私は女性の方ばかり見ていたが、映画が終るまで、彼女は四、五回私の方を顧った。何れにせよ関心をもつたらしい。夢中のT氏は全然そんな私に気付かない。太い溜息をもらし、体をのり出すようにして、ひたすらに残酷シーンを追いつづけている。

とってつけたようなラストで映画は終り、場内が明るくなると、彼女はまたしても私をチラリと一瞥して、そそくさと席を立った。

横手の扉を排して出て行く彼女に、私は出口でおち会える距離を計算し乍ら、後部へとゆるゆるT氏と歩いた。モギリの位置で、ぱったり出くわした私に、彼女はギョツとし、きつい顔になって私の横をすりぬけるようにして表へ出た。もう私はどうしても彼女に声はかけられない。これ以上声をかけると、彼女はきつと、駆足で逃げ出すだろう。

私は女性のあとを追うともなく歩いた。

ミナミの大劇の横切りから、夜の歓楽街は急にあかりを増し、軒並につづくバー、キャバレー、飲食街のネオンが夜の巷を照らしていた。人波もそれに比例してふえて行く。

私は歩きながら、T氏に彼女の事、声をかけた事を話した。私以上に心臓の強いT氏は急に興味深げに、前を小走りに行く女性の後姿に視線を集めた。

「任せときなさい——。うまく話すから……こりゃ面白くなつたな……」

私に眼で合図して、T氏はスタスタと彼女に追いつき肩を並べた。女性は右に並んだT氏をさけるように左に寄る。T氏がしきりに手振りもいれて何か喋っている。女性の足がいつしかゆるやかになってくる。

「うまい、うまい。仲々やるぞ彼は……。一体どういって口説いているんだろう——」V

私は内心、T氏の口説きぶりをききたかったが、今は彼に任すべきだと思った。

女性の歩行が止まりT氏は振返って私を手招きした。示談成立したらしい。

私はやや緊張した面持で近づいた。T氏の出鱈目に符牒を合わせねばならない。

「辻村さんです。決して変な人ではありませんよ。今もお話しました通り、責めや刑罰の研究家でネ、特に責に対する女性心理……そんなものを知りたがっているんですよ。立話も出来ませんネ。まあ、お茶でもどうです——」

T氏、こうなると独壇場である。私は女性に軽く会釈して、T氏にまかせて最寄りの喫茶店に三人揃って入っていった。しかし、彼女はすっかりと私に対して警戒をといたわけではなかった。三十前後の年令の落着きと、辺りの明るい雰囲気、幾分彼女に安心感を与えたに違いなかった。

座った席での主役は、すでにT氏が握っていた。私はT氏の膳立て通りに動き、喋べり、言葉を合わしていればよかった。堂々たる恰幅の、重役タイプのT氏は、こうした場合、実に打ってつけでもあった。如才なくとりとめもないやりとりで、徐々にT氏は固い女性の口をはぐして行つた。彼はこの見知らぬ女性に堂々と名刺をさし出した。肩書で安心させる腹らしい。名刺を眺めていた彼女は意外といった表情で、始めて言葉らしい言葉を発した。それまでは、唯、ええとか、はあとか、何とはなく受け答えしていただけだったから。

「まあ、この会社、よく存じてますわ。京都の局長をなさっておられますのね。私、おたくの大阪支店の方で随分お世話になっているので。大阪店のUさん、ご存知なんですよ」

「ああ、U君ネ。こりゃ意外です。彼ともゲテモノ仲間だね。普段会社じゃしかめ面していますが、今夜の映画は、彼すでに三回見にいったそうですよ。奴さんも好きな方ですよ」

女性は笑った。

「この辻村氏は、この道のオブソリテイ(T氏はオソリテイをこういう)ですよ。貴女ご存知ないかな——奇譚クラブっていう雑誌——」

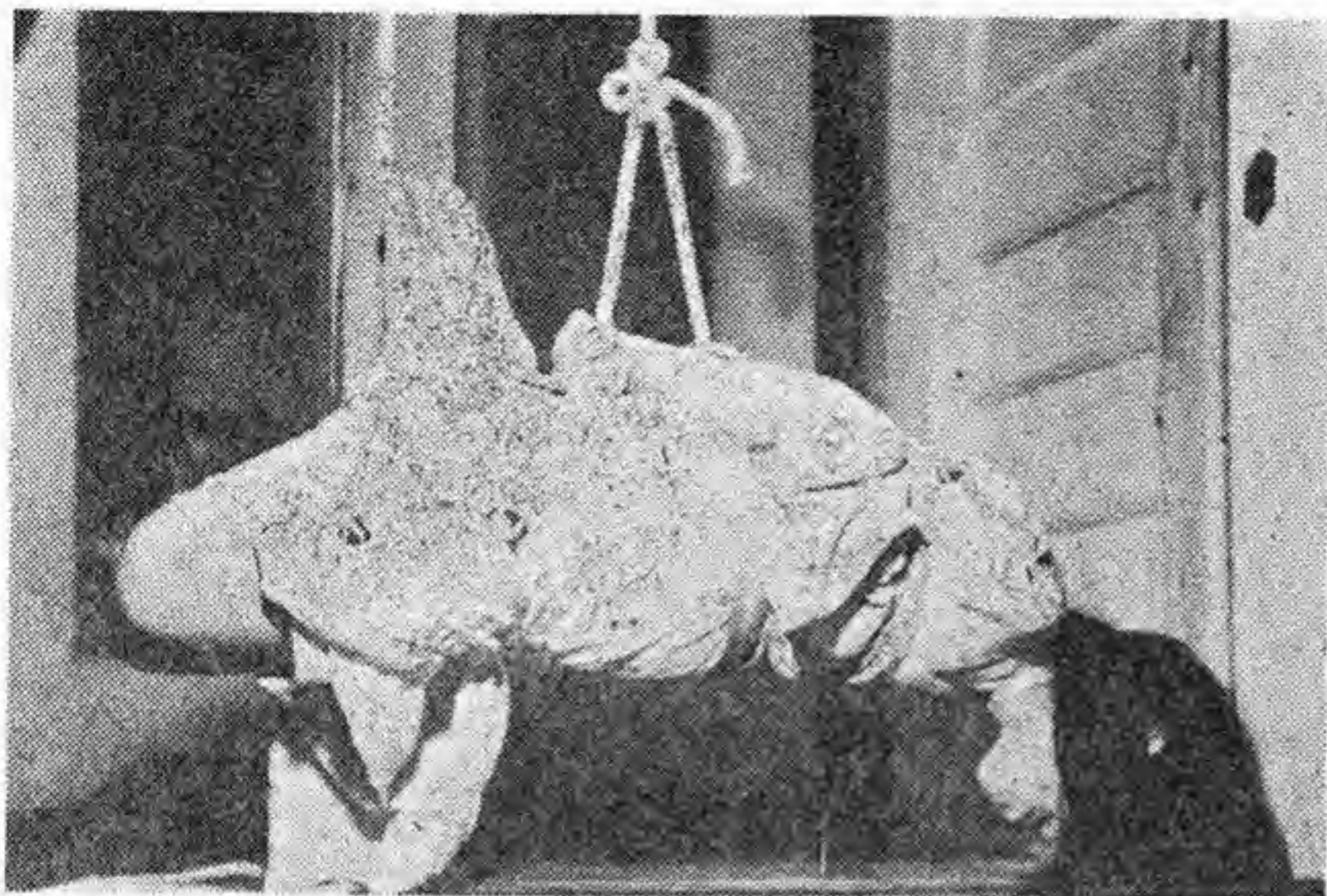
「二、三度買ったことありますけど……」

「おやご存知？ それじゃ話が早い——。辻村隆でこの人書いています。最近はカメラ・ハントなど……。もう二十年選手なんだがなあ——」

「さあ、いちいちお名前は記憶しておりませんけど、そういえば、そんな名前あったような気がします。」

辻村隆もさっぱり型なしである。正直いって有名作家の皆無の奇クなら、書いた人間の名前など、知らないのが当然である。恐らく彼女も知らないに違いない。定連の購読者でもない限り——。

T氏の巧みな誘導で、そろそろ女性の素性が割れてきた。間接にはあったが、T氏の



名刺が有効成分を抽出したらしい。

彼女は広告業のセールスウーマン。一念発起、山口県の防府市より上阪し、マンション暮らしで、今の処独身であるらしい。その

処が判つきりせぬが、一度結婚に失敗して、

そのせいもあって上阪した様子らしかった。

年は言わないが、じっとよく見ると、服装

に較べて、案外若かった。三十前後と見たが

あるいは、二十七、八才ぐらいだろうか。

「お名前をおしえて戴けませんか——」

「Uさんにおききになれば、ご存知の筈

ですわ。イニシャルがK・Sです。」

「じゃあS子さん……」

「結構ですわ」

T氏の話工合で彼女はS子とだけどう

やら分った。いずれ明日にでも判明する

だろうが、別段S子で結構である。齒が

ゆいが、仲々話が核心にもって行けな

い。当の私だって、一体何の目的で、彼

女に声をかけ、こうして向い合っている

のだろうか。あの映画を一人で見る位の

女性だから、責めや刑罰に興味あつての

上、それなれば、つづまる処、あわよく

ば、彼女を一責め責めて見たい。プレイ

への誘導にかられてのことだろうか。最

初のきっかけは兎も角として、T氏の骨

折りで、今S子なる女性は、プレイへの

射程距離にある。ではポツポツと私自身

語らずばなるまい。T氏と主役交替すべき時期にありつつあった。

「どう、知り合いの店で、一杯やりつつ話さ

ない？ 小部屋でないと話し難いがネ」

「よかろう行こう。けれど、ボクは京都まで

今夜帰らねばならない。余りおつき合い出来

ず残念だけど、じゃあ善は急げだ。S子さん

ゆきましよう。」

有無をいわせず、T氏は強引にS子連れ

込もうとした。のみかけのコーヒもそのまま

に、私達は喫茶店を出ると、馴染の店に急い

だ。夜の時間はもう残り少ないからだ。天下

茶屋に帰るS子はいいとして、京都へ帰らね

ばならぬT氏にとっては、貴重な残り少ない

時間だったろう。

× × ×

てっちりを、二箸、三箸つまみ、数盃のさ

かずきを空けて、匆々に立上ったT氏を送り

出したあと、私とS子は、濛々と湯煙るてっ

ちり鍋を、しばしは無言でつついていた。

関門に近いせいか、S子はてっちりが好物

のようであった。私のつく酒を、割合隔意な

く受け、空の私の盃に酒をそそいでくれたり

した。

酒が言葉を滑らかにし、温かい湯気が、郷

愁をよんだ。世間話から、私はいつしか今夜の『日本拷問刑罰史』へと話を転換させていった。もうS子は物怯じしない。しっとりとして、眼がうるみ、盛りの女性の姿に還って硬さはとれて、笑みさえ堪えているようになった。

「あの映画で随分刺激されたんですね。編集部でもどうやら重い腰を挙げて、『日本女性拷問刑罰特集』を撮ることになりました、私も相談にのっているのですが、読者の輿論が編集部をふみきらせたのです。来年の春ごろ発売の奇クに多分発表される予定です。是非ご覧になって下さい——」

「愉しみにしておりますわ。それで、そのモデルになる方なんか、もうきまっているんですの？」

「ええ、きまっています。かなりの重労働だと思ふのですが、この映画を三度も見たという女性の便りが編集部宛にあったそうです。企画があれば是非拷問や責めを受けて見たいって人がネ。貴方ならどうですか？」

「私はいいよ本心を口にした。」

「……………」

煩を染めたままS子はうつむいた。無言である。それは否とも応ともとれる……。

「私、そんな事考えても見ませんでしたもの」

急に仰有ったって……」

「勿論そうでしょう。でも貴女も興味はもっていらっしやるよう、お見受けしたのですがネ」

「まあ——」

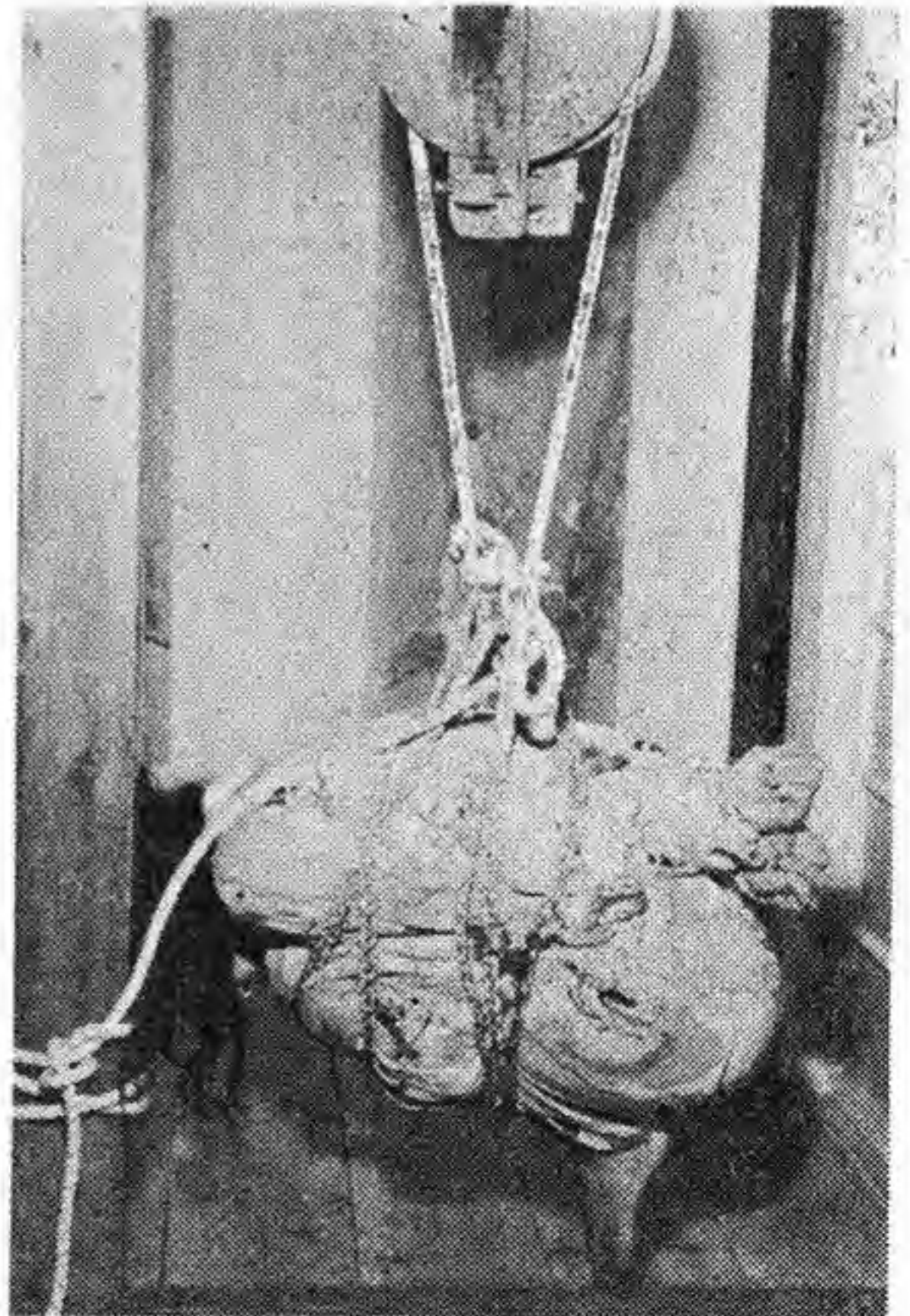
S子はまじまじと顔を挙げて私を見つめ、こころ持ち非難めいた眼付になった。

「そんな女に見えますか？」

「見えますよ。しかし、その事はチットも恥じゃない。見たいと思ったら敢然と見にゆかれるその勇氣に敬服しているのです。」

「随分思い違いなさってるわ。私が見たいと思ったのは実は『裸虫』なのです。あれにはんの脇役で出ている女性が、私の無二のお友達だからです。だから私、羞かしいのを我慢して見に入ったのですよ。」

「なんだ。そういう訳ですか。成程、私はも」



う頭から『日本拷問刑罰史』のみ考えているもんだから……………。そうね。映画は三本立だった。うかつでした。」

私は内心、実にかっかりした。もう二本の映画は、てんで念頭になかったのである。

フト二人の座は白けた感じだった。あの映画に関心のない女性を、改めて口説いて見ても始まらない。私のがっかりした様子が大袈裟だったのか、反ってS子の方が、とりなすように、なぐさめ顔でつけ加えた。

「全然、興味ないという訳じゃありませんのよ。本当いって内心はやはり見たかったのでしょう私。先刻Tさんにも申し上げましたように、奇クを買った事もある私です。モデルさんの縛られたフォトを胸をドキドキさせて見たり、『花と蛇』にハラハラしているのです。でも自分が縛られて見たいと、そんな身近かに思った事はないだけです。」

「私が若し、貴女を縛りたいといったとしたら——仮に……」

「勿論、お断り申上げるでしょうネ——でも……」

「でも……?」

「一生に一度ぐらい、そんな経験もして見たい気持も、心の何処かに潜んでいるように思えるのです。はしたないと思いますけど……」

「一生に一度をこのチャンスに賭けませんか——。実は読者の方に熱心な人がいて、今夜の映画にあったような、木馬、火あぶり、はりつけなどの道具をつくった人がいるのです。現場が処刑のシーンにふさわしいかどうか、二、三日中に、編集部の人とリハーサルをかねて下見に行くのですが、出来れば処刑の定石通り、縛りのリハーサルを試みて見たいと思っていますのです。時間はとらせませ

ん。そう、約一時間ばかりで結構なんです。

是非私に貴女を一度撮らせて下さい。決して迷惑かけませんし、お顔が出るのがおいやでしたら、顔をかくしてとります。貴女のよくな細身の方が、残酷ムードの拷問刑罰の責めにふさわしいんです。」

私はここを先途と口説いた。口説いてもダメならもともとである。うまく行けば、カメラ・ハントの話が一つ出来るという腹づもりもあった。

「二、三日考えさせて下さい。突然でどういっていいかわかりませんし、急におっしゃって、私困りますわ」

無理もないと思う。短兵急で、この場で仮にO・Kをとった処で、すっぱかされたらそれまでのこと。何処へ文句をいって行く筋合もない。私は自分の独りよがりを反省した。見知らぬ男に、突然突飛な話を持ち出され、強要されて困惑するのは当然であったかも知れない。

「じゃあT氏にご返事下さって結構です。T氏に連絡して戴きますから——」

「ええ、そういうことに……」

S子はホッとしたように、生硬な顔をやっとはぐした。話が自分の事でなくなると、女

性は案外お喋りになる。追加の酒をくみかわし、煮つまったちり鍋に、飯を入れ、卵を割って熱い雑炊をふきふき喰べるころ、S子はすっかり、饒舌になっていた。酒はかなり強い方だったが、流石に眼許は赤く、なまめかしい媚態が、全身からチラチラとこぼれた。

「すっかりご馳走になってしまいましたわ。それに減多にきけない面白いお話ばかり伺がって、何だか昂奮したようですわ。辻村さんに一度いうこと聞いてあげないと、悪いみたいですよ——」

「とんでもない。決してそんな義理を考えていただくなくても……。まあ、こうして妙なご縁でお近づきになれたのですから、願わくば、わが燃える気持察し給えよかしですよ」

S子は無言で微笑を浮べ、心なしか親しみをこめて、流し目に私を悪戯っぽくにらんだようだった。

望みなきに非ず。諸否は五分五分だが、せくまいせくまい。今夜はこれであっさり別れた方がよさそうだ。私は念のため自宅の電話番号を告げ、彼女はそれをメモした。

店から車を呼んでもらい、タクシー代は店の勘定の、私のツケに含めるよう手配して、

S子を送り出した。手を振ると、S子は車中でこぼれる笑みを浮べ、右手を頬のあたりまで挙げて、人差指の二本のしなやかな指を軽やかに振って、それに応えた。

人生は面白い。痴漢まがいの一言が、うまく運び出すと、こうも女の心を捉えて、再会を期して快ろよく別れていけるものだ。きつとうまくゆけるだろう——そんな確信が、車の消え去るころ、私の胸に勇然とわいてきた。

× × ×

顛末を有りのまま、T氏に電話で報告依頼——。その後半月ばかり経って彼より返事があった。年末を控えて彼も多忙だったのだらう——。最初は随分ためらって断ったがネ。ボクがいろいろとなだめすかし、頼み込むとボクも一緒ならいいと、やっと応諾したよ。一緒でもいいだろう。

——勿論いいとも、あんたの力だよ、じゃあ委細きめて下さいよ——

S子がT氏に頼み込んだのか、好きなT氏の事だから、うまく自分を売り込んだのか、それは判らないが、兎も角、T氏のお蔭で成功したことは私も認めるにやぶさかでない。ここは当然T氏に加わることはやむを得ない

——。

約束の日はジングルベルの鳴り渡る、クリスマス・イブの夕方である。その日からS子は都合いいというので、私は折角買わされたバーのクリスマスパーティー券、二軒分を放棄せざるを得ない。二枚で三千二百円のバーは痛い、誰かにくれてやれば喜ぶだろうと諦めた。

旅館は恐らく満員だろう、どこもかしこも——。しかし、ホテルで撮ったのでは、従来の緊縛フォトを一步も出ないものになるに違いない。思いは同じだったのか、T氏の打合せの三度目の電話があった。

思い切って京都へ来いというのである。クリスマス・イブで家族を全部放り出して、T氏の自宅でやろうという提案であった。

落付くし、多少の道具もあるだろうから、この案はよかった。S子にも話してあるから夕方五時、新大阪駅で落合って来いという連絡だった。T氏自身すっかり夢中である。

私はS子には連絡せず、新大阪駅のホームで約束の時間に待った。私のバッグにはカメラとストロボと数本のフィルムだけで、縄やアクセサリーは一切T氏が準備してくれるので、比較的軽い。

数分して、和装のS子が、黒いコートに身を包んで、雑踏の中で、私を探すのを見つけて、私はスタスタと走りよった。

「来てくれましたネ、有難う。」

「Tさんの強引さに負けましたわ。ボクも一緒にいるから安心しろなんていうものですか——」

やはりそうか——T氏うまくうり込んだものだ。

新幹線特急で、京都まであっという間である。京都駅の長々とした跨線橋を亘り、正面出口でT氏は待っていた。

駅前からタクシー——。烏丸を走り、河原町に折れて八坂神社の横手を抜け、平安神宮のほとりで降りる。懐石料理で夕食をすませ、ぶらぶら歩いて五分して、目指す家につく。ここは私も始めであった。彼のいう自宅は、彼の二号さんの家であったのか——。

「子供をつれて河原町まで出したんだけど、九時には帰ってくるっていうんだ。本宅でも待っているし、クリスマス・イブは忙がしくてネ。まあ、大きいケーキでも買って機嫌はとるがね、時間が少ないんだよ。今は丁度七時、二時間あるけど、少し急いでやろう」鍵をあけて入った室内は暗く、ひっそりと



静まり返っている。ガスストーブを点じ、T氏はポットをかけた。

「お茶なら私がしますわ」

S子は如才なく立上り、茶ダンスの上の、

コーヒセットの盆を降し、コーヒのありがたいとききながら、お茶を入れる支度を始めた。「綺麗だっていうじゃないの。紹介してもらえろのになあ、今日はダメだね」

「何れ日を改めてネ。先斗町に出ていた女なんだ。子供が一人あってネ。一緒に引取りさ——ボクになついてくれるが、ボクの子じゃない。ボクがひかせた時、田舎から呼びよせたんだよ。とんだこぶつきさ——」

「その代り、プレイの方はどんな事でもOKって話じゃないか」

「それが取柄だけで、子供が今年から小学校だろ、余り派手にもやれない。何しろ家が狭いのでネ」

成程、六帖と四帖半と寝室と勝手元の四間ではSMプレイも多少は制約されるだろう。私達は四帖半の茶の間でコーヒをのみ、六帖の間をプレイの場所に使うことにきめた。

S子は心なしか硬くなっている。とはいえ男性二人いることが、なんとなく安堵感を与えるのか、さして非協力の色もなく、私も一緒に、奥の六帖の間を眺め回していた。

その間にも、T氏はいろいろなものを引っ張り出して来る。青竹、井戸車、附毛、長襦袢、紐、縄——。浮々と口笛も吹きかねない様子である。

「便所に通じる、板間もいいよ。物置に最近バラックで建て増したんだが、未だ何も置いてない。ここなんか感じが出るぞ」

そういつて彼は私を勝手元の横の扉を開いて導びく、すつと冷気が肌にしみる。

準備は大体終わった。

「S子さん、じゃあそろそろ——」

「怖いみたいですわ。余りきつく縛らないで下さいね。始めてだから……。裸になるのはいやですよ。お電話で、それだけはお願いたから——」

仲々慎重である。T氏は屏風を立てて、その蔭で、さらさらと脱ぐ衣摺れの音が微かにきこえた。

「うちの奴なのですが、じゃあ、これ着てやりましょう」

T氏は長襦袢を屏風の上にかけた。それは内側に無言でスルスルと消えて、やがておすおすとS子は立現われた。

「時代色を出したいので、このかもじをつけて下さい。顔も半ばかくれますしね」



かかえて板敷の隅においた。

余り最初に痛くしても、あとに差し障りがあるので緊縛感は乏しいが半幅帯で縛ることにした。S子の胸に帯をかけると微かな震えが私の手に伝わって来た。胸と腹にかけ膝の辺りまで縛って、私は天井を仰ぐ。

流石にT氏のプレイの場所だけあって、丈夫な丸環のついたポールトが、梁にうちつけてある。梁むき出しなのはそのためらしい。

「うまく作ってあるネ」

「天井を張れば吊れないじゃないか。あのポールトは随分役に立っているよ」

T氏はニヤニヤする。

脚立を出してそれに跨がり、私はポールトの穴に帯を通す。S子を椅子に立たせて、しっかり吊り上げると、T氏は椅子を外した。

フーフと軽い呻きが洩れて、彼女は宙に浮いた。

被写体に向って、私とT氏のカメラの閃光が走る。案外堪えられるのか、S子は微かに空間にゆらめいて、深々と頭を垂れていた。

二人がかりでヨイショと降して、T氏が素早く解く。矢継早に私は縄を握って次を待っている。

「一丁これで行きましょうや」

T氏は眼をぎらつかせて井戸車を持ち上げポールトの環にそれを結びつける。

一方で私は、S子を正座させて後手に縛り上げ、正座した足諸共に縄をかけて、一纏めに強く縛り上げた。別のロープで井戸車に縄を通し、背で結んでS子を机の上へ押し上げる。井戸車を通った縄のはしをS子の背で更に結ぶ。机を外すと、S子は荷物縛りになって宙に揺れた。固く結んだ筈の体の縄が伸びて、胫に膝に縄目がくい込む。

三人は殆んど無言に近かった。饒舌する程心のゆとりがなかったのかもしれない。

「いいね、降すよ」

私はT氏に声をかけ、彼がシャッターを押し終ると机を差し入れた。

ついで駿河責めの縛りである。両手足は背

私はもじゃもじゃした黒髪のかもじを差し出す。いわれるままにそれをピンでとめて、顔に垂らす。セットしたばかりの髪が少し崩れた。

「何から行く？」

「時間がないから、予備行動は飛ばして本番と行こう。最初は吊りで行こう。あの板敷がいいよ。ストープあそこまで届く？」

「ああ、充分だ」

T氏は点火したままの、ガス・ストープを

中で合致しない。少し骨が硬くなっているの
だろう。つけようとする、S子は小さく呻
き、痛いわと小声で叫んだ。やむなく精一
杯まで合せて、両手と両足を別の縄で結び、
同じように机にのせて、井戸車に吊り下げ
た。床より十五センチ足らずで、多少物足り
ないが、場所柄仕方がない。高々と吊り下げ
ても、苦痛は同じ筈であるが、どうも致し方
ない。

それで我慢して、私は慌ててシャッターを
切る。これは流石に苦痛を伴うのか、S子
は呼吸を荒くした。

「早くしてネ。早くしてネ。苦しいわ」

きれぎれに叫んでいた。

やっとS子を解放して、ここで一服するこ
とにした。

「非人になろうか、煩かむりでもして……」

「いや今日はよう、もう八時を大分回って
いるよ。それより、私の考えは、次はそろば
ん木責めをやりたいんだ。頼んでおいた三角
の木ある？」

「そいつがなくてネ。昨日大急ぎで、薪を探
して、三角に割れた薪を十本ばかり準備して
おいたよ」

「それでいいよ。座敷でやろう」

S子の一休みする間にも、私は襖の前に、
三角木の揃ったのを七本並べた。

これは襦袢の上からでは面白くない。三角
木にじかに、脛がめり込むところに、残酷味
は加味される。S子は覚悟をきたのか、案外
素直に腰巻をとり下半身を曝した。

太いロープで後手に縛り、二人でそっと三
角木に誘導して正座させた。

「ウーン、痛いわ」

「ダメダメ我慢しなくちゃ。映画は随分この
シーン長かったよ。でも早く撮るから少しの
辛抱だよ。」

身をよじれず、S子はめり込む脛に懸命に
痛みをこらえ、体は自然に浮かすようにして
上半身を折り曲げた。いいポーズである。

T氏と私のシャッターは交互になり、閃光
はダブってきらめいた。

「もう次で終りにしよう。時間だよ」

「うちの奴だけならいいんだけど、子供がい
るのでネ。すまない。」

S子はぐったりとし、しびれたのか、両脛
を撫でさすっていた。

「これで最後ですよ。どう清水の舞台から飛
び降りたつもりで、脱いでくれませんか。全
裸の後手吊りです。錦上華を添えたいんだけ
ど——」

「でもそれじゃ約束が違いますことよ。」

S子は哀願の目付になった。

「いいよ、いいよ。ねえ、これっきりで、さ
あ早いとこやろうよ」

T氏は有無をいわせず、S子の纏う長襦袢
に手をかけた。S子は胸を押えたが、所詮は
それは形式的な抵抗に過ぎなかった。さっと
長襦袢をとられて、彼女はうずくまって胸を
抱え、膝を合せた。

私は素早く後ろに回り、胸に縄をかけ、後
手に縛り上げる。後手の縄の余りをT氏の持
って来た青竹の中心に巻きつけ、しっかりと
縛った。もうS子は抵抗をしない。別の縄で
両足を胸につけ、足首は腰に回した縄で縛り
終るころ、彼は青竹を吊り下げるため、梁の
両端に丈夫な縄を輪にして垂れ下らせる作業
にかかっていた。

「いいね、持ち上げるよ」

二人で両端を掴むと、ぐいと青竹をさし上
げる、S子の体は軽々と宙に浮き上る。縄の
中心がやや腰よりになって、ぐらりとS子の
体の上半身は下る。私達は意気を合して青竹
の両端を縄の輪に押し込んだ。手を離れたら
ジリッと数センチ下ったが、無事彼女は宙吊

りになっている。

カメラ カメラ。とる手ももどかしく、シッターを切る。この構図は正しく『日本拷問刑罰史』を再現したといっても過言ではなかった。

ストーブは真赤に燃えていても、隙間漏る

夜気は冷めたかった。S子の肌に鳥肌が立っていた。そして、彼女は私達が降すまで無言でたえていた。あるいは潜在した被虐の陶醉にひたっていたのかもしれない。

長襦袢を、縄をといった体に向け、私達二人は最大限の謝辞を並べた。

映画、TVのシーン十大ニュース

(ANUS及びNOSEに関して)

鼻 好 生

年末になるとどの新聞でも「今年の十大ニュース」という企画を発表する。そこで

本誌でも。本誌に掲載された記事や写真、他の新聞雑誌にのった記事、映画やTVのシーンなど、もちろん全部見たわけでないから私の見た範囲内で、私のANUS及びNOSEのFUNとしての立場で十大ニュースを探ってみる。

①「白日夢」の路可奈子のアップ撮影における鼻の表情。歯科医で歯治療用の水洗面の水を鼻孔に何度も繰返し注がれるシーン。電流責めで苦悶する鼻とうめき声。キラキ

ラする鼻毛も美しく見えた。

②鼻について。TVのハイクラウンチョコレートの淡路恵子のアップ。一瞬だが彼女の魅力的な鼻孔の奥が明瞭にのぞかれる。

③「紅閨夢」の劇中劇(映画だが)女優がS+M的な画家にチューブから鼻孔に絵具をしぼりこまれる。

④「越後つづいし親知らず」で可憐な佐久間良子が泥田シーンの撮影で耳と鼻の孔に綿をつめこまれてから撮ったという週刊誌に出ていた記事。

⑤週刊朝日に出ていた開高健の「ずばり東

「いいの、いいの。そんなに仰有らなくても……もうおしまいですわネ。」

彼女は乱れたかもしを外し、屏風のかげに消えた。大急ぎで跡かたづけ、何もかも元の処へ納めて、私達は成功を喜びあった。

S子は鏡台に向い、顔を直し、髪型をととのえていた。

最初から、これ程の責めフォトが撮れようとは、期待もしていなかっただけに、私の喜びは一入大きかった。それにも況して、T氏は歓喜を絵に描いたような顔付で、ポーズと、虚ろな眼をS子の背に向けていた。

やがて九時——。T氏の愛人は帰ってくるだろう。

「滅多にない、クリスマス・イブの贈り物だったよ」

T氏は呟やいた。

「一緒に出ないかい」

「うん、残念だが、子供の奴たのしみにしてるのでネ、いてやるよ」

「そうかい、じゃあ、彼女と二人で、骨休みに一杯のんで帰るとするよ」

「うまくやるさ」

私は彼女の支度を待った。

外に出て、平安神宮の辺りで車を拾うと、

京」の人間ドックのルポ記事。ある女優が浣腸されたり、肛門からバリウムを詰めこまれてレントゲンを撮られたり、ポンプで空気をANUSから注入して栓をされそのまま忘れられて苦しさに泣きわめいた話。

⑥十一月十六日、白川由美が出産の時、産児が4キロ近い大きな児だったので中々娩出せず、約3センチ切開し分娩後すぐに無麻酔で六針縫合し、彼女は痛さで失心してしまったという、ある婦人週刊誌記者に語った記事(この時あの彼女の美しい鼻孔はどんな魅力に満ちた表情だったろう！)

⑦「愛——その奇跡」という映画で主演の真理明美は、ストーリーの主人公そのまま、鼻孔にゴム管を挿入して栄養を注入されながら眠りつづける。

⑧司葉子がロケ先の旅館で、地方のボスがトイレに仕かけたテープコーダーでオナラの音を録音されたという話。

⑨テレビ(12チャンネル)で医学教室教養講座、「人体をのぞく」シリーズの「直腸鏡」40センチ程のパイプをグリグリ挿しこまれ、インターンや看護婦が大勢見まもる中で、四つん這いに縛られた苦痛に耐えている若い婦人患者。あの後おそらく直腸患部をひき出され手術の責苦を味わわれたの

だろうが、そこまでは希望する方が無理。⑩最後は「個人的体験」を一つ。

八月のある日トルコ風呂で。揉んでもらいながら、トルコ嬢が小生のお臀を拡げ痔の手術痕を発見。彼女も去年同じ手術をしたとの話。小生胸をときめかし、色々と共通話題を話し合ううち、彼女いわく「その時以来、肛門に痛さを与えると苦痛の反面、異様な興奮がおこる」ということ。そしてその日、時間外のペイをはらい、前後四時間、彼女秘蔵の浣腸器、肛門拡張器、注射器などを駆使して、彼女を責めぬいた。まことに素晴らしい個人的体験であった。(彼女の鼻も又美しかった！)

この他、「奇蹟の人」の有馬稲子の鼻孔にまで施されたメーキャップのアップ写真(朝日グラフ)いくつかのTVスポットの女性の美しい鼻孔のアップ、阪神急行バスの女子従業員の採用身体検査で、他の受験者の前で四つん這いにされ、痔の有無を検査され、人権問題として訴えられたという新聞記事などが印象にのこる。

次号では小生の秘技、S画の合成(モンタージュ)を作品をそえて紹介することにする。

木屋町へ走らせた。車の中で私は無言で、S子の手を求めた。私に手を預けた後、S子はネオンまたたく夜景を見るときもなく追っていた。折りたたんだ若干の紙幣が彼女の掌に残って

「本当に有難う。嬉しかったよ。又の機会があれば更にいいのだが、貴女の仰有るように一生一度ならそれもいい。私にとっても、最高のクリスマス・イブだったよ。」

聖なる夜に私はサタンの申し子のようなプレイに耽溺して、それを祝福していた。キリストよ許し給え。イエス様自身、あのはりつけの残酷そのものの姿を全世界の衆目にさらされているんだもの——あれは拷問刑罰史における、最極刑の姿ですよ——

そんなことを考える私に神は罰を垂れ給うか——。とあれ、私とS子は木屋町のうなぎ店の奥まった座敷で盃を交していた。

オールナイトのきよしこの夜、S子と私はそれからどうしたのか……。これはもうプライバシーの問題。いまさらここにくどくど書くのは、読む方の羨望をかき立てるだけであるかもしれない。

京都の夜は、いつもにもまして、美しく鮮やかに更けていった——。

〔SM〕よりみた世界史シリーズ

ベリサリウスとアントニナ

黒 淵 嬰 一

大ローマ帝国は既に東西に分裂していた。紀元四五五年。アフリカに建国したヴァンダル族の王ガイセリックは、七百年前のポエニ戦役を再現すべく、三百隻のガレー船に一万の蛮兵を乗せてカルタゴを出港し、直路ローマを襲った。これが衰亡に瀕した西ローマ帝国に対する最後の打撃になった。

高い教養と絶世の美貌を謳われた女皇エウドクシアは衆目環視の只中で、装身具や宝石は勿論、着衣迄剥奪された。十六才と十四才になる、麗質母親に劣らぬ娘二人も同じ災難に巻き込まれた。三人の若い婦人は殴られ、蹴倒され、腕を捻じ上げられ、見る間に厳しく縛られて曳かれて行った。

ローマ市の金銀はアレマン族やゴート族の頻々たる襲来で既に大部分持去られていたが残った部分は此の際悉く掠奪された。無知な

蛮族は真鍮製品迄丁寧に運んで行った。更に容姿端麗な婦女を片端から縛り上げ、鞭や根棒で打ち叩きながらオステティア港に停泊している艦船に追立て、船底に幽閉した。その数は二千人を越えていた。エウドクシアと二人の娘はガイセリックの旗艦に於て帆柱から吊された。後になって娘二人は蛮族の妾に昇格したが、当時三十五才だった母親の方は土牢の中で間もなく囚人としての生を終った。

ヴァンダル族退去後のローマには空虚な形骸のみが残った。ブリタニヤはアングル、サクス、ユートの諸族に奪われ、ガリヤにはフランク族が国を建て、イベリヤは西ゴート族に横領された。四七六年、最後に残った本土イタリアも、オドワケルに奪われ、既に実質を失っていた西ローマ帝国は音も無く消滅した。其処には如何なる文学的素材も見出し得ない。プルタルクスの論法を以てすれば、千年後の東ローマ帝国の最期を大阪落城か鎌倉炎上の壮嚴な悲劇に譬

えるなら、西ローマ帝国の消滅は室町幕府の終末にも似た味気無き虚無感のみを伴った。

四九三年、オドワケルは東ゴート王テオドリック一世にイタリアと生命を奪われた。ヴァンダル王国はガイセリックの死後、ハンネリック、グンタムンドを経てトラシモンドが相続した。

イタリアを領有したテオドリックは、ヴァンダル王国と同盟を結ぶ目的で、その妹アマラフリダをアフリカの王トラシモンドに妻として提供した。アマラフリダの正確な容姿は伝っていないが、テオドリックの王統は歴代美人妻を迎えた関係か例外無く優れた美質を備え、その中から確信を持って推挙された王妹が、器量に於て平凡だったとは考えられない。アマラフリダの持参金はシチリヤ島の要塞都市リリベウムであり、ゴート族の貴族一千名と戦士五千名が花嫁に随行した。此の人数は過大だった。アフリカに三代を過して文明化したルアンダル族と、イタリア征伐直後で蛮風を尊ぶゴート族とは既に氣風的にも相容れなかった。ゴート族の間にアマラフリダを中心とするヴァンダル王国横領の陰謀が計画されたというのは真実か誤解か明らかでないが、ヴァンダル側は酒宴が誘発した喧嘩に事寄せてゴート人を殺戮する事に決した。アマラフリダの侍女達は巧妙に遠避けられ、別々の場所で縛り上げられた。アマラフリダ自身はリビヤ人の女奴隷二人に導かれて寝室に入り、着替えの為手を後に廻した処を捕えられた。黒人の大女は百斤の体重と牛のような腕力を持っている。一人が後から羽交締めにし、他の一人が前から口に布片を押し込み、二十七才の優雅な王女は誰にも知られずに縛られた上に猿轡を嚙まされて了った。

アマラフリダと侍女達が地下の土牢に落されると、宮殿の宴席で

はゴート人の大虐殺が演行された。一時間以内に、中程度の国軍にも相当する人数が根滅され、又は投獄された。アマラフリダは地下牢で絞殺され、死骸は壁に塗り籠められた。事は極秘の中に運ばれたが、間もなく風聞として東ゴート王国に伝えられた。東ローマ帝国に対抗する為に当然協同すべき蛮族の二王国は斯くて宣戦こそしなかったが明瞭な敵対関係に入った。併し海軍を有しない東ゴート側は、アフリカに復讐の渡洋遠征を行う事が出来なかった。斯くして舞台装置は出来上った。此処に四人の歴史的人物が登場する。

東ローマ帝国皇帝ユスティニアヌス一世。

その妻、テオドラ皇后。

本篇の主人公ベリサリウス將軍。

その妻にして本篇の副主人公アントニナ。

以上二組の夫婦である。

ユスティニアヌス大帝に就いては、詳述する必要はない。東ローマ帝国中興の英主、ローマ法大全の集成者として、百ページの教科書と雖ども相当な紙面を割いている。体軀雄偉にして容姿は男性的美質に恵まれ、信仰心篤く、努力熱心な学者でもあった。法律、神学、詩文、哲学、音楽、建築学は最も好む処だった。

テオドラ皇后も亦古今の歴史書に多くの題目を提供している。皇帝に欠けていた勇氣を所有して常にユスティニアヌスを激励したのはテオドラだった。同時に恐るべき残忍性を内蔵して暴虐の名を留めたのも彼女だった。

ベリサリウスはトラキヤの一農民より出てペルシャを討ち、アフリカとイタリアを帝国に回復する大戦功を樹てた。アレクサンダー

の血統、スキピオの門地、ケーザルの教養、ハンニバルの財産に相当する何物も持たずその指揮した軍隊は、素質最悪のものだったが収め得た勝利は古代の諸英雄に必敵し、又は凌駕した。実にベリサリウスこそは、その勲功に於てアドミラル東郷に勝り、その信義に於てゼネラル乃木と雖も及ばず、その臣事する君主は明治天皇の至仁至誠に遙か達しなかったにも拘らず、一生を通じ忠節を全うし、恰も乃木將軍の如く生涯を捧げた皇帝と同じ年の内に死んだ武人の鑑である。

併し家庭に在っては最も乱倫な貞操観念を所有した妻アントニナを遂に制御し得なかったのみならず、一生涯妻の権下に屈伏し、その脚を嘗めながら（これは形容や譬ではない）妻の奴隷に近い地位に沈淪した性格的破産者だった。

アントニナの性格は一層不可解である。ベリサリウスの戦場に於ける勇氣と家庭に於ける無氣力が余りにも対照的だったからでもあるが、此の悪妻は自ら不貞を働きながら、皇后と組んで名将であり忠臣である夫を侮辱し虐待することに、最大の快楽を感じる如くだった。併しベリサリウスが出陣する際には必ず同行し、名将の戦友、主計官、補給参謀を誰よりも巧妙に務め、時には一身の危険をも冒して夫の軍功を援助する反面も有した。但しベリサリウスの地位、名声が上れば上る程、それを踏潰すアントニナの満足も増加する筈だった。筆者は將軍夫婦の心理を分析し得ないが、奇巧読者の中には経験に照して明確な推論を下し得る方が有るかもしれない。斯く考えたが故に、我が尊敬する英雄の言行を敢て俎上に呈する次第である。

テオドラの前身は女優だった。併し現代の映画俳優を連想しては

ならない。当時此の職業は社会の最下層に位した。日本にも役者と河原乞食を同列に置いた時代がある。当時のローマには「元老院議員は奴隷と俳優を結婚の相手に撰んではならない」という法律が存在した。

テオドラの父は公営サーカスの動物飼育係で、「熊の親方」と呼ばれた。父が死んだ時母の下には娘ばかり三人の子供が残った。コミットが七才、テオドラが五才、アナスタシアが三才だった。上の二人は直ちに野外劇場に送られ、末娘も五才になると姉に続いた。そして少女時代はすべて、コンスタンティノポリス市民の歓楽に供せられた。姉妹は三人揃って稀な美貌を有したが、中でもテオドラは傑出していた。小柄な、瘦せた、寧ろ繊細な感じの姿態ではあったが、局部局部に於ける女性としての魅力は充分だった。純白の皮膚は寧ろ青白い位で、豊富な金髪、端正な顔、すべて高貴な外貌と共に下劣な愛嬌も兼備していた。テオドラは裸身を惜気もなく衆目に曝した。或る一箇所だけが隠されていたのは法律がそれを強制していたからだった。

尤もギリシャ人やローマ人の裸体に対する観念は、現代の感覚を以て理解しようとしても困難である。例を以て示せば、当時ペルシヤとの交戦に於て、議員階級を含む上流市民の妻や娘達が、都市の難攻不落を確信する処から城壁上に立って敵軍に向い女性最奥の秘密を公然と展示し「欲しくば此の城を陥してみよ」と嘲弄する場面など幾度となく出て来る。

テオドラが語ったという不道德極まる言葉の数々がプロコピウスに依って伝えられている。併しそれはギリシャ語であり、困った事にギリシャ語は同じ語が高尚な学理と正反対の隠語を同時に意味す

るので、語られた環境と雰囲気が解らなければ正確な日本語に訳す事が出来ない。同じプロコピウスはテオドラの演技の内容を刻明に記しているが、それを書き写して行くと典型的な『悪書』が誕生するであろうし筆者の趣味にも合わないので他の人に譲ろう。(事実とすれば現代のストリッパーなど側にも寄れない程のものである)

テオドラは歌も踊りも笛も出来なかった。演技は默劇に限られた。特技はローマ人同様現代人にも好まれる被虐役だった。日本流の張扇で音だけ景気よく叩かれるのとは質的に異っていた。頬を膨らせて叩かれ、観客を笑せながら恨んで見せたり、強度の刺戟を要求する首都市民を満足させる為に縛られたりした。併しテオドラの皮膚は夜間営業の重要な資産だったから単に手を前か後で縛られるだけで、鞭撃其他傷を負わせる怖れがある事は一切行われなかった。

テオドラは男を喜ばす技術も充分体得していたから、一夜を獲得する目的の客は列を成した。テオドラは金銀の前に容易にすべてを提供し、より多くの金銀の為に容易に前約を解消した。ペンタポリスの知事エケボルスは大金を投じてテオドラを妾にしたが忽ち後悔して抛り出した。彼女の貞操観念は余りにも少く、彼女を維持する経費は余りにも多かった。テオドラはアレクサンドリヤを一文無しで出発し、途中体と演技を売りながら若干の資産を作ってコンスタンティノポリスに帰った。ペルシウムで盗賊に襲われ、持物も着衣も奪われ、丸裸で縛り上げられて危く売られる処だったが、一人のアラビア人に助けられた。それで暫く彼と同居してやり、一生の一度だけ不意ながら母親になった。その男の子は誠に無邪気な青年に成長し、父が死ぬ時母親が今は皇后になっている事を教えられる

と喜んでコンスタンティノポリスを訪問した。テオドラは愛想良く私生児を迎えたが、此の青年は皇后の不名誉な秘密と共に宮殿の奥深く消え去って再び現われなかった。

娼婦テオドラが如何にして皇后に成上り、何のように皇帝を支配したかは、古今の史家が中でも当時の哲学者プロコピウスが詳しく然も面白く書き残しているし、本篇の主題とは関係が無いから省略する。五二五年、ユスティニアヌスは前述の法律を自ら改正して女優と結婚した。ユスティニアヌスは四十三才で初婚、そして怖らくは童貞だった。(筆者自身の経験からして有り得ない事ではない) テオドラは十八才で、経験の豊富なる事は言う迄もない。ユスティニアヌスとの間に(出生後未命名で死にはしたが)一人の娘が出来たから男が不能者で無かった事は確である。斯かる結婚は通俗の場合でも読者が想像する通りの結果になる可きで、果してそのようになった。五二七年、ユスティニアヌスは皇帝となり、テオドラは二十才で皇后になった。五三二年、所謂「二力暴動」が起り、五十才の皇帝は退位と逃亡を決意した。二十五才のテオドラが勇気を以て反撃を命じなかったら皇帝の決心は実現されたであろう。以後十六年間皇帝は皇后に頭が上らなかった。

帝国臣民にしてテオドラの前身を記憶しているならばそれだけで不敬罪と叛逆罪を構成した。テオドラの秘密警察と特高監獄は全技術を振って皇后の過去を根滅する事に努め、皇后は不謹慎な私語の為に拷問に附される市民を近く眺める事に最大の慰安を持ったと伝えられる。テオドラが命じた拷問と処刑の記録をプロコピウスの歴史からひろって行くと、正しく奇巧向きの記事が出来るが、余りにも残酷過ぎて筆者には書けない。兎に角獄中で死んだ者は幸福な方

で、多くは財産の他に何か二品を、即ち各自の手か足か眼の中どれか一對を奪われた上で生存する事を強制されて放免された。此の生存は各自の家族の生命を担保として保証された。斯かる処刑の執行はテオドラ自身の物凄く宣誓に依って一層厳肅なものとなった。

「其方が執行を怠るに於ては、必ず体から皮を剥ぎ取る事を誓言する。」皇后は十字を切って宣誓を確立した。命令された吏員は忠誠か恐怖かでそれを実行した。

テオドラは女優時代に貞操を濫売したが、それは金銀が目的であり、肉慾の爲ではなかった。皇后となった事は美貌と理智を最高価格で売った訳であり、ユスティニアヌスに対する貞操を、皇帝が皇后に与えるそれと等しく生涯守り通した。但しテオドラの体力は情夫を設ける程健康的ではなかった。

アントニナはアナスタシアと同年、テオドラ皇后と二才違いだった。彼女の母は日本で言う赤線芸者で、父も祖父も収入は多いが賤しい競走馬車の駆者だった。家には資産が有ったから劇場に出る必要は無かったが、彼女は自ら望んで此の下等職業に就いた。但しアントニナの容姿は公衆に誇示出来る程度に優れていた。背丈はテオドラより少し高い位だが健康的な丸い感じで、色も幾分濃く髪はブルネットに近かった。性格的な特徴は燃え出したら止らない熱情にあった。劇場ではテオドラと組んで出演するようになり、以後二十五年間皇后と善悪様々なコンビを形成した。

テオドラが被虐役を演じる時には男装のアントニナが殴り役や縛り役をした。その他に彼女の特技として縄脱けがあり、綱の目程に縛られた中から巧妙に脱出して観客を驚かせた。尤もこれは縄の方に仕掛があったらしい。アントニナの貞操も乱倫極まるものだった

が、テオドラのそれが金銭の爲の寧ろ理性的な行為だったのに比しアントニナの方は富裕でありながら情熱に身を任せた奔放なものだった。

彼女は二十才以前に法律上の一人の夫と無数の情夫を作り、十五才の時にフォラウスという男児を生み、ベリサリウスに再婚した時はそれを連子としていた。女優時代にはアントニナの方がテオドラを援助して多くの貸倒れを作ったがテオドラが皇后となるやアントニナは高級スパイを務め、五四〇年には大都督ヨハンネスを失脚させる大功を樹てた。ベリサリウスの異例の出世は彼自身の戦功と軍事能力に依る事は勿論だが、アントニナと皇后の特殊関係に相当影響された事も考えられる。皇后の性格が前述の如くであるからベリサリウスの地位が未だ絶対的でない間は妻に対し、即ちアントニナを通じて皇后に対し、奴隷的に服従しなければならぬのは寧ろ当然であつたかもしれない。足に接吻する行為は前例の無いものではなく、帝国に於ける正式儀礼の一種だったが、それは皇族に対する臣下の最敬礼と主人に対する奴隷の挨拶に限られた。アントニナは此の権利を夫に濫用した。当時地中海世界では未だ男でもズボンの着用を蛮風として嫌悪したが、アントニナは乗馬外出の際好んで細目のストラックスを用いたから、斯かる場合土下座して妻の裾を折り返す將軍の不体裁は倍加した。

二

アフリカに於けるヴァンダル族の王国は建国以来百年を経過し、既に精神的にも取得時効を完成させていた。トラシモンドの後を継和なヒルデリックが相続したが、彼の政權は親ローマ的だった。蛮族の大部分は未だ反ローマ主義で、ゲルメルを代表に立てて王国

を篡奪し、ヒルデリックとその妻子や親族を地下の土牢に幽閉した。ユスティニアヌス皇帝は、ゲリメルに対し前王一族をコンスタンティノポリスに送って余生を過させるよう勧告したが拒否され、ヒルデリックは両眼摘出の刑を受けた。

ユスティニアヌス皇帝は、ヒルデリック救出を名としたアフリカ討伐の好機到来として会議を召集したが臆病な臣民の為に賛否は相半ばした。例に依って勇断事を決したのはテオドラ皇后だった。帝国のアフリカ諸将は遠征を名誉よりも危険の大きい事業として敬遠したが、ベリサリウスが任命されると誰もが異議を称えなかった。二十九才の將軍は既にペルシャとの交戦に於て智勇の名を表していた。即ち五三〇年募兵を揮い、援將としてダラ市を守り、ペルシャの大軍を撃退した。敵將はダラ市民に風呂の用意を命じ、日時を通化して大挙襲来したが城壁上から温浴に代る熱湯を注がれて退散した。翌年の戦でベリサリウスは二万五千の混成軍を以て四万のミラン族を粉碎し、八千の捕虜を得た。これが東方で媾和を締結する誘因となった。

五三三年六月。九十二隻の軍艦、五百隻の輸送船は二万の水兵や水夫に操縦され、一万五千の兵、五千の馬、三箇月分の食糧と武器や攻城用重装備を満載してコンスタンティノポリスを出港した。陸軍は四百のヘルル族、六百のフン族を含む五千の騎兵と一万の歩兵、輜重諸兵より成ったが戦力の大部分は騎兵隊に繋がっていた。

遠征艦隊は飲料水の一部を降雨から得る予定だったが、途中十六日間晴天が続いたので大いに苦しんだ。アントニナが船底に砂を盛って太陽を遮った中に水を満した硝子罐を隠して置かなかったら將軍自身も困ったであろう。但しベリサリウスは妻が差出した大將の

飲料を僅か宛兵士にも分与した。

ヴァンダル王国ではサルズニヤ島總督ゴダスがヒルデリック前王の為に叛乱を起し、ゲリメル王の弟ザノーは兵五千、艦船百二十を以てその討伐に向っていた。ヴァンダル族の総人口は七十万に近く、徴兵適齡者亦十六万に及んでいたが、その中には前王の同情者や臆病者を多数含んでいた。

九月、ベリサリウスは艦船をカプトヴェダ岬に導き、各船五人の衛兵を残して全軍全資材を揚陸した。ヴァンダル王ゲリメルは王弟ザノーの帰還を待たず、首府カルタゴ南西十哩に於てベリサリウスを邀撃した。此の地は千四百年後にもドイツアフリカ軍団によって致命の戦場となった。蛮軍五万は三方から同時襲撃を試みたが却ってベリサリウスの各個撃破を蒙った。王弟アンマタスは過早な突撃でローマ兵十二人を討取った後戦死し、彼の軍は潰乱した。王の甥ギバムンドは前進を躊躇している間に襲撃されて倒れた。ゲリメル自身は主力を率いていたが機に遅れ、ローマ軍の前衛を撃退はしたが追撃を怠り、アンマタスの葬儀に無用の時間を空費した。ベリサリウスは混乱した騎兵を纏め、七千の歩兵等と輜重車及びアントニナを残し、大旋回運動の後側面攻撃を展開した。折しも南のモロッコ風猛烈に吹き起り、輜重隊を託されたアントニナは、千余の車輜を砂漠中に円運動せしめ、ローマの騎兵隊は濛々と立騰る大砂塵の中から恰も大軍の前衛の如く駈出てヴァンダル軍を衝いた。ベリサリウスは自ら蛮王に迫った。斯かる戦闘方式は寧ろ蛮族の方こそ歓迎すべきものだった。にも拘らずゲリメルは我が英雄の槍先から逃走した。

ゲリメルは前王ヒルデリックと、その一族を殺戮した後スミヂヤ

砂漠に奪った。カルタゴは又も帝国の肴となった。ゲリメルとザノの家族はローマ軍に捕えられた。ベリサリウスはゲリメルの妻子を鄭重に遇して危害を加えなかった。

十一月。蛮王兄弟は十万と誇号する軍を以てトリカメロンに陣した。ベリサリウスは帝国軍の歩兵を余り期待していなかったから、戦闘を専ら騎兵戦に導いた。蛮軍の主戦力はザノの騎兵だが彼等は弓を持たず、弓手は馬に乗れなかった。ベリサリウスが自ら訓練した親衛隊は騎乗して距離に応じ弓と槍を自由に使用し得た。運動戦に於て少数なローマ軍の方が両翼を延伸した尖角内にヴァンダル騎兵を引包んだ。ザノは戦死しゲリメルは敗走した。此の一戦でヴァンダル王国は倒れヴァンダル民族は歴史上から消え去った。

ゲリメルは荒涼たるマウル族の土地に逃込んだ。カルタゴ宮殿の美妃に囲まれ美食に飽きた生活から、泥小屋に家畜と同居し焼麦を嚙む状態に陥った蛮王は、それでも降伏の勧告を一応斥けた。併し勸降使はゲリメルに一塊のパンと海綿と豎琴を哀願されて首を傾げた。ゲリメルは永い間パンを食べていなかった。王国と民族と弟達の不幸を余り永い間泣いた為両眼は湿疹に冒されていた。失明に近い蛮王の楽しみは音曲より他に無かった。ベリサリウスは蛮王の若い妻を無条件で釈放し、三種の異様な贈物を持たせてゲリメルの所に行かせた。蛮王夫婦は贈られたパンを細かく砕き、泣きながら一片宛喰べた。そしてそれが無くなった時降伏した。

ベリサリウスが戦利品の中から相当な個人的財産を作った事は否定出来ない。併し当時の習慣として將軍たる者は私費で私兵を養うのが一種の義務でもあったから蓄財も戦時の財源として容認する事が出来る。然もベリサリウスは相当な額を強慾なアントニナに引拔

かれたのを知らなかったか又は黙認した。

ベリサリウスは潔癖だった。兵士にも掠奪を許さなかったが、自らも提供されたヴァンダル族の美しい処女達を悉く妻の腰元に払い下げた。ケーザルなら斯かる献上を嘉納したであろう。此の点ユスティニアヌス皇帝と共にベリサリウスは選を異にした。

併しアントニナは、夫の貞操に應えなかった。ベリサリウスには男児が居なかったので養子にする目的でトラキヤの後輩テオドシウスに洗礼親になった。その青年は美貌と教養を兼備していた。アントニナとテオドシウスはアフリカに航行する船上で早くも不倫な關係を結び、全軍中主将だけがその事実を知らなかった。乃至知らない風を装った。カルタゴ攻略後ベリサリウスは或る地下室で突然密通者を発見した。アントニナもテオドシウスも丸裸で、二人の衣服は一塊りになって転っていた。ベリサリウスが怒るより先にアントニナが言った。

「私達夫婦の財宝をテオドラに取られないように隠す為、手伝って貰っていました」

青年は汗を拭きながら、服を持って立去った。妻に誤解を謝ったのは將軍の方だった。

ベリサリウスは当代最高の技術を以て仕掛けられた逆スパイを幾度となく見破った名将である。併しその透徹した眼力を以て、妻の見えすいた嘘を観破し得なかったのは一層の驚異である。

五三四年秋、ベリサリウスは、親衛隊と捕虜を併ってコンスタンティノポリスに凱旋した。謙虚な將軍は歩兵隊の先頭を歩行した。莫大な戦利品の中にソロモン王の宝器があった。ユダヤ教の金盃や燭台はバビロンに往復し、ローマに持去られ、ガイセリックに奪われ

てカルタゴに置かれ、漸くにして今はキリスト教会になっているエルサレムの元の土地に戻って来た。

凱旋將軍は、臆病な皇帝と娼婦皇后の下に平伏した。皇帝は臣下を嫉妬した。ローマ皇帝は武徳を第一とするが故にこれは当然だった。併しベリサリウスの軍功は高く賞され、金銀は市民の間に振り撒かれた。

同じ年イタリヤでは政変が発生した。東ゴート王テオドリック一世は五二六年に死んだが、老王には晩年の娘が一人だけで、相続すべき長女アマラスエンタの夫も既に死に、只一人の孫アタリックが形式的な国王になった。ゴートの王統は女に伝えない事になっていたからアマラスエンタは摂政の地位に就いたが、彼女の優雅にして高い教養は当代君主中最高のもので、然も容姿は自惚強きテオドラ皇后が肖像を一目見て敗北を認めた程であり、東ゴートの王権は實質的に摂政女王の手に歸した。アマラスエンタは文化を好み、東ローマ帝国と和親する政策を採ったが、これは当然ゴート臣民に嫌われた。彼女がその名を借りて支配していたアタリック王は十六才で病死したので摂政の合法的支配権は失われた。彼女は尚も形だけの王を夫にして支配を続けようとしたが遂に夫に選んだテオダッスに裏切られて破滅した。

三十三才の摂政女王は宮中の私室でテオダッスが導き入れた陰謀の一味に捕えられた。筆者も若干の歴史書を読んでいるが、十三年間に亘ってイタリヤのような大国を支配した斯くも若く美しい女王が、斯くも悲惨な最期を遂げた例を知らない。マリーアントワネットにしてもメリーステュワートにしても縛られたのは一回だけだったし死刑は一瞬で足りた。純ゲルマン種の豊満な摂政女王は謀叛者

に王章を奪われ、下着だけに引剥がされ、手は後で縛られ、荷物のように巻き締められた上、頬から溢れる程の猿轡迄嚙まされ、衣裳箱の中に詰め込まれた。

アマラスエンタの押籠められた箱は荷馬車に載せられた。百五十軒離れたボルセナ湖上の一孤島に箱が到着するには二日を要した。地図に見る如く道中は険阻な山道であり、船に積替える際箱は投げ落された。島に到着して漸く美しい女王は縄と猿轡を外されたが筆者にはその時の女王が何のような状態だったか想像出来ないし、従って本篇に書く事も出来ない。寧ろアマラスエンタがよく生きていたと不思議に思う。

摂政女王は在位中善政を敷いていたから各方面から敬愛され、殊にイタリヤ土着民からは慕われていた。故にアマラスエンタの監禁は嚴重を極めていた。未だ騎士道発生せず、父系專制を絶対とするゴート人は婦人を尊敬しなかったし、武勇の素質を欠いた彼女が未だ蛮風を保存するゴート族に嫌われた事と共にアマラスエンタは凡ゆる虐待を被った。摂政女王は朝夕の身繕いや食事等に要する時間以外は手を後に縛られ、眠る時は前で手錠を掛けられていた。

ユスティニアヌス皇帝はテオドラに契められて問罪使を發した。アマラスエンタを復位せしめなければ無敵のベリサリウスを即時派遣して討伐するという威嚇が附けられた。東ゴート王国は實質に於て蛮族王国であるが、形式的には東ローマ皇帝に任命された藩属国となっていたからこれは当然だった。一方、ヴァンダル王国が文弱化して滅亡の原因を作ったのと異り、建国三十九年にして未だ尚武の風を残していた。

テオドラの残酷な理性は、アマラスエンタの生存が公私共に有害



である事を直ちに悟った。摂政が権利を回復すればイタリヤ王国は帝国に戻らず、位を失って帝国に亡命して来れば個人としてのテオドラの魅力が奪われる恐れがあった。アマラスエントは単に美貌に

於てテオドラを圧倒するのみでなく、門地に於て娼婦と比較にならず、教会に於てギリシャ語とラテン語とゴート語で自由に詩や哲学を表現出来る摂政女王こそ皇帝の配偶者に相応わしかった。帝国の使節はアマラスエント救出を暗示し、これが彼女の死期を早めた。

テオダッス王の命令で派遣された刺客は浴室内でアマラスエントを襲って嚴重に縛り上げた。一切の衣類を着用せずに縛った理由は次に続く処刑の必要からだった。謀叛人達は摂政女王を、殊にその美貌を憎悪していたし、彼女の痕跡迄も抹消する事が謀叛完遂の為に必要だった。美しいアマラスエントは手足を縛られて浴槽に落され、沸騰点迄加熱された湯の中で凡ゆる肉質が溶解する迄煮られた。麗質を証明する跡形も留めず、彼女は骨のみを残して消え去った。

筆者は某友人から、アマラスエント虐殺の浴場が現存すると聞かされた事があるが未だ確かめていない。

テオドリック大王は英雄の名を残したがその一族は三代目に絶滅の悲運を見た。然も、妹アマラフリダと娘アマラスエントの二人迄もが縛られて虐殺され、死屍の回復も出来ない悲惨に遭った。

三

五三五年十二月、ベリサリウスは帝国軍を率いてシチリヤ島に向

った。帝国の軍事力はアフリカ討伐に出し尽くされ、大部分は其処に留ってマウル族討伐に従事中だったから、ベリサリウスがイタリア討伐の為に受取った軍隊は彼自身の親衛隊の他には微弱なものでしかなかった。騎兵は二百のフン人と三百のアフリカ人及びベリサリウスの私兵四千。歩兵はイサウリヤ人三千。合計七千五百人に過ぎなかった。相手のゴート族は人口八十万、戦士二十万を算し、数百万のイタリア人はその支配下に在った。千二百余年の後、ナポレオンは四万の兵を率いて隣国から侵入し、十二万のオースタリー兵を破ってイタリアの北半分を征伏し、奇蹟と言われた。英雄の度を表す数値を較べてみるがよい。

ベリサリウスはシチリヤ島のカタネに上陸した。パレルモは頑強に抵抗した。海岸要塞は軍艦の甲板を見下す高さに堅固な城壁を有し、射撃兵器で満たされていた。但しガレー船の橋頭のみは城壁よりも高かった。ベリサリウスは艦隊を港の奥に導いた。各船の短艇は綱と滑車で橋頭に引揚げられた。その中には精撰された弓手が満載されていた。パレルモの要塞は空中攻撃を蒙って忽ち降伏した。

ベリサリウスはシラクサを制圧して此処にイタリア討伐の本拠を置いた。年内に全島は征伏された。シチリヤ島はローマ其他に麦を供給する地位にあり、ゴート王国に与えた損害は甚大だった。

ベリサリウスは直ちにイタリアへ進攻せんとしたが二つの事故で僅かだが遅らされた。一つは公的なもので、一つは私的なものだった。アフリカで八千のヴァンダル人が叛乱を起したので將軍は一千騎を率いて南航した。現地で二千のローマ兵を吸収すると、兵数の多寡は問題とせずに火攻を決行して叛軍を殆んど殲滅し去った。

次には、アントニナの侍女マケドニナが、主人の不貞を見るに耐えなくなつて訴えて来た。シルヴィアとアイオネの二人の腰元まで証人に立てられた。アントニナとテオドシウスの情事は半ば公然と行われているとの事だった。これは放置すれば將軍自身の体面と威信に拘る問題である。ベリサリウスはアントニナ不貞の事実を始めて知った。乃至はそのような真似をした。何れにしても將軍は始めて妻に対して怒った。そして將軍の驚愕と憤怒は、それを演技とするには余りにも迫真的だった。テオドシウスを死刑にする命令が直ちに兵士の一人に与えられた。併し此の命令は故意か偶然かでテオドシウスが逃亡する迄執行を遷延された。そして逃亡後に取消された。アントニナは証人が三人も居たにも拘らず、信じ易い夫に情交の不存在を承認させた。無実の誤解を謝罪したのは又してもベリサリウスの方だった。

ギボンには「有罪な女の復讐程残酷なものはない」と書いている。

マケドニナ等三人はベリサリウスに契められて逃亡したが裏面工作はアントニナの本職だった。マケドニナも、シルヴィアも、アイオネも、秘かに捕えられた。ベリサリウスとローマ軍の眼を避ける為に大石坑が利用された。此の石坑は現在でもシラクサの名所になっているが、古代に於てシラクサを建設する際、石材を切出した露天堀の跡で、底部は複雑な割目や洞穴になっている。約九百五十年前アテネの捕虜七千人が縛られて餓死させられたのも此の石坑だった。其後は刑死者の遺骸を棄てる場所として利用されていたから、葬られない白骨が累々として、雨の夜には燐火が飛んでいた。(古代西洋にも人魂が出た)

マケドニナ等、三人の女は荷馬車に立てた三本の柱に縛りつけら

れ、麦束の底に埋められて石坑に送られた。アントニナは自ら残酷な刑の執行を指図した。猿轡のような手ぬるい事はせず、引き抜かれた三枚の舌は恰もペンダントの如く各自の首に飾られた。但し傷の出血だけは簡易手当で止められた。両手は後に廻り高く頸に吊られ、腋の下を廻った鎖は三人の体を崖から下げていた。飲食は与えられもしなかったし、舌を抜かれては出来る筈もなかった。従って三人共二日と保たず死屍となったが、アントニナとしては、もっと時間をかけて処置したかった事だろう。そうしなかったのはベリサリウスのイタリア本土出陣が切迫していたからで、アントニナはそれに遅れまいとしていたから、マケドニナ等の苦痛は短期間で終らされた。尤もその死体は寸断されてオルテュギアの崖から外湾の海中に投棄された。

アントニナが快楽を打ち切って従軍を急いだ理由が、不貞の後味を紛らす為か、本来闘争を好む性癖に依るものか、ベリサリウスの傍に居たかったのか、筆者は知らない。併し悪妻アントニナが此の戦役期間中はテオドシウスなしに三年に亘り我が英雄と困苦危難を共にし、殊に戦役の末期には単身で夫の為に生涯最大の冒険も行った事は特記してやらなければならない。

ベリサリウスはイタリア本土進攻の為、シチリヤ島北端のメッシナに在り、マケドニナ等三人の虐殺を全く知らなかった。

ユスティニアヌス皇帝は、イタリア征服の名誉を、ベリサリウス一人に与えたくはなかった。ベリサリウスに僅かな兵を授けてシチリヤに送り出すと、直ちに別の將軍二人に命じ、ダルマチャ方面から東ゴート王国に侵入させた。此の二將軍は何の効果も収めずにくぐ敗死した。

ベリサリウスは、帝国の全期待を担ってメッシナ海峡を渡り、対岸のレッジョに上陸した。千三百余年の後ガリバルヂが、千四百余年の後、アイゼンハウアーが同じ進路を通った。陸軍六千五百と艦船二百が雁行した。歩兵各五百がシラクサとパレルモに残留し、シチリヤ島を基地としていた。

ネアポリス（ナポリ）は、ベリサリウスの進路を遮った。市民は二十万、兵はゴート兵八百とそれに使役されるイタリア人一万が居た。城壁は堅固で武器整い、食糧は一年を支えるに足り水は井戸から自給し得た。併し一人のイサウリヤ人が、廃棄された下水道の乾渠を発見したので攻撃路が開けた。四百の撰抜兵が地下水道を通じて市の中心部に潜入した。末端は開渠になって或る大邸宅の庭に出ている。溝の上に橄欖樹の枝が伸びていたので先頭の兵が綱を投げ掛けた。

ネアポリス市民は帝国派と民主派に分裂していた。ローマ兵が侵入した邸宅は民主派の地区にあり、最も安全な場所として家族避難所となっていた。男達は城壁の警備に出ていたので、邸内には妻や娘ばかり二十五人と幼児若干、それに同じ位の女奴隷が居た。当然の事だが男は故意に除外されていた。この約六十人を迅速確実に抑留する事が侵入者にとって最も重要で最も危険な仕事だった。一人でも脱出するか、少くとも声を出されると、侵入者の全滅は確実だった。そしてこれに成功した時ネアポリスの運命は決した。

物音に氣附いて出て来た奴隷娘を物蔭から襲って口を抑えたのを手始めに、回廊を道遥中の貴婦人二人や庭に出ていた娘三人等が相次いで取押えられた。庭の出口を扼し、建物の戸や窓を封鎖した後、出会う女達を或は剣で威嚇し、又はより強力直接な手段を用い

るかして発声を封じ、順々に縛って行った。半時間以内に邸宅は占領され、幼児を除く五十人以上の女達は嚴重に縛られて地下室に監禁された。

原文は「口を封じて」とある。これを「猿轡を噛ませて」と訳してよいか否か、識者の御批判を待つ。単に威嚇を以て発声を禁じたのかもしれないから。

「縛る」のも、何のように縛ったかは明瞭でない。併し文書、壁画、彫刻等より判断すると、ローマ帝国は昔から将官捕虜のような名誉囚は手を前で合わせて鎖を以て繋ぎ、刑法犯を含む他の者は一層不名誉な後ろ手に縛った如くである。ローマ最古の十二銅表法に於ても「手を鎖で繋ぐ」罰と「手を背中で縛る」刑とを区別している。そして女性は何れの場合後者を適用された。何と日本の江戸時代に似ている事か。

故に五十余人の女達は貴婦人、奴隷の区別無く、一様に手を背に縛られ、面紗ヴェールかマフラーの類で口を割られたのであろう。

閑話休題。ネアポリスは内外から挟撃され翌早朝迄に陥落した。

アントニナの連子フォテウスは此の戦に十三才の初陣を飾った。

臆病なゴート王テオダッスは、不満のゴート人に殺された。剛勇なヴィテゲスが王となり、沈滞したゴート族の勇気を振作すべく努力した。脆くも崩潰したヴァンダル王国と異り、ゴート族には未だ剛健の蛮風があった。併しベリサリウスの進撃は迅速だった。ネアポリスとクメを含むカンパニア地方に五百の兵を留め、六千の主力を以て旧都ローマに迫った。ヴィテゲスはベリサリウスの鋭鋒を一時回避し、ゴートの全力結集後に反撃せんとした。ローマはレウリデスと四千のゴート兵に託された。レウリデスは死守を誓った。併

しベリサリウスが接近すると、ローマ市を守るゴート兵はレウリデス一人を残して逃亡した。レウリデスは捕虜となり、ローマ市は六十年目に帝国に回復された。

嘗て、ハンニバルは不出世の名将と言われながら一生かかってローマを征服出来なかった。両スキピオはローマの全国力を傾注し、二代半世紀かけてカルタゴを亡した。ベリサリウスは僅少な、それも素質劣悪な兵を率い四年間に数十万の敵を破ってローマとカルタゴを両方とも攻略した。

併しイタリアの戦闘は寧ろ、これからだった。五三七三年三月、雪解けと共に十五万のゴート兵は全国から集り、タルビス峠を越え、ヴィテゲス王指揮の下に、大挙ローマ市に襲来した。ベリサリウスは輕戦の後、都城に退いた。

ゴート軍は十八日間を費して四台の大破城槌と二十台の攻城塔を用意した。各重兵器には五十人の兵と百頭の牛が附いた。ゴートの大軍はプラエネステ門からヴァチカン区に到る七門の正面に七縦隊となつて待機した。

古代のベリサリウス戦記は、恰も太平記の舞文を読む如き躍動を覚えさせる。ベリサリウスはゴート軍の接近を泰然と待ち、第一矢で隊長クサンツス兄弟を射抜いた。敵将が攻城塔の頂から墜落すると、將軍は射手に対し人を狙わず牛を目標とするよう指示した上で一斉射撃を命じた。重兵器を挽曳する牛は数分間で掃蕩された。運動力を失った破城槌や攻城塔は空しく遺棄された。

蜜王ヴィテゲスは直ちに作戦を変更した。

「大兵に戦術なし」と言うが、ローマ軍に三十倍するゴート軍はサラリヤ門に三万を以て人海戦術を展開する一方で、反対側のハドリ

ヤヌ斯塔陵に主力を転回する余力を持っていた。正に三国志の「偽撃転殺の計」に当る。併しベリサリウスは精兵をハドリヤヌ斯塔陵の上部に潜伏させていた。これ又三国志の「虚誘掩殺の計」である。密集したゴート軍の隊列は一本の投槍をも無駄にできなかった。ベリサリウスは最も危険な戦線に自ら急行して模範を示した。將軍は一戦士としても槍と剣と弓に同等の熟練を有した。

將軍の傍には必ずアントニナが居た。彼女は無袖の胴着に細目のスラックスを太いベルトで締めていた。小柄な身体は胸甲の重量に耐えなかったから蜜族の少年が用いる革胴だけの半武装で、頭部と顔面は髪を束ねた鉢巻状のリボンの他は何も無かった。此の点アントニナの方がより多くの危険に曝されていたと言える。家庭に於て不貞と無道を極めた悪妻が、戦場に於て従順有能な下僚として献身する様は、これ又一つの驚異だった。アントニナは將軍が一矢放つと寸分違わぬ呼吸で次の一矢を弦に添えた。そしてベリサリウスの一矢は裂帛の気合を伴って必ずゴートの一将を貫いた。

ハドリヤヌ斯塔陵上には等身大の大理石像が多数並べてあった。神や英雄の彫刻は蜜兵の頭上に投下された。美術愛好家は古代芸術の喪失を惜しむかもしれない。併し迷信深いゴート族は後陣からこれを見て、天兵ローマ軍に加担して降下すると誤解し、恐怖の為に散乱した。

本攻撃も牽制攻撃も敗れた。ローマ軍はカペナ門を開いて出撃した。喇叭は高らかに突撃譜を奏し、兵士がベリサリウス万歳を連呼して躍進する間に、アントニナは自分の侍女や、将校の妻や使用人で編成した混成女軍を嚮導してゴート軍の遺棄した攻城兵器を片端から焼き払った。

ゴート軍は一日にして三万人を失い、同数が負傷した。ローマ市の攻囲は蜜軍に最も不得手な長期攻囲戦となった。併しゴート軍も必死だった。ティベル河の水源は死体で汚損され、オスティア港は占領された。ベリサリウスは度々出撃してゴート軍を悩まし、疫病に苦しんでいる敵に損失を追加した。今ここで帝国が若干の援軍を派遣すれば、ゴート族の全滅は確実だった。併しユスティニアヌス皇帝は臆病の爲か、臣下に対する嫉妬の爲か積極性を欠いていた。皇帝を動かす力はテオドラ皇后だけで、皇后を説服し得るのはアントニナだけだった。そのアントニナはローマ市でベリサリウスと共に囲まれていた。

アントニナが何と言ってベリサリウスの傍から離れたか筆者は知らない。併し首府コンスタンティノポリスに居る情夫テオドシウスの所へ赴く事が、少くとも主目的でなかった事だけは彼女の爲に認めてやってもよいだろう。アントニナは一人の従者も連れずにローマ市を脱出した。嘗てサーカスで鍛えた強靱な体力と柔軟な運動性は二十八才の今も衰えていなかったし、彼女はテオドラに必敵する勇氣と無類の冒険心をも持っていた。アントニナはゴート軍の三重哨線を潜行踏破し、リリス河の近く迄四日にして到達していた。だが此処で焚火した処をゴート族の小部隊に見えられた。敵は馬上一騎、徒歩十人の徵発隊だった。アントニナの半ば男装したような異様な風態は不審を招くに充分だった。そしてアントニナは短剣も隠していたが、十一人の蜜兵を相手にする剣技は持たないし、ゴート人の脚力に勝る疾走も出来なかった。その代り冷静な判断力と驚異的な忍耐力を活用させようと彼女は決心していた。

ゴート兵が、彼女を縛る目的で縄を取出すと、アントニナは自分

から膝をついて中腰に坐り、更に手を組み合わせた。ゴート兵からは観念したように見えただろうが、アントニナには敵を油断させて逃走する自信が有ったらしい。

アントニナが何のように縛られたか筆者は知らない。だから一応手首の他に胸回りも三巻程縛られたとしておこう。もっと強烈な場面が入用な読者は首縄でも股間縛りでも自由に想像してよい。アントニナは腰部に密着するような服装で下半身を掩っていたから。兎に角、読者の想像するような憐れな姿にされたアントニナは、蜜兵に囲まれ、縄尻を把られ、そして恐らくは打ち叩かれながら曳立てられて行った。

四

アントニナを縛ったゴート兵は、無住の一部落を発見し、彼女を訊問する目的で早目に舎営した。其処でアントニナが、何のような目に遭わされたか、実際には何も解っていない。彼女は文書らしいものは何も持っていなかったし、武器も懐剣程度だけだった。そして何よりも女だった。多分、ベリサリウスさえ欺き通した口舌で、頭の弱いゴート兵を軽く騙した事だろう。

尤もアントニナが拷問された事にしなければ満足出来ない読者も居るだろう。そうしてもよい。真相は解らないのだから。併し本気で貴小説を書くのなら、アントニナでは物足りない。彼女は確かに美人で、年齢も手頃な上、弾力的でもあるのだが惜しむらくは小柄過ぎる。始めからグラマーの女従者を一人か二人登場させておくべきだった。

筆者は残酷な事は余り好まないのだが、悪女アントニナに限り彼女が十一人の蜜兵に囲まれて滅茶苦茶な目に遭わされる情景を想像

して快感を覚える。ベリサリウスを侮辱した罰を此の際存分に受けるがよい。アントニナは天井から逆に吊された。蜜兵十一人は交替に立って鞭と棍棒で打ち叩き、アントニナに何の目的で何処へ行くのかと白状を迫った。アントニナはカプアからミラノへ逃げる途中位の嘘を言っただろうし、蜜兵はそれを信用しなかっただろう。彼女は女優でもあったから故意に恐怖を装い、必要以上に絶叫し、悶絶した如くに見せた。或は短時間本当に失神した。併しその度に水を浴びせられて覚醒した。ゴート族の蜜兵がそれ以上の、奇巧的責技術を持っていたとは、仮定する方が無理だろう。暴力一本の野蠻的拷問が夕方一杯続けられた。但し二十八才のアントニナの体が蜜兵の情慾に対象とされなかった保証は無い。アントニナは輪姦されたかもしれない。そうだとしても、本来不貞な彼女を憐れみはしない。只ベリサリウス將軍には同情する。併しアントニナが責殺されて了ってはベリサリウスも破滅しなければならぬから残念ながらこの場はアントニナに脱走させなければならぬ。

アントニナは吊られたまま気絶し、ゴート兵は責め飽きた。天井に吊った綱を切ったのでアントニナの体は音を立てて床に落ちた。蜜兵はそれを引き擦って柱に繋ぎ、彼女が意識を失っているのを確認した上で放置した。但しアントニナを柱に縛りつけた縄は、手首と柱を結んだだけのもので、彼女が横臥出来るだけの長さがあった。アントニナが実際に気絶したとしても、間もなく意識を回復し、しかも蜜兵には昏睡中を装った。蜜兵はアントニナが当分立てないと信じ、哨兵一人を残して眠ってしまい、番兵も戸外の方を向いていた。だがアントニナは参っていないかった。劇場用に鍛えられた体は充分次の活動に使用出来た。

縛ってある女は逃げないという致命的な錯覚をこのゴート兵を持っていたのだろうか。但しこの誤りは始めて女を縛った者だけが犯すものである。少くともゴート兵は油断していた。そしてアントニナは巧妙に意識不明を装った。これは困難な演技である。縛られて少しも寝返りしないなら何処かが痺れて来る筈だから。

昔、テオドラと組んで演じた加虐、被虐の所作が何の程度参考になったか。縄抜けの秘技が役に立ったか否か。とにかくアントニナは背に回された指先で柱に繋がれた縄目を解いていた。

筆者自身、当年二十七才のある女性で実験した結果、確信した処であるが、女体というものは如何に縛っても必ず自力で解けるものらしい。縛られる方も「熟練」すると手首を僅か傾けただけで重ねた間に隙間を作ったり、胸の一部を変形又は膨張させ、その近くを縛らせて後で元通り縮小し、縄を緩めたり出来るのではないかと思う。但し、筆者は書物を読む方は幾分努力するが、実験的考証の方は極めて貧弱な資料しか有しないから先覚諸賢の御教示を戴ければ甚だ幸いと思う。

とにかくアントニナは自力で自身を柱から解放した。足首を縛った縄も後に回っている自分の指先で解いた。この動作が可能である事は筆者自身の前述のものと同一資料によって確認した。特に柔軟に出来ているのかもしれないが、首縄さえなければ足の結び目は前側に有っても解けるように思う。

アントニナは手首の縄だけを、直ちに解く事が出来なかったらしい。当時の状況を再現する事は困難だが、手首を腹部に縛りつけられたのか。今までの動作で痺れて了ったのか、手首を縛った縄と柱に繋ぐための他の縄とが混乱して解けなくなったのかの何れだろう。

縛られる事を覚悟している女は（そういうものが有れば）五指殊に小指の爪をある型に切って備える事が出来る。前述の女性は縛られる時に後に回った手首の結び目が何の位置で何方を向いているかを正確に記憶している。そして何の爪で何の部分かを何う引いたら解けるかを宣言し、実験観察者の眼前で指摘した通りに後ろ手から解放して見せる。結び目を手の甲側に作っても効果がない。結び目を複数作ればある程度効果が上ると思うが、筆者の資料においては三箇所までなら順序、位置、方向共正確に記憶されていた。但しこの被験者は細い掌と、長い指と、瘦せた体と、数学的頭脳と（柔軟な体と、忍耐力と、十人中四人目位の容姿と）を持っている。

アントニナは手首の縄を解き得ないまま、逃亡したのだから筆者の貧弱な実験に劣っている。しかし、縛られた後ろ手で門前の馬を解き、石段の上から馬背に直接飛び乗り、手を使わないで馬を疾走させ、逃走したというのが本当なら彼女の神経は鋼線張りである。ゴート兵は馬が一頭しかなかったので、慌てて足で追掛けたが及ばなかった。

両手を使わずに馬を全速疾走させ得るか。古代武人は馬上武器使用のため両手離し馬術を重視した。しかし、それは短時間に限られる。ケザールは手を背中に組んでマルス練兵場を十二周したという。これも自転車と同じく、直線路か単調な周期運動の場合にのみ可能で、人と馬をそのように訓練してあるから出来るのであり、かつ、常に手綱を握る用意がある場合にのみ実行し得る。（筆者の経験より）

アントニナがサーカスにおいて特殊馬術に熟練していたとしても、この話は劇的に過ぎて信用し難い。後ろ手の縄を自分で解き、

馬を盗んで逃走したとする方が自然であろう。だが、彼女が縄目を脱出前に爪で解いたか、脱走後に石で擦切ったかの問題は別として絶対の危地から自力で脱出した事は真実である。

アントニナはネアポリスから海路コンスタンティノポリスに直行し、テオドラ皇后にイタリア戦線の戦況を奏上して援助を請うた。ユスティニアヌス皇帝もテオドラ皇后に動かされて漸く腰を上げ、資金（軍隊ではない）と武器と食糧を提供した。その現金でゲルマノ系の將軍マルティンはスクラヴォニヤ人六千人を傭い、ヴァレリヤヌスはフン人四千人を獲得した。アントニナはイサウリヤ人歩兵三千人を募集した。他に帝国正規軍の騎兵が二千だけ加った。

アントニナは三千の歩兵と共に海路ネアポリスに赴き、カンパニヤで募集されたイタリア兵一千を合せてオステイアに進航した。他の軍はタレントゥムに上陸し、輜重車の大群を伴ってアッピア街道を北上した。

ベリサリウスはペラエネステ門から出撃し、アントニナはこの牽制攻撃に乗じて軍と食糧をローマ市に入れた。

ベリサリウスがアントニナを何のような態度で歓迎したか、記録が残っていないので解らない。今日こそアントニナは平伏して足に接吻させる権利を常に増して強要する事が出来る立場にいた。しかし彼女はその権利を放棄したか少くとも保留したであろう。陣営における優越関係は、宮廷や家庭のそれと全く異なる法則に支配された。ここにこの夫婦の不思議があった。アントニナはベリサリウスの軍なる一將校であり、將軍は妻の功勞と冒險を主將として賞した。それ以上の事はローマ解囲の日まで保留された。

ゴート王ヴィテゲスは、死体收容を名目とする休戦を提案して来た。使節はピンキウス宮殿内の大本營に通された。そこで彼等は、

室の中の中央に置かれた豪華な寝椅子と、その上に悠然と横臥した小婦と、その足の方に置かれた椅子に端坐している大將軍とを見た。ベリサリウスは使者の言を黙って聞いていた。しかし、アントニナは、ヒステリックにどなりつけた。使節の一人は数箇月前にアントニナを縛った隊長だった。彼はアントニナを見て何か言おうとしたが、一目睨まれると慄え上った。

ヴィテゲス王は、ローマ市中にベリサリウスよりも高位の婦人、おそらくは皇族の一人がイタリアを統治する目的ですでに到着していると信じてローマ軍の強気に驚いた。

アッピア街道を進撃する一万二千のローマ軍は旧都南方に続々現れて来た。ベリサリウスはアントニナが連れて来た兵を夜の中にオステイアに歸し、昼には堂々とローマに進軍させ、これを数回繰返した。一方では、城壁上の灯火を毎夜三百宛増していった。

ヴィテゲス王は、現在ローマ市附近に居る約二万のローマ軍が単なる先陣であり、陸軍はすでにカンパニヤ平原に充満し、海軍はチレニヤ海を蔽って航行中であると甚だ輕卒にも信じ込んだ。ローマ市の攻囲は一年と九日の後撤去された。五三八年三月だった。

ベリサリウスは、ピンキウス門より追撃した。十万人の退却はミルヴィス橋を渡る際、ついに潰走となった。ゴート兵は自らの恐怖に圧倒され、ティベル河へ真逆様に墜落した。

ヴィテゲス王は未だローマ軍に数倍する兵力と難攻不落のラヴェンナを持っていた。しかしベリサリウスが城門外に現われると脆くも降伏した。

ベリサリウスは生涯の絶頂にあった。しかし、家庭内の幸福は漸く不貞の本性を取戻したアントニナに依って曇らされた。情夫テオ

ドシウスがローマ市に到着した。但し彼を呼返したのはベリサリウスの手紙だった。將軍は養子に戻ってほしいと要望し、テオドシウスはベリサリウス家の財産管理を任された。そしてたちまち四億円相当の財産を着服した。アントニナは夜も昼も情夫を離さなかった。例によって將軍だけが妻の不貞を知らなかった。

北イタリアはゴートの敗残兵が若干の都市を保っていた。しかしユスティニアヌス皇帝はこれ以上ベリサリウスに大権を任したくなかった。イタリアの残敵掃蕩はベリサリウスを必要とせず、ペルシヤ戦線こそ彼の親臨に価するという転任命令が発せられた。將軍はこの命令が不賢明極まる事を指摘しつつも即時服従した。コンスタンティノポリスに帰る事は神格的名将から一奴隸に転落する事を意味するのだが、絶対忠誠なベリサリウスは親衛隊を率いたのみでイタリアを離れた。

イタリアには二万以上のローマ軍が残っていた。ベリサリウスの美德が取去られると、後には、十一人の同格將軍のさまざまな悪徳と、二万人の物慾と肉慾のみが残された。五四〇年、王族トテイラがパヴィアにおいて一千の兵と共に旗を上げたがローマの將軍達は責任を押しつけ合って誰も討伐しなかった。敗残潜伏していたゴート人は次第にトテイラの下に集り、間もなく五千の兵に成長した。漸く討伐に向った二万のローマ軍はフェンザ附近でトテイラと会戦し、忽ち武器も軍旗も投げ棄て十一方に敗走した。トテイラは見る間に十万のゴート人を武装した。ネアポリスを攻略し、更に旧都ローマを包囲した。

五

コンスタンティノポリスにおけるベリサリウスの凱旋式は壯麗を

極めた。全市民の眼が偉大な英雄と、その美しく且つ勇敢な妻に注がれた。にも拘らずアントニナは人眼を憚りもせず情夫テオドシウスを追い続けた。

それなのにテオドシウスは如何なる心境変化を起したのか、アントニナの下から逃げ出し、財産を抱えてエペソスの修道院に入り僧侶となった。何故逃げたのだろうか。

市民の非難に耐えられなくなったのか。罪深い行為に漸く恐怖心を起したのか。それともアントニナの濃厚且つ狂的な情熱に圧倒されたためだろうか。あるいは「激しきは短し」の例通り飽きが来たのだろうか。

但し、エペソス修道院に逃げ込んだ時のテオドシウスは、体一面に鞭の痕があったという。ドナツス教徒がするように（日本にも禅の喝棒があるように）テオドシウスは罪業消滅の目的を以て自らの体に鞭を当てたのだろうか。それともアントニナがカンパニヤの一夜で覚え込んだ鞭の味を一種爽快なものと感じてこれを愛情表現の手段として情夫に試みたのだろうか。だとすればテオドシウス逃亡の理由も鞭撃に耐えられなくなったものとして説明がつく。

小説家なら何とでも都合の良い説明を設けるだろう。しかし、歴史は何も教えてくれない。

アントニナに鞭を振う性癖がついたなら、ベリサリウスこそ最初の被害者になるべきだと反問する読者のために一言弁じよう。

小柄なアントニナが背伸びをして、可愛らしい声で気合をかけながら、大汗をかいながらベリサリウスの背に鞭を当てている情景を想像する不心得者が居るとする。筆者はそのような想像を許しはしないが、この幻想者も、その次に、鞭の下でベリサリウスが苦痛に呻くどころか、くすぐったそうな顔で、半眼を開き、アントニナの無益

な努力を憐みながら、居睡る如くに微笑している処を想像して、その迷夢から醒める事だろう。そのころには幻想の中のアントニナも鞭を投げ出し、地に坐って喘いでいるに違いない。

何故なら、ベリサリウスのごとく、常に先陣に立って最大の危険を、自ら征服して来た將軍は、刀創、矢傷を無数に蒙って皮膚表面を完全に破壊され、鞭程度では刺戟にもならない位に硬化していた事は確実である。小柄非力なアントニナが鞭を振ったら快樂よりも寧ろ苦痛となったであろう。

とにかくテオドシウスに逃亡されたアントニナは怒り、泣き、半狂乱になって、ベリサリウスが如何になだめても聞かなかった。

ベリサリウスは私費で七千の騎兵を養っていた。アフリカやイタリアの廃王も將軍の仁義と權威で安全に保護され、領地さえもらっていたから、ヴァンダルやゴートの捕虜は喜んでベリサリウスの私



兵を志願した。彼の軍は帝国最強の精兵だった。

五四〇年（トティラ挙兵の年）

ベリサリウスは帝国軍や親衛隊を率いてユーフラテス河に出陣し、ペルシャ軍を大いに破った。アントニナはこの出陣に従軍しなかった。テオドラ皇后の命令で大総督ヨハネスを失脚させる高級スパイを務め、それに成功した後、賞としてテオドシウスを強制的に連れ戻す手続きをして貰った。

アントニナの連子フォテウスは実母の不義を見て継父ベリサリウスの所へ奔り、事実を訴えた。この実母、継父の関係が反対なら至極常識的なのだが。

それにしてもフォテウスは、アントニナの不貞をベリサリウスに信用させる事が如何に困難で、且つ如何に危険であるかを知らないのだろうか。知っていても実行したのなら賞讃すべき勇氣である。但し彼はアントニナに二人しかない実子の一人で且つ唯一の男児だ

った。そしてこの年、ベリサリウスは三十一才、フォテウスは十六才だった。ベリサリウスは例によって例の如く始めて（何度目の始めてか）妻の不貞を知り、大いに怒った。

ペルシャ戦線は冬季自然休戦となる気象条件にある。將軍は帰還した。アントニナは、養子テオドシウスを伴って首都郊外に出迎えた。

ベリサリウスは顔を合わすや否やフォテウスを証人としてアントニナに問責した。テオドシウスは自白した。アントニナは僅かに弁解した。それを見たフォテウスはベリサリウスに一本の縄を渡し決断を促した。アントニナはすぐ諦めて將軍に背を向け、自分から手を背中に回した。ベリサリウスは少し躊躇した後、市民の眼を気にしながらアントニナが重ね合わせて待っている両手首の上に縄を巻いた。そして口先だけかもしれないが、すぐにも殺しそうな事を言った。言いはしたが実行は春まで延期した。

フォテウスは実母の処置を將軍に任せ、情夫の方を捕えた。その財産も差押えた。キリキヤの要塞へ送って監禁したのは、苦痛を永引かすのが目的だった。

五四一年春、ベリサリウスはペルシャ戦線へ出征した。アントニナは自宅で監禁されていた。テオドラ皇后は早速干渉し、アントニナを救出した。もっともアントニナは監禁されていたにしては健康で色気も増していた。將軍は今年も勝ったがイタリヤに八倍するペルシャを亡ぼすに至らず、冬になると帰還した。テオドラ皇后は將軍の功を賞したが、アントニナ監禁に就いては譴責を加えた。ベリサリウスは廷臣女官注視の中で妻に謝罪し、その足に接吻しなければならなかった。しかし將軍はこの行為を如何にも歓喜している如く

に行った。アントニナが差し出した足に対し、軽く唇をふれればすむ処を、膝を抱いて、嘗めると言った方がよい位に濃厚に実演した。

テオドラはアントニナの情夫テオドシウスをも解放してやった。

アントニナの歓喜と感謝は度を越していた。彼女はベリサリウスが見ている前で情夫を抱擁した。もっともテオドシウスの方は世にもなさない顔をしていた。アントニナが愛情表現の手段として鞭を使用したかどうか筆者は知らない。テオドシウスは監禁中に健康を害してもいたが、アントニナの爆発的情熱と濃厚な愛撫に圧倒され再会の正にその第一夜において腹上死した。

テオドシウスの死は大きなショックだったらしい。アントニナの不貞はこの事件後に治った。彼女の火の如き情熱も漸く冷めたのか。但しアントニナは三十二才だった。それともベリサリウスとの間が旨く行くようになったのか。他人の家庭は解らない。

しかしフォテウスは実母アントニナから凡ゆる暴虐を被った。テオドラ皇后の特設監獄において利用し得るすべての手段が行使された。これはフォテウスの精神を鍛練する事にのみ役立った。ある友人、おそらくはベリサリウス自身の手引でフォテウスは脱走し、エジプトで僧侶になった。彼はテオドラの死後に帝国一の聖者として尊敬される高僧になった。

五四二年、ベリサリウスはアントニナと共にペルシャ戦線へ出陣した。戦は勝った。しかし、陣中に皇帝死去の誤報が伝えられた。ユスティニアヌスには実子がいなかった。將軍プザスは、次の皇帝はベリサリウスより他にいないと言った。ベリサリウスはそれが聞える位置にいたが、肯定も否定もしなかった。この態度が反逆罪に問われた。皇帝死去のデマを流したのも、叛逆容疑を密告したの

も、どうやらアントニナだったらしい。

ブザスは嚴罪に処せられた。ベリサリウスも皇帝から有罪の宣告を受けた。將軍は自邸に退いて死刑命令を待った。日本と同じく名誉刑としての自殺が認められる時代だった。しかし、アントニナは夫を屈伏させようとはしたが、滅亡させる気はなかった。夜遅くなつて皇后の手紙を持ったアントニナが帰つて来た。手紙には刑量が記してあった。

「アントニナの忠誠に免じて將軍の刑一等を減じ、罰金刑とする。」ベリサリウスに科せられた罰金は、一億二千万円に相当した。將軍の私兵は解散させられ、籤引で宦官に分配された。その上「兵隊の位で」元帥から少將に落され、すでにガダルカナルと化していたイタリア戦線に左遷される事になった。

ベリサリウスの罪は無実であり、皇后の赦免は侮辱だった。しかし、ベリサリウスは生命の恩人としてアントニナの前に平伏し、膝を抱き、足に接吻して感謝した。一生を彼女の奴隸として捧げる事を誓った。

ギボン、この情景を憤慨を以て記している。男子たるもの、この擬態は復讐前の臥薪嘗胆でなければならなかった。

コンスタンティノポリス市民悉くがベリサリウスの復讐を予想し且つ期待した。ローマ帝国皇帝は万世一系ではない。皇帝が臣下を殊に武將を理由なく侮辱すれば弑逆を蒙るのが当然だった。しかも重税のため六十才のユステイニヤヌスは飽きられていた。三十八才の常勝將軍は凡ゆる期待を集められていた。

すべての者が確信した。ベリサリウスは幾らかでも兵力を握ったらず必ず正義の叛徒として無能の皇帝を退位させ、暴逆な三十五才の

皇后と三十三才の妻を縛つて処刑するだろうと。しかし、期待は裏切られた。ベリサリウスは皇帝に対しても皇后に対しても妻に対しても忠実だった。

ベリサリウスと比較すれば、楠木正成の忠義と雖も及ばないのではないかと懼れる。大楠公が臣事した君主は、事業の成敗を論じないならば確かに東洋的名君の一典型だった。公自身も四十四才で陣歿し、僅か五年の臣事で君主から侮辱されるごとき試練に会わなかった。大楠公は寧ろ幸運な武臣だった。そしてベリサリウスの忠義と忍従は、すべてに冠絶していた。

六

紀元五四四年、旧都ローマ市はトテイラ王の卒いるゴート軍十方に囲まれていた。守る兵は老将ベッサス以下三千だった。

イタリア救援の命令を受けたベリサリウスは直ちに出陣しようとしたが帝国は殆んど何も用意してくれなかった。解散された將軍の親衛隊は僅かしか回収し得なかった。四十才の將軍と三十五才の妻はイルリヤ地方を遊説し、ベリサリウスの武名とアントニナの美貌で四千人の無賴漢を集めた。

ベリサリウスは雑多な混成軍を海路オステイヤに導いた。ここからテイベル河を溯つてローマを救援しようという作戦だった。

ゴート王トテイラはこの事有るを予期していた。ローマ帝国の大軍が来援すると見て、テイベル河一帯の防禦は嚴重を極めた。それは僅か四千の弱兵に対しては過大ともいうべき準備だった。テイベル河は太い鉄鎖を幾重にも張り渡して閉塞され、兩岸は設堡陣地が隙間なく連つた。

ローマ攻囲軍は三万に減じて専ら城兵の突出に備え、主力六万が

ティベル河兩岸に配置された。遊撃隊一万はオステイアに逆襲する位置に待機した。その上に本防禦線が有った。ティベル河の上に巨材を繋ぎ渡して橋梁状の構造物を作り、その上に高大な戦闘橋楼を二箇所設け、櫓には無数の射撃武器を隙間もなく装備した。本防禦線はゴート軍の最精銳に依って守られた。

ベリサリウスは偵察に依ってゴート軍の準備を知った。指揮下の軍隊は勇気の他何一つ頼れない。その勇気もベリサリウスが吹き込んだものだった。將軍は機械力を最大限に利用する作戦を立てた。

歩兵と輜重は二百隻の平底船に分乗した。船は舷側を高い板で囲い、板には石灰を塗って火矢を防いだ。多くの射眼が開けられ、弓手が配置された。ベリサリウスは僅かな親衛隊を中核とする騎兵を直率してティベル河の岸を進軍した。全軍の先頭には改造されたガレー戦艦二隻が立った。この二隻は横に連結され、板を渡し、板の上は三階建になっていた。最上部は平坦で巨大な起重機を備えていたから、全体は一箇のクレーンシップのごとき構造だった。起重機の底面はゴート軍の本防禦線よりも高かった。そしてその位置には頑丈な火薬庫が置かれ、中には硫黄や瀝青が充満していた。

ベリサリウスは進撃を命じた。

「我は四千、されど我にベリサリウス有り。」

オステイアには五百の兵と、予備資材とアントニナが残された。

他の全軍は水陸併進してローマに向った。

ガレー戦艦の重量は鉄鎖を切断した。ローマ軍の船隊は兩岸を掃射した。騎兵隊は混乱したゴート軍を蹴散し、追捲った。本防禦線に到るや、ガレー戦艦上の大火薬庫は起重機で橋梁上に吊下された。戦艦は一旦後退し、弩砲を以て巨大な火矢を撃ち込んだ。それ

は正確に火薬庫を貫いた。

天地等しく鳴動する大喪音と共に、昇天する竜の勢で凄じい火柱が天を衝いた。櫓も、射撃武器も、二百のゴート兵も、一団の塵と化して中空に飛散した。

本防禦線は突破され、ゴート軍はティベル河兩岸に分断された。

ゴート軍は全戦線にわたって恐慌を起し、トティラ王は狼狽して総退却を決意した。ローマ軍の大喚声は七丘の都を震動させた。

しかし、ベリサリウスの勝利はこの瞬間に奪われた。オステイアより飛報到来。後方に残した予備資材とそれを守る兵五百はゴートの遊撃隊一万に襲撃され、守将イサアクは血氣に逸り敵中に突入して戻らず。陣営は危険。

能く兵を用いる名将にとって、時々一部隊を喪失する事は、それが主戦場の牽制に役立つ限り、有用な犠牲として活用される。オステイアは無防禦な地であり、主戦場で勝てば何時でも奪回し得るから、ローマ市解囲に成功するなら五百の損失は寧ろ軽い代償と言えた。予備資材の喪失も、ゴート軍主力を撃破すればより多くの捕獲に依って恢復されるであろう。だが、我が英雄はこの報告を聞いた時、生涯只一度の驚愕を表した。

將軍は何か一言叫んだが、それは「アントニナ」と言ったように聞えた。英雄は目前の大勝利と、ローマ救出の榮譽を自ら放棄し、総退却を命令した。躍進中の全軍が勝利の最中に反転するには相当な時間を要した。ベリサリウスはそれを待たず、単騎馬首を巡らし、オステイアへ疾駆した。主将の行動を常に無批判で見習う僅少な親衛隊のみが、その後に辛くも続いた。

ベリサリウスにとっては、ローマ市そのものよりもアントニナの

方が重要だったと見える。但しローマ市は失っても取返せるが、アントニナの如き悪妻が大切だったのか。それは彼女が皇后の寵臣であり、失えば皇后の嚴罰が將軍を待っていたからであろう。ベリサリウスが心底ではアントニナを愛していたからと説明する無責任な論者が居るが、六百年前、アクテウムの戦場から愛人クレオパトラ七世の後を追って身を亡した三巨頭の一人と、我が英雄を同一視する事は許されない。

しかし、この時すでにオステイヤの陣営は蹂躪されていた。イサク以下二百の騎兵は敵中に突入して殲滅された。他の三百はゴート兵に揉み潰されながら海上へ逃れた。予備資材の集積はゴート軍に捕獲された。踏止ったか逃げ遅れたのかは解らないが、残ったのはアントニナと、その侍女や使用人の一団だけだった。アントニナは確かに強靱で勇敢だった。だが自ら武器を把って戦う体力と剣技は持たなかった。侍女の一部は精撰された女戦士だったが数が少なかった。殺到する一万のゴート軍を永く支え得る筈もない。アントニナは馬蹄下に蹴倒され、乱軍中に意識を失った。経過した時間は解らないが、覚醒した時の彼女はすでにゴート兵の手中に落ち、指一本さえ動かせない程強烈な拘束を被っていた。

ローマの女將軍という名は、すでにゴート軍中にも知れ渡っていた。その容姿、素性も一部に知られ、この女性からゴート軍が被った若干の人物的損害と絶大な精神的恥辱は、過大に誇張されて全兵士に浸透していた。ゴート軍は重要な獲物を握ったと正しくも理解した。しかし、彼等はそれがベリサリウス自身を、ここへ呼寄せるとまでは評価しなかった。

ゴート軍の遊撃隊は焚掠の目的で襲来したものであり、オステイ

ヤを占領確保する準備を持たなかった。オステイヤの位置と地形は常に攻者に味方する。ゴート軍は捕虜や捕獲品を迅速に処分する気でいた。彼等の手に落ちた資材は焼却する目的で一堆に積み上げられた。

アントニナと数人の侍女は簑虫の如く縛られた。実に乱雑な縛り方だった。アントニナは縛られる途中経過を覚えていないが、結果から見ると、どうやら多数のゴート兵が寄り集って我も我もと面白がって縛ったものらしかった。集積所には種々の長い物があつたから縛る材料は実に豊富だった。アントニナは交戦中かその直後かに軍服を失って全裸に近かつたにも拘らず、膚がいくらか見えなかった。表面を拖っているのは何等かの拘束材料だった。丈夫な擲射器用の太綱が胸に巻いてあつた。細いが弾力ある弓弦が至る所に喰い込んでいた。振転用の革紐が股間から肩まで幾重にも往復していた。馬具、鎖、針金等殆んど凡ゆる物が雑然と噛みついていていた。

カンパニヤの一夜などとは比較にならない強烈な緊縛だった。無秩序な拘束なのに、アントニナの縄脱け秘技は活用出来なかった。縄抜けは手が痺れるより先に取掛らなければならぬ。現在の条件は最悪だった。アントニナが眼を覚ましたのが全身麻痺の痛覚に起因したのだから。

奇巧は各種芸術的な名称を教えてくれた。曰く「首縄」「股間縛り」「海老縛り」から果ては「ロープブラジャー」に至る迄。だが現在アントニナが蒙っている甚だ無駄多きも無制限的物量を誇示する醜怪な緊縛に対し、何か美しい名称を与えてくれるだろうか。日本語に「雁字搦目」というのがあるが、通俗的でもある上に何度算えても十二本でしかない。「蜘蛛の巣縛り」でもいいけない。材料は

太さも色も形も違っている。

アントニナの周囲には侍女等が何れも大同小異の状態で転っていた。捲毛黒膚のリビヤ女、金髪純白のゲルマン女、牝狼を思わせるサルマティヤ女。その悉くがアントニナに精撰された体格と容姿を持っていたが、今は一様に荷造りされていた。最も小柄なアントニナが、不当にも最も多くの梱包作業を受けていた。ある女は諦め他の女は泣いていた。だが、体力的に最も消耗している筈のアントニナが一人確たる精神を維持した。

「ベリサリウスが必ず来る。」

彼女は乾いた声で言ったが誰も反応を起さなかった。聞えなかったのかもしれない。

兵器や資材や天幕がすでに山を成して積み上げられていた。ゴート兵はアントニナ達の頭と足を両方から持ち、揺すっては山の上に抛り上げた。頂上に載った者もあれば、中腹迄転げ落ちて木材の間に挟った者もいた。アントニナは高い場所で弩砲の突起に引掛つた。縛りつけられたわけでもないが激痛と麻痺のために自ら動く事は出来なかった。

ゴート兵は麓から火を放った。瀝青や硫黄も保存してあったから振り撒かれた。悪臭を伴った白煙と黄煙が立騰り出した。

ベリサリウスが殆んど単騎で奮進して来たのは正にこの瞬間だった。従う兵は僅かで、しかも遅れていた。

「ベリサリウスが来た。」

この叫びが電波の迅さでゴート軍の中に拡がった。瞬時にして奇蹟が起った。一万人の団結あるゴート軍は忽ち一万人の脱走兵の群と化した。掠奪品や捕虜は勿論、固有の武器迄投げ棄てて脱兎のご

とくに走った。

ローマ軍の総司令官が来たからには、その後に何が続いているかも解らないという錯覚は勿論あっただろう。しかし、帝国の名将と剣を交える光栄を求めるゴート戦士が、一人も出なかった程ベリサリウスは恐怖の対象だった。しかも今日のベリサリウスは悪鬼の形相に見えた。

將軍に従った少数のローマ兵は自ら手を下さない勝利に驚いた。

だがその後に、更に驚く事が起った。將軍は悲鳴に近い絶叫で

「アントニナ。」

と呼んでいた。

強まりつつある火勢の響から、

「ベリサリウス。」

と言う声か音が幽かに聞き分けられた。英雄は馬を棄て、火焰の山に駆け登った。

アントニナは未だ意識があった。しかし縛を解く隙はなかった。火焰は足下から迫り、火粉は頭上から降り注いだ。ベリサリウスは戦袍を脱ぎ、自らは火に曝されながら小柄なアントニナを包み込んだ。一躍、二跳で地面に飛び下りた。將軍は四肢に火傷したが、アントニナは免れた。

盲目的に主將に従う親衛兵が、他の女達を救助した。遅れて駆けつけた他の兵は、將軍の行動を、軍需品を保護する目的と解釈し、消火に努めたり、燃えていない道具を運び去ったりした。

ベリサリウスは近くの大きな箱の上に戦袍の包を置き、人形でも取出すようにアントニナの小さな体を箱に掛けさせた。と見る間に我が英雄は妻の足を抱き、顔を腿に埋め、周囲の兵が驚く位の大声

で吠えるごとくに号泣した。アントニナも手離して泣いていた。將軍は妻の縛を解くのを忘れていた。

ベリサリウスは火傷に加えて作戦失敗の苦悩もあってか高熱を發し、数日間病床で呻吟した。この間にローマ市はゴート軍の手に落ちた。

トティラ王はルカニヤ方面に転じた。トティラが出發し、健康が回復するとベリサリウスは僅か一千騎を率いてローマ市を奇襲した。ローマは巧妙に守れば五千で十五万を撃退し得る事が証明されている城である。我が英雄は自ら敵將を倒し、ゴート兵を追散らしローマ市中の敵を駆逐した。ベリサリウスは救出は失敗したが奪回に成功した永遠の都を帝國軍威の象徴として守り抜く決心をした。ベリサリウスの金驚桿がカピトリヌス山上に立つと、脱走潜伏していたローマ兵も続々集って来た。將軍はオステイヤの軍を市中に入れ城壁を修理してゴート軍に備えた。トティラは二十五日後に襲来した。その総攻撃は三度撃退された。トティラは国王旗を棄てて逃げた。ゴートの雜兵が辛くも旗を拾って走り、捕獲を免れた。

ベリサリウスはローマ奪回を皇帝に報告した。ユステイニヤヌスの返事は仲々来なかった。半歳の後賞辭の代りに次の命令が来た。ベリサリウスは全軍をローマに残してルカニヤに赴くべしという内容のものであった。忠臣は即時勅命に従った。

ルカニヤにはゴート族に反抗するイタリア人の他にローマ軍は居なかった。ベリサリウスとアントニナは敵地で兵を作った。五四五年、ベリサリウスは一点差の辛勝ばかりだが、十連勝した。しかしゴートの大軍は減少せず、我が英雄は惡戦苦闘の連続だった。五四六年は五勝二敗。帝國からは依然、何の援助も無い。ベリサリウス

はシチリヤ島に渡って軍隊を編成しようとした。五四七年、シチリヤ島で苦心編成した兵を乗せた船団は暴風で散乱した。

五四八年、ベリサリウスは、シチリヤ島において極度の困窮に陥った。アントニナは援兵を請願すべくコンスタンティノポリスに赴いた。彼女は三十九才だった。

しかるに、癌を患っていたテオドラ皇后はアントニナ到着の前日四十一才を以て逝去し、ユステイニヤヌス皇帝を動かす手段はなかった。アントニナは帝國の援助が期待出来ないことと知るや、聖母教会に隱匿してあった彼女の個人財産を取出した。これはアントニナが多年苦心して貯めた俗に言う「ヘソクリ」だった。この資金で得られた若干の軍と資材はシラクサに送られた。アントニナは首府に残り、次の準備のため借財して回った。ベリサリウスは援兵を受取りいくらかの戦功を得た。そしてこれを機会に召還された。皇帝は臣下の戦功を嫉妬しなくて済んだ。ベリサリウスは奮戦したがイタリアを回復出来なかった。

ベリサリウスは首府において近衛司令官の高位に休養した。イタリア作戦はナルセスに譲られた。皇帝もベリサリウスには拒否した大軍と兵備を、この寵臣に国力を傾けて授けた。ゴート兵はすでにベリサリウスに依って痛めつけられていたのでトティラも間もなく戦死し、五五三年、イタリアは平定された。

ベリサリウスとアントニナは平穩な私生活に引退し、十二年間彼等なりの幸福を享樂した。それがどのようなものであったか歴史は記していない。

テオドラ皇后が死んだので、ベリサリウスはアントニナを余り尊重しなくてもよくなった筈である。しかし彼は体面よりも五四二年

の約束の方を選んだ。朝夕の挨拶において將軍が妻の足に接吻していた事に関しては、確実な証言がある。

只一つ、甚だ信用し難い記録がある。プロコピウスの個人的使者が贈答品を持ってベリサリウス家を訪問した際、將軍が銀盆に水か酒を入れてアントニナに飲ませてやっているのを見たが、彼女の両手は確かに背で縛られていたというのである。

將軍が時々家庭内の權威を回復したのだろうか。それとも、これも奉仕の一種だったのだろうか。

女は奇怪な生物である。軽く縛ると嫌悪するが、一度極限迄、即ち体力の限界まで縛ると異状な性格変化を起す事があると言う。筆者は実験で確かめていないが同意見の者が幾人か居る。アントニナもオステイアの緊縛で全身麻痺して以来繩に対して表現し難い愛着を覚えるようになったのではあるまいか。

五五九年は稀に見る嚴寒で、ドナウ河が固く結氷した。食糧に窮したブルガリヤ人が、熊が里に下りるように大移住を開始した。六万の蛮族が帝国心臓部を荒らし、コンスタンティノポリスを脅かした。部分的に破損した城壁には無能の將軍や武器の使用法を知らない兵士や雑多な市民が群って、焼かれて行く郊外を呆然と眺めていた。帝国の精銳はイタリヤやアフリカやペルシャ国境に在って首府は空虚であり、ユステイニヤヌスは宮殿内で慄えていた。

五十五才のベリサリウスは、脱いで久しいイタリヤ征服の甲冑を帯びなければならなかった。ベリサリウスの軍旗が黄金門に旋え、最も臆病な者までが錆びた剣や虫の喰った甲冑を持出して旗の下に駆け集った。その中にわずか三百人だが、昔將軍の親衛隊だった老兵がいた。

アントニナが軍旗を持った。將軍夫妻の一粒種である娘のヨアンニナが喇叭を吹いた。將軍の妻は三十半ばに見える位若かった。

老英雄の卓越せる軍略は、八千の弱兵を以て六万の蛮族を一戦に撃破し、ドナウの対岸に退けた。

全市民は歓喜し、黄金門から宮殿に向う將軍の後に大群衆が随行した。ユステイニヤヌスは喜ばなかった。皇帝は形だけの賞辞を与えて老英雄を帰らせた。

五六三年、ユステイニヤヌス皇帝を暗殺せんとする陰謀が発覚した。皇帝は証拠も無しにベリサリウスを謀叛者の一人として告発した。忠誠無比な老英雄に八十一才の余命幾らもない皇帝を殺す動機があつただろうか。若しあつたとしたら將軍が三十八才の壮年時代に行っていただろう。だが皇帝はベリサリウスに不利な自白を二人の者から拷問で得た。四十年の忠勤の後、老英雄は有罪とされた。

五六三年十二月から五六四年七月迄、自宅に軟禁された後、ベリサリウスの無実が証明され、財産も還付された。しかし、八箇月にわたる憤怒は血圧を上昇させた。五六五年三月十三日、六十一才の老兵は静かに消え去った。そしてアントニナとわずかな親族や友人に依って寂しく葬られた。

以上を以て、陣營に在っては無比の名将、不世出の英雄、宮廷に在っては最大の忠臣、寧ろ君主の番犬、家庭に在っては四十二年間妻の奴隷であつた憐れな男の伝記を終る。

ベリサリウスが幸福だった否かの判定はすべて読者に任せよう。

アントニナはベリサリウスの死後漸く罪深き生涯を懺悔する氣になつたものか、残された財産を以て尼僧院を建て、自身も尼となりベリサリウスの墓を守って余生を送った。

ガン作・マニヤのノート

濡れにぞ濡れし

芳野眉美

A 辻村隆氏

十月十九日、辻村さんの手紙に驚く。

三十九年十一月号SMカメラハント『青木順子を縛る』の『青木順子後援会』のことで編集部気付で辻村さんに手紙を出していたことに気がつく。あわてた。

後援会に入っておけば、青木順子の舞台がオガメルだろうてな軽い気持で、

「東京方面の公演日程を教えてください」

という虫のいい手紙を書いたのである。

辻村さんの返書は、期待もしていなかったし、考えてもいなかった。

それが、だ、四頁ぎっしりのお手紙に恐縮した。

「編集部の人間と思いがいしてはいますが、私も投稿者の一人、お心易くどうぞ」

とあった。私も編集部の方だとばかり思っていました。

いくら辻村さんの手紙だからといって、驚



くことはない。私が驚いたのは、一面識も無い私に、自己紹介をなさって、筋を通してお手紙を下さったからです。

即ち、辻村さんの本名・住所・社会的地位が、そのものずばり書かれてあった。

簡単なようで、これがなかなか出来ないんです。私も別に自己紹介はしていなかった。

一月号の「濡れにぞ濡れし」の「E日記抄」にも書いたが、オープンに自己紹介されることは、私をそれだけ信用して下さっているわ

けで、こんなにうれしいことはないのです。

十一月三日、二信。

辻村さんが、時代物の作家『緑猛比古』であることを知った。「お天狗松」シリーズは好きだったし、リバイバルしてもいいと思った。(考えて下さいよ、編集長)

十一月十日、三信。フォト二葉在中。

二月号「サロン楽我記」に

「三隅良信氏の了承を得て、彼のモノしたS Mプレイの芳野氏好みのフォト二葉を贈呈した」

とある、そのフォトである。

三隅氏に誌上をかりてお礼を云わせていただきます。有難う御座居ました。

「世の中が面白くて耐りません。次々というるな女性に出逢い、ともすれば本職を忘れてがちで……」

とあった。カメラハント、乞御期待。

まったくうらやましい。

十一月廿二日、四信。青木順子向井一也氏あて、紹介状在中。

十一月二十日まで、立川の文化ミュージックに出演中とのこと。残念ながら二日の差で会えなかった。

森山美歌夫と連絡がついたらしい。

十二月七日、五信。

「美歌夫人、ききしに勝る美人に、岡惚れです。あんな美人ならスレーブになっても構わぬ気がします」とある。

こんなこと云ってもいいのかしら。

団鬼六氏の『花と蛇』が国映で映画化されるので、その取材に上京を進められているよし。そうなるかと辻村さんに会えるのだけど。なにせ、東京と関西じゃ、やはり遠いよね。

以下略。

「青木順子後援会」の記事が、私を辻村さんに紹介したわけで、何が幸いするかかわらない。

青木順子ショーに就いては、たしかに、三十九年五月号の「濡れにぞ濡れし」に書いたが、辻村さんのカメラハントが、

「二番煎じ」

なんてとんでもないことで、私は単なる傍観者にすぎません。直接、青木順子を縛った辻村さんの行動的迫力に及ぶわけがありません。右、釈明します。

「奇譚三十九夜」を始め、辻村さんの作品を拝見していると、その精力的な活動に驚いてしまう。

押せ押せムードの精力的な筆力が、辻村さ

んの文章からうかがわれて魅了される。

私はすぐ逃げることを考える、M的性格だし、辻村さんはなんでも攻撃するS的性格だから、この二人の性格の差は、そのまま体力の差になって現われている。

「青木順子を縛る」の頁に、辻村さんの大学教授的フウボウが載っているから、とくと御覧になって下さい。大人の風格ですよ。

そうとわかると、辻村さんに責められた美女群像が、生ま生ましい実感をともなって私の前に出現する。

KKの毎月号のグラビヤを見るのが、だから楽しいんだ。

これからも御指導をお願いする次第です。

B 芳野眉美氏

「若いですね」

「まだ二十代の青年です」

「ホントですか、二月号の辻村さんのサロン楽我記には、十年選手とありましたよ」

「高校生の頃、少し書きましたから。十年選手だなくて、とんでもない」

「マセていましたね」

「いえ、女性の顔を見ると赤くなります」

「濡れにぞ濡れしは、ノンフィクションです」

か」

「自分のことを書いた場合は、八割、ノンフィクションです」

「辻村さんから贈呈されたフォトは、どんなものですか」

「発表できません」

「何故です」

「KKが発禁になってしまいます」

「そんなにスゴイものですか」

「私の夢を実現してくれたフォトです」

「拝見したいですね」

「発表出来なくて残念です」

「ペンネームが女名ですね」

「高校生の頃の恋人の名前なんです。スミマセン」

「どういたしました」

「それで、私のことを女性だと思っていられしやる読者の方が多くて困っているのです」

「マガラワシイペンネームを、つけたからですよ」

「スミマセン」

「男らしい名前にすべきでしたね」

「変えましょうか」

「いや、そのままでもいいでしょう。イメージがこわれますよ」

「有難う御座居ます」

「何か、外に」

「あの……」

「なんででしょう」

「読者の方々から御丁寧なお手紙をいただいているのですけど」

「それは結構です」

「色々といそがしくて返事も差し上げない方がいますから、誌上をかりておわびします」

「わかりました」

「それから」

「まだあるのですか」

「コマージュをちよっと」

「早くして下さい」

「私に神酒を飲ませてみたいと思う女性の方は、どうぞ御連絡下さい」

「あきれた」

「スミマセン」

C 三原寛氏

Female horse rider for every Saturday

afternoon programme high reward quaranteed

これは、三原寛氏が、某英字紙にだした広告である。訳すと、

「女性騎手、毎土曜午後出演、高給保証」
てなことになるそうです。横文字には弱いよ。

「女性騎手」と英文。

わかる？三原氏が何をタ克蘭でいるか。

「反応が有りましたか」

「ええ、二人ばかり」

「それはそれは」

「文通しています」

「勿論、外国の女性でしょう」

「英文だから、会社でも書けるのです」

「なるほど」

「芳野サンにも英文で書いていいですか」

「トンデモナイ」

三原氏が在日外国婦人の馬になっているのを空想すると、ぞく／＼してくるな。

最近の三原氏の手紙によると、

「テュ・ボア？（お前、飲むの？）とのしかかってきたイタリーの婦人は、最初に童貞を破られた時より、遥かに強烈な印象で忘れられません」

とある。その気持わかる。

「パーティの帰りに送って行って、彼女のベッドルーム迄お伴した時」

とのことです。外国での話です、念の為。

「食べる事も幾度も強制され」

とくるからイヤになる。強烈すぎる。

「仰向けのお腹の上に……を堆高く……」

とか、

「……を両手で捧げて礼拝させられた」

とか、書くのやめましょう。

「自分の排泄物を崇拜視させる事に異常な興味を持っているでしょう」

白人崇拜者にはもってこいの文章です。

次はフランス混血のハイティーンに責められたお話。

「ボールの空気入れて私の腸をふくらませて縛りあげ」

彼女、おもむろに、

「私に片足をかけてポーズをつくり」

いいですか、次が最高なんです。

「目の前の床に放尿して（以下略）」

それから三原氏が混血の美少女に何をされたか勝手に想像して楽しんで下さい。

この三原氏が、「雪国の女王」の命令書を持って私のバーに来たのだから、世の中は面白い。文通はしていたが、この時、初対面。

三十九年十二月号の読者通信に、

「どうせ雇うのならマゾ男を下男にしたい」というM的下男募集の通信がある。

「下男の条件は徹底的にMであること」

即ち

「私の気が向いた時には、昼夜を問わず私のS的気分を満足させるために奉仕させる」

というわけ。オワカリ。昼夜を問わず。ネ。

「私の夫やMの愛人に命じて、拷問させてやる」

ということ。ハイ。

くわしく知りたい方は読者通信をどうぞ。

そして、私（芳野）が女王のところに転送してあげますから、女王の足下で骨をうずめてもいいと覚悟した方はどうぞ。編集部は絶対転送しませんから注意して下さい。

「作業服を着て下男の仕事を真面目にやれるマゾ男」

通信の終りに、

「雪国の女国」

とある。これぞまさしく、

「森山美歌夫人」

とうとう発表しちゃった。ゴメンナサイ。

その通信中の、

「神酒は勿論のこと」

というのが気になる。

雪国の女王の豊麗な和服姿の写真を前にしながら、

「飲みたいですね」

「飲むだけで幸です」

いったい、二人はなんの話をしているんだ。

女王の命令書は、首実験。

勿論、社会的地位からいって三原寛氏は不

合格。残念でした。

「いいでしょういいでしょう。いつか二人で女王の神酒を拝受に行きましょう」

ビールを飲みながら、二人はナグサメあいました。

（私の住所は、三十九年七月号の読者通信にあります）

D S氏

森山美歌夫人の「悩ましのサディズム」昭和二十八年二月号を中心に、贋作が続いているわけだが、S氏のお手紙やバーでのお話からヒントを得て、書き加えている箇所もある。

例えば、三十九年十二月号の贋作中の「縋帯」の件、「がんじがらめに縛られた顔」の件や、四十年二月号の「足枷のついている板」の件、「マラカス」の件などである。

犬のシッポになったマラカスの件をくわしく書くと面白いのだが、書いたところでその

筋にオコラレルだけだからやめました。

最近のS氏のお手紙の中に「アリサ」とあって、混血の美女のフォトが同封されていたのには驚いた。

皇居のお堀端でうつしたものです。

S氏のお手紙には、

「彼女は生まれつきのSで、然も、SとかMとかを知らないで、Sなのです」とあった。

贋作中のアリサは、美歌夫人に責められるM的要素が多いので、これは困ったことだと思いましたが。女王の名に誓って、許して下さいようお願いしておきます。

二月号の贋作中の「命令書」をお読み下さいれば、美歌夫人のすさまじさがわかると思います。全く、女王のアイデアは強烈で、S氏のお手紙を読む度に感心している次第。

「夏——素裸の身体を鎖で縛られ、手は自由にしています、下腹部まで紐でゆわかれその上に浴衣という姿で、映画に連れられて行きました。それも真昼のことです。」

二階の最後列に人が居ないのを幸い、そこに坐らせられ、浴衣をとられて女王様の足もとに寝かせられ、下駄で一時間位踏まれたことがあります」

S氏を下駄で踏んづけている浴衣姿の美歌夫人は、さぞ美しく悩ましかっただろう。

体力に自信のあるS氏だから平気なので、肌が生来弱い私ならすぐ傷だらけになってしまう。下男失格ですね。

もう少し紹介してみましよう。

「先日は風呂場で、口の中にネクタールをそそがれ、飲んではならぬと厳命されて、死ぬ思いでした。口の中に女王様のネクタールをためたまま立っていると、女王様はさらに唾液を吐きかけられました。ネクタールと唾液のカクテルですね。そして、やっと吞めと命令されました」

S氏はあまりネクタールに興味は無いとのこと。これはナイショ。だから、神酒拝受はいつでも死ぬ思いとのこと。可哀いそうに。「ネクタールで濡らしたパンティで猿ぐつわをするんですよ」

と世にもなさけなさそうな（失礼）顔を私に云いました。

「Mさんが教えてしまったから」

M氏はネクタール派の巨頭だから、これはしようがないな。

「その時だけ私が交代してあげましようか」と云いたかったけれど、ヤメタ。

「女王様と離れられることが出来て。どっちだか、はっきり云ってごらん」

右は、女王様のお手紙の一節。名文です。

一度読んで暗記しちやった。

「女王様に責められてフラフラ。でも僕はますます女王様のトリコです。女王様は甘美な快楽のメロデーをかなでて下さいます。けだるくなってきました」

右は、S氏のお手紙の最終節。これでは勝負にはならない、デショウ。

S氏、美歌夫人から離れることなんか出来っこないよ。残念だけど。

最後に下男応募の手紙を紹介すると、

「殺されても、いいと思う位ですから、何でもして仕えさせて下さい。四畳半なんかでなく、犬小屋か檻の中につないで下さい。月給は、こきつかって苦しめて下さるだけで結構です」

こんなこと書くと、本当に犬小屋におちこまれて、首輪でつながれてしまふよ。

空想と現実とは違うんだから、ソフトにいきましょう。下男の仕事は忠実にやって、その上で美歌夫人にM的奉仕をすれば、それ以上の幸福はないと思うよ。ウン。

E M氏

「実験したことないよ」と私。

「無責任だなあ」とM氏。

「だって、Mさんが実験してくれたんでしょ」

「読んだらすぐ実験したくなっちゃってね」

毎月確実に入手されるために

本誌予約購読者を募る

予約申込者月毎増加中です

毎月確実に二十五日発売!

○現在本誌はいろいろの事情で全国末端まで円滑に配本できませんので、所により非常に入手困難だと思えます。毎月確実に御入手されるためには、是非直接予約お申込み下さるようお願い致します。

○予約御購読なさるには、予約購読料を天星社（大阪阿倍野局私書箱第十四号）宛お払込み下さればよろしいのです。

○本誌の送料、包装代などは、すべて当社にて負担いたしますから、誌代のみ御送金下さい。予約購読料は一月分一冊三〇〇円三月分三冊九〇〇円、半年分六冊一八〇〇円、一年分十二冊三六〇〇円です。

「それで、どうだった」

「どうだった、って云ったって」

私とM氏の会話の発端は、三十九年四月号の『犬の首輪』のワンカット。

（おつまみのサンドイッチを便器に置いた。

その上に私は放尿した。「さあ、おたべ」私はJの顔を便器に押し込んだ）

という箇所を、実験したから書いたのか、とM氏が私に聞いたことから始まった。

（ウインナのベーコン巻のたべかけを、足の指にはさんでJにたべさせた）

というシーンはあると私は云った。

「それより、もっとヒドイことをされて、無理にたべさせられたことがある」

（魔法瓶のお湯を流して、私の神酒を入れてJにあてがっておいだ）

「直接でないとイヤだな」と私。

「あきれた。これも実験してないの」

「だからさ、Mさん、実験してよ」

「もう実験したよ」

「どうだった」

「どうだった、って云ったって」

M氏、まじまじと私を見つめて、

「まったく、無責任な奴だ」

とまた云った。

四十年二月号の「贗作・悩ましのサディズム」中の「バターの代りにコートをパンにつけた」のは彼のホントの話ですよ。

私が勝手なことを書くと、M氏がせっせと実験してくれる。ネクタールのオーソリティを持って私は幸福だ。ウン。

ところで、誰の神酒で実験したんだろう。彼、失恋中。ネクタールを飲んでくれることとて、M氏に最大の愛情を感じ始めた彼女が外国に突然行ってしまったからだ。

そういう恋愛を私もしてみたい。

M氏のペンネームは中野安太郎氏。

F 沢井和雄氏

三十七年一月号に「ガン作・マニヤのノート、私のバーでの会話」を書ききっかけになった、ドクターN氏である。沢井和雄はKK

でのペンネーム、KKが一時中絶した頃に名作有り。最近書かないのはさびしい。

「マニヤのノート」は、

「奇クの旧刊号以来の悪友である医学博士のNが、愛用のルノーで、私のバーに立ち寄った」

で始まる。KKに私が復活した恩人です。

沢井氏に始めてお会いしたのは、調べてみ

ると、昭和三十二年五月二十六日の日曜日、快晴、暑い日でした。九年前ですね。

岡本敬氏が主催したKKの愛読者集会の席上だった。

岡本敬氏は三十六年三月号に『金色マニアの願い』を書いているし、夫人の西条悦美さんが三十八年八月号に『黄金マニア』を書かれています。魅力ある悦美夫人のフォトも紹介されているから、旧号をひっぱりだしてごらん下さい。

「芳野さんなら、飲ませてあげてもいいわ」って云ってくれたんだけど。俺は何を云いたいんだろう。

話をもとにもどしましょう。

その沢井さんが、こともあろうに、奥様をお連れになってバーにいらしたことがある。

そして、私の作品を知らないのならまだしも、みんな知っているんだなあ。こいつには参った。弱りました。

はずかしくて、奥様の顔を見ていられなかった。

理解のある奥様で、沢井さんは幸福だ。

「ね、飲ましてよ」

と沢井さんに云ったら、ウソ、誰がこんなこと云えますか。奥様に失礼だ。

「詩人ですね」

「とんでもない」

「夢がある」

「そう、夢は持ってます」

冷汗。辻村さん、Mさんもそうだけど、皆さんが奥様にオープンですね。

沢井さんのお手紙は三十八年三月号の「イエロー・セックス」で「S氏の手紙」として紹介してあります。

その時沢井さんが奉仕していた女王様と、現在の私のバーの近くで飲みながら話をしたことがあった。

「沢井を本当に飼ってやろうかしら」

という言葉、まだ忘れていない。本当に飼われてみたい美女でした。これは奥様にナイショ。

ところで、最近の沢井さんのお手紙を紹介してみましようか。書いてもいいですよ、って皆さんがおっしゃってくれるので助かります。

「あなたの紹介があったので、わりとたやすくプレイに入れました。淡路恵子ばりの、切れ長の目や、一寸くすんだ様な声もS的で、たのしませてくれました」とあり、

「私の癖を話して、タイルに正座して釈伏した所を、首筋を足で踏んでもらいます。それがきっかけで、いく分か彼女もSめいてきたのでしよう。トルコ風呂の囲いの上にどしんとのりかかり（以下発禁）」

沢井さんが彼女のネクタールを飲んだかどうか、私は知らない。

彼女に聞いても、笑って話をしてくれなかった。

私が沢井氏に紹介した美女は、四十年一月号の『濡れにぞ濡れし』中の『A初心者』における『ベテラン用の美女』です。

奥様、ゴメンナサイ。

「その時によって味が違うだろうな」

と、その美女に云ったら、

「アンブルを飲んだあとや、ビールを飲んだあとや、朝や昼でも違うわよ」

とおっしゃった。男に飲ませておいて、

「どんな味がした」

って聞いているのかしら。

「俺にはどうしても飲ませてくれないの」

「だめ」

悲しそうな顔をしたら、

「浮気は、いいわよ」

「——」

「してみたいな、一度」

これにて『濡れにぞ濡れし』を終わります。

【新版】 女体緊縛コレクト・フォト集

E組百花選

大手札印画紙(9×13種) 焼付

各組一枚一組(送料共)

一組一枚	一五〇円
五組五枚	五〇〇円
十組十枚	九〇〇円
二十組二十枚	一七〇〇円
三十組三十枚	二五〇〇円
四十組四十枚	三二〇〇円
五十組五十枚	四〇〇〇円
六十組六十枚	四七〇〇円
七十組七十枚	五四〇〇円
八十組八十枚	六〇〇〇円
九十組九十枚	六五〇〇円
百組百枚	七〇〇〇円

E 1	全裸の悦虐プレイ (愛川)
E 2	仕置を受ける裸身 (大塚)
E 3	荒縄に苦悶する肌 (愛川)
E 4	ムチに耐える美肌 (関谷)
E 5	豊臀と豊胸しぼり (愛川)
E 6	捨身の後手観念像 (大塚)
E 7	足から眺めた裸身 (水本)
E 8	全裸エビ責尻強調 (関谷)
E 9	ハリツケられた娘 (大塚)
E 10	強烈後手高手小手 (愛川)
E 11	責め抜かれた疲労 (梨花)
E 12	逆エビにもだえる (大塚)

E 13	拘禁された美囚女 (大塚)
E 14	浴室に覗く股間縛 (愛川)
E 15	海老責に泣く足首 (大塚)
E 16	乳房強烈締めつけ (愛川)
E 17	牢獄で泣く縛り娘 (大塚)
E 18	美しき全裸股間縛 (大塚)
E 19	全身に溢れるマゾ (関谷)
E 20	ベッドにもだえる (関谷)
E 21	身体中に強烈な縄 (愛川)
E 22	放置された海老責 (東浦)
E 23	ゴム衣で縛られる (東浦)
E 24	ローソクで責める (大塚)
E 25	寝台の排便ポーズ (絹川)
E 26	足指先に漂う媚態 (関谷)
E 27	後手吊り正面裸像 (関谷)
E 28	嚴重な高手小手縛 (東浦)
E 29	女体の全部を晒す (愛川)
E 30	激しいムチ打の果 (関谷)
E 31	若肌も縄にくびれ (東浦)
E 32	投げ出した脚線美 (絹川)
E 33	臍中心の腹部緊縛 (梨花)
E 34	セーラー服の哀歓 (梨花)
E 35	赤いムチ痕の臀部 (関谷)
E 36	仰向けの囚衣の女 (梨花)
E 37	制服の女学生縛り (梨花)
E 38	悦虐にむせぶ若妻 (関谷)

E 39	痛打にくねる裸身 (関谷)
E 40	乳房に加える金具 (大塚)
E 41	鼻責めにあえぐ顔 (大塚)
E 42	あぐら縛りを拒む (大塚)
E 43	浣腸ポーズの裸身 (梨花)
E 44	激烈なエビ責苦悶 (大塚)
E 45	敷布の上のびて (絹川)
E 46	鼻いじめのアップ (梨花)
E 47	柔肌に喰込む麻縄 (東浦)
E 48	縄にくびれる裸身 (東浦)
E 49	椅子に晒された女 (大塚)
E 50	臍そうじをされる (大塚)
E 51	荒縄のトゲに狂う (絹川)
E 52	火のついた煙草責 (四方)
E 53	踏みつけられた胸 (梨花)
E 54	裸身をゆだねた娘 (大塚)
E 55	手足猪吊りの美態 (絹川)
E 56	囚女の美しき緊縛 (絹川)
E 57	諦めた観念全裸像 (水本)
E 58	縄にもだえぬく姿 (絹川)
E 59	黒髪を吊られた女 (大塚)
E 60	女奴隷美しく悶ゆ (絹川)
E 61	袋の中の緊縛裸身 (竹本)
E 62	ビニール袋に蒸す (竹本)
E 63	亀甲型の雁字搦目 (大塚)
E 64	緊縛裸像の舞踏会 (絹川)
E 65	野外の後手宙吊り (梨花)
E 66	足首に鎖錠実施中 (四方)
E 67	室内の後手宙吊り (梨花)
E 68	雨装束の悦虐姿態 (梨花)
E 69	乳房いじめ踏つけ (大塚)

E 70	足の裏ハネ操り責 (梨花)
E 71	乳首プライヤ挟み (竹本)
E 72	野外の逆さ吊り責 (梨花)
E 73	梯子責にあう美女 (梨花)
E 74	逆さ吊りに揺れる (梨花)
E 75	娘十六しぼり加減 (花坂)
E 76	踏みにじられた顔 (大塚)
E 77	逆エビニ反る足先 (大塚)
E 78	両手吊りのお仕置 (絹川)
E 79	責折檻に呻く若妻 (梨花)
E 80	豊麗を誇る正面像 (大塚)
E 81	食卓上の縛り人形 (大塚)
E 82	むしられる下着 (大塚)
E 83	月経帯の羞恥縛り (梨花)
E 84	寝台上的若妻狂態 (関谷)
E 85	強烈全裸エビ縛り (東浦)
E 86	麗姿後手縛り吊り (東浦)
E 87	後手縛豊満臀部晒 (関谷)
E 88	黒髪いじめ凌辱図 (大塚)
E 89	令嬢後手高手小手 (絹川)
E 90	臍部乳房強調緊縛 (東浦)
E 91	責衣にくるまれて (東浦)
E 92	全裸逆エビ責め (水本)
E 93	ローソク乳首ゼメ (梨花)
E 94	全裸後手縛り晒 (関谷)
E 95	強打全裸のあえぎ (関谷)
E 96	肉体美の責衣ゼメ (東浦)
E 97	バンド二ツ折縛り (梨花)
E 98	全裸正坐縛り猿轡 (関谷)
E 99	豆しぼりの猿轡 (絹川)
E 100	強烈縛り臍いじめ (東浦)



夫婦のゴムプレイ

大阪 雨奇男

二回にわたって、ゴム・マニアのプレイについて紹介させてもらったが、その後の体験について少し述べさせてもらおう。

この初秋のこと、梅川良子さんの屋外におけるプレイの記事にヒントを得て、どこか適当な野外で妻を責めてやりたいと考えていた矢先、宝塚の近くの知人から、商売の関係で秋中、北海道の方へ出向くので、時々留守の様子を見に来てくれとのこと。私も商用の関係で近畿各地を方々回っているのですが、これは渡りに舟と早速、カギを預かりました。—というのも、その割合に広々とした家というのが、町並みはずれた静かな山の手にあがり、しかも、確か大きな池のようなのが近く

にあって、これは私のアイデアに絶好の基地になるぞと、すぐ考えついたからだったので

早速数日後、何だかんだと理由をこじつけて、少し重いお仕置を加えてやるということになり、妻に囚衣、刑具類を揃えさせ、外出の準備を命じました。

色とりどりのゴム引のレインコート、合羽類やゴム雨靴に縄、ひもの類などをスーツケースにつめさせ、家をあとにしました。

その家につくと早速、妻を正座させて、こはお前の刑務所なんだぞとさとし、覚悟をきめさせて衣類をとって雨具をつけろと命じます。素裸にピンクのゴム引レインコートを

まとい、裏布をはがした長めの白いゴムブーツをはきおえた妻は、もうなれた手つきで素早く、自らの手で白ゴムレインシューズを顔面にあてがい、眼をわずかにのぞかせて麻ひもでぐるぐる猿ぐつわをし、フードをかぶって、両手にも雨靴をはめ、きちんと正座して私の指示を待ちます。

このスタイルが室内における私の一番好む姿ですが、これからどんな責めが待ちかまえているのかという恐怖におののきながら、まずおそってくる縄目をじっと待ちつつ、私を見上げる妻の眼付を楽しみに、またいじらしく思いつつ、いつも責めの行為に入っていくわけです。

まず、軽くしばって柱につないでおいてから、私はだまって、家の外の様子を下見に出ました。

裏庭の木戸を出て、あぜ道のようなのを約百米ほど曲り曲り歩くと大きな、周囲が数百米はありそうな池のほとりに出ます。夜になると、こんなところへはまず人がこないし、通りもするまいと胸をワクワクさせながら、その池の様子をよく知っておくために水際を歩き、しばらく周辺のもようもよく確かめてから家へかえります。

もちろん、家へかえるといっても、ただかえるのではなく、静かに中へ入り、出るときに命じておいたとおり、カベに向いて直立不動の姿勢でいるかどうかを確かめることと、不意にビックリさせることも忘れません。

さて、一旦ナワをといてから、持参の夕食の準備をさせ、まず一杯というわけで、酒と肴を盆にささげさせて妻が私の正面に正座します。ゴム靴の猿ぐつわもそのままの姿をなめまわしながら、飲み始めます。ハシで顔をいたぶったり、レンガをひろってきて、正座のひざにつみ重ねたりしているうちに、酒肴の盆をささげる両手がゆれ始めてきます。お酒も相当残っているうちに、この盆をなな

めにしてこぼしたり、タタミに下したりすると、そのあと、またどんな刑罰が加わるかもしれないので、妻はもう額に脂汗をうかべ、眼をキラリと光らせながら、こらえています。が、そのうちに、手の角度が段々と下るとともに、小さきみにふるえ始めます。

私はワザと手の甲にキスしてやったり、ガンバレ、ガンバレとおどけたり、後へ回ってフードごと髪をひつつかんでのけぞらせたり背中をムチ打ったり。しかし、ここであまり「スタミナ」を使わせたなら、あとの楽しみもあることだしということ、ほどほどのところで許してやり、猿ぐつわを自らという食事の許可を与えます。しかし、急には手がしびれているので、とてもハシなどにぎれないようです。（それを承知で、ときには「そんなにハシをもつのがいやなら」ということで、せっかくありついた食事を、またとり上げたり、両手を使わずに後手でくえと命ずることもあります）

さてまだ残暑もあって、しかも閉めきった室内での軽い「余興」でも汗びっしょりになったレインコートだけをブルーのものにかえさせて、外が暗闇になるまでの間、休けいさせておきます。簡単に休けいとはいっても、

ここでいう休けいとは全く自由なものではなく、後手で胸をしばって、すでに元どおり猿ぐつわもかませてあって、ただどんな恰好でいてもよいというだけのことです。したがって大抵はタタミの上に横たわってじっと眼を閉じているようです。——時々、タバコをくゆらしながら、これからの責めについて空想している私の方をうらめしそうに見つめながら。

いよいよ外が暗くなったところで、そのままの姿で引き立てるようにし、裏木戸をソツと開けて出ます。もし池までの途中、万一、人に出会うようなことがあっては困るので、フードと猿ぐつわははずしてやり、しばったレインコートの上からササール型の白いダブルのレインダスターコートをひっかけて連れ出します。

大きな池のほとりについたところでササールコートをとり、一旦ナワをといてレインコートの上から黒ゴム男用雨合羽をきせて、再び白ゴムレインカットの猿ぐつわを自らささせ深々とフードの上からさらにぐるぐるまきにくつわをきつくしめてしまします。

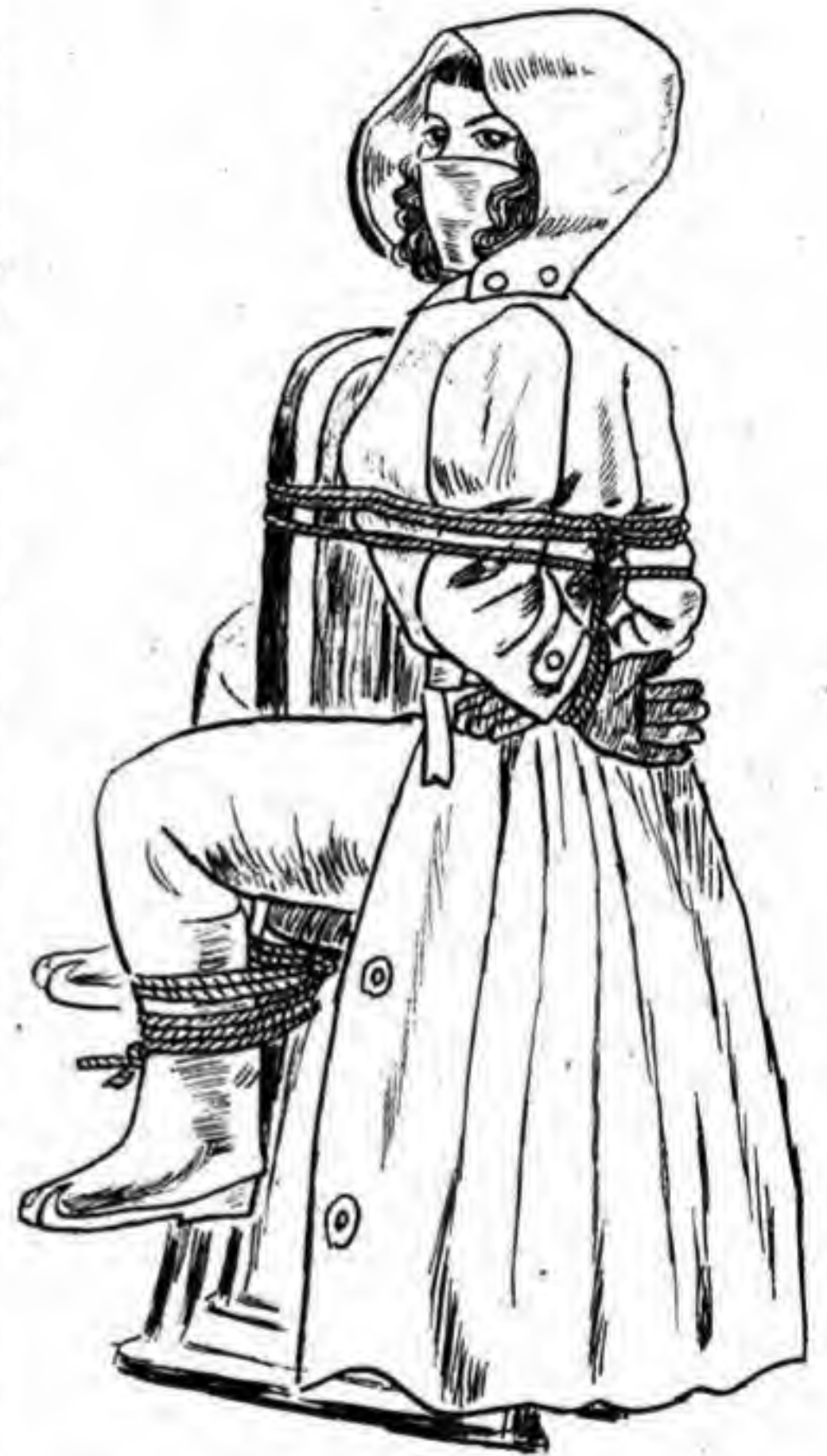
私は最近、とくに婦人用の真白いゴム雨靴に愛着を感じ、色々とりそろえているわけで

すが、どれも全部裏布を切りはなしてゴム地だけのものを利用し、これを色々を使い分けて妻を責めさいなんであるわけです。例えば両手にもはかせる、くつわにする、くわえさせる、食器類に利用する、便器にする、花びんにする等々。

話を戻して、まずは

池の水辺に、ひざがちょうど水に浸る程度のところへ正座させ、手はうしろへ回して嚴重に上半身を麻縄でしめ上げます。そこで「そのままの恰好で、夜明けまで頑張るんだぞ。迎えにくるまで、動いたら駄目だぞ。もし人の気配がしても、できるだけガマンして動くな。やむをえないときはその辺の草むらへでもかくれてよいが、そのときはあとで必ずワビを入れるんだぞ」と命じて、私はその場を立ち去ります。

そして池の土手にかけ上り、近くに人が来るような気配がないか確かめます。野道が細く二本ばかりあるだけで、土手の木蔭からは



もし人が近づいてきてもよく見通せるし、水につけられていま妻が坐らされている姿は、草の生い茂っている土手の上からも余程注意してみないことには判然と分りません。

先程は夜明けまでがまんしろとは云ったものの、これからの水中の、或いは水際のプレイを楽しみにやってきたのですから、私もゴム長に雨合羽というスタイルにそっと着かえ、まずは酔いぎめの心ちよいそよ風に吹かれながら土手に腰かけ、一服つけて妻の被虐姿態をゆっくり堪能いたします。

眼がなれるにつれ、手足の白いレインシューズがはっきりと、そして水辺に黒くうなだ

れて坐る姿がくっきりと浮かび、可哀想に、もう下半身の冷えとしびれにもだえているであろう妻の心境を考えたりしているうちに、一つおどかしてやれと小石をひろって池へ投げつけます。

そばの水面にドボンという物音

に一時、妻は少し腰をうかし、すぐ身をかめるようにしておびえながら、周囲の様子をうかがっているようです。

さらに続けざまに石粒を二つ、

三つと投げつづけるとついに足をずらせて上半身をひねり、こちらの土手の方をうかがいます。そこでしばらく、静かに草かげから、また妻のおびえるさまを観察します。

いままでもこんな手はよく使っているのですが、こんどばかりは野外の責めであるだけに、たんなる恐れだけではありません。奇妙な、不思議な、流行おくれの、男女混装のゴム雨具に身を包み、しばり上げられた姿態を他人にみられるという恥しさは、ちよっとこれにまさるものではありません。

しばらくして、ソーッと後から近寄り、いきなり合羽の背中をムチ打って、驚きと痛み

を与えてから

「いままで、じっと、おとなしくしていたのか」とワザとたずねます。多分、投石の仕わざが私と想像していたのでしよう、少し動いたことを素直にみとめて、首を横にふります。ゴムのにおいにむせかえるくつわの責めはもちろん、声を立てることもできません。

「何故、じっとしていないのか、もうたえられないのか」

首をふってノーの合図。

「なぜだ、云ってみろ」

うるんだ瞳が、私を見上げます。そこで、少しくつわのひもをゆるめてやりますと、涙と唾液でビショビショになったゴムくさい唇をふるわせてこれこれしかじかと訴えます。「実はオレが少しテストしたんだ。あれぐらいのことで動くとはなんだ。これから少し、動きたくても動けないようにしてやるからな」と再び、もがく顔面をしばらくつけ、よろめきながら立ち上らせて長いロープを胴と片足にくくりつけ、水の中へ入っていけと命じます。

まだしびれる足にもたつきながら、妻はドボドボと深みに入っていきます。ロープの端を岸辺でもっている私はまず、腰のへんまで

浸るところまで進んだところで、足のロープを強くひっぱります。足をとられて、大きな水音を立ててころお妻。「早く立て」と命ずるままに、苦しくもがきつつ立上ります。川とちがって池は流れがないだけに急な深みがないかぎり、命の危険のないプレイができます。それから水中でかけ足をさせたり、胸のへんまでつからせて立たせておいたり、ダンスをせよと命じたり、しばらくは様々なスタイルを楽しみます。

夫に仕えねばならない宿命を背負い、秋の夜の山の池に、水しぶきを上げてのたうつ妻の心情やいかにと察してきたところで、ロープをひっぱって岸辺にひきあげ、グショグショのまま少し休けいさせてやってから、今度は約百米あまりはある斜面になった岸辺を水に少しつけてチャブチャブやりながら、四つんばいでかけさせます。もう夜目にもなれて白いゴム靴の「四つ足」が段々と小さくなるのを、ムチふり上げて追いかけます。合羽に包まれたお尻によい音になると、水しぶきとともに「前足」がくずれます。さらにもう一発、氣力をふりしぼって「前足」が顔面をぬぐって前進します。——土手に上って一服つけながら、岸辺を往復する「四つ足の怪物」

に石など投げつけたり、「もっと早く」とか「四つんばいで進め」とか、「バックせよ」とか命じて、クタクタにさせていきます。

ふと持参の時計をみるともう十二時、目新しいプレイに時のたつのもすっかり忘れて、早やもう数時間。最後に雨装の私を背負わせて、岸辺をかけたり、水中へ入ったりした頃は、もう妻の吐く息も荒く、手、足、顔の自由を与えても、ぐったりと岸辺にうつむいたまま、完全にグロッキーの様子で、私がぬれた身体をぬぐってやり、とりあえずササールコートをはおらせて、片手には今夜を楽しんだ、ずぶぬれの「道具」を一杯つめたバッグを、片手には妻を抱きかかえるようにして、池をあとにしたような始末でした。

この池の様子は別図のような地形になっていますが、その後も二回ばかり訪れてプレイをたんのうしました。

運悪く私の都合で、まだ雨の日に行くことができず、残念に思っていますが、もう残り少い秋に、是非一度行ってみたいと思っています。

幸い、まだ一度も人に見られることも、近づかれることもなく、秋の夜空の下、ゴムにとりつかれた夫婦のプレイに没頭できたこと

を少し冗長に紹介させてもらいました。

いまの私の願いは、梅川良子さんの呼びかけにあるように、ゴム雨具装の二人以上、複数の女性の責めプレイをしたいことです、

これだけは許してくれと妻が訴えています。

どんなはずかしめを受けても、それだけは許してくれとのことで、またそれを利用して、プレイも続けているのですが、いずれは説き

伏せてやってみたいものです。それでは、今日はこれまで。

読者原稿——生活体験報告

婦人洋装下着のこと

——東京の小野猛様へ——

細田隆

東京の小野様、お元気ですか。

最近、さっぱり御投稿がありませんが、淋しい限りです。どうぞまた貴重な体験談をお話し下さい。

私は、貴兄とは同じ東京の空の下に住む婦人洋装下着マニアです。下着の中でも、ネグ

リジェやメンスバンドなどよりも、ブラジャーやコルセットなど、特にパンティとスリッパに憧れを感じています。だから数の上でもパンティとスリッパだけに限ったら或は貴兄と比肩出来るのではないかと思っています。私も年の割には収入の多い方なのですが、

只今のところでは極く少量の酒と煙草代、それに若干の書籍代を除いたら、殆んどの小遣金は下着の購入に当てていると云っても過言ではありません。何らかの機会でもあれば、一度お逢いしたいものだと思存します。

下着の購入方法は、貴兄とは違って嘗てデ

パートで恥をかいで以来、代理店や問屋から直接に送付して貰う事にしています。勿論、先にカタログを取寄せするのですが、代理店なら何軒もある事ですから、一品毎に問屋を替えて行けば「妹の贈物」との口実が何回でも通用する訳です。また実際に盛場へ出るとすれば、郵送料以上の交通費が掛ってしまう事は明白なのですから。

その恥と云うのは、斯うなのです。

或るデパートの下着売場で、客のいないのを見すまして思い切って真赤のパンティを買った時の事なのですが、売子が直ぐに応じてくれたものの包装に時間が掛かり、隣の女の子と一緒に横眼で睨み乍ら、

「この人もあんな事を云って自分が穿くんじゃないかしら」

「そうね、何だかそうみたい。ウフッ」

「いやらしいわ」

「彼女の贈物だなんて、私だったらお断りするわ」

「嫌ねエ」

などと、クスクス笑い乍ら囁いているのを聞いたからで、実際、それは透き通る様な真赤なナイロン・トリコットに、脇がネットになつていると云う、凄くセクシーなパンティ

だったので、学校を出たばかりと思われ若い女性にすれば、嫌らしいと感じたのも無理はありません。身体中から火の出る様な思いで逃げ帰ったのですが、彼女等が「この人も」と云ったところを見ると、男性が真赤なパンティを買うのは私一人ではない事になりますし、以前に、きっと自分が穿くのだと明言した男性がいたに違いありません。随分勇敢な男性があつたものだと思いた事でした。

それからと云うものは、すっかり怖気がついて、下着売場を通る時でもセクシーなものは、精々横眼で睨む程度で止めにして、メーカーを覚える事を先決にしています。

もう一つ恥を云うと、それは下着専門店で、の事でしたが、どうせ、なけなしの金を出して買うのなら自分のサイズに合ったものが良いと考えて、色々注文したら

「そう云うチグハグなサイズは生憎とご座居ませんが、女の人だったら、これで充分、間に合う筈なんですけどねエ」

と、気のせいかな、女の人」と云うところを馬鹿に強く云って睨まれた事があって、その時は穴があれば入りたい程に羞しく思い、もう二度と来れないと、取返しつかない様な

思いに地団駄を踏んだのでした。併し、この場合は突飛な注文をしたからなので、余り奇抜なものでさえなければ、訓練の行届いているせいもあって、女店員さん達は不思議な顔もせず、極く当り前の様に売ってくれる事は貴兄の仰言る通りです。併し、そうは云うものの羞しい事には違いなく、どうしても欲しいと夢中になった時でもない、私は躊躇せざるを得ません。ですから斯うした悩ましい下着を、誰に憚る事なく買ったり着たりする事の出来る女性を、この事に限ってのみ私はどんなに羨しく思っているかわりません。

私の今の仕事は、各家庭を廻るセールスなので、時には家の中まで覗ける場合も多いのですが、特にアパートなどでは外聞を憚っての事なので、部屋の中に綱を張ってそこに色物のパンティやスリッパなどを一ぱい、ぶら下げてある場面に、ちよいちよい、おつかります。だから、何時か松原女史が「東京の人よ、何を穿く」で、ウィークリー・パンティを穿く人の少い事を報告しておられました。決してそんな事はなく、お風呂などへ行く時には、恐らく穿き替えてから行くの、だろ、う事は間違いないと思われま。昨夏の事です、アパートでノックしたは

ずみに扉が空いてしまつて、奥さんの（でしようが）ピンクのパンティを穿いた旦那さんと鉢合わせしてびっくりした事もあります。後で扉に錠を下さなかつた事をどんなに悔んだらうかと思うと、可笑しいやら気の毒やら、一日変な気持でしたが、その反面、我が意を得た様な充実した気分にもなつた事でした。また明らかに婦人用と思われる白のパンティを穿いた人になら、枚挙に暇のない程逢つていますから、ピンクなどは一寸例外としても、下穿は完全に男女兼用の時代になつたと云つてもいいでしょう。併し女性の禪姿には残念乍ら、まだ一度もお目にかかつた事はありません。

翻つて、私の下着の事をお話せねばなりません。これは貴兄と全く同様に、色物の絶対の礼讃者です。中でも特に赤が好みなのもそっくりです。だから、同じ東京に貴兄の様な同好の志を得て、誠に心強く思っている次第なのです。

一寸詳しくお話すると、朝出勤する時と家にいる時とを問わず、背広の下は冬ならば何時如何なる時でも、フリルの付いた真赤なブラジャーをつけ、刺繍のある真紅のナイロン・パンティを穿き、豪華なレースを施した真

赤なナイロン・スリッパを着用している事には変わりはありません。併し夏では透けて見える事を怖れて、真赤なナイロン・パンティだけに止めています。スリッパはズボンの股下に溜るのが嫌で、膝の上までしかないセミ・スリッパが好きです。コルセットも時々着用してみますが、苦しいので貴兄と違って外出時にはつけた事はありません。

外出中には、お話する様な事は何もありませんが、男性なら普通の状態では、とても他人に真似の出来ぬ贅沢を、思う存分、楽しんでゐるのだと云う自己意識には、一種格別なものがあります。やはり同好の志でない我真に理解はして戴けないでしょう。

帰宅してからは、扉に鍵を掛け、雨戸を降してカーテンを引いてしまえば、もう絶対に私一人きりの世界です。時には良き理解者がいてくれたらと思う時もありますが、一人の方がかえって誰にも気兼ねなく勝手な事が出来ていいと考えてもいるのですが、どうでしょう。

私の部屋にとっては不相応に大きな鏡に向つて、全財産ありつたけの下着をぶちまけて取替え引替え一通り手を通してみなければ気が済まず、やっと気が済んだと思えば、

今度は飛んだり跳ねたりシナをつくったり、色々なポーズを作つては怪しからぬ振舞に及んだり、よくもまあ飽きないものだと思分でも感心している程です。ですが、やっぱりふつと何の気なしに自己嫌惡に陥つたりする事もあります。

貴兄には理解のある奥様があつて万事、遺漏のない様に取図つてくれるから安心でしようけれども、私の様な一人者は注意の上にも注意してなければなりません。一人者の呑気さから、うっかりする事を極力避けているのです。一番困るのは洗濯ですが、自炊の有難さで日曜日などに部屋の中で纏めてやってしまう。押入れの大きなアパートを望んだのもその為で、その中に全部干しておきます。カーテンを引いて置けば、先ず安心です。好きなパンティを洗つて直ぐ穿きたい時には、帰宅して直ちに洗濯しておけば、ナイロンなら翌朝には必ず乾いていると云う訳です。肌触りが好いと云う事と併せて、この事も亦ナイロンが好きな理由の一つなのです。

貴兄、御自慢のオーロラ・カラーのパンティとスリッパは私も持っていますが、合流のレインボー・カラーとは違って、色彩が少

し濃い目で、それこそ文字通り虹の様に美しいと云っても決して過言ではありませんね。併し今は、街では一寸見掛けません。また物語つきの七色のパンティは私も欲しいと思いますが、何処でお買いになったかお知らせ下さいませんか。鴨居羊子の製品を多く置いているHデパート、Mデパート、おしゃれの店と自讃するKストア、S下着専門店など、随分歩きましたが、遂に見つける事が出来ませんでした。

時代の尖端を行くという鴨居羊子の製品なら、既にもうその殆んどを揃えてしまいました。だが、映画「女は下着で作られる」には、ま

た何か変わったスタイルでも出てくるかと楽しみにしています。

また各社が新しい繊維として宣伝に躍氣のカシミロン、テレビロン、カロラン、カネカロ、ボンネルなど、暖いだの、肌触りがいいだの、伸縮性があるだの夫々に秀れた特徴を謳っておりますが、やっぱり丈夫で見た眼にも美しく、洗濯の乾きも早く、肌触り満点のナイロンが私は一番好きです。だから私の蒐集したパンティとスリッパの殆んどはナイロンで占められている状態です。何処へ行っても先ず眼につくのが婦人洋装下着ですので、私の生活はナイロンで覆われていると云って

もいいでしょう。

貴兄の云われる様に、男のくせに女性の下着に愛着を覚える事は確かにアブには違いないし、屈強の男が毛脛を出して真赤なスリッパを着ている処など、第三者から見れば、反吐の出る程グロテスクなものでしょうが、誰に迷惑を掛ける訳でもなく（実際に洗濯前のすっきり変色したパンティなど見ても性向が違うのか余り関心を覚えません）自分一人だけで楽しみ満足しているのですから、至って罪のない方だと思っています。だから他人にこそ絶対に秘密の事柄であっても、私自身貴兄同様に決して罪悪感に襲われたり、恥だなどとは考えた事はありません。

私の収入は歩合制なので、月々多少の高低はあっても腕には幾らか自信もあるので、最低参万円は確実に保証出来ます。今の私の望みは、私のこの性癖を充分に理解してくれる妻が欲しいと云う事です。積極的に協力してくれなくても、私のする事をただ黙認してくれさえすればこと足ります。御返事下さる方があったら俸せです。

それでは、これでペンを擱きますが、小野様、誌上での御活躍を切にお願い致します。では、お元気で。さようなら

梨花悠紀子逆吊り写真特集

第一集

略号（さか）

第二集

略号（させ）

第三集

略号（さと）

両足首括り逆吊り

逆吊りの女体折檻

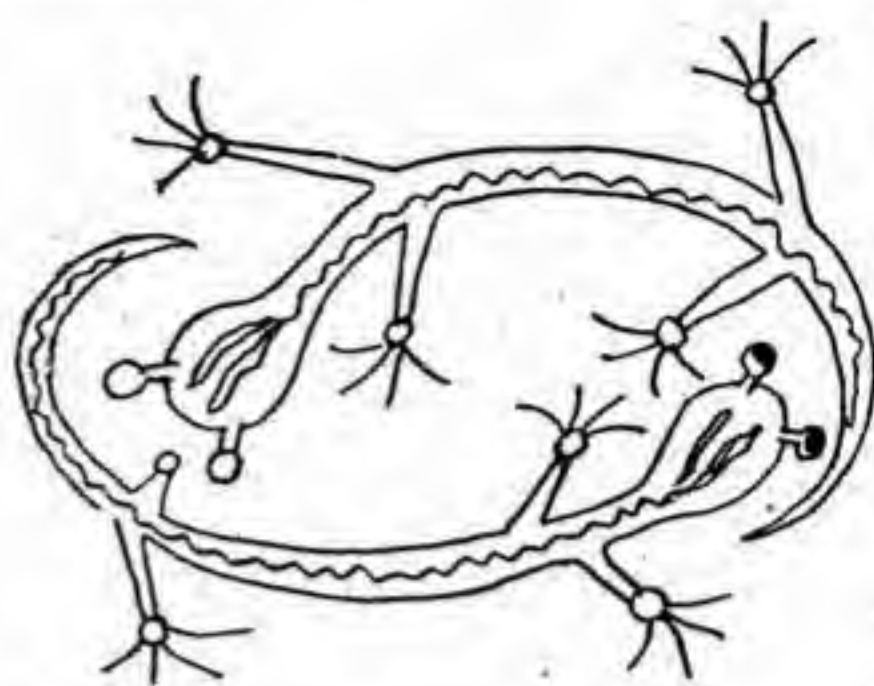
手足逆宙吊り

足首を揃えて括られた縄を滑車に連結されて、足を上に逆さに吊り下げられた美女梨花悠紀子は、両手を背中後手に縛られ胸には乳房がつぶれんばかりの縄目が肌に喰い入っている。全体重を両足首の縄で支えて痛さを耐えている梨花悠紀子。

逆さ吊りにあえぐ梨花悠紀子に対して、更にあくなき暴虐の手は、情容赦なく竹の棒にて女体のあらゆるところを叩き、こじ入れ、踏みつけ激しい折檻を加える。美しい眉をひそめて必死に耐える美貌の彼女の凄絶にして、しかも美しい吊責めフォト。

両足首と両後手首を括った縄を滑車に連結して、じりじりと宙に吊り上げてゆく。顔、胸、腹を下にして、足首と背中を上にして宙に浮いてゆく梨花悠紀子。柔肌には恐ろしい程縄がうずまって、吊責めの真価が鮮明な印画紙焼付によって発揮される。

大中判印画紙焼付
各集五枚一組 一〇〇〇円



「想 う こと」

(続)

西

条

操

みなも さざなみ
水面に小波は騒ぎ、雑魚は跳ねる。
されど、誰か知ろう、百尺下の水の
すがた、魚の心を。

— 吉川英治 —

今は、昭和四十年元旦の未明である。三時
間近くに亘って聴かされていた恒例の紅白歌
合戦。若干の格調正しきものを除いては、お
おむね、歌とはおろか、唄とも云えぬ愚劣き
わまる雑音の連続であった。そして、切替え
たチャンネルの画面から流れ出したのは、第

九交響曲の最終楽章——。

朗々たる合唱の其の和音は、胸にずんとこ
たえて響き、私は心を洗われた様に感じたの
であった。

さて、二月号において、私は些か感ずると
ころを述べさせて頂いた。筆の足らぬ所や書
き落しの論点もあるので、昭和四十年の劈頭
に臨んで、続けて申し述べたいと思う。

反感を買うかも知れないし、第一、此の文
を最後まで読む読者は半ばに満たないかも知
れぬ。それを敢えて覚悟の上で、大上段にふ
りかぶる所存である。

読者の多くは、おそらく馬耳東風だろう。

また、かなりの読者には耳の痛いことだろう
し、「何をほざく」と眼を剥く向きも多いか
と思う。しかし、つまるところ、当誌を思う
一念からなのだ。

此のままにして推移せんか、遂には当誌の
存在が危殆に瀕するに至ることは、火を見る
より明らかである。読者の大多数の要求する
ものが、現在の様に愚劣なものである限り、
賢明な編集者の努力も空しく、うらぶれた街
頭の薄闇の中でコソコソと密売されるエロ本
やブルーフィルムと同列のものに、当誌もな
り下がらざるを得なくなるであろう。

私はいま、失礼にも、読者を愚劣呼ばわり

した。歌謡曲は愚劣だと或る人は云う。テレビドラマは如何？ 忍法活劇は？ チャンバラ映画は？ 或る人は愚劣と唾棄し、或る人は大衆の慰安だと弁護する。一体、愚劣とは何なのか？ そして、大衆と称されるものの実体は？ 大衆とは遂に愚ろかなものなのか？ いわゆる大衆が好愛してやまない芸術は遂に真の芸術ではあり得ないのか。如何なる条件を備えた作品が、真の芸術たり得るのだろうか？ 私は、ここで芸術論を展開するつもりはないし、その能力もない。しかし、愚劣であるか愚劣でないか（いや、間違った）愚劣だと思われるか愚劣ではないと感じられるかは、甚だ重要なことである。一つかみほどの、或いは一抱えほどの人々によって愚劣だときめつけられれば、それは即ち愚劣なのだ。そして愚劣にして芸術たり得なかったそれらのものがセックスに縁遠いものであるならば、それが大衆の間にもはやされるのをきめつけた人々も黙って苦しげに眺めているに留まる。しかし、愚劣にして、しかも、セックスに縁遠くないと烙印を捺されたら最後、それは執拗に指弾されて浮かばれない破目に陥るのである。

一方、定かでない基準により、幸いにも、

愚劣でないとファイリングされたものは、よしんばセックスの核心を衝いたものであっても、芸術であるが故に是認され、それをもてはやさない大衆の方が軽蔑されるのだ。いや、これは、或いは順序が逆であって、大衆がもてはやさないからこそ是認されたのかも知れないが。

話を本筋に戻そう。本筋とは、当誌の在り方に就いてである。

セックスに関して、一目見るなり、一目読むなり、大衆が忽ち理解して昂ぶ様なものが排斥されるのは、洋の東西と古今を問わず当然である。それは、幾千年の歳月のうちに培われた叡智（世間智と云った方が適切かも知れない）であり、倫理である。読者のうちには、当誌の内容の殆んどはセックスそのものの描写ではないと云う論点に立って、吹き荒れる悪書談義に抵抗される向きが多いと思われる。ノーマルな人々には性的興味がないだろうから、いいではないか、ノーマルなエロ本や猥談本と同一視する勿れ、とおっしゃる。しかし、である。私は先程「セックスに縁遠くない云々」という表現を用いた。如何に少数であろうとも、性的感興を堪能する人間が存在する限り、それはセックスを描いた

ものに他ならない。ましてや、当誌を愛読する人々の欲望は、学問上でも立派に分類され登録されていて、レッキとしたものであるにおいておや、である。そして、ここに注意すべきことは、潜在的なアブノーマル人士が甚しく多いことである。従って、当誌の内容は、予想外に夥しい男女の性的感興を刺戟しているのだ。

遠い太古の昔、我々人類の祖先が其の存在を衛るために、他の生物を屠って其の血を流し、その肉を啖らい、おのが子孫を得るために異族の女性を掠奪した其の時から、SMの血は全人類の血管に脈打っている。だからSMを理解できない人間の方が、アブノーマルなのかも知れないのだ。

ただ、惜しむらくは、SMなるものが誤解され、サディズム・マゾヒズムの真髓に程遠い代物が我物顔で横行闊歩していることであって、本当に歎かわしい限りである。

SMの真髓に目覚めない男女は（天下泰平なのだから仕方ないし、当人達のささやかな小市民的幸福のために、目覚めないことを切に祈る次第だが）女が縛られ、撲られ、セックス・エリアのあたりで恥かしめられたりするのを以て、サディズムであり、マゾヒズム

であると誤解している。夫婦者が、愛人同志が、または一夜の情人達が、長襦袢やベッドや乱れる黒髪を背景に、性行為の一部もしくは大部分として、いたぶったり痛められたりそして、それを互いに嬉しがるのがSとMだと思ひ込んでいるのだ。受取る方も浅はかだが、作品（と称するもの）を与える方も与える方だ。SMの本質の何たるかを知らないあどけなき男女を性的感興に駆り立てるために、コマーシャリズムに毒された彼等がデッチ上げる活動大写真は、文章は、そして見世物は、寝室や密室に連れ込まれた女性が肌も露わにいたぶられ、遂に犯されるに至るシーンを小器用に並べたものに過ぎない。女性美とかいうものは溢れているかも知れないが、所詮それは、刺戟の強いエロ談義であって、ウルトラ四十八手を描いた猥談の域を越えていないのである。ここに、通常の意味における性行為の描写の有無は問題ではない。女性が、女であるということ自体を利用して責められ、いたぶられ、恥かしめられると云うことがポイントなのだ。

また、一方では、エロ的な傾向などは一見絶無の様なものもある。豊満な美女が、可憐な佳人が、むごたらしい拷苦に呻き悶え、遂に

は血をほとばしらせ、骨を砕いて絶命すると云うお断だ。まことに勇壮にして豪快、悲惨にして鬼哭啾々である。簡単にして明快の上なく、或る意味ではストレス解消に役立つこと請合いである。しかし、残念ながら、それは残虐と云うものであって、残酷ではなくSMの座標系には程遠い。いわば、講談本と云ったところだろうか。

真のSMには、その行為、もしくは施される行為に、生物としての契機、社会的な必然性、少くとも其の人間の半生に近い宿命的蓋然性が塗りこめられて居なければならぬ。アブノーマルな欲望を催したから、ちよっと街に出て対象を探し、そこらへ連れ込んで痛めてやるか、と云う風なお手軽にして直截なものではないのである。その様な考え方はつまるところ、通り魔とか尻切り魔のそれと何等選ぶところがないではないか。

さて、私は先程「愚劣」ということに就いて少し触れた、何が愚劣で、何が愚劣でないのか？ その定義は定かではない。それは恰かも、人間の行動に関して、何が合理的で何が不合理であるかを論ずるに等しく、おそらくは神のみぞ知る、であろう。大切なことは、愚劣でないというレッテルなのだ。

当誌が悪書として弾劾されるのを悲憤慷慨なさる方々に問う。

ノーマルなセックスを対象としたエロ本やフィルムの販売が禁じられているのを不当だと考えらるるか？ その禁制が当然だとすれば、アブノーマルな欲望を対象としたものにも弾圧が加えられて然るべきではなからうか？ 両者とも、いずれも性的感興に溢れたものである以上、そして、それが愚劣なものである限り、両者の間には、指向する目的に関しては何等本質的な差異はないのである。

再び「愚劣」とは何か？ 私は私なりに大まかな定義を下そう。

愚劣なものとは、つまり、何等の努力をも要しないで、理解できるもの、もしくは、そう云ったものが訴えんとする事柄や、漂わせるニュアンス、そして、求めんとする連想などのことである。一目眺めるや、二三行読むや、大衆が其の日常経験や欲望に照らして、忽ちグッと胸に来る様な刺戟に満ちてアクの強いものである。それはおおむね、手近かな親近感と具象性に富み、ややオーバーであるが故に、かえって大衆の憧れるところとなるのだ。逆は必ずしも真ならず、愚劣でないものの全てが難しいとは限らな

いが、少くとも、理解するに些かの努力を要するものは、愚劣でないとのレッテルを貰える。

支離滅裂なことを申し上げてしまった。当誌擁護の立場に立って、私の申し上げたいことはこうだ。

つまり、読者諸賢において、エロ描写に紙一重のSM場面、暴力を押し立てての血なま

文献資料を求む

本誌上に紹介して価値のあるS・M・F等各種の文献、資料を御所持の方で御提供可能の方は御連絡願います。誌上発表の分につきましては、出来るだけの謝礼を差し上げたいと存じますので、文献誌としての本誌の価値を高めるためにも何卒新古多少に拘らず御提供願います。写真、絵画、文章、パンフレット、広告スクラップ・ブック、チラシ等なんでも結構です。御希望により使用後資料は御返却いたします。

「奇クサロン」原稿募集

読者の皆さまの共通の広場として、「読者通信欄」と共に、皆さまに親しまれていく「奇クサロン」の欄をこれから益々発展充実させてゆきたいと思ひます。マニヤ通信、モデル通信、短信往来、編集者執筆者モデル投稿者などへの呼び掛け、文通交際写真、絵、告白の便り等々、なんでも構いませんからお気軽にお寄せ下さい。

本誌編集部

ぐさくも残虐な情景や叙述——そう云ったものを誌面に要求することを差し控えられたら、ということである。勿論、そう云ったものを渴望される気持は衷心より御察し申し上げる。それは恰かも、精力に溢れた人間が異性を求めるに等しい血の騒ぎなのだから。

しかし、そう云った声が余りにも強いと、賢明なる編集者においても、ついつい路線を踏み外し兼ねないし、そうなれば一大事である。一目見るなり、一読するなり、忽ちにして血沸き肉躍ると云った風な、お手軽にして直接的な刺戟を誌上に追求するのをやめようではないか。そして、編集者においても又、いわゆる「大衆ベッタリ」の編集をして、おそれるおそれる、ひそやかに世に流し、よって来たる世の指弾と販売部数との悪循環に悩むのを、どこかで快刀乱麻を断つ必要があるのではなからうか。

誰かが云っている。

「隣の貧乏、鴨の味」と。

また、こうも云う。

「深い同情のさ中に在っても、他人の不幸に對しては、万人はひそやかな快感の情を禁じ得ない」と。

遠い遠い昔より、人類の血の底に沈澱して

いるサディズムとマゾヒズム。それを自覚していない幸福者達をして好奇の眼をそば立たせ、その血を掻き立てるが如き編集は、これを避けられた方が賢明であろう。未開花の血に与えられる刺戟は、恰かもウラニウム二三五の如く、臨界量を超えれば鮮烈な爆発をもたらし、目覚めた血は再び鎮まることはない。街の本屋をひっくり返して歩く綺羅びやかな方々はいざ知らず、真の識者が憂うるのは此の点なのだ。まして、その指向する座標系が真のSMのそれではなく、SMの仮面をかぶったエロ本や講談本の亜流とあつては、正統誌の名が慟哭するであろう。

ついでに差し出がましいことをもう一つ。

それは、近來の当誌において、とみに其の比率を増した同好者同志の呼びかけ合いに就いてである。それ自体は何等責められるべき筋合の事柄ではないが、私に云わせれば、それは当誌の品格を損なうこと著るしいものがあり、何とか実話と云った風なものレベルに引き摺り下ろしてしまう感がある。そして、世の「指導者」達は、かかる切実にして迫力ある声を見て、此の様な「不道德」な行為が蔓延し、遂には白昼堂々と行なわれる様になるのではないか、ホラ、ここに、解説付き絵

草紙の教科書があるではないか、と被害妄想に駆られる仕儀と相成るのである。

生意気なことばかり申し上げて相済まね。

しかし、これもあれも、当誌を、孤塁を守る此の奇譚クラブを、切に思う一念からなのである。安易にしてお手軽な刺戟をもてはやし礼讃するのをやめよう。遊戯（プレー）と称するらしいの相手を求め囁って、アブノーマル・パチルス恐るべし、との印象を播きちらすのを避けよう。そして、SMがセックス充足の手段であると単純に割り切らず、丹念な思索と時間とをかけて、いわゆるノーマルな人々には思いも寄らぬSMの世界、真のサディズム・マゾヒズムの次元を賞でようではないか。

見識ある編集者として、所詮は読者の鏡たらざるを得ない。読者各位が自己の赤裸々な欲望を深く沈潜させ高く昇華せしめ、それが編集者に反映し、両者一体となって努力するならば、必ずや当誌は風格を備えて、それを指弾する人々の方こそが、恰かも芸術を理解できない大衆の様に、軽蔑されるに至るであろう。真のSM世界への道は峻しくもきびしいが、その谷は、底の浅い好色本などよりも遥かに深く、その峰は、香り高い文学と比肩し

て聳えているのだ。いや、おそらくは、SMの真髓と古今の名作とは、座標原点を同じくしているのかも知れない。その様な気がするのだ。

万事が安直で近道反応謳歌の当世、今日此の頃の社会に欠くるものは、詩とロマンである。私は、その詩とロマンと、そして壮重な叙事詩をさえ、当誌、此の奇譚クラブに見出したいと念願するものである。

さて、再三再四、真のSM、サディズムとマゾヒズムの真髓と云う言葉を用いて来た。

真のサディズム、マゾヒズムとは何か？その本質とは？

再び三度、大上段にふりかぶろう。そもそも、サディズムとかマゾヒズムとか云う名称がいけない。S侯爵やM氏が生まれ出ずる以前から、それは厳として存在したのである。S侯爵やM氏が、たまたま其の傾向をセックスの分野で発揮して有名になってしまったものだから、それ以来、それはセックスと不可分のものにされてしまったのだ。

まあ、それもいいだろう。セックスとは、性行為それ自体のみならず、人間をして行動に駆り立てる衝動の根元なのだから――

人類をして大いなる行為に駆り立てる或る

もの。日常われわれの眼前を幻影の如く横切って泡沫と消え行くもろもろの事象、その全てのものの背後の空高く厳として高らかに飛翔している或る存在。西へ西へと新大陸を切り拓いて往った男女の心を支えたもの、塵芥の如く戦場の土と朽ち行く兵士の胸を甘く浸したものの、そしてまた、愛する者のために自己を犠牲として悔いぬ親や男女の瞳に溢れるもの、それらは如何なる基盤に根ざしているのだろうか。

文明の光が射し初めてより此の方、人類の歴史を支え推進して来たのは因習と習慣の殻に閉じこもり、ひたすら身の安全を守るに汲々たりし人々であつたらうか？ 否。

現在の社会を維持しているのは、マイホーム、マイベビー、マイカーの小市民達であるか？ 否とよ。

近い将来の文明を死守するのは華やかな都会の光茫に舞い痴れてうつつを抜かす男女達であろうか？ 断じて否。

そしてまた、幾世紀、幾千年紀の未来、此の惑星を担って立つのは、緑なす地球の丘に恋々たる人々であるだろうか？ 断々乎として否。

身の危険を冒して古き因習に敢然と挑んだ

人々、部下を叱咤して死地に追いやった武将達、他人の生活を人知れず支えて働く男女、そう云った人達の手によって、人類の歴史は支えられて来たし、支えられているし、そして支えられて行くのだ。意識するとしなないに拘わらず、そこには、人間の否、生物の存在そのものに根ざしたSMの真髓がある。

かの悪名高き大東亜戦争、その悲愴にして惨たる時代においても、よろずお手軽で手取り早い現在の世のさまより見れば、そこには雄大な詩とロマンがあった。ふり返りみてまさぐれば、硝煙けふる空高く、琴線ふるわ

せるに足る真のサディズムがマゾヒズムが、壮麗に舞っているのではないだろうか。

その戦争から既に二十年。当誌も十数年の歳月を閲し、カストリ誌の域を脱して久しい。かくなる上は更に一日でも早く、SMの仮面をかぶった猥談本、はては毒々しい絵草紙などの亜流から、高くぬきん出て欲しいとこいねがうこと切なるものがある。

つい、大見得を切ってしまった。

たとえ話を以ておわろう。

禁断の木の実たる原子力。当誌は、云わば其の原子炉である。原子力潜水艦の寄港に就

いて世の人々は騒ぐ。一方は安全だと云い、

他方は危険だと喚く。放射能制御の術なき現在においては、採るべき道は唯一つ、原子炉に厳重なシールドを施し、エネルギーのみを取り出す「からくり」を設けることである。そして、その「からくり」の操作には、努力と注意を要するのだ。その努力と注意を払い其の「からくり」を身につけ、炉心には決して触れようとはしない人こそが汲めども尽きぬ恩恵に浸り得るのではないだろうか。

「最新版」 女体緊縛フォト五十選

B組五十集 大手札判印画紙(9×13) 焼付

各組一枚一組(送料共)

一組一枚	一〇〇〇円
五組五枚	四〇〇〇円
十組十枚	七五〇〇円
二十組二十枚	一四〇〇〇円
三十組三十枚	二〇〇〇〇円
四十組四十枚	二五〇〇〇円
五十組五十枚	三〇〇〇〇円

B1	全裸エビ責仰向け(関谷)
B2	逆エビ責め全裸像(水本)
B3	乳首ペンチ挟み(竹野)
B4	後手十字縛肩口上(梨花)

B5	足の裏擦り責め(竹野)
B6	おへソいじめ大写真(関谷)
B7	剥いだバタフライ(関谷)
B8	貴方に捧げた裸身(大塚)
B9	乳房責め絶叫苦悶(大塚)
B10	無防備双手吊り(絹川)
B11	豊満臀部エビ縛り(水本)
B12	糸縄わね股間縛り(水本)
B13	全裸亀甲股間縛り(関谷)
B14	足踏付け二つ折り(大塚)
B15	尻突出しムチ打ち(関谷)
B16	手錠にもだえる(竹野)

B17	尻突出エビ責め(水本)
B18	椅子開股鼻責触手(梨花)
B19	息もつがせぬ猥褻(竹野)
B20	投げ出した全裸(関谷)
B21	美しき尻部の露出(絹川)
B22	猿ぐつわ悦虐境(竹野)
B23	後手柱縛り脚線美(竹野)
B24	強制鼻挟水呑ませ(梨花)
B25	苦悶にねじる裸身(関谷)
B26	責めに気を失って(関谷)
B27	さアどうでもして(関谷)
B28	豊麗乳房膨隆縛り(竹野)
B29	投げだされた女体(竹野)
B30	裸身をくびる麻縄(梨花)
B31	強烈縛りに悦ぶ(梨花)
B32	全裸逆エビ片脚拳(東浦)
B33	踏みつけマゾ境地(東浦)

B34	すべてをさらけて(関谷)
B35	ムチ打ち失神寸前(関谷)
B36	クリップ鼻挟み(絹川)
B37	台上的マゾポーズ(大塚)
B38	吊られゆく美体(絹川)
B39	拷問に無惨な美貌(梨花)
B40	マゾ女性の表情美(東浦)
B41	喰い込む股間縄(絹川)
B42	炎責めに悶える(梨花)
B43	犠牲者の人身御供(大塚)
B44	美肌無茶苦茶縛り(絹川)
B45	裸身に立つ蠟燭(大塚)
B46	手枷足枷大写真(四方)
B47	鎖に悶える足首美(柳初)
B48	蛇責めに柔肌栗然(梨花)
B49	鼻の玩弄恍惚境(大塚)
B50	女囚菱縄さらし(絹川)



検便随想に应えて

漆 山 春 美

赤痢、腸チフス、コレラなどが発生すると新聞紙上で先ず眼につくのは「検便」という文字です。私達のようなA感覚に興味ある者にとっては「検便」は集团的に、男女を問わず、肛門からガラスの棒で採便されるのですから、いわば集団浣腸？ や肛門検診みたいなもので、見のがせないことだと思います。検便といえは私達が小学校の頃によくマツチの空箱に便を入れて持って来るよう先生に言われたことがあります。伝染病の予防の関係では必ず肛門からの直接採便によっているようです。新聞紙上でもよく検便は問題になって居ります。ずっと以前では福島市で集

団赤痢発生時に住民を四つん這いにして検便し、婦人達で問題にしたようですし、又福岡でも給食婦の健康診断の時、市役所に集合させて直接採便したのを市役所の吏員がのぞき見たところから問題になったこと。又、山形県の温泉で宮様行幸に際し、女中達を幕で仕切りもしない室に座布団を一枚置いて、そこで尻が天を向くような姿勢で四ツん這いにされ肛門にガラス棒を突っ込まれたこと。又、新潟県の佐度で集団赤痢が出て女高生などを幕で仕切った保健室で、スカートを捲り上げてズロースを下げさせ両足を出るだけ開いて体を前にかがめた姿勢をとら

せて直接肛門にガラス棒を入れた等々投書欄などに気をつけていると、いろいろ興味のあることが書いてあります。ごく最近では千葉県習志野市のコレラ騒動の時、地区の住民や市内飲食業者従業員を屋外体操場(グラウンド)に大きな天幕を張ってそこで、尻を丸出しにさせて四ツん這いにさせ採便したので、B Gや女生徒など恥しがって大変だったとの報道もありました。事例を多く挙げて参りましたが、なぜ私が検便記事を見ると興味を覚えるのかという点と私自身この恥しい洗礼を何回か受けたかなのです。

第一回目は中学を卒業して、愛知県小牧の紡績工場に勤めていた時、寮の女子工員の一人在り帰省した時に赤痢にかかってしまい女子寮の食事から、などと言われて女子寮の全員百五十人が検便された時です。

その時、三棟の寮のうち一棟ずつ食堂へ集合させられて保健所の人から「この寮のなかから赤痢患者が発生したので、これから検便させてもらいます。検便は法律で定めた規則に基づいて行うので全員が受けなければなりません。又赤痢がこれ以上ひろがらないためにも自衛のために協力して下さい。検便は衛生室で行いますから一〇一室の人から順番に廊下に並んで下さい」と申し渡されました。皆は検便は始めてなので「トイレでとって持っていくのかしら、私便秘してるから出ないわ」などと話しているうちに「一〇九室の方!」と呼ばれて五人一組で衛生室の廊下を曲ると、すぐ前に検査を受けた人が顔をまっかに上気させて「ひどいわよ、お尻へガラスの棒つつ込むのよ」とささやいて走って指示された反対側の出口から出て行きました。皆で顔を見合わせていますと「早く入って入って!」とせかされて衛生室へ入りますと保健所の若い男の人がイスに腰かけていて室番と

姓名、年令を聞かれ、紙切れを渡されました。床張りの十畳敷位の広さの室の中には白いツイタテがコの字型にして二カ所設けてあり、その二つの囲いの中間の机の上にガラスの棒の入った試験管が沢山置いてありました。「次の方早くして」という声に囲いの中へ入りますと保健婦の人が「向うむいて、肛門からとりましますからお尻出して」ししぶズロースを下げますと「白墨の印の所に両足を置いて前に手をつく」ように言われ恥しさにまっかになつてしまいました。とにかく窓の明るい方にお尻を向けて四ツん這いになるとお尻が伸ばられる感じがしちよっと痛いと思つた時には「さあ終り、次の方」と簡単に終つてしまいました。室から出ると、お友達と顔を見合せ思わず「嫌アねえ」とためいきをついてしまいました。自室へかえってからしばらく人糞じゅうりんとか何とか皆でワイワイ話して居りましたが、検査の結果何ともないことが二日程あとでわかり赤痢騒ぎもこれだけで済んでしまったのです。

第二回目は紡績会社を退社して郷里のアイスクリーム、牛乳工場に勤めていた時、丁度満十八才になったばかりの三月でした。伝染病シーズンに入るので予防のために健康診断

は特に嚴重に行うとのことで、従業員は胸部レントゲン、その他検便など保健所からレントゲンカーや医師が出張して来て工場で検診した時です。勤めていた工場は現場の総員は六十名位で内十名位は配達運転手で男の人で、これはレントゲン検査だけ。残りの五十名は年令十五才〜三十才までの女子でこれらの人は直接手で原料や製品(包装前)に触れるから検便は他人の便で代用したりするのを防ぐため直接採便、という方針だと聞かされました。皆もお尻から採ると聞いて嫌がったのですが、田舎の人特有の従順さと伝染病を出したら大変だという気持ちから協力することになったのです。その日はレントゲン検査はスリーマーやスリップの上からできるので簡単に済み、次は検便です。男の人達がレントゲンだけで済むとすぐ仕事に出かけたあと、私達は宿直室の八畳の部屋で採便されました。障子を開けて中に入ると、そこは何にも囲いもしてなく保健婦さん二人と男の人がいて、男の人に姓名と生年月日を聞かれ、それから部屋の隅で「お尻を出して、両足を開いて、ひじを前についておなかの力を抜いて」と指示され、ガラスの棒がヒヤリと冷い感じとさし込まれるのがわかりました。中学を卒

業してすぐ就職したN子さんは丁度生理中で黒ズロースの下に生理帯をしていたので泣きたい位だったと言っていました。そして「皆なされたんだから仕方ないわね」とあきらめ顔でした。このように私が経験した範囲では検便は四ツン這い方式をとっているようです。後ろから器具を操作するに一番よい姿勢だからでしょうか。そしてベッドがなくても多勢を次々と検査するにも能率的だからではないかと思えます。

第三回目の体験は検便とはちがうのですけれど、浣腸です。牛乳会社で勤務していた、ある日。朝から何となく胃が重苦しく気が進まなかったのですが、家で心配するといけないうので会社へ出ました。何か気の進まぬ時は何かあるもので会社で水にぬれた床で滑ってイヤというほど尻もちをついたのです。その時は照れかくし半分で平気だったのですが、午後になると何かチクチクと痛みトイレでしゃがんだりするとズキンと痛むのでK整形外科病院へ会社を早退して行きました。先生は四十才位の方で、尻もちをついたことなどくわしく質問した後、「どうぞ」と黒ビニール張りのベッドを指さしました。そこに横になると「どれ見せて下さい」といいながら看

護婦さんに私のパンティを下させスカートを腰の上までまくり上げて私をうつぶせにしました。先生は「尾てい骨を打ったな」などと言いつつ、お尻の骨を圧したりして痛みを確かめていましたが、何やら看護婦さんに命じしばらくそのまま待っていますと、看護婦さんがもどって来て「浣腸しますから。痛くないですよ」というのを見れば大きなガラス容器に白い液の入っている黒いゴム管のついた器具を持っているではありませんか。

私はそれまで浣腸といえばセルロイドの小さなイチヂク型のものだと思ひ込んで居りましたし小学校の四年か五年の時便秘してしまい隣の産婆さんに無理やりあおむけにされて両足を挙げさせられて浣腸されたのがイチヂクだったので浣腸といえばイチヂク浣腸と思っていたのに大きな器具を見てびっくりしてしまいました。そして「便秘してないんですけど」といいましたけれど「診察には腸を空にしないといけません」と言われ仕方なく左を下にして足を腹につくようにまげて下さいという言葉に従いますと片方のお尻の肉をつまみあげられ管がさし込まれ液がグングン入って行くのが生温く感じられました。お腹が張って苦しくなってきたので思わず顔を

しかめますと管が抜かれ看護婦さんの手が脱脂綿で私のお尻をおさえ「少しがまんして下さい」といわれ二分程経ったでしょうかグーグーとお腹が痛み出し早く液を出してしまいたい気持ちで一杯になりました。「もういいですか、トイレへゆかせて」と三度位言った所で看護婦さんはやっと「はいいいでしょう」と離してくれました。大いそぎでパンティを上げて診察室の向い側のトイレへ待合室を横切って飛び込みやっとホッとして診察室へ戻ると診察室の片隅で太陽灯か赤外線灯かを足にかけていた三十才位の男の人が終って出て来る所でした。今終ったとすると私が大きなお尻を丸出しにして浣腸されているのを見られたことになる……このことに気がついたらとたん恥しさに火が出るような思いに全身が包まれました。又ベッドに上って今度は正座して上体を前にたおして丁度おじぎをしたような姿勢をとらされお尻から指をさし込まれて直腸内から尾てい骨のまわりを圧えたりして痛みを探され、それが終わるとレントゲン写真で腰部を撮影してやっと解放されました。結果がわかるまで四十分位診察室で待っていましたけれど、その間、さっきの私の浣腸される所を見ていた人にもし会ったらなどと思

うと居たたまれない思いでした。結果は単なる打撲傷で尾骨に異状なしとのことで飲み薬をもらって帰ったのですけどこの日のことがすごく強烈に私の心に焼きついたのでした。ふとしたことから奇クの存在を知り偶然拾い

読みした所に私の体験とそっくりなことを求めていらっしゃる文を読んで散々迷ったあげくペンをとったのでした。私は来春まで新潟市内でお手伝いをして居りますのでもしお手紙いただけますなら、こ

れから半年間は毎月末に新潟郵便局止、漆山春美に到着するように御願ひ申し上げます。皆様にいろいろ教えていただきたい気持ち一杯なのです。

新版 M フォト

新人 S 女性出現

股 挟 み

略号 (あと)
女の逞ましい股に、がっちり挟まれた男の顔。

大手札印画紙焼付

四枚一組 一〇〇〇円

素足の脂

略号 (あて)
女の美しい素足をべっとり顔の上にのせられた男。

大手札印画紙焼付

五枚一組 一二〇〇円

ムチの威力

略号 (あさ)
縛った男をムチを揮って意のままに料理する高慢な女。

大手札印画紙焼付

十枚一組 二〇〇〇円

人間便器

略号 (あす)
トイレの中で女の便器の代

用となり下った男の顔。

大手札印画紙焼付

十枚一組 二〇〇〇円

蠟涙の洗礼

略号 (あせ)
女に蠟涙を全身に浴びせられて悶えている縛られ男。

大手札印画紙焼付

四枚一組 一〇〇〇円

尻の下の顔

略号 (あた)
女の尻の下に押しつぶされて、うごめいている男の顔。

大手札印画紙焼付

二枚一組 六〇〇円

海老しばり

略号 (あそ)
エビ縛りで苦しんでいる男を意のままに弄ぶ女。

大手札印画紙焼付

六枚一組 一四〇〇円

神酒授与

略号 (あち)
ネクタールを直接口へ与えられてる男の幸福。

大手札印画紙焼付

六枚一組 一四〇〇円

股責極楽

略号 (あつ)
女の股でがっちり咽喉輪を押さえられている男。

大手札印画紙焼付

四枚一組 一〇〇〇円

足舐と嗅香

略号 (あこ)
女の素足を舐めさせられ、の香を嗅がされる男。

大手札印画紙焼付

五枚一組 一二〇〇円

顔面騎乗

略号 (あう)
男の顔の上に、どっかと豊満なお尻を据えた女。

大手札印画紙焼付

七枚一組 一五〇〇円

人間犬の芸

略号 (あえ)
首輪とくさりともチで厳しく芸を仕込まれる犬男。

大手札印画紙焼付

十枚一組 二〇〇〇円

女の尻と顔

略号 (あく)
女の巨大なお尻によって押し潰された男の顔。

大手札印画紙焼付

三枚一組 八〇〇円

足指の饗宴

略号 (あの)
女の足の指に挟んだお菓子をお口でいただく緊縛男。

大手札印画紙焼付

二枚一組 六〇〇円

男を縛る女

略号 (あに)
男を縛り上げて自由を奪い恣に弄った末屈伏させる女。

大手札印画紙焼付

十枚一組 二〇〇〇円

尻責股責

略号 (あぬ)
女性の最大の武器尻と股とで男の顔をむちやに責める。

大手札印画紙焼付

十枚一組 二〇〇〇円

セミ・フィクション

おなかに切り傷のある女

南方 佳 男

○

二歳になる長男が生まれる前に、妊娠中の妻とこんな会話をしたことがあった。

「このごろ帝王切開で赤ちゃんを生む人が増えたんだって……」

「ふーん」

「気のない返事だなあ……帝王切開は母体保護にいいんだって……」

「そう。でも私はいやよ……だっておなかを切って出すんでしょ。痛いわ、それにもし失敗でもしてごらんない……ああ恐しい」

それから数カ月後、かなり難産の末、長男

を生んだ妻が、今度は彼女の方から帝王切開の話をふり返して来た。

「子供を生むって苦しいのよ。陣痛って、やってみなくちゃあわからないわ。あれだったらいっそのことおなかをパッと開いて、出してもらったほうが楽じゃないかしら」

そしてまた何カ月後のことになる。

○

「こんにちは。南方さん、お久しぶり」

足元に注意しながら市内バスを降りたとなん、艶っぽい女性の声で、びっくりさせられてしまった。

「ア！ ああ道ちゃん……」

「ほんと四年ぶりだね、お元気？ 奥さんも坊やちゃんも大きくなったでしょう」

彼女は、いかにもなつかしそうに、矢継早に話しかけて来た。

「ああ、おかげでね。で、道ちゃん、すごくやつれたようだが……」

その昔、ミスU市に選ばれた彼女。上背も一メートル六十センチを越しているだろう。バストもヒップもぐっと大きく、ウエストがキュッと締まった典型的なグラマータイプ。



その上に東宝の水野久美ばりの美人ときてい
る。陽気で性格もザックパランだからボーイ
フレンドも多かったが、割り合いシンは固く
友達づき合いと恋人（おこがましいが私のこ
となのです）との区別ははっきりしていた女
性だった。

本名は中尾道子。いや失礼しました、いま
は人妻、坂井道子さんである。そしていま私
と立ち話している間も、彼女はしっかりと乳
母車の柄に手をかけていた。

○

「ええ、会う人ごとに私のことをやつれた
っていうわ。この児のせいなの」

彼女は乳母車の中にいる丸々とよく太った
坊やに、いかにも可愛いくてたまらない、と
いった顔で視線を送りながら話を続けた。

「帝王切開したのよ」

「そうだったのか。大変だったねえ」

「ええ、だからひどく疲れちゃって、初めか
らその気だったら、まだよかったんでしよ
う。私の場合、年遅い初産の子供でしよ
う。それにおなかに予定より二十八日も長く
いて生まれた時に目方が四キロ以上もあるす
ごく大きい児だったの。それで難産なもんだ
からお医者さまから、胎児と母体保護のため

どうしても手術の必要があるって、にわか
に切っちゃった。だから私の体の衰弱がひど
かったのね。あのね、もう産後六カ月になっ
ているのに、まだ目がかすむのよ」
「そういえば彼女は、さっきからまぶしそ
うな目つきをしていた。」

○

またここで不粋な説明をさしていただく。
彼女、つまりそのころは中尾道子、と私とは
事実上、夫婦といってもよい関係にあった。

それはドライな恋愛感情で結ばれ、離れた
ものではなく、二人の別離は二人の努力では
いかにしても越えられない家庭的な障害があ
ったことで、互いに別れがたい想いのま
ま、共に無理じいに過去を忘れようといまの
妻を、あるいは夫を選んだメロドラマの主人
公を地で行くような間柄だった。

したがって、いまここに四年ぶりに顔を合
わせても、ズバリ遠慮のない話ができた。そ
しておかげで貴重な体験談を知るところとな
った。

「手術って痛かった」

「痛いわよ、マスイなしでお腹を切るんだも
ん」

「へエ、マスイかけないのか……」

「知らなかったの。盲腸手術と違うのよ。め
ったに薬を使ったら、お腹の中の赤ちゃんが
危いのですって」

「じゃあ、生体解剖だね」

「ン、生物の実験でやった蛙の解剖そのまま
だわ」

そして「うふっ……」と忍び笑いした。きつ
とありし日に、二人でよく試みたSMプレー
を思い出したのか――。

でも私は気にかかった。本当にマスイなし
で手術するのだろうか。読者諸兄にくわしい
方がおられたらお知らせしていただきたい。
まあ、彼女の場合は特例だったのかも知れ
ない。

「手術台の上に裸におかれて、大の字型に手
足を縛られる。ちよっとしたハリツケ晒し者
って形。といっても手の方は、手術中だけ暴
れないように看護婦さんが押えるていどだ
し、裸といったって白布がかけてあって、露
出してるのはおなかだけ。でもやっぱり恥し
い恰好だわ」

彼女は少しオーバーな表現で、手術のもよ
うを話してくれた。

○

本誌のモデル、梨花悠紀子さんがデビュー

したところ、梨花さんの体はいまよりずっと幼かった。それが一番はつきりしていたのは、おなかの肉付き、とくにお臍を中心に下腹にかけて若い女性特有の脂肪太りらしいものがなく（いまでも多い方ではない。それは体を新鮮にみせているが）ちようどゴムまりの肌を感じさせていた。

私はこんな感じのピチピチした若い女性の腹部に強烈なサジズムをおぼえるのだが、これと対照的な、ぼったりと脂肪の乗ったおなかに魅力を持つ。もちろん脂肪の量にも加減があるが、絹川文代さんていどの体が理想だ。

道子（とくに今文章の中では呼び捨てさせてもらおう）のおなかも絹川文代さんのそれとそっくりだった。といっても、ミスU市に選ばれてから二、三年後のこと。私と好きなプレイを楽しんでいたころの彼女のことである。

いま彼女が話す言葉で、私は手術台に乗った彼女の姿をやすやす連想できた。

あのころの彼女は、私の性格のよき理解者で、私の好きな縛りスタイルに、少しくらい難しい注文でも応えてくれたものだ。

本当に十字架に縛ったことはなかったが、

狂言の『棒縛り』のように、青竹を両肩に天秤でもかつぐような形に背負って、両腕を縛らせ、床柱の前に立って『ハリツケ』だなどと私を喜ばせてくれたこともあった。

ベッドの上で大の字縛りになったことも度々だ。

「本物になったね」

私のいったこの言葉の意味は、こんな説明をしていなければ、おそらく他人にはわからないだろうが、彼女はとっさに

「バカ！」

と小さな声で答え、ほんのり紅潮しながら軽くにらんだ。

○

「どのくらい切るの？」

「そうね」

道子は帯の下あたりから指間隔でちよっと計るまねをした。

「随分大きいわ。お臍の七、八センチ上ぐらいから、私のときは、もう赤ちゃんが出かかっていながら、あわてて手術したんでしよう。だから本当の切り方と違うかも知れないけど、デルタのあたりまで切ってるわけ。だって傷がそのくらいあるものね」

なるほど随分、派手にりっぱに切り開いた

ものである。でも、体験談なのだから信じよう。

あの私のよく知っている真っ白なきめの細かい道子の腹。手術中は豊かな美しい腹線美も妊娠という現象で変形し、おそらく臍窪もなくなるほどグンとせり上っているだろう。

磨きたての大理石のように輝いている肌の中央に、いまから『そこを切ってほしい』とでも示すかのように、縦に一条、紫緑色に妊娠線が引かれている。

「あのね、お遊びのときのようにプツリ、ざくざく、ズバリって切らないわ。お医者さまが慎重にまず皮を切って、肉を切って、腹膜を開いて、そして子宮を、腹膜を切る時が一番痛かったようだよ。でも本当はね、陣痛から出産と痛さ続きのもう一つ延長でしょう、だから陣痛の痛さと手術の痛さは違うんだけど、こんがらがって、どんな痛さって形容できないの。ただすごく痛い。そして死にたくないって気持ちでいっぱいになるの」

話を聞いても、それはそうだろう——という気になる。

健康な意識のはっきりした若い女性にこんな手術をしたら、それこそ死刑にしているのも同じである。

手術前に看護婦が機械的は必要部分に施すアルコール消毒だって、ノーマスイのおなかにされたのだったら、その行為だけで次に来るものを想像して十人中九人まで失神するだろう。ましてやお医者が無表情な顔で局部を喰い入るようにみつめ、やおらメスをキラめかしたりしたら、それこそ映画に出て来るドラキュラー的医師のそれに変りないはず。

そんな恐いことを彼女は半分無意識で経験したというのだから、私としては、彼女を英雄視する価値があるな—と思った。

○

それから後のことは聞く必要もないし、彼女も説明できない。

「帝王切開の傷だけは、どんなにうまく整形美容をしたって消えないんですって……」

おそらく未婚の美女が聞けば、死刑の宣告に準じるほどのショックを受けそうなこの言葉、道子は割り合い平然といった。

「相当にグロテスクな傷だわ。だっておなかをそれこそ真っ二つに深く切り裂いて、かなり長い時間かかる手術でしょう。盲腸手術とは段違いよ。だから傷痕だっておなかに飾りししゅうでもしたように、はっきり残っているわ。そうね、私は貴方とお別れした直後に

移動性盲腸炎でかなりの手術をしたのよ。だからいまの私のおなかには傷だらけ。でも縦の傷ばかりね。アクセサリーのついでに切腹して横の傷もつけようかしら……」

微笑を浮かべてそう話す言葉は、まるで私の心の中を読みとったかのように思えた。

そして

「でもお臍だけは、ちゃんと有るわよ。真ん中を縦に切っても、そこそこだけは左に避けてあるわ。」

と付け加えた。

四年の歳月が二人の間に、やや他人行儀なわだかまりをつくったといっても、やはり道子は「私の道子だ——」とこの最後の言葉で、しみじみ痛感した。彼女は私を忘れていなかったのだ。

○

「このところを、このあたりからスーッとこらまで切るんだってさ」

寝床の中で以前の道子と同じようにみごとな腹線美をしている私の本当の妻に、指先で示しながら、きょうの話を中ばはかしながら話してやる。

わざとお臍の真上を通る。指が窩に入るとグルグルと突ついてゴマをとってやった。

「道子のお臍もよくこうしてゴマをとってやったな。腋の下をくすぐっても、あまり感じないのに、お臍は無性に嫌った。だから余計にいじめたくなって、新しい毛筆の先をヌヨン切って、バサバサし荒い毛でくすぐってやったりした」

そんな追憶が幻となって私の頭を過ぎ去った。

「いい加減にしてよ、お臍にさわるの。さわったかったら自分のをしなさいったら……」

その点、妻の言葉は味気ない。でも帝王切開にだけは興味があったようである。

「そんなに大きくお腹を切られて痛い思いをするんだったら、やっぱり私は嫌ですよ。痛い痛っていても、陣痛の痛さもていどが判ったし、二人目も普通にお産します。だってあなただって私のおなかに傷のない方がいいでしょ」

その通りだ。想像的腹部加虐に楽しみを持っている私も、やはり妻にだけは別な考えをしている。

せめて私が、愛人の一人も持てる身分になって、妻も許してくれるなら、一度は帝王切開手術の実際とその後の姿を確かめてみたいという意欲は多分にあるのだが…… (了)

【体験告白】

女性ビンタの追憶

ハビンタ・マゾの提唱V

王 福 敏 太

本誌には、ビンタを一つのジャンルとしてあつかったものはないが、ポリウムのある若い女性のひ弱き男性への強烈ビンタ、先輩女性の後輩女性へのビンタなど、つまりビンタ・マゾはアブの世界の一つのジャンルとして独立させてもいのように漠然とではあるが考えるし、また私自身、その悦楽にひたっているのである。

その意味では戦前はよかった。私の成長した頃は日本のビンタ史上、まさに黄金時代と言っても過言でなからう。周知の軍隊のビンタは私にとっては味もそっけもなく、全く問題外だが、看護婦宿舎で、女学校寄宿舎で、

女子青年学校で、女教師が男生徒に、母が男の子に、姉が弟に等々ビンタ、オンパレードであった。

私をして、今なお悦楽の血をわかせる二、三の思い出をここに紹介しよう。

その一は、わんぱくもさかりの小学校四年生のときの出来ごとである。私のクラスは田舎で、特に人数の少かったせいもあって、その当時の学校としては珍らしい男女共学であった。しかも、勉強、体力ともに女生徒の方が優勢で、男の方に成績では劣ると受持の説教を受け、一緒にあそんでいても、机の上に顔を押しつけられて鼻血を出す者あり、正面

切って相撲をとっては、これまた投げとばされるというていたらくであった。

さて、ある日の休み時間、女生徒全員でボール遊びをしていた。日頃のうつぶんをはらすはこのときとばかりに男のわんぱく連中数人でこのボールを奪取し、男生徒にのこされた唯一の武器である敏捷さにものを言わせ、パスしながら逃げまわり、とうとう休み時間を終ってしまった。こうなると女生徒のゆくところはきまっている。受持のKという女教師のところに行った。Kはすぐ犯人を調べあげ、教室には入れず廊下に立たせておいた。

そして女生徒全員を廊下に呼びビンタを張れと命じた。しかし、いかに豪の者たちとは言え小学校四年生の女の子である。もじもじしていた。K先生は「Y子さん、あなたから始めなさい」と男を相撲で投げとばしたY子に命じた。Y子はこんどは、臆することなく腕を一寸まくった具合にして、子供の正直さ力一杯に張っていったものだった。男生徒の中には（なんだ女になぐられるなんて）という素振りのものもいたがK先生の権幕を横目で感じとると、そのままY子のお仕置を受けて（意外に痛いぞ）という風に顔をしかめているものも多く、一番はじっここの小粒なのは、

よろよろとよろけて、転んでしまったのだった。

他の女生徒、二十何人かがそれに続いた。

「女生徒にいたずらすると、どういうことになるかわかりましたね」とK先生。さっきまでの元気はどこへやら、すっかりうなだれた男生徒たちはコックリとうなずいた。すすり泣いている者もあった。Y子は小気味よげにねめつけていた。男生徒数人に対する女生徒二十何人かのビンタはまさに壮観であった。後で男生徒の一人が「Y子のやつはくらくらする程だった」と言っていた。

幸か不幸か、その時わたしは、その仲間に入っていなかったので、マゾ気分は味わえないでしまったが、今でも胸のときめく思い出である。

学校の話のついでにもう一つ。六年生になると大平洋戦争が始まり、ビンタはますますさかんになった。男教員の不足から、三年の男生徒だけのクラスを師範出の三十前後のIという女の先生が受持っていた。この先生は強力ビンタで有名であった。

ある日の放課後、そのクラスの前を通ったら、二、三人の男生徒が戸のすき間からのぞきこんでいる。私もひかれてのぞきこんだ。

何が原因かわからないが、全員立たされてうなだれているし、七、八人が教壇に立ったI先生の前に整列してやはりうなだれている。なかには泣いているものもある。こっちからみえる左側の頬が一樣に赤味を帯びている。どうやらヤマ場はすんで終りに近いらしい。「……いいですね。わかりましたね。こんどこんなことをしたら許しませんよ。」

「それでは、今度やった人たちに、二度と悪いことをしないようにしてあげましょう。一人づつ先生のところへ来なさい」といって彼女は教壇の上の教師用のイスに腰を下した。

何だかわからないままに左端の一人が小羊のようにモソモソとその前にゆく。パシッ!! いすのきしむ音とともに、強烈な平手打ち、よろよろとよろけて、一列に並んでいる一人におつつかるが、金縛りにあったようにさけようとしないうちに、その生徒も一緒に倒れてしまった。

「次の人……」……パシッ!!

中にはビンタされる前にもう、その恐ろしさに泣きじゃくって「先生、もうしませんから許して下さい」というものもいたが「泣いたからといって許しません、来なさい」パシッとうとう、その生徒は大声を出して泣き、

それにつれて皆なオイオイ泣く仕末だった。

その先生は女ながら後手に手をくんでよく歩いていたので、白いきれいな手のひらに見入って、子供心にも、神秘感というか魔力というか感じ入っていたものだった。

今にして、その時のような光景に接したらおそらくジーン来て、こっちが卒倒してしまうに違いない。

母が子にするビンタはかなりあったとは思うが、不運にしてみたことがない。ただ、戦時中の雑誌に「……ドイツでは街頭であろうとどこであろうと母が子の頬をひっぱたいといふ……」という記事を見て、体格のよい、きびしいドイツ婦人の顔を思い浮べて妙に胸が高なつたのを覚えている。

先輩看護婦のすざまじいビンタをみたことがある。それは中学一年のときの夏休み、トラコーマの治療にある地方都市の日赤に通院したときのことであった。

意識してかどうかは忘れたが、よく午後に出かけた。午後は医者は居なかったが、手術もすんでいることでもあり、看護婦に洗眼してもらえばすむことだったので、さしつかえはなかった。そんなとき、となりの室あたりからよくビンタの音がきこえて来た。「なに

をしているの」わざととぼけてきいたら、その看護婦は「あなたの学校の上級生もやるでしょう」とそらした。そういえばそうなのだが通念上やさしい女の世界のことだけに、一種の異様なこの雰囲気で妙にドキドキして赤くなったように記憶している。それとなしに注意していると、階段の下で廊下のまがり角で、物置きところで、宿舎でとよくやっていたものだ。その打肉音のかもしれない独特の雰囲気、するどい圧迫感、被虐者と加虐者のコントラスト等にひたる気分がよくて、わざとそばをとぼけたようにして通ったものであった。

そんなことをしているある日の午後、その圧巻に遭遇した。いつものように慣れた眼科に入ろうとしたら、室には誰もおらず、患者もなく、となりの室あたりからただならぬ気配。そっとのぞいてみたらやっているやつがいる。十五、六人の看護婦を集めて気合入れの最中。婦長だろう。ガッシリとした風格の女性が二、三人を前に呼び出し、ビンタである。それも往復ビンタの強烈なところ。とてもナヨナヨした女性のそれとは違い、何者をも屈服させずにおかない偉力のあるもの。このときの平手往復ビンタの打肉音は、これまでに私が経験して来た男女のビンタを通じて、

最高のもので、今でも、そのするどいひびきが耳のそこにのこっていて、悩ましく、血をわかせる、高鳴らせてくれるのである。これらは、すべてわたしの古い過去の体験である。しかし、私の胸には、そのスイッチをまわせば、いつでも、あざやかな画面をもつて、いやそれに、立体音響も加えてよみがえってくる。一見やさしい女の世界に咲くサド女性たちのあわれなる小羊への加虐!! たのしいかな!! ビンタ・マゾのもつ過去の珠玉の追想。

いずれ、そのうちに機会をみて、ビンタ・マゾのジャンルを、もっと想像的に開拓してみたいと思っている。

N・H・K TV

(十二月十八日夜九時四十分)

恋すれば物語

おもだか・しの

八百屋お七の話をもとにして、純粋な恋愛感情とは、自分の情熱に忠実な事ではないだろうかという愛情論をテーマにして、須川栄

三氏が書下した作品だそうです。奉行をフランキー堺が演ずる喜劇仕立て、お七の男関係を問い訊して行きます。

白洲は一応形通り奉行所の吟味席らしく出来ており、流石、N・H・Kの貫録で劇場用映画としても十分使えそうなものでした。ところが肝腎のお七さんは粋なご奉行様の指図かどうか知りませんが、髪は島田に結って、櫛、簪もさしており、着物は対丈の白っぽい囚衣のようなものですが、帯は色物の扱帯を前結びにただけで、全くの縄無しで、至極無邪気な様子で、白洲の庭の上に坐っております。

これは見物していても、何とも妙な光景で

お七自身も手のやり場に困っているようにみえました。

どうもこの白洲は表向きのもではなく、奉行が内々でお七を呼び出して、きき訊して居るらしく、特に縄を解いて身体を楽にさせて話をして居るつもりなのでしょうが、囚衣というものは、縄目が模様にも、色どりにも成って恰好がつくものですし、囚人は縛縄が礼装で、罪状の有無とは関係のないものですから、何んとも残念な演出でした。

こんな工合の至極のんびりした雰囲気取調べが進んで行くわけで、お七の申し状というのがまた、大したもの、愛して居る男が六人おり、六人共それぞれに好きなので、とても一人だけ選び出して夫と定める事など不可能だという話が、えんえんと続きます。

それでとうとう通人の御奉行様も、堪忍袋の緒が切れて、火焙りにする事にきめるといふのが御話で、最後に引回しの場面になります。ここまでは仕様のないシーンの連続でしたので、最後も大した事はないだろうと思つて居りました所、引回しの場だけは、まことに結構な出来映なので、びっくりしました。

着物は例の黄八丈で、帯は結ばずに巻帯にして、縄は荒縄ではなく細引ですが、菱縄に掛けてあり、髪も髷を解いてすき髪にされた見事な罪人姿で、着物の裾を割って左右に開き、膝まで丸出しにされて、裸馬に跨って居

ります。

引回しはどうも有名な女優程、演出がよくないようで、大抵は足を揃えた打乗りですましております。実際にも、死罪獄門等比較的に軽い罪人の時等には、女は打乗りにさせた事もあったそうですが、引回しは、殆んど一月掛りで、三十軒程の道のりを歩きますから、乗馬の心得の有る健康な婦人ならともかく、白洲や牢内で、散々に痛めつけられた女囚を、馬の背や腰掛けさせて歩く事は、事実上不可能に近かったと思います。ですから、引回しを無事に務めるためには女でも本式に跨がって乗らなければ、とても終りまで乗って居られなかつた筈で、お七や白子屋お駒等でも、打乗りだったという信用出来る話は聞いた事がなく、彼女達もまた、素足を見せて、跨って乗せられたのが本当だと思われま

す。縛縄についても、小説等に書かれて居る扱方には、誤りが多いようで、引回しに出る時は掛けられる荒縄は、処刑の後でなければ外されません。また、罪人を縛った縄は、牢内等錠を下した罫いの中であれば、外す事はありませんから、火焙りの時には、刑架にかけられる時の服衣、即ち普通は腰巻一枚の半裸の素肌のまま、荒縄で本縄に縛られ、若し許されればその上に着物を羽織らせていただいて、馬に跨がり、刑場に着いて馬から下された後、羽織っていた着物を脱がされて、本

縄のまま、刑架に別の縄と鍾で結付けられるのです。

磔の事についても、いずれまとめ見るつもりですが、着衣の扱い方は同様で、何れの時でも刑場で罪人の縄を外して着物をぬがせたり、着替えさせたりする事はありません。

したがって、今回の演出のように、黄八丈の私服を着た上から縛られて、引回されたとするとその私服のまま処刑されたので、お七の実際にもそうだったかも知れません。普通着流姿で馬に跨がると、裾は後へ引上げられ尻端折りをしたようになって、枉が跨った足の上に懸るようになり、ある程度膝頭から股のあたりをかくせるものです。

しかし、今回は腰紐を使わずに曳いて着た着物の裾を両足の間からすっきり前に引出して、馬の背にひろげて掛け、その裏返しに掛けた裾の上に乗るように跨がらされて居りましたので、両足がすっきり出る上、前には筵が見えないので大変美しく、若い色好みな女の罪人にふさわしい引回し姿になりました。ただ全身の見えるカットは極く短く、しかも正面上方からの遠景だけだったのは、まことに残念でした。

婦人の引回し姿は、映画では時々見られ、最近では『日本拷問刑罰史』にも出て居りましたが、よいものは非常に少いようで、今回のように見事なものは、一寸類がないように思いました。

代理部分護品一覽

○妊婦女体資料の部○

臨月腹ヌード	大手札二枚一組 略号「りく」	三〇〇円
安原さゆり	大手札二枚一組 略号「りく」	三〇〇円
臨月腹アップ	大手札二枚一組 略号「りと」	三〇〇円
安原さゆり	大手札二枚一組 略号「りと」	三〇〇円
臨月妊婦の全身	大手札二枚一組 略号「りせ」	三〇〇円
安原さゆり	大手札二枚一組 略号「りせ」	三〇〇円
臨月腹の側面	大手札三枚一組 略号「りそ」	四〇〇円
安原さゆり	大手札三枚一組 略号「りそ」	四〇〇円
臨月腹の背面	大手札二枚一組 略号「りも」	三〇〇円
安原さゆり	大手札二枚一組 略号「りも」	三〇〇円
臨月垂れ腹	大手札三枚一組 略号「りみ」	四〇〇円
安原さゆり	大手札三枚一組 略号「りみ」	四〇〇円
妊婦ヌード	大手札三枚一組 略号「やま」	三〇〇円
安原さゆり	大手札三枚一組 略号「やま」	三〇〇円
妊婦しぼり	大手札三枚一組 略号「やむ」	三〇〇円
安原さゆり	大手札三枚一組 略号「やむ」	三〇〇円
臨月妊婦三態	大手札三枚一組 略号「よむ」	三〇〇円
安原さゆり	大手札三枚一組 略号「よむ」	三〇〇円
産み月のお腹	大手札三枚一組 略号「よま」	三〇〇円
安原さゆり	大手札三枚一組 略号「よま」	三〇〇円
動物的な腹部	大手札三枚一組 略号「よま」	三〇〇円
安原さゆり	大手札三枚一組 略号「よま」	三〇〇円

○女体緊縛資料の部○

安原さゆり	略号「よみ」	四〇〇円
妊婦の股間縛り	大手札三枚一組 略号「には」	四〇〇円
児玉 昌子	大手札三枚一組 略号「には」	四〇〇円
妊娠八カ月の緊縛	大手札三枚一組 略号「にあ」	四〇〇円
児玉 昌子	大手札三枚一組 略号「にあ」	四〇〇円
妊娠五カ月の緊縛	大手札三枚一組 略号「にこ」	三〇〇円
児玉 昌子	大手札三枚一組 略号「にこ」	三〇〇円
妊娠前裸縛り	大手札三枚一組 略号「まさ」	三〇〇円
児玉 昌子	大手札三枚一組 略号「まさ」	三〇〇円
妊娠初期の緊縛	大手札三枚一組 略号「めろ」	三〇〇円
児玉 昌子	大手札三枚一組 略号「めろ」	三〇〇円
妊婦の股間縛り	大手札三枚一組 略号「にふ」	四〇〇円
児玉 昌子	大手札三枚一組 略号「にふ」	四〇〇円
妊婦の股間縛り	大手札三枚一組 略号「にと」	三〇〇円
児玉 昌子	大手札三枚一組 略号「にと」	三〇〇円
分娩後縛り	大手札三枚一組 略号「につ」	三〇〇円
児玉 昌子	大手札三枚一組 略号「につ」	三〇〇円
分娩後股間縛り	大手札三枚一組 略号「にて」	三〇〇円
児玉 昌子	大手札三枚一組 略号「にて」	三〇〇円
全裸緊縛姿態	大手札四枚一組 略号「ゆり」	四〇〇円
遠藤百合子	大手札四枚一組 略号「ゆり」	四〇〇円
鼻をいたぶる	大手札三枚一組 略号「ゆは」	三〇〇円
遠藤百合子	大手札三枚一組 略号「ゆは」	三〇〇円

鼻の穴責め	大手札三枚一組 略号「なく」	三〇〇円
大塚 啓子	大手札三枚一組 略号「なく」	三〇〇円
鼻なぶり	大手札三枚一組 略号「ない」	三〇〇円
大塚 啓子	大手札三枚一組 略号「ない」	三〇〇円
鼻責めの陶酔	大手札三枚一組 略号「なは」	三〇〇円
大塚 啓子	大手札三枚一組 略号「なは」	三〇〇円
苦悶の裸身	大手札四枚一組 略号「くせ」	四〇〇円
関谷富佐子	大手札四枚一組 略号「くせ」	四〇〇円
裸身の晒し	大手札三枚一組 略号「わあ」	三〇〇円
関谷富佐子	大手札三枚一組 略号「わあ」	三〇〇円
全裸股間縛り	大手札四枚一組 略号「せら」	四〇〇円
関谷富佐子	大手札四枚一組 略号「せら」	四〇〇円
強烈エビ責め	大手札三枚一組 略号「えり」	三〇〇円
大塚 啓子	大手札三枚一組 略号「えり」	三〇〇円
蒲団に悶ゆ	大手札三枚一組 略号「なき」	三〇〇円
関谷富佐子	大手札三枚一組 略号「なき」	三〇〇円
悦虐の果て	大手札三枚一組 略号「なみ」	三〇〇円
関谷富佐子	大手札三枚一組 略号「なみ」	三〇〇円
椅子エビ責め	大手札三枚一組 略号「おき」	三〇〇円
東浦ひかる	大手札三枚一組 略号「おき」	三〇〇円
六尺縛り	大手札三枚一組 略号「ろは」	三〇〇円
東浦ひかる	大手札三枚一組 略号「ろは」	三〇〇円
弓吊り責め	大手札二枚一組 略号「つき」	二五〇円
梨花悠紀子	大手札二枚一組 略号「つき」	二五〇円

手足宙吊り	大手札三枚一組 略号「つた」	三〇〇円
梨花悠紀子	大手札三枚一組 略号「つた」	三〇〇円
オムツの股間縛り	大手札四枚一組 略号「むく」	四〇〇円
東浦ひかる	大手札四枚一組 略号「むく」	四〇〇円
強烈責め、被虐の果	大手札五枚一組 略号「りお」	五〇〇円
梨花悠紀子	大手札五枚一組 略号「りお」	五〇〇円
乳房いじめ	大手札二枚一組 略号「とお」	二五〇円
大塚 啓子	大手札二枚一組 略号「とお」	二五〇円
激痛ノ逆エビ責め	大手札四枚一組 略号「きえ」	四〇〇円
大塚 啓子	大手札四枚一組 略号「きえ」	四〇〇円
美貌の裸身に縄目	大手札三枚一組 略号「きん」	三〇〇円
絹川 文代	大手札三枚一組 略号「きん」	三〇〇円
腰元吊り責め	大手札二枚一組 略号「こり」	二五〇円
村井知可子	大手札二枚一組 略号「こり」	二五〇円
腰元間諜の拷問	大手札四枚一組 略号「こく」	四〇〇円
村井知可子	大手札四枚一組 略号「こく」	四〇〇円
強烈エビ縛り	大手札三枚一組 略号「もい」	三〇〇円
関谷富佐子	大手札三枚一組 略号「もい」	三〇〇円
乳房責めの苦悶	大手札二枚一組 略号「もろ」	二〇〇円
関谷富佐子	大手札二枚一組 略号「もろ」	二〇〇円
全裸ムチ打ち	大手札四枚一組 略号「もた」	四〇〇円
関谷富佐子	大手札四枚一組 略号「もた」	四〇〇円
強打に泣く裸身	大手札四枚一組 略号「むち」	四〇〇円
関谷富佐子	大手札四枚一組 略号「むち」	四〇〇円

狙われた和装の娘 大手札十二枚一組 略号「ねい」 一〇〇〇円	愛川 悦子 略号「ねい」 一〇〇〇円	強烈エビ責め 大手札三枚一組 略号「えひ」 三〇〇円	水本 茂美 略号「えひ」 三〇〇円	ゴム衣緊縛 大手札三枚一組 略号「みす」 三〇〇円	水本 茂美 略号「みす」 三〇〇円	バンド開股 大手札三枚一組 略号「はこ」 三〇〇円	東浦ひかる 略号「はこ」 三〇〇円	バンド責め 大手札五枚一組 略号「はん」 五〇〇円	東浦ひかる 略号「はん」 五〇〇円	夫人の表情 大手札三枚一組 略号「せや」 三〇〇円	関谷富佐子 略号「せや」 三〇〇円	後手吊り足挙縛り 大手札五枚一組 略号「うら」 五〇〇円	東浦ひかる 略号「うら」 五〇〇円	二つ折りエビ責め 大手札五枚一組 略号「うり」 五〇〇円	東浦ひかる 略号「うり」 五〇〇円	足挙げ椅子責め 大手札五枚一組 略号「うる」 五〇〇円	東浦ひかる 略号「うる」 五〇〇円	吊り打ち 大手札三枚一組 略号「やり」 三〇〇円	関谷富佐子 略号「やり」 三〇〇円	股間縛法悦境 大手札三枚一組 略号「ぬこ」 三〇〇円	絹川 文代 略号「ぬこ」 三〇〇円	踊り子緊縛 大手札三枚一組 略号「りこ」 三〇〇円	絹川 文代 略号「りこ」 三〇〇円
責め衣 大手札三枚一組 略号「せめ」 三〇〇円	大塚 啓子 略号「せめ」 三〇〇円	猪 吊り 大手札三枚一組 略号「いの」 三〇〇円	梨花悠紀子 略号「いの」 三〇〇円	足挙開股責 大手札三枚一組 略号「あけ」 三〇〇円	梨花悠紀子 略号「あけ」 三〇〇円	緊縛女体撮影風景 大手札四枚一組 略号「むら」 四〇〇円	大塚 啓子 略号「むら」 四〇〇円	〇フエチ資料の部〇	白晒六尺襪 遠藤百合子 略号「しろ」 四〇〇円	白晒六尺襪 遠藤百合子 略号「しろ」 四〇〇円	白晒六尺襪 遠藤百合子 略号「しろ」 四〇〇円	黒 襪の女 遠藤百合子 略号「くま」 三〇〇円	黒 襪の女 遠藤百合子 略号「くま」 三〇〇円	黒 襪の女 遠藤百合子 略号「くま」 三〇〇円	相撲襪を締め込む 遠藤百合子 略号「くう」 三〇〇円	変形六尺襪 細川アヤ子 略号「ふい」 三〇〇円	六尺襪開股 細川アヤ子 略号「ふは」 三〇〇円						
六尺フンドシ 大手札五枚一組 略号「ろい」 四〇〇円	東浦ひかる 略号「ろい」 四〇〇円	六尺襪の女性像 大手札四枚一組 略号「くろ」 四〇〇円	関谷富佐子 略号「くろ」 四〇〇円	レインコートの拘束 大手札四枚一組 略号「いろ」 四〇〇円	大塚 啓子 略号「いろ」 四〇〇円	ゴムフエチ 大手札四枚一組 略号「こま」 四〇〇円	梨花悠紀子 略号「こま」 四〇〇円	バンドを脱ぐ女 遠藤百合子 略号「ゆす」 三〇〇円	遠藤百合子 略号「ゆす」 三〇〇円	月経帯縛り 遠藤百合子 略号「ゆお」 三〇〇円	遠藤百合子 略号「ゆお」 三〇〇円	相撲襪着用 大手札十一枚一組 略号「すま」 一〇〇〇円	大塚 啓子 略号「すま」 一〇〇〇円	股に喰い込む黒フンドシ 大手札三枚一組 略号「とし」 三〇〇円	東浦ひかる 略号「とし」 三〇〇円	股を開いた黒フンドシ 大手札三枚一組 略号「とひ」 三〇〇円	東浦ひかる 略号「とひ」 三〇〇円	バンド晒し 大手札三枚一組 略号「はと」 三〇〇円	東浦ひかる 略号「はと」 三〇〇円	バンド足挙げ 大手札三枚一組 略号「はそ」 三〇〇円	東浦ひかる 略号「はそ」 三〇〇円	バンド見せ 大手札三枚一組 略号「はぬ」 三〇〇円	東浦ひかる 略号「はぬ」 三〇〇円
白フンドシ 大手札四枚一組 略号「ふん」 四〇〇円	大塚 啓子 略号「ふん」 四〇〇円	黒フンドシ 大手札四枚一組 略号「くふ」 四〇〇円	大塚 啓子 略号「くふ」 四〇〇円	ゴムぐるみ人形 大手札四枚一組 略号「こみ」 四〇〇円	東浦ひかる 略号「こみ」 四〇〇円	ゴム包みの束縛 大手札四枚一組 略号「こは」 四〇〇円	東浦ひかる 略号「こは」 四〇〇円	ゴムと女体アップ 大手札四枚一組 略号「こあ」 四〇〇円	東浦ひかる 略号「こあ」 四〇〇円	パリスバンド前開き 大手札三枚一組 略号「おい」 三〇〇円	東浦ひかる 略号「おい」 三〇〇円	パリスバンド縛り 大手札三枚一組 略号「おは」 三〇〇円	東浦ひかる 略号「おは」 三〇〇円	携帯用白バンド 大手札三枚一組 略号「おか」 三〇〇円	東浦ひかる 略号「おか」 三〇〇円	サカエ軽便型バンド 大手札三枚一組 略号「おた」 三〇〇円	東浦ひかる 略号「おた」 三〇〇円	パリスSSバンド 大手札三枚一組 略号「おこ」 三〇〇円	東浦ひかる 略号「おこ」 三〇〇円	パピアバンド 大手札三枚一組 略号「おし」 三〇〇円	東浦ひかる 略号「おし」 三〇〇円	サカエバンド 大手札三枚一組 略号「おえ」 三〇〇円	東浦ひかる 略号「おえ」 三〇〇円

四馬孝秘蔵版画集

大中判 (13×18 匁) 印画紙焼付↓コレクシヨン専用

口絵の制約によって十分その腕を揮うことのできない髀肉の嘆をかこっていた四馬孝氏が、登場の女主人公をすべて全裸に剥いで、美しく目ざましい秘蔵版をものしました。

△責められる美女波津子の痴態▽

大中判五枚一組 一〇〇〇円 略号(しお)

一、恐怖の浣腸責め

ベッドの上には、白く輝やくような肌にとす黒い縄が無惨にも喰い込んでいる。厳しい後手しほりに身動きもできない波津子、伸びやかな脚を逆エビに持ちあげられし猿ぐつわの下で苦痛にあえいでいる。男の手にした30ccのガラスシリンダーは、今まさにアヌスに迫るとしている恐怖。

二、柱抱きの責め

斜めに立てかけられた五寸柱をアグラに組んだ足で抱くようにしてあらもなく縛られた波津子。豊かに肉のついた胸や腹が、じかに柱に密着して、大きく開ききった両方の太腿のアグラ縛りも恥しい妙齢の女性にとっても、最もむごたらしい責めである。それだけにS的ムード満点である。

三、庭のハダカ責め

夏草の生い茂る庭の棒杭に、両手をひろげ、左足を高く頭の位置まで挙げて縛られた奇妙な晒しものポーズ。叢から蚊や蟻が白い

△可憐な少女加奈子の羞恥責め▽

大中判五枚一組 一〇〇〇円 略号(しる)

一、ロウソク責め

可憐な美少女加奈子が、この屋敷に囚われの身となつて、すでに幾日経つてあろうか。なやなよとした青い実の裸身には、麻縄がむごたらしく肌を痛めつけ、火のついた百匁ロウソクの焰が、テレビの前で足挙げポーズで縛られた加奈子の頬を襲ってくる。嗜虐的な男の眼が恐ろしい。

二、アノヨは上手!

加奈子は男の可愛いペットである。全裸に剥かれて、後手高手小手に縛られた上、首と膝頭とを革紐で繋がれ、ヨチヨチと部屋の中を歩かされる。ピンク色に染つた繊細な足の指先に力をこめて、転ろげないようにと、懸命に歩くとするが、縛られた身体は遅々として前へ進もうとはしない。

三、逆エビ柱吊り

夜の縁側の柱に、加奈子の白い身体が逆エビ縛りにされて、柱に宙吊りになっている。スタンドの

四、被虐の絶叫

後手高手縛りの上に、革のベルトの股間縛りで締めつけられて喘ぐ加奈子の右足を無理矢理に挙げて固定しようとする、いやらしい禿頭の暴虐。可憐な加奈子は、あまりのことに悲鳴をあげて絶叫すれば、一層の被虐の念が全身を戦慄させる。そして男には快い音楽と聞えただろう。

五、美しき犠の鑑賞

美しい宝石のような加奈子の身動も爪先から髪の毛の一本一本に足るまで、刻明に観察しようという野卑な男の欲望は、彼女をして部屋に柱に晒しもののような恰好で括りあげてしまったのである。好じろじろとナメクジのような目で全身を眺められる気味悪さ。

「最新版」 女体悦虐写真集印画紙版

G組百姿集

大手札型印画紙(9×13種) 焼付

各組一枚一組(送料共)

一組一枚	一五〇円
五組五枚	五〇〇円
十組十枚	九〇〇円
二十組二十枚	一七〇〇円
三十組三十枚	二五〇〇円
四十組四十枚	三二〇〇円
五十組五十枚	四〇〇〇円
六十組六十枚	四七〇〇円
七十組七十枚	五四〇〇円
八十組八十枚	六〇〇〇円
九十組九十枚	六五〇〇円
百組百枚	七〇〇〇円

12	全裸しぼりと浣腸器(玉田)
11	浣腸器に脅びえる女(玉田)
10	恐怖のいたぶり(新井)
9	手吊り全裸さらし(玉田)
8	全身ガンジガラメ(大塚)
7	煙草責と荒縄緊縛(大塚)
6	縄に羞らう裸しぼり(長野)
5	敷布に悶える白い肌(玉田)
4	一糸まとわぬ晒し者(玉田)
3	豊臀と足首と後手縛(玉田)
2	アグラで縛られる(玉田)
1	顔面から全身嚴重縛(東浦)

38	柔肌は縄にくびれて(玉田)
37	裸を誇りの椅子縛り(玉田)
36	写真に埋れた全裸姿(大塚)
35	美貌と豊胸を誇る女(長野)
34	典型的な股間しぼり(大塚)
33	足でなぶられる鼻(大塚)
32	踊子の緊縛ポーズ(絹川)
31	肥り肉を晒らす女(東浦)
30	逆エビと浣腸器(大塚)
29	緊縛裸身を誇る足(長野)
28	白肌は縄にくびれて(大塚)
27	革の猿轡で責める(新井)
26	机の脚に縛られる(新井)
25	肌に刺さる荒縄(大塚)
24	豊胸に黒紐の輝やき(長野)
23	後手縛全裸椅子跨ぎ(東浦)
22	縛られて鼻を任す(大塚)
21	二つの乳房アップ(長野)
20	足首と後手首と(玉田)
19	椅子に縛られた全裸(玉田)
18	諦観の後手しぼり(玉田)
17	責写真に埋れた緊縛(大塚)
16	黒フンで縛られる女(玉田)
15	そりかえる鼻の頭(大塚)
14	美しき全裸強調縛り(大塚)
13	踏みつけられる美貌(大塚)

69	木馬責め斜め後姿(大塚)
68	首枷のさらしもの(大塚)
67	目かくしのハリツケ(大塚)
66	手吊り足縛り仰臥(新井)
65	猿ぐっわの婉な表情(新井)
64	後手縛全裸の美しさ(大塚)
63	強奪されたパンティ(大塚)
62	責めぬかれた表情美(大塚)
61	可憐ないじめられ様(大塚)
60	両手吊りの猿ぐっわ(新井)
59	無抵抗の裸いじめ(大塚)
58	不安定な台上股間縛(大塚)
57	色魔に脱がされる(新井)
56	後手縛りで寝室へ(絹川)
55	椅子に跨がされた女(新井)
54	後手吊り全裸の美(玉田)
53	全裸後手吊り晒し(玉田)
52	後手首縄膝頭一括縛(木村)
51	全裸胴絞め首縄猿轡(木村)
50	全裸正面強烈亀甲縛(木村)
49	嚴重荷造縛りの全裸(玉田)
48	股間縛り全裸重量感(大塚)
47	後手逆エビ強烈鼻責(大塚)
46	裸身の美を誇る縛り(長野)
45	荒縄と豆絞りの猿轡(大塚)
44	トイレを前にして(大塚)
43	庭の見える部屋にて(大塚)
42	オシメカバー縛り(大塚)
41	女囚縛られ姿(宇治)
40	女囚哀歎(宇治)
39	全裸の肌は縄まかせ(玉田)

100	膨大な臀部を眼前に(大塚)
99	反りかえる緊縛裸身(長野)
98	台上の緊縛裸身像(長野)
97	股間縛り全裸の膝立(大塚)
96	臍乳房強調喰込む縄(大塚)
95	白肌に映える光の縞(玉田)
94	全裸アグラ坐り縛り(玉田)
93	裸身を晒す両手縛り(大塚)
92	六尺禪巨大臀部虐め(大塚)
91	白布の猿轡と白肌責(木村)
90	奴隷の裸身を捧げる(木村)
89	後手縛り裸立姿晒し(木村)
88	美麗の全裸に嚴重縄(玉田)
87	豊満裸身を誇る緊縛(玉田)
86	全裸でしやがむ後手(玉田)
85	ヤンチャ娘開股縛り(長野)
84	膨隆見事な乳房責め(長野)
83	巨大な臀部全裸後手(大塚)
82	首縄開股強烈縛り(木村)
81	蒲団上に転がった女(遠藤)
80	全裸後手足首連繫縛(玉田)
79	両手開き吊り顔虐め(新井)
78	首吊りの責め(新井)
77	美貌をいためつける(絹川)
76	縄にもだえる美女(絹川)
75	白肌で縄にうそぶく(長野)
74	豊満を誇る露出癖(長野)
73	長髪垂らし全裸縛り(長野)
72	火あぶりにあう女(大塚)
71	革全頭マスクと手錠(大塚)
70	木馬責め斜め前姿(大塚)

〔代理部新版分譲品一覽〕

腸露出無念腹切腹

大手札十枚一組 略号 (八〇〇円)
大塚啓子 略号 (せ10)

全裸の切腹悦楽 1

大手札四枚一組 略号 (四〇〇円)
大塚啓子 略号 (ひた)

全裸の切腹悦楽 2

大手札四枚一組 略号 (四〇〇円)
大塚啓子 略号 (ひと)

マニヤの切腹

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
甘木春子 略号 (まに)

女子斗争場面写真

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
大塚、玉田 略号 (のわ)

二女格闘場面写真

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
大塚、玉田 略号 (のか)

全裸正面切腹姿態

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
大塚啓子 略号 (のみ)

切腹に悶える裸身

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
大塚啓子 略号 (のそ)

浣腸と便意の苦悶

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
遠藤百合子 略号 (のけ)

強烈エビ責め

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
長野良子 略号 (てへ)

玉田美佐子 略号 (ねむ)

後手首の高縛り

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
玉田美佐子 略号 (ねへ)

椅子またぎの責め

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
玉田美佐子 略号 (ねと)

血紅切腹決定版

大手札十枚一組 略号 (一〇〇〇円)
大塚啓子 略号 (れは)

血紅切腹凄惨姿態

大手札十枚一組 略号 (一〇〇〇円)
大塚啓子 略号 (れみ)

黒いフンドンを誇る

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
遠藤百合子 略号 (くわ)

高圧空気浣腸

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
大塚啓子 略号 (むい)

浣腸場面大写真

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
大塚啓子 略号 (むは)

施される浣腸

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
大塚啓子 略号 (むろ)

全裸脚拳姿態

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
長野良子 略号 (てい)

全裸アグラ縛り

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
長野良子 略号 (てへ)

全裸屈伸縛り

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
長野良子 略号 (てほ)

六尺揮の変形姿態

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
長野良子 略号 (てに)

蹲踞と拍手

大手札二枚一組 略号 (二〇〇円)
長野良子 略号 (てり)

鬼面と接吻する

大手札二枚一組 略号 (二〇〇円)
長野良子 略号 (てち)

強烈エビ責め

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
松本アサ子 略号 (まと)

裸身に羞らう

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
松本アサ子 略号 (まつ)

女賊捕縛

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
大塚啓子 略号 (へい)

女賊処刑

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
大塚啓子 略号 (へは)

全裸緊縛姿態開陳

大手札四枚一組 略号 (四〇〇円)
遠藤百合子 略号 (ゆり)

鼻をいたぶる

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
遠藤百合子 略号 (ゆは)

浣腸をする女

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
遠藤百合子 略号 (ゆか)

バンドを脱ぐ女

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
遠藤百合子 略号 (ゆお)

絞首刑

大手札二枚一組 略号 (三〇〇円)
新宮夫人 略号 (るく)

引回しと晒

大手札二枚一組 略号 (三〇〇円)
新宮夫人 略号 (るに)

磔 (はりつけ)

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
新宮夫人 略号 (はみ)

晒 (さらし)

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
新宮夫人 略号 (さら)

絞首刑

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
新宮夫人 略号 (こけ)

晒台の生首

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
新宮夫人 略号 (のく)

斬首の瞬間

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
新宮夫人 略号 (のき)

斬首処刑場面

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
新宮夫人 略号 (くし)

月経帯のまま縛り 大手札三枚一組 三〇〇円 遠藤百合子 略号(ゆず)	豊満を切り裂く刃 大手札三枚一組 三〇〇円 長野良子 略号(ほふ)	鎌腹を切られる女 大手札二枚一組 三〇〇円 愛川悦子、田中芳代 略号(らく)	咽喉笛を刺される女 大手札二枚一組 三〇〇円 愛川悦子、田中芳代 略号(らみ)	血紅使用 斬られる女 大手札七枚一組 七〇〇円 絹川文代 略号(らふ)	雲斎の相撲フンドシ姿 大手札三枚一組 三〇〇円 東浦ひかる 略号(ろみ)	凄んだ女賊スタイル 大手札三枚一組 三〇〇円 大塚啓子 略号(へに)	バンド、ゴム見せ 大手札五枚一組 五〇〇円 東浦ひかる 略号(へみ)	浣腸を施される女 大手札三枚一組 三〇〇円 大塚啓子 略号(ちら)	煙草責めの裸身 大手札三枚一組 三〇〇円 大塚啓子 略号(たく)	淫らな長髪の乱れ
大手札三枚一組 三〇〇円 長野良子 略号(ろも)	ふり乱す長髪の悶え 大手札三枚一組 三〇〇円 長野良子 略号(ろめ)	縄目に悶える夫人 大手札三枚一組 三〇〇円 関谷富佐子 略号(ほく)	髪を引き回される夫人 大手札三枚一組 三〇〇円 関谷富佐子 略号(ほむ)	自ら施す浣腸 大手札三枚一組 三〇〇円 大塚啓子 略号(ちめ)	浣腸器を弄ぶ女 大手札三枚一組 三〇〇円 大塚啓子 略号(ちり)	写真の中に悶える 大手札四枚一組 四〇〇円 大塚啓子 略号(けよ)	写真に埋れた裸女 大手札四枚一組 四〇〇円 大塚啓子 略号(けお)	フンドシ姿の魅力 大手札三枚一組 三〇〇円 細川アヤ子 略号(ふの)	フンドシ姿の羞らい 大手札三枚一組 三〇〇円 栗本ミチ 略号(ふへ)	フンドシの前後左右 大手札四枚一組 四〇〇円
栗本ミチ 略号(ふな)	フンドシの変わった姿 大手札三枚一組 三〇〇円 栗本ミチ 略号(ふに)	前開き、ゴムオシメカバー 大手札十二枚一組 一〇〇〇円 大塚啓子 略号(しま)	前開き布製防水オシメカバー 大手札十二枚一組 一〇〇〇円 大塚啓子 略号(しな)	全裸の切腹悦楽(1) 大手札四枚一組 四〇〇円 大塚啓子 略号(ひた)	全裸切腹悦楽(2) 大手札四枚一組 四〇〇円 大塚啓子 略号(ひと)	乳房しばり 大手札三枚一組 三〇〇円 長野良子 略号(うは)	鼻責めと緊縛 大手札五枚一組 五〇〇円 大塚啓子 略号(うい)	木馬責三態 大手札三枚一組 三〇〇円 大塚啓子 略号(もく)	椅子責めの果て 大手札三枚一組 三〇〇円 大塚啓子 略号(いす)	哀婉 血紅切腹 大手札五枚一組 五〇〇円 大塚啓子 略号(るな)
双胸の強調縛り 大手札三枚一組 三〇〇円 長野良子 略号(そう)	動感海老責地獄 大手札三枚一組 三〇〇円 大塚啓子 略号(とう)	色禪の開股縛り 大手札三枚一組 三〇〇円 長野良子 略号(いふ)	鼻責めのアップ 大手札三枚一組 三〇〇円 大塚啓子 略号(はす)	膨満 正面縛り 大手札三枚一組 三〇〇円 長野良子 略号(へな)	血紅切腹絶命態 大手札三枚一組 三〇〇円 絹川文代 略号(ちの)	血紅美女の切腹 大手札三枚一組 三〇〇円 絹川文代 略号(ちた)	オムツ着用フォト 大手札七枚一組 七〇〇円 大塚啓子 略号(むね)	バンド着用開股ポーズ 大手札三枚一組 三〇〇円 東浦ひかる 略号(つん)	マニヤ全裸緊縛フォト 大手札三枚一組 三〇〇円 栗本ミチ 略号(いな)	



愛読者の皆様、いかがお過ごしでしょうか。私事KK誌の読者になりました。二年半ほどになりましたが、月々のKK誌発行日が待ち遠しく、それをおぎなう様に五日毎に本屋に行く有様です。ところが、さいわい近所にKK誌のフオート写真の注文品を送っていただいた事、又写真お見せしていただいて明るい物がひらめいた気持ちでした。私自身二年半にもなるのに今

の今まで気がつかなかった事を残念に思った事はありません。その日より一週間程して品物が来しました。開いて見る時のうれしさ、その喜びは筆に書き現わす事のできないほどでした。私は特に（女相撲女斗美の太のファンです）モデルの若々しい肉体美の動き、組敷き、寝業の斗美、まさに今まで夢にえがいた事が現に目の前にくり展げられました。どうして見たら良く見られるかと写真ブック帳にはりつけて自分の創作の説明文を入れて見えています。この喜びをなんとかしてKK誌の方々にお礼申し上げたく、まずい筆ながら一筆お礼のしるしにと思ったしだいです。今後なにとぞ増々の発展に御尽力あらん事、KK誌ファンの方々と共に祈りいたします。（島根県八林貞治▽）

十二月号、辻村氏の三十九夜物語の「穴に憑かれた男」は大変楽しく、小生のような耳環鼻環マニヤというより偏執者には、とても嬉しく読んで行く中に、耳朶に穿孔のシーン、鼻隔壁に穿孔のシーンは堪らなく自分が冥主になったような気持ちで穿孔してみたくさえなりました。もっとも三十数年前

にはカフエーの女給の耳朶に次々と十数人に穿孔した経験があります。今後もうこういう読物をお願いします。さて同号の読者通信欄にM七〇生氏より小生の鼻環の孔が余りに大きいので軟骨を外科医に削除してもらったように書かれておりますが、現在耳に十六個鼻に七カ所の孔があり、十四才より十六才迄の間に針を通しましたが一度も医者の手にかけておりません。小生の手は比較的太い方ですが、拇指は爪迄通り、他の四本は根元迄通いますが栓はしておりません。只人目のない所で指を差し込んで引張っておりますので少しも縮小しません。耳環の孔をあけた動機は三才の時、金閣寺で見物に來た外国女性の耳環と耳孔を見たのが初まりで、幼稚園に見学にきた十才位の外国少女の耳環が頸飾と兼用になった豪華なものでした。次に八才の時、街路で遊んでいたら、七十才位の老男子が、真鍮の耳環をはめていたのが、今でも眼底に残っております。そして耳朶に孔があけてあるのを不思議で魅力を感じました。それから十四才の時、京極でこれも豪華な耳環をはめて、孔は三分位にのびてかきが太いので大きく見えて堪ら

なくなつて帰宅後穿孔しました。十六才の時に始めて孔のところへ栓をつめて初めて貫通しました。其の時の嬉しさは今も忘れません。鼻もその方法で初めは千枚通しで穿つて次々と太いのと差し換え現在十九ミリ迄通りますが、これ以上は鼻腔の方が通らないし軟骨につかえて痛くなります。世界の秘境シリーズ十月号表紙の美女の鼻環は素晴らしい魅力があります。（京都市八佐々木耳環生▽）

日増しに寒さのきびしくなる今日この頃ですが、貴社には益々御発展のこと、なによりです。世間が少々さわがしくなり、内容も少しパツとしなくなりましたが、こんな事にくじけず、ドシドシがんばって良い作品を作っていたくださいますよう心からお祈りいたします。今後グラビヤに出せぬ作品は分譲品として、どしどし販売して下さいお願いします。（東京八坂守生▽）

貴社益々御繁栄のこと、読者の一人として蔭乍らお悦び申し上げます。私も貴誌の一読者として早や十数年になりますが、その間書店から又古本屋や夜店で購入した

時代もあります。発禁であやふく入手できない事もありましたが、最近近所の本屋さんに特約し毎月発売と同時に購入しております。もう何十冊もの蔵書が本箱にいっぱい詰っておりますが、その中から古い号をとり出して読み耽るのが、一つの大きな楽しみとなっております。雨の休みの日など朝から読みだすと、あれやこれやと、思わず一日を過してしまふこともあります。発刊以来の貴誌を全部揃えて読んでいると、もうこれだけで充分満足すると思うくらい大変な量で、単に通読するだけでも、何日もかかるくらいですが人間の欲というものには、きりがないもので、毎月毎月新しい雑誌が待たれてなりません。どうか今後とも、休刊することなく、我々ファンのため続刊されることを祈ります。全国の読者の皆様、我々の奇巧のために大いに声援を送るうではありませんか。(静岡市八岡本豊)

木村洋子

完全逆さ吊りフォト

分譲

大中判印画紙焼付三枚一組

一〇〇〇円 略号(さつり)

竹野ひろ子様十二月号の「おしめカバーと私」の文を拝見してお便り申上げることになりました。貴女が文中に望まれているプレイの一分でも満足していただければと考えて投稿させていただきま。あなたの希望とおり、裸身に「おしめカバー」をしてその上から皮製の拘束衣を着用し、レインコートを着せて、私の乗用車で夜のドライブに出掛けます。そうして何時間の間、あなたが我慢しておられるか、たしかめて見るのも、よい考えでしょう。私はナイロン製のゴム製など数々のレインコートを持っていますので利用できます。又縛りの場合でも、全裸で綿ロープで全身を縛り、その上にナイロン製のレインコートを着用して、夜のドライブウエーを一人で歩かせて、私が後方より車で付いて行くようなプレイも又よいでしょう。あなたに対する数々のアイデアは持っていますので、一緒に希望されるプレイを実行して見たいものです。ただ縛り責めだけで

は、興味ありませんので、変わった縛りやプレイが出来たら両者共々たのしいのではないのでしょうか、機会があれば共に趣味を生じて行動して行きたい思います。あなたの希望が一日も早く実行できることを心から祈ります。(大阪市八真山淳)

新年号の「美女血斗吉田御殿」は川上、滝雨女史の麗筆と豊富なさし絵で文字通り本格的な美女血斗絵物語を堪能いたしました。美女血斗模様にあこがれている私にとっては、まことに血汐の香り高い贈物でした。欲を云えば討たれようとする美女、それと美女の生首の表情がものたらぬと云えばものたらぬところ。今後に望むところは、より無惨味溢れる挿絵なり口絵の出現です。無惨絵マニア、美女血斗マニアの私にとって、血しぶきと共にのけぞり、生から死への一瞬に硬直した美女の姿態、それとさまじくあられもない恰好で横たわる美女の屍の数々。一面に描いた無惨絵模様です。無惨絵マニアにとってはこのものが不可欠の要素になっています。血の尾をひいて宙に飛ぶ美女の生首、血しぶきと共にのけ

ぞる美女、くみしかれて乳房や咽喉笛をえぐられて苦悶の形相も凄艶に果てんとする美女、山を築き血汐の川を流して足の踏み場ない程に横たわっている美女の屍の数々の姿。その屍をふみこえて、尚も斬りむすぶ美女運河凄艶な図柄に全く異常とも云えるあこがれを抱いています。勿論ふんどし一本の裸の美女の場合を想像すると私の血は妖しくうごめいてきます。森田氏は斬られる女の、生から死への凝結した一瞬の美しさを讃えておられるが、私はこれらをひっくり返して、屍となり果てて横たわる姿の美女、それもふんどし一丁の裸姿のそれにあこがれているのです。ふんどしをきりとりしめ内股もあらわに、乳房のえぐられてこと切れている無念の形相も凄艶な美女、みだれた髪は地上にのたうっている状も効果的です。くりくりとしたお尻の双丘をわってきりとりしめた赤ふんどしの結び目をみせてうつ伏して果てている裸女、或は大の字なりに果てた女の屍の上に、更に他の女の屍が折り重なっている様、更には血の海の中に白蛾のような身体を累々と折り重なり山をきずいているふんどし一つの裸女の屍その屍をふみつけ

て尚斬り結ぶふんどし一丁の裸女達の群像等を描いていただきたいものです。裸血斗マニア、無惨絵マニアは奇クでは少数派と思いますが、この少数派の渴もたまにはいやして下さい。(女斗彦)

貴誌十二月号に続花と蛇が掲載されているのを発見し、久々に又貴誌を買い求めました。これが連載二回目と知って十一月号もあわせて買ったことは勿論のことです。私は大版時代からの長い間の貴誌ファンでしたが、ここ一年ばかりは貴誌の内容にあきたらずしばらく遠ざかっていたのですが、この春出た「花と蛇」特集号を見て思わず快哉を叫び同じ雑誌を三冊も買ってしまいました。それから続篇の連載を待ちわび、時々書店でペラペラめくっていたのです。そして、遂に続篇の連載を発見し、これを機会に再び貴誌の熱烈なファンに舞いもどったわけ以下、少しばかり注文を述べさせていただきます。作者の筋の展開は実に老練と云うべきで申すところなしですが、もう少し静子夫人をはじめ四人の美女の美しさを強調する描写を加えて下さい。長いまつげの先にキラキラ光る涙のし

ずくだとか、うす桃色にほんの上気した頬にふるえている金色のうぶ毛だとか、青い血管がうっすらと浮き出しているつややかな乳房とか、むっちりした太腿とか、白魚のようにほっそりした指先に光っているピンクのマニキュアをした爪だとか。そうした肉体の表現を随所に入れてもらいたいと思います。それに一層女体をなまなましく実感させるものとして匂いとか温かみとかを強調してもらいたく思います。かすかな甘ずっぱい乙女の乳房の匂いとか、太腿の奥のむんむんする匂いとか、かっとはてった内腿の熱気、ひやっとするすべっこい尻などなど。あくまで責められる女は美しく淑やかでなくては面白味がありません。京子の空手二段はいささか興味さくせんたるものがあります。十二月号の新らしきヒロイン小夜子の登場も胸をわくわくさせるのですが、コンテストに出たことがあると云うのはちよつと残念。あくまで淑やかな令嬢にしていた方がいいと思います。また責められる男というのは、あまりゾツとしたものでないで、新たに登場する文夫はせいぜい美津子の責めの小道具に使う程度に、つまりしぼりあ

春川ナミオ画 女体下敷力作M画決定版

分譲用弩級版 大判印刷画紙鮮明焼付 七枚一組 三〇〇〇円 略号(ぬけ)

豊麗きわまりない美女の巨大な臀部に押し潰されるM男の姿態を描いて第一人者の春川ナミオ氏が多くのファンの要望にこたえて特に分譲用として十二分に腕を揮つて、まことに奔放にして大胆な構図の素晴らしいM画をここに完成しました。これこそMマニア待望のMゾ画の決定版です。座右の宝として末永く御保存下さるようお願いいたします。

一、股間で圧死する

美しくも逞ましいグラマラスな股間に押しつぶされて窒息寸前の男の恍惚境を描いている。この男のM男の横暴にして美しい姿態で

二、行水の美女

な、タライに一杯になるほどの大きなお尻をすえて行水をつかう美女。そしてそのお尻の下に押し潰されて、顔をのぞく男の顔で、男の顔は次第に苦痛に変わってゆく。

三、臀部の首絞め

柱に縛りつけられた男の咽喉元に、美しい女の巨大な臀部が男の顔を潰すばかりに、のしかかかって、呼吸困難のために絶命寸前である。しかし女のお尻の下敷になる

喜悅に男はしびれるようなMの法悦境をさまよっている。

四、人間ハンモック

手と足をひろげて四方から吊られた男の腹の上には、豊かな美女の裸身が、どっかとのっかかって、男はクワシヨンのように、いつまでも耐えられるだろうか。

五、人間椅子の喘ぎ

豊かで色気あふれる美しいマムの巨臀が、四つ這いになっている。背にどっかりと乗っている。男は、美しい女体の重さが、マダムを慕う男に千金の重圧となつてのしかかる。

六、ローソク責め

逆エビに反らされた少年の背中の下には火のついた蠟燭が、ロと燃えている。男の尻が、懸命に反らした美女の裸の尻が、懸命に燃え、おろされる。全身脂汗を流して耐えに耐える少年。果していつまでもつたろうか。

七、股間に沈潜する男

美しい女の肉づきのよい太い股で顔をびっちりと挟まれ、むちむちした女体の下に完全に埋もれて、絶命してもいいとさえ考えた。中

げられたボーイフレンドの目の前で責められる美津子といったシチュエーションに願います。(東京都八原矢源二V)

北九州市にお住いの門田澄子さんお元気ですか。十一月号で澄子の便りを読み思い切り返事をします。小生はあえて澄子さんとは言わないでおこう。澄子と言わせてもらう。なぜならば澄子はただ一人の女奴隷に等しい存在であるか

ら「さん」はつけぬことにする。小生は生れながらのサド的性格の一男性である。小生現在二十七才であるが、もの心ついた時から現在に至るまで絶えず女性に対しての責め緊縛、仕置を夢みています。女性を責める事にはかなり自信をもっています。澄子よ、小生はていつに責めてみたかと思うがいかがですか。希望の虐め方を上げてあげます。全裸の澄子をロープでがん字がら目に縛り宙吊り、

逆さ吊り、ハリツケ、ムチウチなどありとあらゆる責めをして上げます。まず文通なりとも御交際願います。門田澄子へのみのとい合わせにかぎり住所をおしえて下さい。編集部の方、御願います。(石川県八サド義V)

西原アサ子です。十二月号の読者通信にのせていただいたおかげで多数の方からお便りをいただき奇クの方には感謝いたしております。思えば読者通信に手紙を出そうかどうか、ずいぶんまよいました。自分と同じようななやみをお持ちの方と、お友達になれたらと、又おたがいになぐさめあえたらと思ひ投書したわけですが、お便りをいただいた方の中には、ほんとうに私をよく理解していただけたような方もいました。なぜか気がすすみませんでした。私はまだ浣腸したいけんがないからかもしれない。でも奇クを愛読し始めてからなぜか浣腸の記事が頭から離れず、時々私も他の女性の方からイチジク浣腸していただけたら、などと思っております。おはすかしい事ながら……。静かな部屋の中で、おたがいに浣腸をしてなぐさめあえたら。でも私はだ

めです。恥かしがりやだから、せめて文に書くことがせいっぱい。最近どういうわけか便秘しがちなので薬局へイチジクを買った。いきました。恥かしくてとうとう買えませんでした。お通じがないせいか、人前でもいつも顔が赤くなるようなことが起ります。となりのおばさんに、この事を話したら、おなかに火をすえたらといういわれ、小さなモグサをすえていただきました。お灸は小さい頃にお腹しよをして母に叱られたが、すえられた事があります。この時はお灸をすえられ何か妙な気がしました。これから私がお灸に興味を持ちましたわけ。となりのおばさんのおしやるには便秘や生理不順の時は実際お灸は効果あるそうです。私も週に一度すえていただく事にしました。案外奇クのお灸読者の中にも、お灸に興味をお持ちの方も多いいのではないう。おたがいに勇気を出して。(東京都北区八西原アサ子V二十才)

四馬孝画

時代風女体切腹画

大判判印画紙焼付

五枚一組 略号一〇〇〇円

略号(ゆい)

一、座敷牢の美女

無実の罪によって座敷牢に押し込められた美女が、男の見ている前で牢内に白布を敷きつめ双肌ぬきになるや、短刀で下腹を切りさばき左の乳下に止めの一刺し。

二、介錯される美女

上半身の豊かな肉づきもあらわに庭に端坐して、左脇腹から臍下にかけて、脇差できりりと切れば介錯の刃が一閃、麗わしの細首にさつと散る血しぶき。

三、駕籠の中の姫君

駕籠で送られる美女が氣にそまぬ縁談をいとい、腰巻一つの裸身となつて覚悟の切腹。守刀で臍下を十分に切つた上、更に鳩尾へかけて凄絶な十文字切腹。

四、果てる男装の美女

小姓姿に身を変えた男装の美女が、豊かな乳房もむきだしに前をくつろげて、その下腹に突き刺す小刀の切先。深夜の御殿にくりひろげられた倒錯美の絵巻。

五、裸身の切腹

も早や逃れぬと覚悟した美しい腰元は死んで操を守りぬこうと、輝くように白い肌をすべてさらけだし、守刀の短刀で下腹を一文字に切つた上、咽喉笛にひと突き。

刑部典子様、奇ク誌上にて拝読致しました「カメラハント」への記事、大変興味を持ちました。耳鼻責プレイ辻村先生にこのことですが、中々早急には実現難しいでしょう。私と一度プレイをしてみませんか。すぐ応諾されますれば最大の幸福です。大いに頑張ってお下さい。私も祈ります。仮りに応諾を頂きますれば名神高速パスの一番車で伺いますと、大阪又は神戸へ直行できます。私は勝手に先生に毎月の宿直日直の日を知らせて居ります。貴女がMでなくSなら素晴らしいのですが、中部地区でお会い出来なれば、私自身を教材に互いに研究し実験プレイを致しますと、お互い奇クファン故割合早くSになれると思います。どうも中部地区にSのベテラン女性が見当らず残念です。純SMプレイの諸器具衣類を揃えられる方はSMの御夫婦か、暇と経済的余裕のある方ということになります。私みたいな者は最低二人位のS女性グループの責めの実験台となりたく希望しております。唯一度辻村先生に試験を受けましたが、御存じの如く最初は残念ながら失敗しました。大きな事を言うわけではありませんが総ゆる型を受けて

みたいと思っています。貴女と一緒に先生の指導の元でのプレイを願っております。貴女がSでしたら連絡をして勿論そうなれば三カ月位後になりましょう。私の事は先生が詳しく御存知です故絶対大丈夫です。誌上で連絡しまして文通しませんか。(名古屋八七〇生)

奇ク愛好家の皆様、初めて御目にかかります。皆様同様、毎月奇クを愛読している二十五才になる男性です。読者通信を拝見し一度交歓文通でもしたいものと考えて居りました。SMどちらも好みですが、唯今カメラに凝って、許婚者を口説いてはSMプレイの写真を撮っておりま。プレイといっても一方的で、いつも相手をいじめる方で、多少不満を持っております。どなたか女性の方で、私を虐めてくれるような方に居られませんか。なお御夫婦がSMプレイをして居られる方の御話やらプレイのやり方など御聞きしたいです。どなたでも結構です。SMについて話し合いお友達になりたいと思います。お手紙下さい。自分で現像引伸し全部やっております。DPEにお困りの方がありましたら、奇ク愛読者のよしみで無料で引き受けます。その際写真の交換などもしたいと思ひます。奇ク発展のためにも、皆様の御手紙をお待ちします。(東京八渡辺宏信)

先日は早速フォトをお送り下さいまして有難うございました。無事入手いたしました。一週間の日数を見て局へ行きましたところ成るべく早く来て下さいと言われ、消印の日付を見て驚きました。まさに打てば響く早さですね。全くスブード発送には感心しました。今度も宜敷くお願い致します。この前の品の中に後姿の一枚あり、がっかりしました。やはり素顔の見える位がいいですね。特に色々の表情がモデルの顔に出ているのが、やはり好きです。大塚さん、五月さん、近頃は余り絹川さん、五月さん、近頃は余りグラビヤでお目にかかりませんが如何されましたか。以前に活躍された花坂道子さんなんか、好きな人です。グラビヤ写真を集めて早や十五年、今ではミカン箱に一ぱいあります。好きな小説ばかり合本したのが、やはりミカン箱に二箱と少々あります。女房に「こんな物集めてどうするの?」と何時も笑われますが、ときどき古い分

女相撲と女斗美

女相撲組打ち

相撲マワシ着用
大手札印画紙焼付
八枚一組 八〇〇円
略号(すか)

女相撲投げ業

相撲マワシ着用
大手札印画紙焼付
八枚一組 八〇〇円
略号(すね)

禪裸女の争斗

白晒六尺フンドシ着用
大手札印画紙焼付
五枚一組 五〇〇円
略号(めん)

禪裸女の寝業

白晒六尺フンドシ着用
大手札印画紙焼付
五枚一組 五〇〇円
略号(めき)

裸女相搏つ

白晒六尺フンドシ着用
大手札印画紙焼付
八枚一組 八〇〇円
略号(えく)

を引き出して見るのも楽しいものです。これから何年続きますことや、一日も永生きして、たのしい人生を送りたいものですね。全くの話がね。貴社も私達マニヤのため益々頑張ってください。お願いします。(大阪市八高山二朗)

○ 小生は女性刺青ファンです。毎月店頭で雑誌をくってみては、女性刺青の写真や絵をさがして居りますが、なかなかめぐり合いません。貴誌も欠かさず見るのですが、刺青以外のSMには余り興味をもって居りませんので(嫌いではないのですが)ほとんど購読したことがありません。大分以前の「淫らな蜘蛛」「切腹幻想」去年か一昨年の「女賊切腹」だけは切り取ってアルバムにはってあります。それが今回突如、刺青女性の緊縛フォトが、十二月号、一月号二月号と連続して載ったのですから小生の喜びお察しいただけると思います。分譲品の申込も多数のこと、また一月号には読者通信欄にも、このフォト賛美の文が三通のっておりましたね。やはり世の中には小生と趣味を同じうする人もかなりあることを知って意を強うした次第です。そこで小生長

年の夢を提案致します。それは山原清子嬢の如き篤志の女性の出現を待っていたのでは、この次はいつの事になるやら判りませんので、普通のモデルを使って、その裸身に絵具やマジックなどで刺青を描き、それを写真にとってはどうか、ということなんです。それもあ

りふれた背面だけでなく前面にも、つまり乳房、腹部、右腿などに男性の興味をそそる刺青を描き、揮姿で縛ってその写真を提供してほしいのです。もちろん誌上発表には限度がありましようが、それはそれで結構、チャリズムの魅力を発揮できるでしょうし、分譲の方で心ゆくまで全面刺青姿を楽しみたいのです。如何でしょう御無理でしょうか、その図柄の二、三を御参考までに次にあげてみます。八中略Vざっとこんなものが考えられます。要するにこれまでの刺青つまり伝統的な浮世絵系統の図柄にとらわれず(それらも十分にとり入れながら)新しい感覚をもとり入れ、背中だけでなく前面にも刺青を施した美しさを

<p>女相撲四十八手 (1)</p> <p>大手札印画紙焼付 六枚一組 八〇〇円 略号(すは)</p> <p>モデル 木村洋子、大塚啓子</p>	<p>女斗立術の応酬</p> <p>大手札印画紙焼付 六枚一組 八〇〇円 略号(すむ)</p>	<p>立術の攻撃場面</p> <p>大手札印画紙焼付 六枚一組 八〇〇円 略号(すた)</p>	<p>寝業の女レス</p> <p>大手札印画紙焼付 六枚一組 八〇〇円 略号(すほ)</p>	<p>女斗連続場面</p> <p>大手札印画紙焼付 九枚一組 一〇〇〇円 略号(すく)</p>
---	--	--	---	--

水野弘氏提供

女体切腹フオート

女体切腹の介錯

大手札三枚一組 三〇〇円
略号(せは)

妻の切腹プレイ

大手札三枚一組 三〇〇円
略号(せは)

首桶に落ちる首

大手札三枚一組 三〇〇円
略号(せへ)

とらしてもらえぬのか、またそれにはどう連絡をとったらよいの、御知らせ願えませんでしょうか。

(一刺青マニヤ)

奇ク御愛読の皆様、お褒めありませんか。すっかり寒くなりました。月経帯マニヤの皆様もお元気の事と拝察申し上げます。バンドマニヤの方々の殆どが、例外なく最も愛着を感じておられる前開式生理バンドを私は直接生理バンドメーカーに頼んで分けてもらう事が出来ました。黒や白の新品メリ

ヤス二重ゴムの前開式メンスバンドを五枚も購入出来たのです。素晴らしいでしょう。もう手に入らないものですから……。でも一人だけで喜んでいられるのもどうかと思ひますのでその中二枚だけならお分けしてもよいと思ひます。誌上にてお申込み下さい。この前開式メンスバンドやその他色々な月経帯を部屋一ぱいに拡げ弄んでいる様子を御想像下さい。顔にはパンティをすっぽりとかぶり、口には黒いバンドを一杯に含み、その上から替ゴムでしっかり押さえ、沢山のメンスバンドを捧げ持ったり穿いたりするポーズをあらゆる角度から、又色々な瞬間を写してみました。御希望の方には写真を差し上げてもよろしいです。御同好の皆様なら必ず喜んでいただけると思ひます。(徳山市八保田生)

初めてお便り致します。皆様の仲間入りをさせてやって下さい。私は本誌を愛読して七年になります。一度も女性の方とおつき合ひをしたことがありません。で、この便りを出した機会に、是非私奴を女主人様の僕として奉仕させてやって下さい。朝は女王様の足の下で弄ばれ、夕方になると

平手打ちの御馳走にあずかりたいのです。どうか女性の美しいお手で、このみじめな私奴を思いきりドレイ扱いにして下さい。心からお待ちして居ります。月に一度か二度、私を犬にして下さる方がおられましたら、一日も早くお便り下さい。心からお待ちして居ります。私は市内の商店で働いている者です。では、女王様のお便りをお待ちしております。(京都市八中西弘次)

貴誌十二月号及び一月号に於て素晴らしい刺青女性のモデルの取材には全く感じ入りました。早速フオートを数種類手に入れさせてもらいました。もうこの種のモデル嬢は、あとにもさきにも得難いものとなることでしょう。貴誌同系の雑誌では男性の刺青姿体を取材していますが(同封写真提供します)貴社にお願いの件は、これを女性に替え、モデルにも専属の大塚啓子嬢を起用して作成してはと思ひます。同嬢は過去にも経験が幾多あり、只問題は刺青を描き込むだけですが私が最近感じているのは、東映映画の刺青担当技師さんですが、ほんとうにすばらしい本物そっくりな描きで(博徒もの

映画におけるもの)ここまで注文をつけるのは無理でしょうが、是非この実現方に企画をお願いします。(読者・乳生)

先般注文の新作Mフオート落手致しました。私達Mファンにとりまして、分譲のMフオートは本当に早天の慈雨にも似て有難い限りです。先月号又今月号と矢継早やにMフオートを発表される編集部諸先生方の御苦労もさる事ながら、我等M党にとっては、此の上もなく嬉しい事です。早速ながら一月号発表のMフオート別紙のように注文致しますので宜敷く願ひます。矢張り女王様は若くて美人に越した事はないので、この点今度の山原様には今から期待しております。尚今後Mフオートの発表の際は、出来る範囲内に於て、Mフオートモデルの方のネーム、体格、年齢なども知る事が出来れば、入手する迄の楽しみも大きいと思ひます。何卒今後もしどしMフオートの発表をされる事を望んでおります。寒さに向います折柄諸先生方にはご自愛の程願ひ上げます。

(富山県高岡市八東山弥彦)

奇ク編集部の皆様、ゴムマニヤのお方様お褒り御座居ませんか。私はつい分前からゴムが好きでゴムと遊ぶ事に喜びを感じて参りました。はずかしい事で悩んで居りましたところ奇クに同じ気持ちの方が多勢いらっしやる事を知りどんなにか安心した事で御座居ましたよう。そう云う意味で奇クはあたしの心のささえです。感謝していただきます。思えば私がゴムを愛する様になったのは小学校六年から女学校に入る頃の事で御座居ます。押入れの中を整理して居りますと、赤ちゃん用ですが三才児用の大きなオムツカバーが出て来ました。母に尋ねると実は私が使用して居たもので、アメリカに居る叔母がたくさん送ってくれたものの残りだそうで箱に入って五枚も余分が残って居たのです。一人子の私の家には必要がなく、そのままになって居たのでした。そのオムツカバーは三角おしめを使うのに便利な様に極薄い生ゴム製で、布等を全然使用してない総ゴム製で、パンツ型のもので足の周辺には此れもゴム製の大きなひだがゴム糊ではり付けてある美しいもので色は黄色とピンクがありました。最近ゴムの水泳帽子等に取付けられ

て居るゴムで出来た花飾りが此のゴムのオムツカバーに三カ所程ついているのです。全体が花の様に美しいゴムパンツです。アメリカ製はキレイだな、と感心致しました。母におかしな子と云われ乍らもらったゴム下着、三才用のものでサイズも大きく総ゴム製だからよく伸びますので、そっと私は素肌とそのゴムパンツをはいて見たら、ゆっくりはけるではありませんか。足の周りがちよっと痛い程度、パリパリとはくときゴムが音を立てました。良質のゴムはピチピチ張り切って生きている様です。ヒンヤリしたゴムの感触、歩くと私をすっぽり包んでくれるゴムがキュツキュツとかすかに音を出します。その内汗が出てぬめぬめして来ました。私のおしりにピツタリとゴムがハリ付いています。此の時のセンチメンタルな気持が私をゴムのとりこにしたのです。総ゴム製のパンツ、何と云う美しく生き生きとした下着でしよう。その頃既に生理日があたしにはありました。月経帯もすこしは何となく好きだったのですが、此の事があってからバンドも大好きになったのでした。汚れた月経帯のゴムをお洗濯して庭の一隅に干

す時何となく黄色いゴムが一面に縫い付けられた此の下着と替ゴムの風景に見とれて居りました。生理日におむつカバーをバンドの代りに使ってみました。総生ゴム製のカバーはカサばらず充分バンドとして役立ちました。その頃ゴムの感触が好きでパンティも上からはかず、前述のゴムカバーだけで過して居りました。バンドはゴムの部分が少なくピツタリと肌にハマり着いてしまつてゴムの感触があまり感じられませんでした。生理日が間近くなつた頃の外出には用心のためバンドを着用致して居りますが、素肌に触れるあのムチュムチュしたゴムのタッチは感じられませんでした。その点ゴムパンティは素晴らしいワ。プリプリと歩く度にゴムが足の周囲にまつわりついて良質ゴムだったからキュツキュツと音も立てるしゴムである事の条件、あの個性的な臭気、パリッ、プリップリッとした生ゴムのタッチは何とも云えない魅力です。大人用のゴム製おむつカバーも月経帯もゴム手袋もゴムのものを身につけるものは、何でも好きでずい分たくさん集めて居ます。最近のバンドは大方ウールゴムやスポンジ性のゴム等で出来て居ますが、私はやっ

新作マゾ・フオート

(新人モデル)

人間馬の調教プレイ

大手札三枚一組 五〇〇円
略号(まの)

足舐めの奉仕と強制

大手札三枚一組 五〇〇円
略号(まわ)

股責めにあう顔面

大手札三枚一組 五〇〇円
略号(また)

縛られて翻弄される

大手札三枚一組 五〇〇円
略号(まひ)

踏みにじられる顔面

大手札三枚一組 五〇〇円
略号(まな)

肩車に奉仕する青年

大手札三枚一組 五〇〇円
略号(まは)

玩具にする縛り人形

大手札三枚一組 五〇〇円
略号(まて)

首を太股にて絞あげる

大手札三枚一組 五〇〇円
略号(まや)

ぱり生ゴム製の薄い黄色のゴム底で替ゴムも生ゴム製のものが好きでそれを使って居ます。特に昔の製品でパンティ型のフレンドバンド等が好きです。内側に大きく広くゴムが付いて居る上にそのゴムがバンドの外側まで出してあり足を通す周囲の外で縫い着け、汚れない様に工夫したもので、黒のパンドに黄色のゴムが外側から染しめるもの。雨の戸外を大人用のおしめカバーをしてレインブーツの下はソックスの代りにゴム氷のうをはき手袋の下は手術用のゴム手袋、そしてゴム引きレインコートで身をととのえて歩くの大好きです。先日氷のうをいつもの様に空気でふくらして、その上に座ってゴムに悲鳴をあげさせてゴム破りの遊びをしていて思いつきました。それは咽頭用ゴム氷のう(細長い型のもの)三本を買い自然状態ぐらいにかるくふくらし口もとを完全に括ります。その二本を長くタテに結び合せ丸い輪を作りま

す。此れは体のお腹のぐりに丁度はまる空気入りのゴム輪となります。そして他の一本にも少し大きい目に空気を入れて、さきほどのゴム輪に直角に前後に取付けます。此の様にするとゴム風船のバ

ンド又はフンドシが出来ます。歩く度にギチャギチャとゴムが動きまわります。こうして私はゴム遊びをして楽しむ様な今日の姿で御座居ます。奇巧の発展を祈りゴムを愛します。(神戸市兵庫区水木通八太西良子)

○

本誌十二月号に出ました春川ナミオ先生の(尻の下に敷かれる)は本当に耐らない程に素晴らしい拝見致しました。今後もしどしどせて戴き度く御願います。画集が出ましたら是非買わせて戴き度く思う位です。中年の御婦人特有の太るだけ太った逞しい臀部の美しさは、何と尊い迫力に満ちている事でしよう。私は比較的小柄な一十八才の温和な呉服商ですが、何の掛引もなしに本当に只々、巨大な迄に大柄で肥満した御婦人に対する憧れの念を禁じる事が出来ないのです。営業の場でも逞しい大柄な御方に強要されると、どんな無理でもきいてしまう馬鹿な私です。街で肥満した御婦人を見かけるとノミの夫婦と人々を笑わけても良い一緒に歩いてお話ししたいと、常識も無い事を考えてしまふのです。奇巧の愛読者で長年読ませて貰って、こんな素晴らしい

刺青女体関連写真

華麗なる玉取姫の刺青を背中から臀部、太股に至るまで一面に施した山原清子さんの文藝的価値豊かなフォトを、好事家、文献蒐集家、マニヤの方々に分譲いたします。時節柄誌上グラビア掲載を憚かられますので、何卒印画紙焼付にてお求め願います。

黒ふんどし入墨姿

大手札印画紙焼付 三枚一組 三〇〇円 略号(くの)

日本髪のお全裸体に細身の黒ふんどしをきりりと締め込んだお嬢さんが、ぐっと黒ふんどしの喰い入った双丘を突き出して、その魅力的なポリウムのある肉体を誇示しています。日本髪と入墨の肌と黒ふんの三つの要素の美しさ。

黒フン媚態の魅力

大手札印画紙焼付 五枚一組 五〇〇円 略号(くな)

これまた日本髪にて、すっきり着物や脱ぎ去り、きりりと締めつけた黒フンドシ一本の豊満な肉体で背中や臀部の入墨や股に喰い込んだ黒フンドシを十分見せながら演じる婀娜なしどけないポーズ。

黒禪背面模様

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円 略号(くこ)

洋髪で黒フンドシをきっちり締め込んだ清子嬢の入墨の美しい背面をふんだんに見せています。

黒フン手吊り責め

大手札印画紙焼付 三枚一組 三〇〇円 略号(くり)

両手首を揃えて鴨居に吊られた黒フンドシ一本の女体が爪先立つてくるりくりと回転するところを、前後側面の三つのアングルで見事な肢体をごろんにいれる。

全裸入墨姿態

大手札印画紙焼付 三枚一組 三〇〇円 略号(いれ)

刺青マニヤの方々に並に文藝的にコレクションしておられる方のために清子さんに素裸になつてもらつて入墨の隅から隅まで、とくとごろんにいれます。

晒六尺フンドシ

大手札印画紙焼付 三枚一組 三〇〇円 略号(ろと)

日本髪——清潔な白のふんどしが殊の外、朱と青の墨に美しいコントラストを示しています。

白六尺一本の姿

大手札印画紙焼付 三枚一組 三〇〇円

しい挿絵は始めてです。只もう少し表情に鈍重な迄に柔かい感じが欲しかったと思います。お尻の線は全く素晴らしいの一語に尽きます。若しどこかで肥満婦人のコンクールでも有れば又、ヒップアップ○センチ以上のお方のコンテストでも有れば飛んで行って駆けつけたい私です。全国の皆様、特に東京及び京阪神在住のお方どうかお手紙下さい。(京都市四条小橋下ル八小原陽一郎)

○ 奇く愛読者のみなさん今日は。私約三年ほど前から貴誌を愛読しております。独身の男性でございます。今迄はこの書店にでも貴誌が買えたのに最近ではどこでもというわけにはゆかず残念です。私は生来どうもSの傾向があるらしく、一度女性に浣腸してみたいという気持ちが押えきれなくなり、読者通信を通じて私の希望を満すことができましたらと思ってお便りさせていただきました。奈良、大阪、京都近郊の方、一度私とプレイして下さる方はおられないでしょうか。そんなすばらしい女性がおられましたら、一度お便りください。お便りありましたらいつでもどこにでも出かけてゆきます。

それではお便りおまちいたしております。(奈良八T・I生)

○ 小生、読者通信は今回で三回目に成ります。奇くを買う店はいつも同じで、何日も二十七日に書店に行きます。主人は小生が黙っていても奇くを渡してくれまう。一時奇くはつまらなくなつたように思えましたが最近又楽しく読めるようになりまう。特に毎号の辻村隆先生のすばらしい文の内容、又二月号には、佐中晴成氏の「S Mレター」は実にすばらしく読ませて頂きました。他にも、このような内容の記事がたくさん掲載されますこと望んでいまう。編集部の皆様、宜敷しくお願いしまう。(静岡八藤井正義)

○ 原由貴子様の紹介された、「世界」十月号、早速古書店を漁ってみましたら、ほとんどの店でその前後があつて十月号だけぬけていまう。東京にはこんなマニアがいてのかしらと心強く思つたほどです。やつと思いで一冊手に入れましたが、同じ思ひの方もいらつしやる事と思ひ浣腸描写だけ要約しまうと、若い鉄道員が夜勤にそなえて、昼間床に入るとき、

略号(ろに)
洋髪——坐り、中腰、立ち、いずれも入墨の背面と白いフンドシの尻への喰い込みを中心素晴しい美しを狙いまうした。

白禪後手高手小手

大手札印画紙焼付 三枚一組 略号(ろし) 三〇〇円

ぎゅうぎゅうと力まかせに縛り上げた二の腕から後手首、首繩、只でさえ大きな乳房がむくれたようにくびれていまう。

日本髪全裸強烈縛

大手札印画紙焼付 三枚一組 略号(いら) 四〇〇円

可憐な高島田で可愛い顔の清子嬢だが、背面一ぱいには見事な入墨。そのアンバランスに對して全身にぎりぎり巻きつけた蛇のような縄。両の足首にまた紅を刷いたように色づいて、ふるいつきたいように美しい。身動きのできない身体を蹴倒せば、海老のように全身を曲げて喘ぎ、呻めき、そして恍惚とした表情になる。

洋髪全裸強烈縛

大手札印画紙焼付 三枚一組 略号(いこ) 四〇〇円

豆絞りの猿ぐつわをかまされた清子嬢の全裸身に、きびしく捌か

れる高手小手の縄目。入墨の美と緊縛姿態の美を最高に發揮しつつ女体責めのムードをむんむんと散させ、写真の中から香わしい臭と吐息の洩れだしそんな緊迫感あふれる傑作です。

日本髪全裸股間縛

大手札印画紙焼付 三枚一組 略号(いさ) 四〇〇円

入墨に映える全裸身に、乳房も潰れよとばかり強烈な縄が二の腕と胸、後手を締めつけていまう。更に胸もくびれる腰繩、股間縛りとS的ムード溢れる素晴らしい緊縛姿態が、この三枚のフォトに結集していまう。殊に、島田鬻の全裸身は、稀少価値も満点です。

可憐島田鬻全裸縛

大手札印画紙焼付 三枚一組 略号(いみ) 四〇〇円

これは又まことに可愛い島田鬻のよく似合うお嬢さんです。可憐な餅肌の麗しさはよくわかっています。思ひます。全裸の身には刺青が見事に彫られていまう。お添えものまでついていて、この下キセントリックをぐらんになつて

隣家の少年が叫び声を挙げて逃げ出す場面を見て、きつと浣腸されるに違いないと想像しエキサイトするわけです。「前略——もぐり込んだふとんの暗やみで神沢（鉄道員）はむきだしにされた少年の尻に浣腸器がさし込まれるのを見た。油をぬったガラスの浣腸器の先端がひらかれたつぼみの粘膜にふれたとき少年があつと声をたてた。——中略——とうとう少年が泣き出してしまった。浣腸器には、まだ三分の一位薬液が残っているのに、もう強い刺激が少年をおそったのである。——中略——当然神沢の愛する少年も尻に脱脂綿をあてがわれてはげしい刺激に堪えさせられた。非情な薬液が少年の腸内を駆けめぐり、ふくらんだ下腹部がうねった。広くなったり、重くなったり、痛くなったりして波のようには下腹部に押しよせる刺激に、少年は懸命に耐えた。たまたまなくなつて、少年が泣き声をたてると姉がもう少しだから、もうすぐだから、といって我慢させるのだった。——以下略——ほんの一部ですが、生き生きとした描写がうかがえると思います。本誌でもこんな人に浣腸ものを依頼したらどうでしょう。か。世界の原様、看護技術

の佐東様、十日頃に坂本局止でお手紙下さいませんか。お互いにきつとたのしめる事と思います。尚グツとおちますが漁書の折、手に入れた百万人のよる誌（三九・七）の坐薬につかれた女性の記事マニア一読の値打があります。綜合雑誌や一般のエロ雑誌にこの様な記事がみうけられるのは、A感覚と云うものマニアが考える程異常ではないのかもしれないね。
（台東区八小林薫）

○
新年おめでとうございます。奇クの皆様のお元気で活躍を心より喜び申上ります。二月号の口絵で山原清子さんの刺青姿を再び拝見しうれしくなりました。出来れば清子さんの彫った当時の体験記とか他の女性の彫りましたら、もっと女性刺青の写真や記事をもっと下さい。別冊としてでも女性の刺青特集号が出たらと楽しみにしております。機会があれば直接清子さんの裸身の写真を撮りたいと思うのですが御住所と本名（又は芸名でも）お知らせ願えませんでしょうか。（神奈川県八女性刺青マニアより）

○
皆様明けましておめでとう御座

印画紙焼付 梨花悠紀子吊責写真 再分譲

連続吊り責めフォートの決定版、未発表の秘蔵写真

A5判感光紙焼付にて分譲していましたが、未だに御注文や照会が参つておりますので、ここに再び印画紙焼付として再分譲いたします。（内容は以前分譲のものと同じです）

第一集 逆エビ吊り

略号（りつ1）

大手札印画紙焼付

六枚一組 五〇〇円

第二集 逆胴吊り

略号（りつ2）

大手札印画紙焼付

六枚一組 五〇〇円

○
います、編集部の皆様お元気ですか。私も今年に入ってますます元気で居ります。毎号毎号楽しく拝見致して居ります。又愛読されて居る皆様も、ますます本誌を毎号楽しみの内に読まずにはおられない事でしょう。私は今日までただ一すじに女性から、一度いじめられ、身体がうごけなくなるまで女王様からムチのごちそうされて見たいのです。ただそればかりゆめを見て居ります。どうか女性の方この私を心ゆくまで、ムチのごちそうをして下さいませんか。心からお待して居ります。どうかゆき有るお便りを心から待って居ります。お便りを待って居ります。
（京都市右京区八中森広次）

○
読者の皆様、新しく愛読させて頂きましてから四カ月になりました。初めて読者通信に書きました。よろしく願います。私はマッサージや指圧を研究して摩法（オサスリ）の方法を新しく作りました。全身にクリームをつけてなげたり、さすったりの奉仕をいたします。私はかるいSMを好みますが特に、アヌスに興味を持っています。奇クを通じてお互いに誠実なお友達になりたいと思います。是非お便りを下さい。確実にご返事いたします。（東京都内八南生）

○
始めまして、不束な初心者でございますが、愛読者の皆様方の仲間に入れて頂きたく、つたないペ

四馬孝画 今月の新作

倒錯美緊縛画集

大判判印画紙焼付

五枚一組 一〇〇〇円

略号(えと)

(美女のいけにえ)

一、女体解剖台

黒くて冷たいレザー張りの台の上に逆エビ縛り首縄姿で載せられてゐるのは、齡二十才の美女。身体の前面をむきだしにして、台の上にころがされたのに対して、これから加えられようとする嗜虐のかずかずを暗示する恐ろしい道具が彼女を冷たく見下している。

二、嫉妬の鬼

絶世の美貌の妻を持った平凡な男は、あらぬ嫉妬に悩まされるものだが、自分は醜い容貌でありしかも、妻はホステスのナンパワゴンであつてみれば、嫉妬の鬼となるのも又当然であらう。これは若くして美しい妻を持つ夫が、その閨房に於て浮気の相手を白状させるシーンである。

三、鼻料理プレー

顔は女性の生命であるが、鼻は又、その大切な顔の中心に位して女性変貌の中心をなすもので、男

心をそそのかる中心でもある。美しい女性の鼻をいたぶるのは、これ又Sマニヤの醍醐味である。大事な鼻をツンと突き出して、身動きもできないように手足を拘束された美女が、今やその鼻、鼻孔を男の手によって、思うままに料理されようとしているのだ。

四、涙を舐める男

ぱっちりとした瞳、いたつぷらな瞳。房々とした丈なす黒髪は、色白の肌によくマッチしている。乳房や腰部には、むくりと肉がのびていながら、全体にはほっそりとした身体つき。その華奢な裸身をくびるように掛けた麻縄、そして身体を真二つにするばかりに締めつけた革紐の首縄、股間縛。今や皮ムチの鞭打にあつて、苦渋に流した大粒の涙を、男はペロペロと如何にもうまそうに舐め続けるのだ。

五、山小屋の一夜

リュックを担いで楽しい山登りの一日が終つて、山小屋で一夜の宿泊を求めた乙女。山のけがれを知らぬ清純な空気と同じく、彼女も又、山の美しさに憧れた十九になる清純な処女であつた。しかし山小屋の一夜は、彼女にとっては何となく悪夢の一夜であつた。その怖しい悪夢のいまわしい悪夢のページが、ここに展開されている。

代)

ンを執りました。私は二十九才になる或る個人商社に勤める孤独な女性でございます。私の過去をお話し申し上げたとて、只数々の運命にもあそばされて来たとのみ申し上げれば御想像いただけると思ひます。「浣腸」これ程私を魅惑する言葉はありません。もう数年以上にもなる私の他人にかくれた秘かな大きな喜びでございます。今迄は思い出す程のこともなく、全くの一人だけでしたが、この際思い切つて読者通信に出させて頂きたいお友達をもちたいと存じます。何卒よろしくお願い致します。ペランの方々には誠はおはすかしのですけれど、愛読者の中には私の様な、初心者の方もいらっしゃると思ひます。女性の方でしたら誰方でも結構でございます。編集部宛御便り下さいませ。心からお待ち申しあげて致します。拙い文面ですので編集部の方が適当に訂正されても、内容さえ変らなければ宜敷うございます。只私は皆さんの様に経験も浅く、未熟なものですので、その点強調してほしいと思ひます。又適当な中部地区の方を御紹介下さればうれしく思ひます。では、御面倒ですが何卒よろしくお願い致します。(羽根さち

奇クを愛読するようになって二年余りになりますが、お便りするのには初めてです。毎号、素晴らしい写真や記事に何時も云い知れぬ喜びを味つて居ります。しかし、残念なことには未だ一度も、実際に女性を責めたことがないので、何時も現実に写真のように女性を縛り、いじめることが出来たらと夢見て居ります。奇クには事実、女性を縛り浣腸をしたり、空気も入れて妊婦のようにお腹をふくらませたりする記事がのって居り、そのようなことが出来る方が本当にうらやましい限りです。読者通信欄に女性でいじめられることを希んでゐる方もある様ですが、東京の方が少ない様なので残念です。東京近郊の女性の方とは是非文通か、交際したいものです。経験者の方に具体的な方法をお教え戴きたいと思ひます。そして、早く奇クに体験談を投稿して愛読者の方に種々御指導を仰ぎたいと思ひます。初の中からプレイするのはどうかと思ひますが、お互いの秘密を厳守の上で信頼出来るまで、文通交際出来たら幸いです。年配の方で責め方に精通された女

性ならば尚結構です。責められた時の写真や体験談をお送り下さる様切望して居ります。大変勝手なことばかり書きましたが、同好の女性のお便りを心待ちにして居ります。(埼玉県八安西隆夫)

橋本和江様。突然の御無礼お許し下さい。何の面識のない私が誌上で貴女の投書を拝見しまして、是非とも相手にして戴きたく、自分の失礼も顧みず敢えてお願いする気になりましたのは、貴女の存在を同郷の者として身近に感じたからであります。しかしながら、貴女の相手としての資格が私に有るのでしょうか。奇巧の読者になつて日も浅く、生来、少々このサド的性格を持合わせていたとしても、経験のない私には疑問です。あまり自信もないというのが本心です。でも来春、そちらの銀行に勤務することになっているには、この素晴らしい機会を失うことは惜しみても余りあるほど残念に思われます。私の現在の知識とテクニックの不足や至りなさは貴女に対する未来の夢と欲望に依つて補うということとを条件に、貴女の相手として認めて下されば光栄に思います。文章から察して、

貴女もそれほど強烈なマゾヒストンとも思われませんが、私もできるだけ貴女の御満足のいくように努力しますから、どうか宜しくお願い致します。しかし、私も所詮男です。身長一米六十五、体重六十八キロ、胸囲九十五、肉體は、貴女の条件にかなう唯一のものかも知れませんが、貴女が望むなら緊縛、浣腸、鞭などで責苦しめたぶり恥しめ、屈辱の限りを尽してみたいと思つて居るのです。でもそんな日がいつ来るのでしょうか。来春の帰郷まで待てと言うのですか。いいえ、私は今日からでも貴女を手紙の中で、虐めてやるつもりですから初めてお会いして、早速にプレイを試みることは不可能なことだと思ひます故、文通から出発して、貴女が私の性質を十分知るように、私も貴女の性格や嗜好を全て知った上で、お互いに交際することができれば最良の方策だと思つて居るのです。これまで書いてきて、私もいささか理性を失いかけて居るような気がして、自問したくなりました。でも未知のものには憧れるものであります。愚かなことは未知ということとでなく、無知ということでしょう。橋本様、私は貴女のこと

山原清子

刺青の華写真集

好評につき文献的価値も極めて豊富な山原清子の入墨に関連した最新撮影の分譲写真集をここに提供します。各種趣向のマニヤの要望により、フンドシ、腹巻、女体切腹、縛りなし刺青、緊縛とお求めにより特に撮影した最も新しい山原清子の写真集です。

黒フン高手小手縛

大手札印画紙焼付

八枚一組 八〇〇円 略号(ひろ)

黒フンドシ・フンの期待に応えて、全裸の刺青女体に喰い込むばかりの黒フンドシをきりりと締めさせ、麻縄によるきびしい高手小手縛りが豊富な裸身をくびつています。細目に悶える清子のポーズが八葉の写真に満ちています。

入墨女体全裸像

大手札印画紙焼付

十枚一組 一〇〇〇円 略号(ひへ)

これは入墨の女体をあますところなく、皆様ファンの眼前に開陳

した一糸まとわぬ全裸像です。勿論一本の縄も用いておりません。刺青マニヤの方々のために、色々な角度から、さまざまなアングルでごらんにいれました。まさに刺青女体の文献写真です。

黒禪刺青女体

大手札印画紙焼付

十枚一組 一〇〇〇円 略号(ひね)

女体のフンドシ姿の中でも、特に黒禪を好まれる方も多い。そして殊に縛りなどを併用しない純然たる黒禪着用のポーズを好まれる方々のために作成したものです。特に刺青と双丘にぐっと喰い込む黒フンドシの魅力を盛り上げることに努力しました。

六尺禪をするまで

連続二十ポーズ組写真

大手札印画紙焼付

二十枚一組 二〇〇〇円 略号(ひは)

全裸の刺青姿が白晒の六尺禪を一人でキリリと締め込むまでの連続写真を二十ポーズに分けて、実際に着用してゆく有様を刻明に描写してゆきました。

は何も知りませんが、貴女が異性からの行為は求めていないのでしたら、せめて文通だけでもして下さい。どうか私の拙い文章に賛同して戴けるのでしたら、誌上でも良し、編集部宛にでも良し、お返答下さい。楽しみに待っておりますから。では身体にお気をつけて暮して下さい。(東京都八石原道夫)

名古屋M七〇生さま——貴兄の

御投稿、いつも拝見しています。と申しますのは、私も名古屋近郊に住んでおり、貴兄と同じく、数年前より鼻中隔に自身で穿孔し、現在、六ミリの孔を持っております。鼻輪利用のネガは、その他のマゾフォト(どれもセルフタイマーやレリーズを利用して写したものです)と共に数えきれないほど沢山所持しているのですが、仕事に追われて引伸しができないままにしまっておりまます。ところで私もMの一人ですが、男性Sとのプレイは好みませんので、今までの貴兄のおよびかけにも沈黙していましたが、十二月号で、同好の志で小集会でも開いて連絡をとりあおうとおよびかけを拝見し、大変よいことだと存じましたので

この欄をお借りしておよびかけに応じた次第です。小生、毎月二、三回は名古屋へ出ますので、日時、場所を御指定いただければ出かけて行きますが、できれば毎月一日が一番都合です。時間も、名古屋へつくのはどうしても午後になりまますので、二、三時頃か、六時過ぎ頃がよいと思います。尚、小生、三十六才ですが体軀はスマートな方だと自負しています。小商店主です。男性Sとのプレイは好みませんが、女性Sとのプレイなら、どのような責めにも奉仕にも喜んで甘受できるだけの自信があります。生命の危険と不具にならない程度の怪我ならば、又、口舌利用の奉仕や便器代用などの奉仕も誰にも負けないほどうまくできるつもりですが、いつも無理に頼んで、プレイをしてもらうだけで、まだ本当のS女性には残念ながら、お会いしたことがありません。名古屋近辺にはS女性はおいでにならないのでしょうか。(美柳輪生)

初めて手紙を出す私ですが「奇譚クラブ」は約一年愛読しているものです。私も他の愛読者の方々とのおつき合いを望んでおりまし

白フン脇差切腹

大手札印画紙焼付

十枚一組 略号(ひに) 一〇〇〇円

白フンドシを勇ましく締めた刺青娘が、豊満な裸身をさらけだし脇差を手にして、キリキリと真白の下腹を切り裂いてゆく有様を刺青切腹ファンのために十枚の組写真として分譲品を加えました。

白フン短刀切腹

大手札印画紙焼付

十枚一組 略号(ひぬ) 一〇〇〇円

前の組と同じように、豊満な刺青の女体を清潔な白晒の褌で締め込み、ドキドキとする白鞘の短刀により臍下をしたたかに、真一文字に切る入墨娘のハダカ切腹。

刺青姐御腹巻脇差

大手札印画紙焼付

十枚一組 略号(ひほ) 一〇〇〇円

白晒の六尺褌を締め込んだ上にさらしの腹巻をした、いなせな入墨姐御、脇差一本を腹巻に差し込んで凄んだポーズ。これは特に姐御マニヤのお求めにより、その提供のアイデアにて、脇差の振付けをいたしました。

刺青姐御腹巻短刀

大手札印画紙焼付

十枚一組 略号(ひり) 一〇〇〇円

これは前の組と共に、特殊な姐御スタイル好みのマニヤの方々のために、作成したもので、特写すれば一組何万円もかかります故、ここに分譲品として格安に作成したものです。白褌、腹巻、短刀、刺青、といった一連の好みを抱かれる方は、是非お求め下さい。

海老責姿態

大手札印画紙焼付

三枚一組 略号(ほか) 三〇〇円

縄の緊縛に対しては、相当の耐久力を持っている山原清子に対して試みた海老責のテスト。

股間縛

大手札印画紙焼付

三枚一組 略号(ほき) 三〇〇円

全裸の刺青女体に対して加えられた嚴重な高手小手縛り。更に別の縄は股間縛りになって、流石強情我慢強い刺青娘も、その痛さに思わず悲鳴を挙げるに至ったという股間縛りのフォト。

たが、なかなか手紙を出す決心が
つきませんでした。十二月号を読
みやっと決心がつきました。私は
東京に住む大学生です。はつきり
申せば慶応大学に行っています。
現在郷里より下宿をしています。
です。何故学校の名を出したかと
いえば、自分自身の身をあかすこ
とによって安心してもらえると思
ったからです。私はかんちょうマ
ニアです。どうか東京又、自動車
もありませんから、千葉か神奈川、
埼玉あたりの女性の人、特に東京
の女性の方、年令はいくつでもか
まいません。未亡人の方でも大歓迎
です。おつき合ひして下さい。
私は自分のことは何んでもかくさ
ずいうつもりです。身分証明もみ
せるつもりです。何故って、決し
て悪いことではないのですから、
でも、決して貴女のこととはききま
せん。ただまじめにプレーできる
人を望みます。どうか次の号に投
稿おねがいいたします。(東京八
石岡康夫V)

○ 埼玉朝霞のMY様。お手紙十一
月二十八日に受け取りました。約
束日の二十五日より三日おくれで
配達されたわけで、お会いするこ
とができず残念に思っております。

す。もう一度御連絡下さい。遅配
を考えて指定日に一週間ほどの間
をあけるか、待ち合わせ場所の駅
の伝言板を利用するとか、連絡の
方法もきめて下さい。せつかくお
手紙をいただいても、一方交通で
はまたお会いできないのではない
かと心配です。念のため私の連絡
場所をお知らせしておきます。
(東京都台東区竜泉寺町百十一中
村方芳野眉美)

○ 寒さ一段ときびしい折柄、皆様
方には益々御元気の事と存しま
す。「光陰矢の如し」と申します
が、月日のたつのは早いもので
す。私が「奇ク」発刊第一号を手
にしてから、すでに二十年近い歳
月が流れて居ります。当時紅顔の
大学生だった私も、すでに四十の
年を数え、現在の地位に一応はふ
さわしい中年紳士に変わってしま
いました。全く今昔の感にたえま
せん。其の間「奇ク」が幾多の困難
を乗り越えて、今日の隆盛を保っ
て居られる事は、読者の一人とし
て、真に感謝に耐えない次第で
す。小生の拙作を御読み下さった
方々は、すでに御承知の事と思
いますが、マゾヒストである平伏人
も其の間数々の事態に直面して参

分譲品御注文の栞

○代理部の分譲品及び雑誌は、す
べて前金にて御注文願います。直
接の販売並に代金引換、後払い等
は取扱っておりません。
○御注文品はご注文書到着と同時
に発送申し上げますが、品切れの
時は二、三日の猶予をお願い致し
ます。
○ご送金は、現金書留(現金書留
の封筒は一枚三円にて郵便局で売
っています)小為替、定額小為替
(振替用紙は郵便局にあります)
当社の振替口座番号は大坂五〇〇
四二番です。切手代用(四円、十
円、二十円、三十円、四十円など
の小額切手で、絶対に紙にはりつ
けないで下さい)等を御利用願
います。
○御注文品は、雑誌では何年何月
号、或いは略号の附してあるもの
は略号。フォートの類はすべて略号
にてお申込下さい。品名を記され
ますと間違いが起り易く、且つ発
送に手間どりますから、必ず略号
にて願います。
○送料は日本国内に限り、すべて
当方にて負担いたします。但し速
達或は書留にての発送を御希望さ
れる向きは実費御負担願います。
外国便は飛行便若しくは船便の実
費送料を御加算願います。

○御注文の宛先は、大阪阿倍野局
私書箱第十四号、天星社です。
局よりの通知で郵便物の宛書きは
私書箱番号に統一するよう依頼さ
れましたのでお願いいたします。
○分譲品の新しいものは、毎月の
新刊誌上で「新版案内」として発
表しておりますから、その目録に
て御注文願います。又古くなりま
したものは漸次打ちりにします。
○尚、御注文の際、もし品切れの
ときの代品として第二希望品がご
ございましたら、お書き添え願え
ましたら幸いです。
○御注文品の送り先は必ず楷書で
はつきりとお書き願います。肩書
き(何々方、何々社内など)がご
さいましたら、それもお忘れなく
お書き添え下さい。
○発送者の名前を個人名で御希望
の方は、その旨お申添え下さい。
○御注文者の御氏名は絶対に他へ
洩らすようなことは致しません故
後には焼却いたします。
○局留にて郵便物をお受取りにな
られた方は、御注文の際、お受
取りに行かれる郵便局名(正式の
名前)とお名前を御連絡下さい。
郵便局は特定郵便局でも集配局で
もどちらでも結構です。別に局か
到着している日頃を見はからって
局の窓口へ出向かれて受取人の名
前を言ってお受取り下さい。

りました。S女性を求める事が如何に困難な事であるか、そして、たまたま知り合ったS女性も、わずかのギャップがうまらぬ為、はかないプレイに終始した事か。いやと云う程私は体験して参りました。今は対象もないままに、もんもんの日を過す私ですが、恐らくは世の大多数のM諸氏が同じ想いではないかと愚考する次第であります。しかし乍ら、ただ満たされぬ日を送るのみでも困ると思ひます。要は発散する機会を持つ事だと思います。女性でも男性でもかまいません。共に語り、お互の性向を赤裸々に話し合える友人があつてこそ、唯いたずらに内こうする事なく、健全な社会生活を送れるのではないでしょうか。此の点「奇ク」の編集長が、出来得る限り時間をさいて、同好諸氏の話し相手となるとの発言は、真に当を得た事と存する訳で御座居ます。世のS女性並にM男性の方に、機会を得て、共に愉快な時をすごす事が出来れば、真に幸甚と存じます。(東京都八平伏人V)

○ 一月号の絵物語「美女決斗吉田御殿」と「今日と明日の報酬」は面白く拝見しました。この絵物語

のような絵を大切に多く出版して下さい。文章も大切ですが、文より絵がより大切と思われますので、より多く絵をのせて楽しませて下さい。絵がなくてグラビヤがなくなると何となく手紙など書く気になれません。現代物の「今日と明日の報酬」の様なものを二月号から、引続いて二回くらい連載して内容を良くして下さい。そのため定価が五十円や百円高くなつても構いません。いっそのこと一挙に定価を五百円に上げて、内容を充実して下さい方が有難いです。実際、月一冊では物足りなく思っているのは私だけではないでしょう。そのためにも増頁を期待しています。「緊縛フォト撮影の実際」といった塚本先生の文章で写真も豊富に、紙もグラビヤと同じよい紙面にしていただきたいと思ひます。これでしたら、千円で喜んで買うことと思ひます。より多くの絵物語とグラビヤ、それに撮影の裏話といったものを載せて下さい。一月号の内容は大変良く出来ていたと思ひます。

○ (新潟県八青木新作V)

寒い寒い冬です。そして寒い時温かいふとんの中ほど有難いもの

はありません。そして温かい床の中で腹ばいになって読むのはいつも奇クです。私は二十五才の男性も二年前から私の心の中を占領してしまつた奇クにすっかり魅せられてしまつて、最近はどうなことも、MSの眼を通して見るような習慣になつてしまひました。丁度一度経験した禁断の木の実のように。どちらかというとM気味の私は、朝の通勤ラッシュも一つの楽しみになります。少しふとり気味の女学生、濃紺の制服に黒の長靴下、白の可愛らしい顔が人混みに押されて苦しそうに、私の身体に押しつけられてくる。私は顔では平静を装いながらも、もっと押してくれ、めっちゃくちゃにしてくれ」と胸をときめかしてしまふのです。ピッタリしたストラックスをはいたBGらしい若い女性も、私の心を乱します。我知らず自分の心の変化に顔を赤らめることさえあります。女性にいいめられてみたい、その豊満な身体で馬乗りを押さえつけられたい。顔の上にお尻をのせ、ほしいますにいいめてもらいたいと思う。経験はないけれど、裸にされて縛られてもいいし、脱いだばかりのパンティやメンスバンドを顔にかぶせ

られて。そして出来たならば浣腸、香わしい神酒など。こんな事を書いて「では私が」と申し出てくれる女性には居はしないだろうとは思ひますが、お互いに秘密を守るといふことであれば文通し又は話をする位は許されても良いのではないのでしょうか。太田区の津田亜紀子様、ちょっと遠いけれど京成線上野駅の駅売店並に地下道では常時新本は勿論旧刊号も販売しております。一度行ってみられたいかがですか。では読者の皆さん、又の機会に。(千葉県八滝沢登V)

○ 私はKKを愛読して一年半になります。本年二十四才になる女性でまだ未婚です。四つ年下の妹と二人でアパート暮らしをしております。私は妹に美人になりたければ、浣腸をすればいいわと教えてやりますが、便秘はしてはいないようです。でも、時には私に浣腸をやってくれます。夏に一度妹に浣腸してやり、苦しむ顔つきが面白く、その姿をカメラにおさめましたが、カメラ屋に持ってゆく勇氣がなく、そのままになってしまひます。そんなわけで妹とはつまみませんので、一度マニヤの方とお

女性モデル募集

○本誌では、口絵写真並に限定版用或は分譲写真用の女性モデルの方を募っております。

○誌上発表支障の方は、限定版又は分譲用フォトに出演していただきます。又、助手介添若しくはプレイのみ出演御希望の方でも結構です。

○出演或は参加御希望の方は、編集部宛御照会下されば、報酬その他詳細お返事の上、お打合せいたします。応募の方の秘密

は厳守いたしますから御安心のうえ応募下さい。

○緊縛写真御希望者は勿論のこと女相撲、女斗美、切腹、浣腸などを初めとして、Mフォトのサジスチンとして出演ご希望の方など特に歓迎します。

○本誌の充実のため何卒奮ってご応募下さい。余暇を利用してのご参加でも差支えありません。特に妊婦フォト撮影可能の方は遠近に拘らずご連絡下さい。

天星社編集部

逢いたく投書した次第です。私は浣腸の外に揮、乳房責めに興味を持っております。もし私を責めて下さる忠実な方がありましたら一度たずねて来て下さい。住所は岐阜市徹明町です。小さいアパートですが妹と二人きりです。両親はまだ元気で別に家を持っておりません。二月九日か十一日の日に、私は国鉄岐阜駅にて待っております。時間は午前九時から九時半まで。私の持っているものは白のハンドバッグに革の手袋で、黒のスカートです。なお私は、バスト九一センチ、ヒップ九七センチ、ウ

エスト七四センチ、体重六八キロ身長一米六九センチで、大柄な方です。恵子さんと呼んで下さい。駅から私のアパートへ案内します。妹は勤めに出るので留守です。なるべく二十四才から二十七才ぐらいの近県の方を望んでおります。なお浣腸液やオシメなどには用意してあります。では、よろしく。(岐阜市八青木恵子)

○私も兼々貴社の奇クを愛読している一人ですが、就中「縛り」には特に興味をもって居り、毎月胸をときめかせながら見て居りま

す。巻頭のグラビヤはその中でも最高に目を楽しませてくれます。まさに人間の本能に美酒を注ぐの感があります。さて、そこで私自身頃思っている事です。縛りに関するグラビヤ、小説等、今まで種々見て居りますが、大体のところが一枚で一人の被縛者しか写って居らずその点にちよっと不満を持ちます。そこで望むことは被縛者を複数にして頂き度いと云うことです。勿論複数ですから二人以上何人でも良い訳ですが大体二人から五人位までが適当かと思えます。これら複数のモデルを別個でなく、一緒にしかも夫々異った縛り方で組合せ一つのものにすると思った趣向です。この組合せ(縛り方は後手か吊りが良い)無限になると思います。今までも奇クにそのようなものが全然ない訳ではありませんが大変少いと思われまので、このような趣向のものもどんどんとり入れて頂き度いと思えます。又その写真には絶体男性を入れず全部女性のみにし、一人一人の顔の表情も、苦しみ悶えているような状態にし、そばにはナワ尻とか棒等を色々な形でつけ加えます。種々な責道具を置くのも結構ですし、緊縛の方法も器物、

建築物を利用するのも又大いにその効果を上げるものと思います。又縛りに使うナワも荒ナワ、シゴキ等色々ある訳でそれらも大いに利用し、変化のある写真にしたなら尚一層良いと思います。又このような場面になるような、題材「女子寮」「女子学生」「センイ、薬品工場の女工員」等で小説を書いて見るのも一趣向と考えます。出来れば私自身書いて見たいと思っております。(SMファン生)

○二月号に出た山原清子さんの入墨姿は中々素晴らしいものです。十二月号に出たときは、あれは身体に画いたものだと思ったのですが今になってホントウに入墨したものだということが判って感心しました。出来れば両腕へかけて早く入墨して完成していただきたいものです。機会があればナマのものをを見せていただきたいものです。女の入墨は非常に情感をそそるものです。読者の中にも多数の同感者が居られることと思います。今後グラビヤ(カラーなら尚更結構です)に多くの婦人入墨を鮮明に掲載方お願いします。(北九州市八女性の入墨同好生)

近頃本誌のゴムマニヤに関する記事が少くなり非常に寂しい限りです。マゾ、サド、浣腸、革マニヤ、フェチ等、人間誰しも程度の差こそあれ、多少は備えているものであり、そのどの面が強調されて、その人の好みに合っているなかで決まるものだと思います。世の中には、性癖を各自自分だけのものだと信じこみ、劣等感を感じているのではないのでしょうか。従って、さ程ゴムの感触に敏感でない人が、何の気なしに日常使用着用しているのを見、却って自分のゴムフェチを強く意識させられ、人知れずに悩み、或は楽しんでるのが現状ではないでしょうか。自分のフェチを一般の人に知られたくないという気持と裏はらに人のフェチを知りたいというのが人情というものです。ゴムの魅力は先ずその柔かさとスベスベした肌ざわりにあると思います。次にその快い匂いも又魅力の一つに挙げねばなりません。一枚のゴムが色々と形を変え、或はオシメカバーに或はブルマーに、バンドに、氷嚢に、レインコートに、性具等に使用

用されることを想像するだけでもすばらしいではありませんか。氷嚢二個を両足に足袋代りに履き、生ゴムのオシメカバーをじかに着け、総ゴムの漁師等の使用する胸まである靴と続きになっている胴衣を着け、ゴム手袋、ゴムマスクを着け、一番上からゴム引レインコートを付け、妻からゴムボールをぶっつけられたり、又妻にこの姿をさせ、いろいろのポーズをとらせ、いじめつけるのも一興です。妻と二人で薄明りの電灯の風呂に、ゴム装束で入浴したりゴムスポンジで身体を洗うのも、すばらしいプレイの一つです。身長に二倍する総ゴム布で全身をすっぽり包み、虫ゴムで縛り、ゴム長（新品の未使用のもの）の中に入れた湯を飲ませ、その湯を又口移しに飲ませてもらうのもすばらしいものです。ゴムの魅力の一つにその光沢も見逃すことに出来ません。すべすべしたきめの細かい表面が目を楽しませてくれます。次にゴム特有の匂いも軽視すること出来ません。（佐賀県八吉沢夏夫）

次号（四月号）は二月二十五日に発売いたします

二月号に西条操氏の、「想うこと」と、佐仲晴成氏の「KK誌のあり方について」という、現在の本誌にかなり批判的な二つのエッセイがのっていたが、麻生は、これに全面的に賛成であり、このよう

な風俗誌をめざして成長されることを、この際特に希望しておきたい。（麻生保）

ないにいいことを発表された勇氣ある両氏、および、それを敢て掲載された編集部に心から敬意を表する。自縄自縛という言葉があるが、どうも、時折それが懸念されるようなものがいまだに散見するのは残念である。夢もポエジもなく、何等の美意識の働いていない創作やフォト、支離滅裂で、我田引水にもならないようなエッセイなどは、徒らにKK誌に対する誤解を招くばかりである。最近では、昨年十二月号の原辺露光氏の「ラテン音楽と奴隷の血と」および本年二月号の黒淵嬰一氏の、「悲劇の女王ゼノビア」が断然光っていた。特に後者はかつての沼氏の手帖にも匹敵するものでありこの「世界史シリーズ」は長く連載されたいものである。このような真面目なエッセイや、時評や、また手記や体験談などがもっと読みたいものである。KK誌が今後かつての「人間の科学」誌に、プ

編集部ならびに読者の皆様、あけましておめでとうございます。昨年は私の処女作「美女決斗吉田御殿」を採用していただいた上、二月号では兵頭庫一様から過分のおほめをいただき、作者冥利につきました。私は前から女斗美のファンとして絵物語を望んでいた、強く投稿しましたのが、あんな素晴らしい絵になったのせられまし。欲をいえば、連続絵ですからもう一枚姉妹の最期の場面がほしかったのですが、それはあまりにも虫が好く、編集者の方と流れい子様に厚くお礼申し上げます。ただこれを機会に読者の皆様からも投稿していただいて、毎号女斗美の絵物語が見せていただけたら、どんなに楽しいことでしょう。私もなお「女忠臣蔵」や「女白虎隊」の構想をまとめつつあります。が、同好者の方々のご支援をお願い申し上げます。（東京都八川上米子）

五十万円懸賞原稿募集

過月号で五十万円懸賞の原稿を募集しましたところ、いち早く数篇の応募原稿が送稿されてまいりましたが、残念ながら入選作品として掲載するに耐えるものは見当りませんでした。引続いて募集を継続いたします故、本誌の増刊にふさわしい佳作をお寄せ下さるようお願いいたします。

賞　金

一	席	各	拾	万	円	一	名
二	席	各	五	万	円	二	名
三	席	各	参	万	円	五	名
四	席	各	壹	万	円	十	名
五	席	各	五	千	円	十	名

愛読者原稿募集

△体験、告白、手記△

どなたにも一つや二つの思い出とか、体験とかいったものが必ずあるものです。物言わざるは腹ふくるるのたとえどうか皆様の真実の叫びをどしどし文字にしてお寄せ下さい。採用篇には本誌三月分乃至一年分贈呈します。

△創作、小説、物語△

御自分の描く夢をまとめて

規　定

- 一、本誌の読者に提供するに適當したS・Mを中心とした創作、小説などのフィクション。告白、体験、手記、或は論説、意見など形式は問いません。S・Mの他、フェチ切腹、浣腸その他特異な趣向のものも大いに歓迎いたします。
- 一、すべて未発表の自作に限ります。
- 一、枚数は原稿用紙五十枚以上のこと。
- 一、締切は別に定めませんが、入選作品は翌月号に発表の上、賞金を呈します。
- 一、応募原稿には「懸賞作品」と赤エンピツにて肩書きして下さい。

天星社編集部

下さい。採用篇には本誌五月分以上贈呈します。

△(映画、雑誌)通信△

映画や既刊雑誌の中で、特に興味をお持ちになった事項を通信下さるようお待ちします。掲載の分には本誌三月分贈呈いたします。

△レポートマニヤ通信△

新聞記事等で関心をお持ちの事項或はマニヤ各傾向の本誌に対する通信をお寄せ下さい。本誌二月分贈呈します。

◎尚、以上の五項目の採用原

△読者通信△

編集者、執筆者、投稿者への通信、呼びかけ、前号の批評、本誌に対する希望や御意見、感想、思い出話、或いは読者相互の交歓文通、応答などをお寄せ下さい。

△奇クサロン△

奇クサロン向きの短文、マニヤ通信、写真絵画などを募ります。文章は原稿用紙三枚まで。採用篇には薄謝進呈します。

☆本誌御購読の栞☆

一月分(1冊) 三〇〇円△送共△
三月分(3冊) 九〇〇円△送共△
半年分(6冊) 一八〇〇円△送共△

本誌は毎月二十五日に全国各地の有名書店にて一斉に発売いたしますが、入手困難の方は直接代金御送付の上、御予約下されば、毎月二十日前後、印刷完成と同時に厳重包装して確実に発送申し上げます。局留の方々は二十五日頃受領して下さい。

奇譚クラブ 定価三〇〇円

三月号

(第十九巻第三号)
(通刊第二〇〇号)

昭和四十年二月二十日 印刷
昭和四十年三月一日 発行

編集印刷兼発行人 箕田京二
大阪阿倍野局私書函第十四号

発行所 天星社

(振替口座大阪五〇〇四二番)
(昭和三年四月三日第三種郵便物認可)
(国鉄大局特別扱承認雑誌第一二二二号)

☆代理部分譲品について☆

○代理部分譲品は本誌に広告してある分は全部在庫しておりますから、略号明記の上お申込み下さい。尚、分譲品の詳細は、目錄を御請求の上ごらん願います。
○既刊雑誌の旧号は別項の通り在庫していませんから、売切れぬ中御注文願います。
○口絵写真の複写転載は固く禁じます。